博士論文

中世ハンザ商業史の研究
―1369年リューベックのポンド税台帳と領収書の分析―

令和２年３月

中央大学大学院商学研究科商学専攻博士課程後期課程
柏倉　知秀

目次

序論 1
1．研究の背景と目的 1
2．時代背景 4
3．史料―1369 年のポンド税台帳とポンド税領収書 5
4．14 世紀後半のリューベック 10
5．14 世紀ハンザ商業圏の貨幣と度量衡 12

第１部　西方貿易―ネーデルラント・オルデスロー・ハンブルク 14

第１章　フランドルと北ネーデルラント 14
はじめに 14
1．貿易構造 16
2．商品 18
3．商人 20
4．船舶 23
おわりに 25

第２章　オルデスローとハンブルク 26
はじめに 26
1．貿易構造 29
2．商品 31
3．商人 35
おわりに 38

第２部　東方貿易―メクレンブルク・ポメルン・プロイセン・リーフラント 40

第３章　メクレンブルク 40
はじめに 40
1．貿易構造 41
2．商品 41
3．商人 45
4．船舶 47
おわりに 48

第４章　ポメルン 49
はじめに 49

１．貿易構造　50
２．商品　51
３．商人　55
４．船舶　57
おわりに　58

第５章　プロイセン　60
はじめに　60
１．貿易構造　62
２．商品　63
３．商人　69
４．船舶　72
おわりに　73

第６章　リーフラント　74
はじめに　74
１．貿易構造　76
２．商品　77
３．商人　81
４．船舶　84
おわりに　85

第３部　北方貿易―デンマーク・ホルシュタイン・スウェーデン・ノルウェー　87

第７章　デンマーク（スコーネ地方）　87
はじめに　87
１．貿易構造　90
２．商品　91
３．商人　95
４．船舶　97
おわりに　98

第８章　ホルシュタイン（フェーマルン島）　100
はじめに　100
１．貿易構造　101
２．商品　102
３．商人　104
４．船舶　105
おわりに　106

第 9 章　スウェーデン　107
はじめに　107
１．貿易構造　108
２．商品　110
３．商人　115
４．船舶　117
おわりに　118

第 10 章　ノルウェー　120
はじめに　120
１．貿易構造　122
２．商品　123
３．商人　125
４．船舶　126
おわりに　127

第 4 部　14 世紀後半のリューベック商業　128

第 11 章　14 世紀後半リューベックの商業構造　128
はじめに　128
１．貿易構造―取引相手地域と都市　128
２．14 世紀後半リューベックの主要商品　132
３．主要商品の流通構造　135
４．商人と船舶　145

結論　150

参考文献　153

序論

1. 研究の背景と目的

地中海商業圏とともに中世ヨーロッパの 2 大海上商業圏の一翼を形成していた北海・バルト海商業圏（北ヨーロッパ商業圏やハンザ商業圏ともいわれる）において最大の商業勢力であったのが，低地ドイツ語を使用する北ドイツの商人と都市の団体であったハンザ（Hanse，ハンザ同盟 Hanseatic League，ドイツ・ハンザ Deutsche Hanse）である。北海・バルト海商業圏を中心に商業活動を展開していたハンザの歴史を理解するためには，その商業史研究が必要不可欠である。ところが，中世ハンザの商業活動について，その全体像はいまだ解明されたとは言えない状況である。ハンザが活動した商業圏は，時代によってその範囲は異なるとはいえ，北ドイツを中心として東はロシアやバルト三国，北はアイスランドやスカンディナビア半島，西はイングランドやフランス，南はイベリア半島にまで広がっていた[1]。このように，ヨーロッパの多くの国々と商業関係を築いていたハンザの歴史を解明するためには，ハンザと関係のあった諸地域の史料や研究文献を参照しなくてはならず，それがハンザ商業史の全容解明を妨げているのは否めないだろう。これまでに発表された最良のハンザ商業史の概説は 1964 年にドランジェがフランス語で執筆したハンザ史の中の一章であり続けているのが現状である[2]。もちろん，個別の都市や個々の商品に関する研究は多数発表されているが，ハンザ商業史全体を扱った総合的な記述はまだ現れてはいない[3]。新しいハンザ商業史像を描くためにも，ハンザ商業に関する実証研究が，今後ますます必要とされているのである。そして，同じことが，ハンザの中心都市であった北ドイツの海港都市リューベックにも該当する。

現在でも自治体の正式名称として「ハンザ都市リューベック」（Hansestadt Lübeck）を名乗っているリューベックは，中世バルト海地方最大の都市のひとつであり[4]，北海地方とバルト海地方とを接続する商品積み替え地として経済的に繁栄し，「ハンザの首都」（Haupt der Hanse）として外交政策に大きな影響を与えた都市であった[5]。しかし，ハンザの中心

---

[1] Hammel-Kiesow 2007, S. 9-10.

[2] ドランジェ 2016，222-275 頁．2012 年にドイツ語訳第 6 版が出版されたドランジェの著書はドイツ人研究者 2 名によって加筆・修正されているが，「ハンザの商業」に関する章に大きな変更はなかった。Dollinger 2012, S. 273-340. ドランジェよりも簡潔にまとめられたハンザ商業史の概観として Irsigler 1998 がある。その他に，ハンザの食料交易史については Henn 1996，中世のバルト海貿易については Jahnke 2015 がある。

[3] 商業史を含めたハンザ史の研究状況については，次を参照。Dollinger/Graßmann 1998; ドランジェ 2016，222-275 頁；柏倉 2016。

[4] 中世バルト海地方の都市人口についてまとめた Fritze によると，1450 年頃のバルト海地方で人口が 2 万人を超えていたのは，ダンツィヒ，リューベック，ノヴゴロドの 3 都市だけであったという。Ftitze 1986, S. 12-13.

[5] Gläser/Hammel-Kiesow/Scheftel 2006, S. 248.

都市であったにもかかわらず，中世リューベックの商業活動について，その全体像はいまだ十分に解明されているとはいいがたい[6]。もちろん，多くの研究者によってリューベックと個別都市との通商関係や特定の商品に関する実証研究が発表されている。例えば，12 世紀から 14 世紀にかけてリューベックがヨーロッパ各地で獲得した通商特権の分布を調査した研究[7]，14・15 世紀のリューベック商人の商業帳簿を分析した研究[8]，リューベックの穀物，塩，毛皮貿易といった個別の商品に関する研究[9]，リューベックと南ドイツのフランクフルト（Frankfurt am Main）やニュルンベルク（Nürnberg）との通商関係史[10]などが発表されている。ただ，リューベック商業史の全体像を扱った研究は少なく，中世から近代にいたるリューベック商業史の概説的記述や 14 世紀後半・15 世紀末・17 世紀末のリューベック港の海上交易額の比較分析，リューベックを経由した北海―バルト海間の嵩荷交易の発展過程など，Hammel-Kiesow による一連の研究が貴重な成果となっている[11]。しかし，第二次世界大戦後にリューベック市立文書館の所蔵史料が旧ソ連や旧東ドイツに押収されてしまったため，リューベック史の研究は停滞を余儀なくされた[12]。そのため，中世のリューベックで取引されていた商品の種類と数量，商品の原産地，通商路，取引相手地域や都市，商業活動に従事していた商人の取引規模や具体例，流通の担い手である船舶の種類や大きさといった商業史固有の課題が，依然として未解決のまま残されている[13]。これはハンザ商業史のみならず，中世ヨーロッパ商業史の大きな欠落点であり，それを解消するための実証研究を試みることが，本論文の目的である。そして，上記の商業史の課題について検討するために必要な情報を提供してくれる史料が，港湾税台帳（Hafenzollbuch）と総称されている関税台帳や入港船舶台帳などの数量史料である。本論文では，リューベック市立文書館[14]に所蔵されている 1369 年のポンド税台帳（Pfundzollbuch）およびポンド税領収証（Pfundzollquittung）という未刊行の関税史料を用いて，中世リューベック商業史に関する未解決の課題について実証研究を試みる。

ところで，中世ハンザ商業の特徴としてしばしば言及されるのが「北海とバルト海を接続するハンザの東西交易」という概念である。例えば，戦間期を代表するハンザ史家であった Rörig は「ノヴゴロド―リューベック―ハンブルク―ブルッヘのライン」を「ハンザ

---

[6] Hoffmann 2008, S. 190.

[7] Baumann 1882.

[8] Lesnikov 1960; Lesnikov 1961b.

[9] 穀物は Hansen 1912，塩は Braun 1926; Heineken 1908，毛皮は Lesnikov 1961a.

[10] フランクフルトは Koppe 1952; Koppe 2006，ニュルンベルクは Nordmann 1933．その他の取引相手地域に関する研究は，本論文の第 1 部から第 3 部で紹介する。

[11] Hammel-Kiesow 1993b; Hammel-Kiesow 1993a; Hammel-Kiesow 2002.

[12] その後，リューベック市立文書館の所蔵史料は，1987 年，1990 年，1998 年に返還されたが，その一部は行方不明のままである。Graßmann 1992; Graßmann 1999.

[13] 商業史固有の課題については次を参照。谷澤 2017，3-9 頁；石坂・壽永・諸田・山下 1980，10-12 頁。

[14] 正式名称はハンザ都市リューベック文書館（Archiv der Hansestadt Lübeck，略称 AHL)である。

経済システム固有の脊柱」と呼んでいる[15]。ドランジェは「ハンザ商業は，基本的には・・・東欧産品を西欧に，西欧産品を東欧に輸送する商業であると定義できる。ハンザを生み出し，存続させたのは，東欧と西欧北部との間の交易である」と述べ,「ノヴゴロド―レーヴァル―リューベック―ハンブルク―ブルッヘ―ロンドン」をハンザ商業の幹線であったしている[16]。2000 年に初版が出版され，現在まで版を重ねている Hammel-Kiesow のハンザ史概説では,「この商業の基本構造は、東方と北方の贅沢品・原料・半製品・食料と、西方および南方の手工業製品との交換にあった」とし,「ハンザ商人の最も重要な居留地(商館)は、北西ロシアのノヴゴロド（Novgorod)、ノルウェーのベルゲン（Bergen)、フランドルのブルッヘ（Brugge)、イングランドのロンドンにあった。その位置が、北海とバルト海を結ぶ東西交易という特徴を示している」と記述している[17]。このように，バルト海と北海を結ぶ東西交易がハンザ商業の基本構造であり，その商業構造の中でリューベックが 2 つの海域を接続する商業都市として重要だったという意見が繰り返し表明されている。同様の見解は，日本でも受け入れられており，西洋経済史や商業史の教科書でも採用されている[18]。しかし，このような北海・バルト海を接続する東西交易という概念は，必ずしも十分な実証研究に基づいているわけではない。そのため，Johansen のようにハンザの東西交易が過大評価されてきたと主張する研究者もいれば，逆にそのような見解を批判する Weibull のような研究者もおり[19]，史料に基づいた実証研究のさらなる蓄積が必要とされている。その際に重要な視点は,「ハンザ商業はきわめて多様な側面を持って」おり,「ハンザ商業が基本的に東欧の未加工品と西欧の高価な品との交換にあるというだけで済ましてしまうならば，それはハンザ商業の特徴を歪めてしまうことに」なり,「ヨーロッパ経済においてハンザが果たした偉大な役割を説明するものこそは，この多様性である」というドランジェの主張である[20]。本論文では，ハンザの中心都市であり，中世バルト海地方において最大の商業都市であったリューベックを事例として実証研究を行うことで研究史上の欠落を埋めることを目的とするが，その際に，東西交易の拠点という伝統的な見解にとらわれるの

---

[15] Rörig 1928, S. 157.

[16] ドランジェ 2016，225 頁。

[17] Hammel-Kiesow 2014, S. 11. Hammel-Kiesow は 2009 年に出版された共著のハンザ史でも「ハンザの商品流通の基本原理は，東方や北方産の食料，原料，いくつかの威信財や奢侈品と西方産の工業製品の交換だった」と述べている。Hammel-Kiesow/Puhle 2009, S. 110.

[18] 例えば，西洋経済史の教科書である奥西・鳩澤・堀田・山本 2010，15 頁には「重要だったのは東西ヨーロッパをつなぐバルト海・北海ルート」であり,「ドイツ・ハンザは・・・リューベックとハンブルクとの内陸路を介したルートを核として，東西ヨーロッパをつなぐ商業において主導的な位置を占めた」と記述されている。また，流通史のテキストである谷澤 2017，133 頁ではハンザ商業の項目で「バルト海・北海海域では，通商軸がノヴゴロドからダンツィヒ，リューベック，ブルッヘを経てロンドンへと達し」ていたという説明が見られる。

[19] Johansen 1963, S. 45; Weibull 1967, S. 24-25.

[20] ドランジェ 2016，236 頁。

ではなく，リューベック商業の多様性に着目しながら，リューベック商業の実態を解明したい。

以下，本論文では，研究の背景と目的，利用史料，当時の貨幣と度量衡について解説した序論に続き，第 1 部から第 3 部まではポンド税台帳および領収書に登場するリューベックの取引相手地域を西方，東方，北方の 3 地域に分けて分析する。すなわち，第 1 部の西方貿易では，リューベックよりも西方に位置する取引相手の内，第 1 章ではリューベックと海路で接続されていたネーデルラント地方について，第 2 章では内陸路で結ばれていたオルデスロー（Oldesloe）およびハンブルク（Hamburg）について検討する。第 2 部では東方貿易が扱われ，バルト海南岸と東岸の諸地域を，第 3 章のメクレンブルク地方（Mecklenburg），第 4 章のポメルン地方（Pommern），第 5 章のプロイセン地方，第 6 章のリーフラント地方（Livland）に分けて検討する。第 3 部の北方貿易では北欧の諸王国とホルシュタイン地方東部が対象となり，第 7 章ではデンマーク王国のスコーネ地方（Skåne），第 8 章ではホルシュタイン（Holstein）地方東部のフェーマルン島（Fehmarn），第 9 章ではスウェーデン王国，第 10 章ではノルウェー王国が検討される。最後の第 4 部第 11 章では，第 1 部から第 3 部の分析結果に基づき，14 世紀後半リューベック商業の構造について，取引相手，商品，商人，船舶の観点から検討する。

2．時代背景

本論文で検討するリューベックのポンド税台帳が成立した歴史的背景には，1360 年から 1370 年までのバルト海地方における政治情勢がある。1360 年にデンマーク王ヴァルデマー4 世（Valdemar IV）は，スウェーデン王の抵当に入っていたスコーネ地方を武力で奪還し，ハンザ都市に対してスコーネ地方において従来から認めてきた特権の承認と引き換えに 4,000 マルクの支払いを要求した[21]。さらに，翌年の 1361 年にヴァルデマー4 世は，スウェーデン領のゴットランド島（Gotland）を征服し，当地のハンザ都市であったヴィスビー（Visby）も占領した[22]。これらの出来事がきっかけとなり，1361 年にグライフスヴァルト（Greifswald）で開催されたハンザ総会はデンマーク王国との戦争を決断し，その戦費を賄うために関税の徴収を決定した[23]。これがハンザ都市でポンド税（Pfundzoll）が徴収された初めての事例であったが，この時にはまだ「ポンド税」という用語は使用されていなかった。しかし，1362 年に始まったデンマーク王国との戦争でハンザは敗北してしまい[24]，その後，ハンザとデンマークとの間で外交交渉が続けられることになった。最終的に交渉は決裂し，1367 年 11 月 19 日にケルンで開催されたハンザ総会においてデンマーク王国とその同盟国であるノルウェー王国との戦争およびポンド税の徴収が決定された[25]。こ

---

[21] Götze 1970, S. 84, Anm. 5; Schäfer 1879, S. 167-168, 260-261.

[22] Götze 1970, S. 83-84.

[23] Götze 1970, S. 86-87.

[24] Götze 1970, S. 86-87.

[25] Götze 1970, S. 108-110.

れが，いわゆる「ケルン同盟」の成立である。なお，この時に初めてポンド税（puntgheld）という名称が使用された[26]。この 2 度目のポンド税徴収のために作成されたのが，1368 年-1371 年のリューベックのポンド税台帳とポンド税領収書である。1368 年 4 月以降，ハンザおよびハンザと同盟したスウェーデン王，メクレンブルク公，ホルシュタイン伯の軍勢は，デンマーク王国ならびにノルウェー王国との戦いを開始し，1368 年の夏頃にはエアソン海峡周辺の重要な都市や城をほとんど占領し，ノルウェー王ホーコン 6 世（Håkon VI）も敗北を認めた[27]。この間の 1368 年 6 月 24 日にリューベックで開催されたハンザ総会では，ハンザ商人のスコーネ渡航が再び許可されるとともに，戦費を充足するためにスコーネでもポンド税が徴収されることになった[28]。その後，ハンザとデンマーク王国との間で外交交渉が繰り返された結果，最終的に 1370 年 5 月 24 日にシュトラールズント（Stralsund）で和約が結ばれ（シュトラールズント条約），戦争は終結することになった[29]。

３．史料―1369 年のポンド税台帳とポンド税領収書

本論文で利用するポンド税とは，上述のように，対デンマーク戦争をきっかけにハンザ都市で徴収が始まった臨時関税のことであり，課税単位にフランドル・ポンドを使用していたために，その名がつけられた[30]。このポンド税に関係する史料類型として，ポンド税を徴収していた各都市の記録であるポンド税台帳，ポンド税を支払った商人や船長に納税証明書として交付されたポンド税領収書，ハンザ総会でポンド税収入の各都市への配分などを決定するために作成されたポンド税決算書（Pfundzollabrechnung）の 3 種類が存在する[31]。その中でも特に，ポンド税台帳および領収書は，中世ハンザ都市で取引されていた商品の種類や量，商品の輸出入先，取引に従事していた商人や船長についてのデータを提供してくれる唯一利用可能な数量史料である。本論文で分析するリューベックのポンド税台帳は，Rörig によって「リューベック商業史のみならず，北ヨーロッパ商業史の至宝」と評価されており，中世ハンザ商業史研究にとって貴重な史料となっている[32]。

リューベックの文書館に所蔵されていたポンド税領収書が，ハンザ史の研究で最初に紹介されたのは 1862 年のことであり，リューベックのポンド税台帳がハンザ史研究のための専門誌『ハンザ史論叢』（Hansische Geschichtsblätter）でその存在が知られるようにな

---

[26] HR I, 1, Nr. 413, S. 374.

[27] Götze 1970, S. 115-117.

[28] HR I, 1, Nr. 469; Götze 1970, S. 118.

[29] Götze 1970, S. 119-122; Brandt 1970.

[30] 以下，ポンド税およびポンド税台帳の解説については次を参照。柏倉 2003a；谷澤 1997，91-93 頁。

[31] ポンド税決算書を利用した研究として，柏倉 2004; Stieda 1887, S. XXVI-XXXIII; Vogel 1915, S. 277-279, 551-552.

[32] Rörig 1926, S. 114.

ったのが 1885 年のことであった[33]。1874 年にはレーヴァル（Reval，エストニアの首都タリン Tallinn の旧ドイツ名）のポンド税台帳の一部が雑誌に掲載され，1887 年にはその全部がリューベックに所蔵されていたリーフラント諸都市のポンド税領収書と共に刊行された[34]。後者の編纂者である Stieda は，ポンド税全般に関して詳細に解説するとともに，『ハンザ総会議事録集』（Hanse Rezesse）に収録されていたポンド税決算書についても紹介している。その後，各地のポンド税台帳および領収書の刊行が進み，1900 年に Bruns が 14 世紀後半リューベックのポンド税台帳からベルゲン商業に関するデータを抜粋して紹介し，その数値は後世の研究者によってたびたび利用されることになった[35]。1902 年には Wendt が 1368 年と 1369 年のリューベックのポンド税台帳を取引相手地ごとに商品と金額を集計して一覧表として刊行したが，その編纂内容については批判もある[36]。1904 年から 1908 年にかけては，1492 年－1496 年リューベックのポンド税台帳から輸出入商品の抜粋が，1910 年には 1369 年ハンブルク（Hamburg）のポンド税台帳が，1935 年には 1368 年リューベックのポンド税台帳と領収書，そして，1362 年-1363 年と 1368 年-1371 年のトルン（Thorn）のポンド税台帳が刊行された[37]。第二次世界大戦後は，戦禍によってヨーロッパ各地の文書館史料が散逸したり，失われたりしたために，ポンド税台帳の刊行も不活発となり，唯一 1979 年に 1398 年エルビング（Elbing）のポンド税台帳が出版されたにすぎない[38]。しかし，冷戦終結前後から，押収されていた各地の史料が所蔵元の文書館に返還されるようになった結果，再びポンド税台帳の刊行がはじまった。1996 年には 1492 年-1496 年リューベックのポンド税台帳が以前より完全な形で刊行されたのをはじめとして，2006 年には 1485 年-1486 年のハンブルク―リューベック間で徴収されていたポンド税台帳が，2012 年には 1409 年と 1411 年のダンツィヒ（Danzig）のポンド税台帳が出版されている[39]。

このように活発な刊行作業の結果，未刊行のポンド税台帳や領収書がまだ残されているのはリューベック市立文書館しかないようである[40]。リューベック市立文書館には，14 世

---

[33] Mantels 1881（初出は 1862 年）; Stieda 1885

[34] Höhlbaum 1874; Stieda 1887. レーヴァルのポンド税台帳を利用した研究として，Koppe 1940; 柏倉 2003b; Schubert 2000.

[35] Bruns 1900.

[36] Wendt 1902. Wendt に対する批判として，Lechner 1935, S. 11.

[37] Bruns 1904-1908; Nirrnheim 1910; Lechner 1935; Koczy 1935. トルンのポンド税台帳を利用した研究として Ahnsehl 1961 がある。

[38] Militzer 1979. この他に，1418 年のハンブルクのポンド税台帳が 1972 年に刊行されているが（Sprandel 1972），この台帳はポンド税台帳とは別の関税台帳（ヴェルク税台帳）であると指摘されている。Stefke 1985; Stefke 1983.

[39] Vogtherr 1996; Hormuth/Jahnke/Loebert 2006; Jenks 2012. ハンブルク―リューベック間で徴収されていたポンド税台帳は Jahnke 1996 によって紹介されている。1409 年ダンツィヒのポンド税台帳を利用した研究として，Jenks 1996。

[40] 各地のハンザ都市で作成されていた各種の港湾税台帳の所蔵および刊行状況については，次を参照。Jahnke 1998; Bohmbach 1982; Schildhauer 1968.

紀後半のポンド税台帳だけで 1368 年-1371 年，1378 年，1379 年，1380 年，1381 年，1383-1384 年，1384-1385 年，1398 年，1399 年，1400 年の計 10 冊が残されており[41]，さらに 1367 年から 1371 年までの計 1,764 件のポンド税領収書が現存し，ハンザ都市で最も豊富なポンド税関連史料が所蔵されている[42]。通常，ポンド税台帳および領収書に記録されていた内容は，ポンド税を支払った船長と商人の名前，出港地と入港地，商品および船舶価額，関税額，商品名などである。全部の項目が常に記載されていることは少ないが，14 世紀リューベックのポンド税台帳では出入港地がほぼ完全に記録されており，他の都市のポンド税台帳よりも詳細な流通状況を解明できる可能性が高い[43]。特に 1368 年－1371 年の台帳に関しては，他の年度には記載されていないハンザ都市からの輸入が一部記載されているだけでなく，同時期のポンド税領収書が現存するために輸入記録が豊富となっており，輸入状況がより詳細に判明するという特徴がある。さらに，他のポンド税台帳からは知ることのできない穀物取引が，1368 年-1371 年のポンド税台帳および領収書には記録されている点が重要である。例えば，1368 年－1371 年の台帳と同じように商品の記載が詳細な 15 世紀末リューベックのポンド税台帳では，穀物が免税とされていたために，その輸出入は記録されておらず，穀物取引の実態を再現することは不可能となっている[44]。また，他の都市のポンド税台帳には，そもそも商品名や輸出入先の両方が記載されることがないため，中世リューベックのみならず，北海・バルト海商業圏において商品流通の実態を数量的に明らかにする可能性を秘めた唯一の史料が，1368 年－1371 年リューベックのポンド税台帳ということになる。

1368 年から 1371 年のポンド税台帳は，もともと 702 枚の紙葉（フォリオ Folio）が豚革の表紙で 1 冊の帳簿に綴じられていたが，帳簿が厚くて利用しづらいため，現在は 2 冊に分割されている。1368 年と 1369 年の記録は詳細かつ規則的だが，1370 年と 1371 年の記録はしだいに不規則な記載内容となり，記載件数も減少している[45]。一方，ポンド税領収書は，他のハンザ都市で作成され，商人や船長がリューベックに持ち込んだものの一部が現存している。現存する 1,764 件のポンド税領収書の内，件数としては 1368 年と 1369 年が多く，その素材は羊皮紙か紙に書かれている。ポンド税領収書の素材・サイズ・記載内容は，それぞれ作成された都市によって異なっているが，基本的には船長と商人の名前，商品および船舶価額，関税額，商品名などが記載されている[46]。

---

[41] リューベック市立文書館には，この他にも 1492 年から 1496 年のポンド税台帳（Vogtherr 1996 として刊行済）と未刊行の 1534-1538 年，1539-1545 年，1540-1542 年のポンド税台帳が存在する。

[42] 現地調査の結果，ポンド税領収書の中には一部，ポンド税領収書とは異なる史料が混入していることが分かった。そのため，実際の件数は 1,764 件よりも少ない。

[43] 例えば，ハンブルクやトルンのポンド税台帳には商品の輸出入先が記載されていないため，取引相手地の特定ができない。Nirrnheim 1910; Koczy 1935.

[44] Bruns 1904/1905, S. 109-110; Vogtherr 1996, Teil 1, S. 35; 谷澤 1999，174 頁。

[45] その原因として，ポンド税台帳を記入していた書記の交代と，ポンド税徴収規定の変化が指摘されている。Wendt 1902, S. 14; Lechner 1936, S. 19.

[46] ポンド税領収書については，Lechner 1935, S. 40-46; Mantels 1881.

ポンド税徴収に関する規定は，1367 年 11 月 11 日にケルンで開催されたハンザ総会において定められた[47]。まず，ポンド税の徴収期間は，当初，1368 年 2 月 20 日から 1369 年 2 月 12 日までとされていた。しかし，デンマークとの戦争が 1 年で終結しなかったためか，ポンド税の徴収期間も延長されることになった。ポンド税の徴収期間は，1368 年 10 月 6 日のハンザ総会では 1370 年 4 月 14 日まで[48]，1370 年 2 月 25 日のハンザ総会では 1371 年 9 月 29 日まで延長された[49]。つまり，実際にポンド税が徴収されていた期間は，1368 年 2 月 20 日から 1371 年 9 月 29 日までの約 3 年半であった。

次に，税率であるが，ポンド税徴収時に使用されていた通貨によって別々の税率が定められていた。これは，ポンド税徴収時に税額を計算する手間を軽くするため，1367 年に初めて導入された措置である。例えば，フランドルの通貨で支払う場合は，1 フランドル・ポンド（Pfund flämisch，グロート・ポンド Pfund Grote と表記されることもある）につき 1 グロート（Grot）とされており，税率は 240 分の 1 となる。同様に，6 リューベック・マルク（Mark lübisch）につき 4 ペニヒ（Pfennig，税率 288 分の 1），6 ズント・マルク（Mark sundisch，ズントはシュトラールズントの省略）につき 6 ペニヒ（税率 288 分の 1），12 フィンケナオゲン・マルク（Mark Finkenaugen）につき 8 フィンケナオゲン（Finkenaugen，税率 288 分の 1），4 プロイセン・マルク（Mark preußisch）につき 8 ペニヒ（税率 360 分の 1）と定められていた[50]。

ポンド税の課税原則は，ケルン同盟に加盟していた海港都市から商品を輸出する際に課税され，ケルン同盟に非加盟の都市から輸出された商品はケルン同盟加盟都市に輸入される際に課税されるというものであり，ハンザ都市からの輸入はほとんど記録されていない[51]。商人は宣誓に基づいて商品価格を申告し，上記の税率に基づいてポンド税を支払い，納税証明書としてポンド税領収書を受け取った。一度課税された商品は，所有者が変わらない限り，ポンド税領収書を提示すれば非課税とされた。つまり，別のハンザ都市で課税された商品は，リューベックで持ち主が変わらない限り，リューベックのポンド税台帳に記録されないことになる。また，船長も船舶価額に対して上記の税率の半分をポンド税として支払うことになっていた一方で，聖俗貴族の自家消費物資は免税扱いとされていた[52]。さらに，1369 年 3 月 11 日の追加規定により，商品だけでなく現金についても商品と同様に課税されることになった[53]。

ポンド税は戦時に導入された臨時関税であり，ポンド税徴収時は戦時中のため，平時の

---

[47] HR I, 1, Nr. 413.

[48] HR I, 1, Nr. 479. 1369 年 10 月 21 日のハンザ総会で再度，ポンド税の徴収期間が 1370 年 4 月 14 日まで延長されることが確認されている。HR I, 1, Nr. 510.

[49] HR I, 1, Nr. 522. その後，1371 年 10 月 27 日のハンザ総会でポンド税徴収の中止が正式に確認された。HR I, 2, Nr. 18.

[50] HR I, 1, Nr. 413, S. 374.

[51] ポンド税の徴収規定や課税原則については，Weibull 1967, S. 12-13; Lechner 1935, S. 17-21.

[52] HR I, 1, Nr. 413, S. 374, Nr. 469 §5; Stieda 1887, S. X; 柏倉 2003 年，20 頁。

[53] HR I, 1, Nr. 489 §9; Stieda 1887, S. X.

状況を反映していない可能性がある。しかし，戦争の影響は，年代や地域によって異なっていた。1368 年から 1371 年のポンド税の場合，ハンザ諸都市とデンマーク王国およびノルウェー王国との間で戦争中であったが，主要な戦闘はデンマーク王国の主要部が占領された 1368 年の夏に終了しており，同じ頃にノルウェー王もハンザ側に降伏している。そして，1368 年 6 月 24 日にはハンザ商人のスコーネ渡航が再開されており，同地方のヘルシンボリ城（Helsingborg）だけは 1369 年 9 月まで籠城が続いていたが，スコーネ地方との商業取引への影響は少なかったと考えられる。また，1369 年 8 月 3 日にはノルウェー王国と休戦が成立しており，1369 年は 1368 年よりも戦争の影響は少なかったことが推測される[54]。ただ，1368 年にデンマーク王国およびノルウェー王国に対する通商封鎖が実施されており，両王国との交易は停止を余儀なくされていた[55]。そのため，戦争よりも通商封鎖の方がハンザ商業に対する影響が大きかったかもしれない。さらに，関税史料につきものの，密輸，脱税，積み荷の過少申告などといった問題もあることから，本論文で扱うポンド税台帳のデータから分かるのは，あくまでも実際に取引されていた量や金額の最小値でしかないことに留意しておく必要がある[56]。

以上の点を踏まえ，本論文では，輸入記録が他の年度よりも詳細に判明する 1369 年のポンド税台帳（正確には 1369 年 3 月 11 日から 1370 年 4 月 13 日までの記録だが，以下では 1369 年と表記する）と領収書を分析して，当時のリューベックで営まれていた商業活動の実態について検討する。これまでの研究では，1935 年に刊行された 1368 年のポンド税台帳（正確には 1368 年 3 月 18 日から 1369 年 3 月 10 日までの記録だが，1368 年と表記する）と領収書のデータが利用されてきた[57]。しかし，1368 年はデンマーク王国およびノルウェー王国との戦争が始まった年であり，1368 年のポンド税台帳と領収書の証言能力について疑問を呈する研究者もいる[58]。本論文で利用する 1369 年のポンド税台帳と領収書の記載期間になると，デンマーク王国およびノルウェー王国との戦闘状態はほぼ終結しており，1368 年よりも平時の状況が記録されている可能性が高い。この点が，本論文で 1369 年のポンド税台帳と領収書を分析する理由である。1369 年のポンド税台帳については，すでに Wendt によって 1368 年の台帳とともに都市および商品ごとに一覧表化された形で刊行されている。しかし，台帳のみのデータであるため輸入については不完全であり，また，一部の記載内容が誤読されていて正確さに欠けている箇所が存在する[59]。そのため，

---

[54] この時期の戦争の状況については，次を参照。Goetze 1970, S. 115-119; Wendt 1902, S. 16; Schäfer 1879, S. 476-503.

[55] Weibull 1967, S. 20; Wendt 1902, S. 27-30.

[56] Hammel-Kiesow 1993a, S. 82; Weibull 1967, S. 21; Lechner 1935, S. 47; 谷澤 2011, 21-28 頁。

[57] Lechner 1935.

[58] 高橋 2013，117－118 頁；ドランジェ 2016，224 頁。

[59] Lechner 1935, S. 11. 例えば，Wendt は，シュテティーンの輸出と輸入に関する箇所を誤読している。Wendt 1902, S. 48. この箇所で彼はリューベックからシュテティーンに穀物が輸出されていたと解釈したが，正しくはシュテティーンからリューベックへの穀物輸入の記録である。

本論文では，リューベック市立文書館に所蔵されている未刊行のポンド税台帳とポンド税領収書を利用して分析を進めていくことにする。

４．14 世紀後半のリューベック

本論文で検討する 1369 年という年代は，ハンザ都市リューベックにとってどのような時代であったのだろうか。ハンザ史の先行研究では，1370 年のシュトラールズント条約とそれ以降の時期について，政治的見地では商業特権を獲得したハンザの最盛期と見なされる一方，経済的見地ではハンザが衰退する端緒となったという両極端の評価がされている[60]。西洋経済史では，14 世紀は飢饉とペストに彩られた経済危機の時代（中世後期の危機）であったとされており，事実，リューベックでも 1350 年を皮切りに，1358 年，1367 年，1376 年，1388 年，1396 年と 14 世紀後半だけで 6 回もペストが流行していた[61]。しかし，1284 年から 1700 年までのリューベックの長期経済変動局面を分析した Hammel-Kiesow の研究によると，14 世紀のリューベック経済は 11 年から 25 年周期の 5 回にわたる景気の波を記録しつつ，14 世紀末まで好景気を維持していたという。そして，1369 年は，1362 年から 1381/84 年にかけての 4 番目の周期において，1372 年に山を迎える上昇局面に位置付けられている[62]。1367 年のペストの流行，1368 年の対デンマーク戦争の勃発にもかかわらず，リューベック経済にとって 1369 年は好況期であったと言えよう。Hammel-Kiesow は別の論文において，14 世紀後半から 17 世紀までの期間に断片的に判明するリューベックの商業規模と長期経済変動局面とを比較した上で，商業活動が経済変動局面に影響を与えていたことを示唆している[63]。リューベックがバルト海地方を代表する商業都市であったことを顧慮すれば，商業活動が経済活動全体に大きな影響を与えていたことは間違いないだろう。

次に，14 世紀後半のリューベックを人口という観点から，他の都市と比較してみよう。中世ヨーロッパの都市人口について正確な数値を算出することは不可能であるが，ヨーロッパの主要都市人口の推計値を提示したジュネーブ大学の共同研究の成果から，中世ハンザ圏の主要都市の序列を示すことが可能である（表 1 参照）[64]。なお，最新のリューベック史の概説書では，1300 年頃に約 15,000 人，14 世紀に 18,000 人，15 世紀に 25,000 人

---

[60] ドランジェ 2016，395-396 頁；斯波 2010，1-7 頁；斯波 1997，8-9 頁。

[61] Ibs 1994, S. 86-107.

[62] Hammel 1988, S. 91-92.

[63] Hammel-Kiesow 1993a, S. 91. この論文では 1368 年も好況年であったと評価されている。Hammel-Kiesow 1993a, S. 88. Hammel-Kiesow は市壁内の不動産取引売買件数の推移に基づいてこのような評価を下しているが，不動産取引の拡大は，商業活動が停滞したために余剰商業資本が不動産に投資された結果ではないか，という指摘もある。斯波 2010，140 頁。

[64] Barioch/Batou/Chèvre 1988. 以下，頁数は省略するが，人口の出典は左記文献を参照。

という人口数が示されており，表 1 で示した数値よりも少なく推計されている[65]。いずれにしても，リューベックの人口は，ハンザ都市の中では北西ドイツの大都市ケルンに次いで 2 番目の，中世バルト海地方の海港都市としては最大の人数を記録していた。人口という観点から，リューベックはハンザで最も重要な商業都市の 1 つであり，バルト海において最大の海港都市であった。なお，1300 年時点の人口でハンザの 4 大商館が置かれていた都市と比較すると，フランドル地方のブルッヘと北西ロシアのノヴゴロドはそれぞれ 40,000 人，ロンドンは 35,000 人となっており，リューベックの人口を大きく凌駕していた一方，ノルウェーのベルゲンは 7,000 人とかなり少なかったことが分かる。さらに比較として，地中海商業圏を代表する海港都市ヴェネツィアとジェノヴァの人口（1300 年）を挙げると，それぞれ 110,000 人と 100,000 人となっており[66]，ハンザ圏の大都市よりも 1 桁人口が多かった。代表的な海港都市の交易額から地中海貿易とバルト海貿易の規模を比較した Spufford の論文によると，14 世紀後半ジェノヴァの海上交易額はリューベックよりも 5 倍から 6 倍の規模であったという。地中海商業圏と比較すると北海・バルト海商業圏の人口は少なく，それが交易規模にも反映されていたのだろう，というのが Spufford の主張である[67]。

表1：中世ハンザ圏の主要都市人口推計*

都市	1300年	1400年
ケルン	54,000	40,000
ブルッヘ	40,000	125,000
ノヴゴロド	40,000	50,000
ロンドン	35,000	45,000
リューベック	28,000	25,000
ロストク	14,000	14,000
シュトラールズント	12,000	15,000
ダンツィヒ	9,000	20,000
ヴィスマル	8,000	-
ハンブルク	8,000	22,000
リーガ	7,000	7,000
ベルゲン	7,000	-
シュテティーン	6,000	10,000
ヴィスビー	3,000	3,000
ストックホルム	2,000	5,000

*空欄は不明。

出典：Barioch/Batou/Chèvre 1988, pp. 6-9, 11, 33, 52, 55-56, 62-63, 66.

[65] Graßmann 2008, S. 308.

[66] Barioch/Batou/Chèvre 1988, pp. 43, 49.

[67] Spufford 2002, S. 160-161.

５．14 世紀ハンザ商業圏の貨幣と度量衡

最後に, 1369 年リューベックのポンド税台帳および領収書に登場する貨幣と度量衡について簡単に説明しておきたい。中世の北海・バルト海商業圏では複数の貨幣体系が併存しており，ポンド税台帳や領収書にも様々な貨幣単位が登場する。本論文では，史料上で登場する貨幣単位は，当時の交換比率に従って，すべてリューベック・マルク（以下，特別な時以外はマルクと表記）に換算する[68]。

まず, ポンド税台帳で最も頻繁に登場するのがリューベックの通貨であるリューベック・マルクであり，1 マルク＝16 シリング＝192 ペニヒ（1 シリング Schilling＝12 ペニヒ）で換算される計算貨幣であった。その他にも，1/2 ペニヒ（ドイツ語でシャーフ Scherf，ラテン語でオボルス obolus），1 ポンド＝20 シリング＝1.25 マルクで計算されるリューベック・ポンド，銀の地金として銀マルク（marca argenti，1 銀マルク＝2 マルク）および純銀マルク（marca puri argenti，1 純銀マルク＝3 マルク）があった。なお，リューベック近隣のヴィスマルやハンブルクでもリューベックと同じ貨幣体系が利用されていた。この内，14 世紀後半のリューベックで実際に造幣されていた硬貨としては，銀貨であるペニヒ貨，4 ペニヒに相当するヴィッテン貨（Witten），そして，10 シリングに相当する金貨（ドイツ語でグルデン Gulden あるいはフロレン Frolen，ラテン語ではアウレウス aureus あるいはフロレヌス florenus と表記）があった[69]。

リューベック・マルクと同じ計算体系だったのが，メクレンブルクやポメルンの通貨であり，1 ロストク・マルク（Mark rostockisch）＝16 シリング＝192 ペニヒ（1 シリング＝12 ペニヒ），1 ズント・マルク＝16 シリング＝192 ペニヒ，1 フィンケナオゲン・マルク＝16 シリング＝192 フィンケナオゲン，1 シュテティーン・マルク（Mark stettinisch）＝16 シリング＝192 ペニヒとなっていた。1369 年に一般的だったリューベック・マルクとの交換比率は，1 ロストク・マルク＝1 ズント・マルク＝2/3 リューベック・マルク（＝10 シリング 8 ペニヒ），1 フィンケナオゲン・マルク＝1 シュテティーン・マルク＝0.5 リューベック・マルク（＝8 シリング）だった[70]。

プロセインの通貨はプロイセン・マルクであり，1 プロイセン・マルク＝24 スコット（Skot）＝60 シリング＝720 ペニヒ（1 シリング＝12 ペニヒ）という計算貨幣になっていた。交換比率は 1 プロイセン・マルク＝1.5 リューベック・マルクであった[71]。

リーフラント（現在のラトヴィア・エストニアに該当する歴史的地名）では，1 リーガ・マルク（Mark rigisch）＝ 4 フェルディング（Ferding）＝48 エール（Ör）＝144 アルティヒ（Artig）という独自の計算貨幣が使用されており，交換比率は 1 リーガ・マルク＝2.25

---

[68] ハンザ圏の貨幣体系については Sprandel 1975, S. 196-201; Stieda 1887, Inhalt, S. X を，各通貨のリューベック・マルクとの交換比率については Jesse 1967, S. 221; Lechner 1935, S. 41-43, 63-65 を参照した。

[69] Sprandel 1975, S. 196; Lechner 1935, S. 65. リューベックの貨幣については，次を参照。Dummler 2012; Dummler 2015.

[70] Sprandel 1975, S. 200-201; Lechner 1935, S. 42-43.

[71] Sprandel 1975, S. 197; Lechner 1935, S. 41.

リューベック・マルクとなっていた[72]。

ポンド税台帳でリューベック・マルクの次によく登場するのが，フランドル・ポンド（グロート・ポンド）である。グロート・ポンドは，1 ポンド＝20 シリング＝240 グロート（1 シリング＝12 グロート）で計算され，リューベックでは，フランドル，北ネーデルラント，ハンブルクおよびオルデスロー方面との取引でよく使用されていた。リューベック・マルクとの交換比率は，1 ポンド＝5 マルクであった[73]。

ポンド税台帳および領収書に登場する度量衡については，あまり情報がない。というのも，1369 年の台帳にも領収書にも，商品の数量が記されている事例が少ないためである。梱包単位としてよく登場するのが，毛皮・革に使用されるスキムメーゼ（Scimmese），毛織物のテルリング（Terling），各種の樽（トンネ Tonne，ファス Faß，パイプ Pipe）などである。度量衡としては，ラスト（Last）とシェッフェル（Scheffel）などがあったが，この内，重量に換算可能だったのが容積を示す単位のラストであり，1 ラスト＝12 トンネで計算されるが，内容物によってその重量にはかなりの幅があった[74]。そのために，取引されていた商品の量的把握は取引額に依拠せざるをえず，本論文ではリューベック・マルクで表記を統一する。

なお，14 世紀におけるリューベック・マルクの貨幣価値を厳密に評価するのは困難であるが，Ahrens がリューベック・マルクをユーロに換算した試算値が存在する（換算の際には 2002 年時点のユーロが基準とされている）[75]。あくまでも概算値ではあるが，参考までに紹介すると，1 リューベック・マルクをユーロに換算した数値は，1301 年-1350 年は 381.93363 ユーロ，1351 年-1375 年は 363.0159 ユーロ，1376 年-1400 年は 267.40467 ユーロとなる。この数値を 2002 年の為替比率に従って円に換算すると，1301 年-1350 年は 45,051 円，1351 年-1375 年は 42,819 円，1376 年-1400 年は 31,541 円となる（小数点以下切り捨て）[76]。つまり，本論文で検討する 1369 年の 1 リューベック・マルクの価値は，約 42,819 円，1 シリングは約 2,676 円，1 ペニヒは約 223 円ということになる。あくまでも厳密性に欠ける試算値であるため，ここでは当時の取引額を想起するための手がかりとして紹介するにとどめたい。

---

[72] Sprandel 1975, S. 198; Lechner 1935, S. 64.

[73] Lechner 1935, S. 63-64.

[74] Wolf 1986, S. 192-193.穀物 1 ラストの重量は，穀物の種類によって比重が異なるため，穀物の種類が異なると重量も異なる。例えば，リューベックでは大麦 1 ラストの重量が 2,053.6-2,117.7 キログラムであったとされている。Wolf 1986, S. 54.

[75] Ahrens 2004, S. 295-296. なお Ahrens の試算値は，Waschinski 1952 の研究成果に依拠している。

[76] 円に換算するための為替比率は，2002 年の期中平均である 1 ドル＝1.063 ユーロ＝125.388 円から小数第 4 位以下を切り捨てた 1 ユーロ＝117.956 円を利用した。為替比率の典拠は，国際連合統計局『国際連合世界統計年鑑 2002-2004』原書房，2006 年，789 頁，791 頁。

第１部　西方貿易―ネーデルラント・オルデスロー・ハンブルク
第１章　フランドルと北ネーデルラント

はじめに

中世のネーデルラント地方（現在のオランダ・ベルギーに該当する地域）は人口稠密で多数の都市が存在し，特に南ネーデルラント（現ベルギー）では毛織物工業が発達していた。そのため，ハンザおよびリューベック商業にとって，ネーデルラント地方は毛織物の供給地として最も重要な地域であった。先行研究では，このネーデルラント地方を３つの商業圏に区分している[1]。まず，ハンザの４大商館のひとつであるブルッヘ商館が存在したフランドル（Flandre）伯領を中心とした地域であり，ブラバント（Brabant）公領やエノー（Hainaut）伯領もこの地域に含まれる。この地域の商業拠点としては，フランドル伯領の三大都市ブルッヘ，イーペル（Ieper），ヘント（Gent）の他，ダム（Damme），スロイス（Sluis），アールデンブルフ（Aardenburg），アントウェルペン（Antwerpen）などの中小都市があった。２つ目の商業圏は，北ネーデルラント（現オランダ）のホラント（Holland）伯領とゼーラント（Zeeland）伯領であり，中世ではドルトレヒト（Dordrecht）とアムステルダム（Amsterdam）が２大商業中心地であった。この地域の都市は，ケルン同盟にも参加しており，ドルトレヒトやアムステルダムでもポンド税が徴収されていた。最後に，北ネーデルラントのゾイデル海（Zuiderzee，現在のエイセル湖 IJsselmeer）東岸とエイセル川（IJssel）流域の諸都市があり，代表的な都市はエイセル川流域のカンペン（Kampen）とデーフェンター（Deventer）であった。この地域の都市はハンザに加盟していた時期があり，ケルン同盟にも加わってポンド税の徴収に参加していた。

これらの諸地域とリューベックは，海陸の通商路で結ばれていた。海路では，リューベックからユトランド半島を迂回して北海沿岸を航行する迂回航行（Umlandfahrt）が利用されていた。15 世紀の北海―バルト海間の航海ルートについて記した『海書』（Seebuch）には，ズウィン湾（Zwin）沖からユトランド半島の北端まで北海沿岸を航行し，スカゲラク海峡（Skagerrak）―カテガット海峡（Kattegat）を通過してバルト海に入り，大ベルト海峡（Storebælt）からリューベックへと至る海路が記録されている[2]。陸路では，リューベックからトラーヴェ川（Trave）の水路を利用してオルデスローへ，そこから陸路でハンブルクに向かい，エルベ川を渡河してシュターデ（Stade）―ブレーメン（Bremen）―デーフェンター―ライン川流域のアーネム（Arnhem）―ワール川（Waal）流域のネイメーヘン（Nijmegen）―スヘルデ川（Schelde）流域のアントウェルペンを経由してブルッヘに至るルートが利用されていた[3]。リューベックからハンブルクまでは内陸路を利用し，ハンブル

---

[1] 以下の説明については，ドランジェ 2016，261-267 頁に依拠している。Henn 2006 でも同様にネーデルラント地方を３つの地域に区分している。

[2] 『海書』に記された海路については Goetz 1973 参照。

[3] Bruns 1896, S. 47-55; Bruns/Weczerka 1962, S. 137-141; Bruns/Weczerka 1967, Karte 2.

クから北海沿岸を海路でブルッヘへ向かうルートもあった[4]。北海―バルト海間を直通の海路で結ぶ迂回航行の利用が活発化するのは 15 世紀以降とされており，それ以前はリューベック―ハンブルク間の内陸ルートの方が北海・バルト海商業圏の基幹通商路であったとされている。また，15 世紀以降になっても，リューベックとハンブルクでの積み替えに伴う運送料の上昇に耐えられる軽量・高価な商品については，リューベック―ハンブルク間の内陸路を流通していたとされている[5]。

以上のことから，リューベックとネーデルラント地方との商業について検討する場合，海路で直接結ばれていたネーデルラント地方との商業とハンブルクを経由した商業についてそれぞれ検討する必要がある。そこで，第 1 部では，ポンド税台帳と領収書に記録が残っている，フランドル地方（個々の都市名は記録されていない），ホラント地方のドルトレヒト，エイセル川流域のカンペンについて第 1 章で検討し，第 2 章では北海沿岸のハンブルクと，リューベック―ハンブルク間内陸路の中継拠点であったオルデスローについて検討する。

本章で検討する中世のリューベック―ネーデルラント商業については，1911 年に発表された Bahr のフランドル商業に関する著書が長らく唯一の研究であった[6]。彼はブルッヘの関税表や仲買人規則，ハンブルク，ロストク，リューベックといったハンザ商人の商業帳簿，ドイツ騎士修道会の商業帳簿，1369 年ハンブルクのポンド税台帳などを利用して，ハンザ―フランドル商業で取引された主要商品について解説した。その後，Stein が，1369 年に作成されたブルッヘ商館の租税記録から，ブルッヘにおけるハンザ商業の取引規模を推測している[7]。それによると，この年のハンザ商人の取引額は 21 万 2000 マルクと推計され，ドランジェはそれを 1368 年リューベックの総取引額の 39%に該当すると評価している[8]。また，フランドルを直接扱った研究ではないが，14 世紀のリューベック―ストックホルム商業史に関する著書を 1933 年に発表した Koppe は，リューベックを経由してストックホルム―フランドル間で取引をしていたリューベック商人の存在について指摘し，そのような商人の事例を紹介している[9]。その後しばらくの間，研究に進展はなかったが，1992 年に始まったドイツのキール大学とグライフスヴァルト大学の共同研究プロジェクト「ブルッヘのハンザ商人」（Hansekaufleute in Brügge）をきっかけに，ブルッヘ商館や

---

[4] 1340 年頃にリューベック商人の積荷を載せたハンブルク船がマース川沖合で被害を受けた記録が残されている。柏倉 2005。

[5] 谷澤 2011；谷澤 2017 b は 19 世紀におけるリューベック―ハンブルク間の交通について紹介している。

[6] Bahr 1911. 中世の北ネーデルラント商業については，ハンザ－オランダ間の外交関係史に関する研究（Seifert 1997）やハンブルクからのビール輸出に関する研究（Stefke 1979）は存在するが，14 世紀のリューベック－北ネーデルラント商業史については研究が進んでいない。

[7] Stein 1917, S. 189-236.

[8] ドランジェ 2016，262 頁。

[9] Koppe 1933.

そこで取引に従事していたハンザ商人に関する研究が活発化することになった[10]。この研究プロジェクトから生まれた成果のひとつとしてリューベックのフランドル渡航商人（Flandernfahrer）に関する研究が，Asmussen によって 1999 年に刊行された[11]。彼は 1368 年リューベックと 1369 年ハンブルクのポンド税台帳を利用して，リューベック―フランドル商業の主要商品について解説するとともに，1370 年から 1389 年にかけてフランドル人とフランス人がハンザ商人から略奪した商品の損害額一覧から，ハンザのフランドル商業においてリューベック商人が最大の割合を占めていたことを明らかにした[12]。

以上のように，先行研究では，Bahr と Asmussen を除けば，ハンザやリューベックのネーデルラント商業に関する研究は少なく，数量史料を利用した事例研究が必要とされている。また，本書で利用するのと同じポンド税関連史料を分析した Koppe は，ポンド税台帳に記録されているハンブルクやオルデスローからの輸出入記録をフランドルとの貿易と同一視しており，そのことが他の研究者から問題視されている[13]。そこで，本章では，1369 年リューベックのポンド税台帳および領収書から判明するリューベック―ネーデルラント間の海上ルートを利用した商業活動について，ハンブルク経由の内陸ルートとは別個に検討する。

１．貿易構造

1369 年のポンド税台帳と領収書から判明するリューベック―ネーデルラント商業の構造は，表 1-1 の通りである。ブルッヘとの取引が記録されていた 1368 年のポンド税台帳とは異なり，1369 年の台帳にはフランドル（ラテン語で Flandria）としか記録されておらず，ブルッヘなど個別都市の地名は記録されていない。1368 年の台帳では，輸出はフランドル地方（92.5 マルク）[14]，輸入はブルッヘ（3,856.375 マルク）としてしか記録されておらず[15]，両者を合計した 1368 年のフランドル地方とリューベックとの輸出入額の合計は 3,948.875 マルクにすぎなかった。1368 年の数値と比較すると，1369 年の輸出入額は 17,317 マルクとなっており，4 倍以上の取引規模を記録している。フランドル地方との海上取引という点では，1368 年よりも 1369 年の方が当時の状況をより反映していたと考えられるだろう。また，1368 年のフランドル地方との取引額でブルッヘの割合が圧倒的に多かったことを顧慮すると，1369 年のフランドル地方とリューベックとの取引でもブルッヘが主な取引相手であったと考えていいだろう。ただ，1369 年リューベックのポンド税台帳および領収書から判明するリューベックの総取引額においてフランドル地方が占める割合

---

[10] この研究プロジェクトについては次を参照。Paravicini 1992, S. 91-166; Hammel-Kiesow 2000, S. 361-379.

[11] Asmussen 1999.

[12] Asmussen 1999, S. 232, Tab. 15.

[13] Lechner 1935, S. 49. Asmussen 1999, S. 17-18, 224.

[14] Lechner 1935, I 497, S. 165.

[15] Lechner 1935, I 1356-1358, S. 302-303.

は 4 パーセントにすぎず，他の地域と比較すると，メクレンブルク地方（19,967 マルク）よりも少なく，ノルウェー（13,401 マルク）よりも多いという程度の規模にすぎなかった。

ケルン同盟に参加し，自市でポンド税を徴収していたカンペンとドルトレヒトとの取引はポンド税台帳に記録されておらず，表 1-1 で示している数値（カンペン：1,220 マルク，ドルトレヒト：500 マルク）はリューベック市立文書館に現存するポンド税領収書に記載されていたデータを集計したものである。そのため，カンペンとドルトレヒトについては不完全な輸入状況しか判明しないことに留意しなければならない。なお，1368 年のポンド税台帳でもカンペンやドルトレヒトとの取引は記載されておらず，カンペンについてのみポンド税領収書の記録（輸入額：835 マルク）が残されている[16]。

表1-1：リューベックーネーデルラント商業

単位：リューベック・マルク

地名	輸出	輸入	合計	割合
フランドル地方	11,340.0000	5,977.0000	17,317.0000	91.0%
カンペン	0.0000	1,220.0000	1,220.0000	6.4%
ドルトレヒト	0.0000	500.0000	500.0000	2.6%
合計	11,340.0000	7,697.0000	19,037.0000	100.0%

出典：AHL, PZB 1369-1371, fol. 298r-299v, 300v- 302r, 344v-345r, 346r, 415v, 466v-467r, 468r, 470r, 489r; AHL, PQ 6-10.

貿易収支については，北ネーデルラントとの取引記録が不完全であるため，フランドル地方についてのみ確認すると，リューベックからの輸出額 11,340 マルクに対してフランドル地方からの輸入額は 5,977 マルクとなっており，リューベックの輸出超過となっている。しかし，これは迂回航行を利用した海上貿易についてのみに言えることであり，ハンブルクを経由したフランドル方面からの輸入については，高価な毛織物が大量に輸入されており，リューベック―フランドル商業全般ではリューベックの輸入超過だったことが推測される[17]。

表1-2：リューベック―ネーデルラント商業の取引時期

単位：リューベック・マルク

地名	1369年3月11日-1369年7月12日	1369年7月13日-1369年10月2日	1369年10月3日-1369年12月24日	1369年12月25日-1370年4月13日	合計
フランドル地方	8,046.0000	3,716.5000	634.0000	4,920.5000	17,317.0000
カンペン	800.0000	0.0000	0.0000	420.0000	1,220.0000
ドルトレヒト	500.0000	0.0000	0.0000	0.0000	500.0000
合計	9,346.0000	3,716.5000	634.0000	5,340.5000	19,037.0000
割合	49.1%	19.5%	3.3%	28.1%	100.0%

出典：AHL, PZB 1369-1371, fol. 298r-299v, 300v- 302r, 344v-345r, 346r, 415v, 466v-467r, 468r, 470r, 489r; AHL, PQ 6-10.

ポンド税台帳の記帳時期に従ってリューベック－ネーデルラント商業の取引額を集計したのが表 1-2 である。この表から分かる通り，商業活動が最も活発だったのは 3 月から 7

[16] Lechner 1935, II Kp 1-5, S. 366.

[17] この点については，第 2 章で改めて検討する。

月にかけての時期であり，10 月から 12 月は取引額が低下している。12 月末から 4 月にかけて再び取引が活発化しているが，15 世紀前半にハンザが 11 月から 2 月にかけての冬季航海を禁止していることから判断しても[18]，冬季の海上貿易は不活発だったと言ってよいのではないだろうか。

２．商品

ここでは，リューベック―ネーデルラント間で取引されていた商品について，フランドル地方と北ネーデルラント（カンペンとドルトレヒト）に分けて検討する。上述のように，北ネーデルラントのカンペンとドルトレヒトについては輸入記録しかないため，輸出状況については不明である。さらに，輸入品の中で商品名が判明するのはワインと毛織物（両方とも原産地不明）だけであり，しかも毛織物は数量不明のワインと一括されて記載されており，両者の正確な割合は不明である（表 1-3 参照）。ただ，1368 年カンペンのポンド税領収書によると，輸入額 835 マルクの内 755 マルク（90 パーセント）をワインが占めており，残りの 80 マルクは現金だったことから，海路を利用して北ネーデルラントから輸入された主要商品は，ワインだったと推測してもよいだろう[19]。

表1-3：北ネーデルラントからの輸入（1369年）

単位：リューベック・マルク

商品	金額	割合
ワイン	660.0000	38.4%
不明	560.0000	32.6%
ワイン・毛織物	500.0000	29.1%
合計	1,720.0000	100.0%

出典：AHL, PQ 6-10.

リューベックとフランドル地方との間で取引されていた商品を集計したのが表 1-4 と表 1-5 である。まずリューベックがフランドル地方から輸入していた商品について確認しよう（表 1-4 参照）。輸入額 1 位は油（輸入額 2,188.5 マルク，輸入額に占める割合 36.6 パーセント，以下同じ）であり，2 位は毛織物（1,666 マルク，27.9 パーセント），3 位はワイン（912 マルク，15.3 パーセント）と続いており，上位 3 商品だけで輸入額の約 80 パーセントを占めている。輸入額第 1 位が油（おそらくオリーブ油）というのは意外かもしれないが，1368 年のポンド税台帳でもブルッヘからの輸入額 1 位は油（2,075 マルク，54 パーセント）となっている[20]。油は重量商品のため，ハンブルクとオルデスローで商品の

---

[18] ドランジェ 2016，157 頁。

[19] Lechner 1935, II Kp 1-5, S. 366.

[20] Lechner 1935, I 1356-1358, S. 302-303.なお，1368 年の台帳では油とコメが一緒に記帳されている事例（260 マルク）があるため，実際にはもっと多くの油が輸入されていたのは間違いないだろう。

表1-4：フランドルからの輸入（1369年）

単位：リューベック・マルク

商品	金額	割合
油	2,188.5000	36.6%
毛織物	1,666.0000	27.9%
ワイン	912.0000	15.3%
各種商品	504.0000	8.4%
コメ	286.0000	4.8%
不明	105.0000	1.8%
キャラウェイ	105.0000	1.8%
樽	86.5000	1.4%
硫黄	47.5000	0.8%
獣脂	42.5000	0.7%
アーモンド	24.0000	0.4%
現金	10.0000	0.2%
合計	5,977.0000	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 298r-299v, 300v-302r, 344v-345r, 346r, 415v, 466v-467r, 468r, 470r, 489r.

表1-5：フランドルへの輸出（1369年）

単位：リューベック・マルク

商品	金額	割合
ライ麦	3,256.0000	28.7%
ベーコン	2,116.5000	18.7%
バター	1,801.0000	15.9%
塩	852.0000	7.5%
各種商品	799.5000	7.1%
小麦	535.5000	4.7%
ライ麦・穀粉	369.0000	3.3%
現金	360.0000	3.2%
蜜ロウ	226.0000	2.0%
その他	215.5000	1.9%
鉄	189.5000	1.7%
毛織物・塩	150.0000	1.3%
銅	140.0000	1.2%
ベーコン・ライ麦	90.0000	0.8%
スキムメーゼ	83.0000	0.7%
肉	80.0000	0.7%
獣脂・豚脂	76.5000	0.7%
合計	11,340.0000	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 298r-299v, 300v- 302r, 344v-345r, 346r, 415v, 466v-467r, 468r, 470r, 489r.

積み替えが必要な内陸路よりも，フランドル地方からリューベックまで直通の海路が好んで利用されていたようだ。毛織物はフランドル地方の代表的な輸出品であり，通常は第 2 章で述べる内陸路経由で輸入される場合が圧倒的に多かったが（ハンブルクから輸入された商品のうち毛織物だけで 17,403 マルクを記録している）[21]，その一部は海路でも輸入されていたようだ。1368 年のポンド税台帳でも同様に，毛織物が輸入額 2 位（585 マルク，15 パーセント）となっていた[22]。ワインは上述のカンペンからも輸入されていたが，油と同様に重量商品であり，海路で運ぶのに適していた商品だったようだ。ただ，1368 年の台帳ではワインの輸入は記録されていない。輸入額 4 位の各種商品（504 マルク，8.4 パーセント）は，史料中で特定の商品名ではなく，bona（商品），diversa bona（各種商品），alia bona（その他商品），sua bona（彼の商品）などと表記されていたものを集計してあるが，商品の内容が一切不明なため，本論文では分析の対象とはしない。輸入額 5 位以下で特色のある商品としては，地中海商業圏からもたらされたと考えられる南ヨーロッパ産の商品があげられる。具体的には，コメ（286 マルク，4.8 パーセント），キャラウェイ（105 マルク，1.8 パーセント），アーモンド（24 マルク，0.4 パーセント）である。先行研究によ

[21] 本論文第 2 章，表 2-3 参照。

[22] Lechner 1935, I 1356-1358.

るとコメはスペインからの輸入品と推測されており[23]，1368 年のポンド税台帳でもブルッヘから 164.5 マルクのコメが輸入されていた[24]。

次に，リューベックからフランドル地方へ輸出された商品について確認してみよう（表 1-5 参照）。輸出額首位を占めているのはライ麦（輸出額 3,256 マルク，輸出額に占める割合 28.7 パーセント，以下同じ）であり，続いてベーコン（2,116.5 マルク，18.7 パーセント），バター（1,801 マルク，15.9 パーセント）となっており，上位 3 商品で輸出額の約 63 パーセントを占めている。4 位は塩（852 マルク，7.5 パーセント），5 位は各種商品（799.5 マルク，7.1 パーセント）となっている。6 位は小麦（535.5 マルク，4.7 パーセント），7 位はライ麦と穀粉の一括課税（369 マルク，3.3 パーセント）である。ライ麦，小麦，ライ麦・穀粉を合計した穀物全体の輸出額は 4,160.5 マルクとなり，穀物が輸出額全体に占める割合は約 37 パーセントとなる。低価重量品である穀物の場合も，輸入品の油やワインのように，商品の積み替えが必要ない，直通の海路で輸出されていたようだ。また，金額は少ないが，肉（80 マルク）と獣脂・豚脂（76.5 マルク）もリューベックから輸出されており，ベーコンやバターと合計すると，畜産品の輸出額が 4,074 マルク，輸出額に占める割合は約 36 パーセントとなる。このように，穀物や畜産品が輸出額の約 73 パーセントを占めているのが，輸出面での特徴と言えるだろう。この他に，東ヨーロッパの特産品である蜜ロウ（226 マルク），スウェーデンやプロイセン地方の輸出品である鉄（189.5 マルク）と銅（140 マルク）が，リューベックを経由してフランドル地方へ輸出されていた。なお，1368 年のポンド税台帳に記載されているフランドル地方への輸出額は 92.5 マルクにすぎないため[25]，1369 年の数値と比較することはしない。

3．商人

本節では，ネーデルラント地方との取引に従事した商人について検討するが，北ネーデルラントについては 7 名の商人しか確認できないため，フランドル地方についてのみ検討する。リューベック―フランドル間で取引に従事していた商人の人数と取引額を集計したのが，表 1-6 である。取引額に応じたリューベック商人の分類については，Koppe がポンド税台帳を利用してリューベック―ストックホルム商業を分析した著書で，取引額 100 マルクより上を大商人，100 マルク以下を中小商人と分類している[26]。その後，取引額 100 マルクを境に大商人と中小商人を区分するという考え方は，14 世紀末のポンド税台帳に基づいたリューベックの北ヨーロッパ商業および海運に関する Weibull の研究に継承された。Weibull の研究では，1398 年―1400 年リューベックのポンド税台帳のデータから，商人の取引規模が 50 マルク毎に分類されており，それがスウェーデン，ノルウェー，デンマーク

---

[23] ハンザ圏におけるコメ取引については，次を参照。Karg/Jahnke 2016; Luis 2016.

[24] Lechner 1935, I 1356-1358.

[25] Lechner 1935, I 497. 1 隻の船舶の記録であり，積荷の内訳は，亜麻 67.5 マルク，蜜ロウ 25 マルクであった。

[26] Koppe 1933, S. 126.

といったリューベックの取引相手地域毎に比較されている[27]。本論文では，Weibull の研究成果と比較が可能なように，彼と同じ基準に従って商人を分類して集計している。その結果，リューベックでフランドル商業に従事していた商人 148 人の内，100 マルク以下の中小商人 92 人の取引額は合計 3,783.5 マルク（取引額全体に占める割合 21.8 パーセント，以下同じ）にすぎないのに対して，101 マルク以上の大商人 56 人の取引額は 13,533.5 マルク（78.2 パーセント）に達していた。大商人の人数は中小商人よりも少ないが，取引額という点でフランドル商業の大半を担っていたのは大商人だったということが判明する。迂回航行を利用したフランドル地方との直接取引は，積み替えが必要な内陸ルートを利用した取引よりも，輸送費用という点では安価だったかもしれないが，商品を載せた船舶が難破したり，海賊に襲撃されたり，リスクという点では負担が大きかった。そのようなリスクに耐えられる大商人が，海路を利用したリューベック―フランドル間商業では主流だったと言えるだろう。Weibull の研究によると，14 世紀末の北ヨーロッパにおいて大商人の割合が多かったのは，リューベックからの距離が遠かったベルゲンとストックホルムであった[28]。このことから，遠距離になればなるだけ，大商人の割合が増えていったことが推測される。

表1-6：フランドル商業に従事した商人の人数と取引額（1369年）

取引額（マルク）	商人数	合計（マルク）	割合
1-50	58	1,382.5000	8.0%
51-100	34	2,401.0000	13.9%
101-150	17	2,076.0000	12.0%
151-200	12	2,142.5000	12.4%
201-250	9	2,106.0000	12.2%
251-300	4	1,122.5000	6.5%
301-350	5	1,586.0000	9.2%
351-400	0	0.0000	0.0%
401-450	5	2,102.5000	12.1%
492	1	492.0000	2.8%
544	1	544.0000	3.1%
580	1	580.0000	3.3%
782	1	782.0000	4.5%
合計	148	17,317.0000	100%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 298r-299v, 300v-302r, 344v-345r, 346r, 415v, 466v-467r, 468r, 470r, 489r.

フランドル商業では特に上位 9 人の取引額の合計が 4,500.5 マルク（26 パーセント）に達しており，中小商人 92 人の取引額 3,783.5 マルクよりも多かった。この 9 人の大商人の

[27] Weibull 1967.

[28] Weibull 1967, S. 79, 89.

取引内容を抜粋したのが表 1-7 である。この表から判明するのは，大商人の取引が輸出か輸入のどちらかに特化しているという点である。Loo, Biscopingh, Sconenbergh, Hachede の取引は，少額の輸入はあるとしても，取引額のほとんどが輸出に向けられている。その内 Hachede はバター輸出のみに携わっているが，それ以外の 3 人についてはライ麦と小麦の穀物輸出が特徴的である。一方，Klotz，Winsen，Otbernshusen，Schoneweder は輸入のみに携わっており，Klotz はワイン，Otbernshusen は毛織物，Schoneweder は油の輸入に特化し，Winsen は各種商品，油，コメの輸入に携わっていた。唯一の例外が Luddam であり，彼の取引は毛織物を輸入し，蜜ロウを輸出するというものであり，取引額は均衡していた。

表1-7：フランドル商業に従事した主な商人

商人	取引額（マルク）	取引件数	取引内容	出典
Loo, Hinricus de	782.0000	3	ライ麦407マルク，小麦314マルク，鉄61マルクを輸出	AHL, PZB 1368-1371, fol. 346r, 466v, 470r.
Schoneweder, Heine	687.0000	4	油407.5マルクを輸入，ベーコン206マルク，ライ麦・穀粉60マルク，獣脂13.5マルクを輸出	AHL, PZB 1368-1371, fol. 299v, 345r, 469r.
Klotz, Heine	580.0000	1	ワイン580マルクを輸入	AHL, PZB 1368-1371, fol. 298r.
Biscopingh, Thideke	544.0000	2	ライ麦544マルクを輸出	AHL, PZB 1368-1371, fol. 467r, 468r.
Winsen, Herman de	492.0000	4	各種商品232マルク，油135マルク，コメ110マルクを輸入，バター15マルクを輸出	AHL, PZB 1368-1371, fol. 299r, 344v, 345r, 469r.
Otbernshusen, Jan	435.0000	2	毛織物435マルクを輸入	AHL, PZB 1368-1371, fol. 300v.
Schonenbergh, Hinricus	428.0000	4	ライ麦374マルク，ベーコン54マルクを輸出	AHL, PZB 1368-1371, fol. 299r, 466v, 467r, 469r.
Hachede, Clawus de	420.0000	1	バター420マルクを輸出	AHL, PZB 1368-1371, fol. 301r.
Luddam, Thomas	412.0000	2	毛織物206マルクを輸入，蜜ロウ206マルクを輸出	AHL, PZB 1368-1371, fol. 415v.

また，ハンザ都市リューベックの指導者層を形成していた参事会員については，1369 年当時現職であった Loo(在職期間 1364-1386 年)と，後年に参事会員となった Otbernshusen（在職期間 1370-1380 年）と Schonenbergh（在職期間 1376-1384 年）の合計 3 人の存在が確認できる[29]。

さらに，主要商人 9 人の内，6 人は他の場所との取引が史料で確認できる。その中でも特徴的なのが，Hachede，Loo，Winsen の 3 人である。Hachede は，ハンブルクから 180 マルクの毛織物を輸入し，オルデスローへ蜜ロウ 140 マルク，ゴットランド島へ塩 38 マルクを輸出していた。フランドルへの輸出額も含めると（以下同じ）合計 778 マルクの取引額であった[30]。このことから，Hachede が低価重量品のバターは海路で，高価な毛織物と蜜ロウは海路よりも安全な内陸路で取引していたことが分かる。

参事会員 Loo の取引額は，ハンブルクから樽（中身不明，以下同じ）187.5 マルクを輸入し，オルデスローへ蜜ロウ 289 マルク，ゴットランド島へ毛織物 87 マルク，エルビン

[29] Lutterbeck 2002, S. 292-293, 318, 365-366.

[30] AHL, PZB 1368-1371, fol. 289r, 301r, 392r; AHL, PQ 1337, 1483. なお，1368 年のポンド税台帳には，Hachede がバター80 マルク，2 スキムメーゼ 51 マルク，計 131 マルクをハンブルク方面へ輸出していたことが記録されている。Lechner 1935, I 869, 875.

グへ塩 72 マルク，合計 1,417 マルクであった[31]。さらに 1368 年には，オルデスローから毛織物 1,560 マルク，樽 85 マルクを輸入し，オルデスローへ銅 840 マルク（ダンツィヒからの輸入），ダンツィヒへ毛織物 792 マルク，塩 70 マルク，エルビングへ塩 203 マルク，羊毛 30 マルクを輸出しており，合計 3,580 マルクもの取引が 1368 年のポンド税台帳に記録されていた[32]。Loo の取引でも，低価重量品の穀物は海路で，高価な商品である毛織物や蜜ロウ，銅のように高額な荷物は内陸路経由で取引されていたことが分かる。また，北方のゴットランド島との取引を除けば，リューベックを経由した北海方面と東方のプロイセン地方との取引が特色であった。

Winsen は，ハンブルクから 3 樽 100 マルク，ストックホルムから鉄 93 マルク，バター・鉄・肉 60 マルクを輸入，オルデスローへ銅 415 マルク，ストックホルムへ塩 20 マルクを輸出，合計 1,180 マルクの取引をおこなっていた[33]。さらに 1368 年にはブルッヘから海路で油 390 マルクとコメ 30 マルク，オルデスローから樽 363.75 マルク，各種商品 185 マルク，コメ・アーモンド・砂糖 118 マルク，ストックホルムから銅 100 マルク，バター 32.5 マルクを輸入し，オルデスローへ銅 144 マルク，スキムメーゼ 100 マルク，現金 90 マルク，ストックホルムへ毛織物 96 マルクを輸出していた。1368 年のポンド税台帳に記録されていた輸出入額は，合計 1,679.25 マルクであった[34]。リューベックを経由した西方の北海方面と北方のスウェーデン間で取引するというのが Winsen の商業活動の特徴であった[35]。そして，ここでも高価・高額な商品（銅）は内陸路，低価重量商品（油）は海路という通商路の使い分けが確認できる。

以上 3 人の取引内容から，低価重量商品は海路で直接フランドル地方と取引し，高価・高額な商品は海路よりも安全なリューベック―ハンブルク間の内陸路を利用するというように，当時の商人が商品の特徴に応じて取引経路を選択していた様子がうかがえるのである。

4．船舶

14 世紀のリューベック海運で用いられていた船舶については，ポンド税台帳に基づいて Lechner や Weibull が船舶の評価額（以下，船舶価額と表記）という観点から分類を試みている[36]。というのも，ポンド税台帳にも領収書にも船舶の大きさや積載量についての記録がないため，先行研究では船舶価額に基づいた分析がされている。そのため，本論文で

---

[31] AHL, PZB 1368-1371, fol. 307v, 308r, 346r, 348v, 442r, 466v, 470r; AHL, PQ 1481.

[32] Lechner 1935, I 244, 308, 327, 518, 526, 588, 597, 854, 1092.

[33] AHL, PZB 1368-1371, fol. 250r, 251r, 289r, 290r, 417r, 436v, 438v; AHL, PQ 1487, 1544, 1545.

[34] Lechner I 1935, I 175, 193, 219, 245, 501, 632, 852, 857, 860, 1118, 1120, 1356-1358, 1359-1363.

[35] Koppe 1933, S. 131-135.

[36] Lechner 1935, S. 71; Weibull 1967, S. 56-57, Tabelle 5.

も Weibull が提示した船舶価額の分類に準じて分析することにしたい。北ネーデルラントに関しては，ドルトレヒトからリューベックに入港した 1 名の船長（船舶価額 50 マルク）についてしかデータがないため，本章ではリューベック―フランドル海運に従事した船舶についてのみ検討する。

ポンド税台帳から判明するフランドルを行き来していた船舶の価格と出入港数を集計したのが，表 1-8 である。迂回航行をおこなってリューベックとフランドルとの間を行き来していた船舶 45 隻の内，船舶価額が判明するのは 44 隻であった。44 隻の内訳は，船舶価額が 54 マルク以下の船が 4 隻（全体の 9.1 パーセント），55 マルクから 200 マルクの船が 25 隻（56.8 パーセント），201 マルク以上の船が 15 隻（34.1 パーセント）となっていた。船舶価額 55 マルクから 200 マルクの中型の船舶が占める割合が最も大きかったが，その中でも 101 マルクから 200 マルクの船が 19 隻（43.2 パーセント）と最も多く，101 マルク以上の船舶が 34 隻，つまり，全船舶数の 77.3 パーセントを占めていた。Weibull が分析したリューベック―北ヨーロッパ海運では，最も大型の船舶が航行していたのはリューベック―ベルゲン航路であったが[37]，フランドル海運に従事していた船舶もそれに匹敵する規模であった。「はじめに」で述べたように，ユトランド半島を迂回してバルト海から北海へ向かう迂回航行は，当時のリューベック海運にとって最も距離が長い航海ルートであり，遠距離航海に耐えられる，大型の船舶が利用されていたことが推測される。

表1-8：リューベック－フランドル海運の船舶価額と船舶数（1369年）

船舶価額（マルク）	船舶数	割合
1-18	3	6.8%
19-36	1	2.3%
37-54	0	0.0%
55-100	6	13.6%
101-200	19	43.2%
201-300	9	20.5%
301-400	5	11.4%
600	1	2.3%
合計	44	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 298r-299v, 300v- 302r, 344v-345r, 346r, 415v, 466v-467r, 468r, 470r, 489r.

なお，ハンザ圏では海上保険の普及が遅く，ハンザ商人は積荷を複数の船舶に分けて発送することで，リスク分散をおこなっていた[38]。一方，船主は，1 隻の船舶を丸ごと所有するのではなく，船舶を複数の持ち分に分割して保有することで，船の建造および偽装費用だけではなく，リスクの負担を軽減していた。船の安全に責任を負うことになる船長は，

[37] Weibull 1967, S. 59.

[38] ドランジェ 2016，166-168 頁。

指揮する船舶の持ち分所有者の 1 人であったと考えられている[39]。

おわりに

本章では，リューベック―ネーデルラント地方との商業関係について，ハンブルク経由の内陸路ではなく，海路を利用したリューベック―ネーデルラント商業の貿易構造，取引商品，商人，船舶について検討した。その際に，北ネーデルラント地方のデータが少ないため，フランドル地方を中心に分析した。貿易構造については，1369 年リューベックの貿易において，海路を利用したフランドル地方との取引額は 17,317 マルクにすぎず，近隣のメクレンブルク地方よりも少ない取引規模だった。フランドル地方との貿易収支については，輸出額 11,340 マルクに対して，輸入額は 5,977 マルクにすぎず，リューベックの輸出超過であった。取引時期としては，航海シーズンの春から夏にかけての時期が活発であり，秋から冬にかけての時期になると取引額は減少していた。

商品については，北ネーデルラントから輸入されていたのはワインと毛織物であり，特にワインの輸入が活発だったようだ。フランドル地方からは，油，毛織物，ワインが主要な輸入品であり，それ以外には南ヨーロッパ産のコメ，キャラウェイ，アーモンドなどが輸入されていた。フランドル地方への輸出品としては，ライ麦と小麦に代表される穀物，ベーコンとバターといった畜産品が占める割合が大きかった。

フランドル地方と取引していた商人については，取引額が 101 マルク以上の大商人が，人数は中小商人よりも少ないが，取引額に占める割合は 78.2 パーセントと大きく，特に上位 9 人の商人だけでフランドル地方との取引額の 26 パーセントを占めていた。取引額上位層の大商人の取引形態としては，輸出か輸入に特化している点が特徴的であった。また，リューベック―ハンブルク間の内陸路も利用していた 3 人の大商人の取引から，低価重量商品は海路で，高価・高額な商品は内陸路というように，すでに 14 世紀後半の時点で取引される商品の性格に応じて取引経路が使い分けられていることが判明した。

船舶については，船舶価額 55 マルクから 200 マルクの中型の船舶が占める割合が最も大きく，とりわけ船舶価額 101 マルク以上の船舶が全体の 77.3 パーセントを占めていることから，比較的大型の船舶が使用されていたと推測される。

以上は，海路を利用したリューベックの西方との取引の概要であり，内陸路を分析した従来の研究よりも，重量品の油，ワイン，穀物の取引が活発だったことが判明した。次章では，本章の分析結果を踏まえたうえで，内陸路を経由した西方との取引について検討する。

---

[39] ドランジェ 2016，162-164 頁。

第 1 部　西方貿易―ネーデルラント・オルデスロー・ハンブルク
第 2 章　オルデスローとハンブルク

はじめに

北海からエルベ川を約 110 キロメートルさかのぼった所に位置するハンブルクは，北海沿岸地域における代表的なハンザの海港都市の 1 つであった[1]。ハンブルクとバルト海沿岸のリューベックとは，約 60 キロメートルの距離がある内陸路で接続されており[2]，両都市を結ぶ通商路は，中世のバルト海と北海とを結ぶ重要な商業交通上の動脈であった。そして，このリューベック―ハンブルク間の内陸路の中継地点であったのがオルデスローである。第 1 章ですでに述べたように，リューベック―オルデスロー間の交通は，トラーヴェ川の水路を小型の船舶や艀が，あるいは，陸路を荷車が往来していた。リューベックからの商品は，水路を利用した場合はオルデスローで荷車に積み替えられ，オルデスローからハンブルクまでは陸路を移動した。ハンザ圏の陸上交易路を研究した Bruns によればオルデスローからハンブルク以外の目的地は確認できないため[3]，ポンド税台帳や領収書に記載されたハンブルクおよびオルデスローとの取引について検討する本章では，オルデスローとの商業取引はハンブルクとの取引の一部と見なして考察する。

中世ハンザ商業史におけるハンブルクの位置付けについては，バルト海沿岸に位置するリューベックにとってハンブルクが北海沿岸の港として機能していたという見解と，ハンブルクはエルベ川流域という広大な後背地を有しており，北海とエルベ川上流域を接続する港としての機能の方が重要だったという見解が対立している[4]。14 世紀末までのハンブルク商業史の研究としては，1907 年に出版された Kiesselbach の著書と 1948 年に発表された Jochmann の博士論文が現在でも最も包括的な研究である[5]。両者の研究では共に特権状や関税表といった証書史料だけではなく，関税台帳や債務台帳といった数量史料が利用されているが，ハンブルクの商業史的な位置づけについては対照的な見解が主張されている。Kiesselbach の著書では，Wendt によって刊行された 1368 年―1369 年リューベックのポンド税台帳の数値が利用されており，リューベック―ハンブルク間商業の重要性が主張されている[6]。同様に，1368 年リューベックのポンド税台帳を利用して毛織物取引について分析した Rörig の論文でも，北ヨーロッパ交通におけるリューベック―オルデスロー

---

[1] 谷澤 2011，226 頁，註 6。
[2] 谷澤 2011，32 頁.
[3] リューベック―ハンブルク間の通商路については，次を参照。Bruns 1896, S. 47-55; Bruns/Weczerka 1962, S. 137-141; Bruns/Weczerka 1967, Karte 2; 谷澤 2011，34-39 頁。
[4] 谷澤 2011，240-241 頁。
[5] Kiesselbach 1907; Jochmann 1948.
[6] Kiesselbach 1907, S. 210-216, 243-245.

間の内陸路の重要性が指摘された[7]。このように，初期の研究では，北海とバルト海を結ぶ東西交易という枠組みの中で，ハンブルクが位置付けられてきた。この間，1910 年には Nirrnheim によって 1369 年ハンブルクのポンド税台帳（ハンブルクからの海上輸出だけが記録されている）が刊行されたが，ハンブルクの商業史的な評価については特に変更はなかった。ただ，編纂者の Nirrnheim によって，従来ハンブルクからの主要輸出品と見なされてきたビールと穀物の他に，亜麻織物と毛織物の輸出額が多かったことが指摘されたことが新しい発見であった[8]。大きな転換点は，1948 年に発表された Jochmann の博士論文である。彼は，1369 年ハンブルクのポンド税台帳のデータから，ハンブルクから北海方面に向かった輸出品の中でバルト海産の通過商品（蜜ロウ，毛皮，鉄）が占める割合が少ないことを指摘し，ハンブルクを「リューベックの北海港」とは見なせないと主張した[9]。Lehe が 1958 年に発表した論文も，この Jochmann の見解に同意しながら，ハンブルクの後背地であるエルベ川流域との通商関係を重視する見解を提起している[10]。そして，1963 年の Johansen の論文では，上述の Jochmann の博士論文や Lechner が 1368 年リューベックのポンド税台帳の解説で示したグラフに基づいて，北ヨーロッパの東西交易が過大評価されてきたと主張し，ハンザの南北交易（北欧やドイツ内陸部，特にフランクフルトなどとの通商関係）の重要性が提起されている[11]。しかし，彼らの見解はポンド税の徴収規定を正しく認識しておらず，リューベックは東西交易の中心地として重要だったという反論が，1967 年にスウェーデンの研究者である Weibull によってなされている[12]。また，Jochmann の研究は 1369 年ハンブルクのポンド税台帳のデータに基づいているが，その際にポンド税台帳の数値を直接利用しているのではなく，1915 年に Vogel がドイツ航海史に関する著書の中で引用している数値に依拠している点が問題である[13]。Vogel は，ポンド税台帳から集計された商品取引額を商品の重量に換算しているが，重量換算での比較では穀物やビールといった低価重量品の割合が多くなり，高価軽量品の毛皮や蜜ロウといったロシア・東欧産の商品の評価は下がってしまうからである[14]。日本でも谷澤が，リューベック―ハンブルク間の商品流通の実態について 1368 年リューベックのポンド税台帳や 15・16 世紀の関税史料を利用した実証研究をおこなっており，内陸通商路の重要性について再確認している[15]。

ところで，第 1 章でも言及したように，リューベックを経由したストックホルム―フラ

---

[7] Rörig 1926, S. 223. 1926 年初出だが，その後，別々の論文集に 2 度再録されている。Rörig 1928; Rörig 1971.

[8] Nirrnheim 1910, S. LVII-VLIII.

[9] Jochman 1948, S. 73.

[10] Lehe 1958, S. 133, 135.

[11] Johansen 1963, S. 46.

[12] Weibull 1967, S. 8, Anm. 7, S. 24-25.

[13] Jochmann 1948, S. 71-73.

[14] Vogel 1915, S.227.

[15] 谷澤 1997；谷澤 2003。これらの論文は，谷澤 2011，第 1 章および第 2 章に加筆修正の上，再録されており，本章ではこちらを利用した。

ンドル間商業について言及したKoppeの研究は[16], 14世紀後半のリューベックやハンブルクのポンド税台帳を利用しているが，その際にハンブルクやオルデスローからの輸出入をフランドルとの交易と同一視しているという批判がある[17]。確かに，1369年ハンブルクのポンド税台帳には輸出先が全く記入されておらず，リューベックからハンブルクに送付された商品が，そこからどこへ輸出されたのかは不明である[18]。しかし，中世ハンブルク史の先行研究では，ネーデルラント地方，とりわけ，ホラントのアムステルダム，フリースラントのスタフォレン（Stavoren），フランドルのスロイスがハンブルク産ビールの輸出先として指摘されている[19]。また，1375年に記録された渡航商人団体の所属商人数からも，ハンブルク商業に占めるフランドル，ホラント，フリースラントの重要性が指摘されている[20]。さらに，本章で検討するリューベックのポンド税台帳に記載されているオルデスロー方面との取引記録やハンブルクのポンド税台帳および領収書には，商品価格や船舶価格としてフランドル通貨であるグロート・ポンドが頻繁に登場することから，ハンブルクやオルデスローの取引相手としてフランドル地方やグロート・ポンド貨の流通圏（ネーデルラント地方）が重要だったことが推測される。以上の点から，ハンブルクから北海沿岸に輸出された商品の輸出先について断定することはできないが，フランドルあるいは北ネーデルラント地方が輸出先だった可能性が高い，と本章では結論付けたい。

最後に，本章で利用するポンド税関連史料について確認しておきたい。序章で述べたように，ポンド税は，ハンザの海港都市から商品が輸出された時，そして，非課税の商品がハンザの海港都市に輸入された時に，関税が徴収されるというのが課税原則であった。ハンブルクは，1362年に始まったポンド税徴収には最初から参加していたが，1368年のポンド税徴収については，1363年から1364年，さらに1367年から1368年にかけてホルシュタイン伯との間で紛争が起こっていたため，当初は参加していなかった[21]。そのため，1368年10月までハンブルクでポンド税は徴収されておらず，ハンブルク方面からの輸入はオルデスローからの輸入として，リューベックのポンド税台帳に記載されていた。その後，ハンブルクは途中からケルン同盟に参加し，ポンド税を再び徴収し始めることになった。ハンブルクは，1368年10月6日にシュトラールズントで開催されたハンザ総会に参事会使節を派遣し，1368年分の戦費負担として900マルクの支払いとそれ以降のポンド税徴収に協力することを条件に，ケルン同盟への参加を認められた[22]。ハンブルクでポンド税の徴収が始まると，リューベックのポンド税台帳にはオルデスローからの輸入がほとんど記録されなくなり，1369年のポンド税台帳には，オルデスローからの輸入が9件しか記録されていない[23]。その代わりに，ハンブルクからの輸入について情報を提供してくれ

---

[16] Koppe 1933.

[17] Lechner 1935, S. 49; Asmussen 1999, S. 17-18, 224.

[18] Nirrnheim 1910, S. 1-91.

[19] Gabrielsson 1982, S. 169; Jochmann 1948, S. 130.

[20] Theuerkauf 1998, S. 136.

[21] Nirrnheim 1910, S. XI.

[22] Nirrnheim 1910, S. XIV; HR I, 1, Nr. 479 §15.

[23] その内の2件（AHL, PZB 1368-1371, fol. 347v.）はハンブルクのポンド税領収書の記

るのが，ハンブルクでポンド税が徴収された際に発行されたポンド税領収書であり，その内の一部がリューベック市立文書館に伝来している。しかし，第二次世界大戦後にリューベック市立文書館の所蔵史料が旧ソ連や旧東ドイツに押収された結果，ハンブルクのポンド税領収書の一部は所蔵不明となってしまった。けれども，1910 年に Nirrnheim が 1369 年ハンブルクのポンド税台帳を刊行した際に，当時リューベック市立文書館に所蔵されていたハンブルクのポンド税領収書も収録していたため，本章でも原本が伝来していない領収書については，それを利用することが可能である[24]。ただ，ポンド税領収書については，その全数がリューベックに伝来しているわけではないため，ハンブルクからリューベックへの輸入の全体像が判明するわけではない点に留意する必要がある。また，ハンブルクのポンド税領収書には，商品の金額が不明な事例が多く存在するため，実際の輸入額は本章で示した数値よりも多いと考えるべきである[25]。リューベックからハンブルク方面への輸出については，リューベックのポンド税台帳ではオルデスロー向けの輸出として記録されていると見なして問題ない[26]。ただ，リューベックに到着する前に別のハンザ都市でポンド税が徴収された商品については，リューベックで所有者が交代しない限り，リューベックでポンド税が徴収されることはなかったため，オルデスロー／ハンブルク向けの輸出がすべてポンド税台帳に記録されているわけではないことに注意すべきである。

なお，本章ではリューベック―ハンブルク間の内陸商業を扱う関係上，船舶に関するデータがほとんど存在しないため，船舶に関する分析はおこなわない。

1．貿易構造

1369 年のポンド税台帳と領収書からリューベック―オルデスロー／ハンブルク商業についてまとめたのが表 2-1 である。ハンブルク方面への輸出は，その手前にあるオルデスロー向けとしてポンド税台帳に記録されているため，輸出額はゼロとなっている。一方，ハンブルクからの輸入は，ポンド税領収書から判明するのがほとんどであり，ほんの少額（685 マルク）がオルデスローからの輸入としてポンド税台帳に記録されている。リューベックからオルデスローへの輸出額は 41,147.5 マルク，ハンブルクおよびオルデスローからリューベックへの輸入額の合計は 40,881.8958 マルクとなっており，輸出入額がほぼ均

録と重複しているため，本章ではハンブルクからの輸入として扱っている。その内の 1 件は 1369 年 8 月 28 日付（Nirrnheim 1910, Beilage II, Nr.236），もう 1 件は 1369 年 9 月 12 日付（AHL, PQ 193.）のポンド税領収書であった。

[24] 本章で検討する 1369 年ハンブルクのポンド税領収書については，Nirrnheim 1910 で刊行されている領収書の内 105 件の所蔵がリューベック市立文書館で確認できない状況である。

[25] 商品の数量は判明するが，金額不明の記録が 122 件確認できる。

[26] 既述の Bruns の交通路研究によれば，オルデスローを通過した商品の目的地としては，ハンブルク以外の都市は考えられない。Bruns 1896, S. 47-55; Bruns/Weczerka 1962, S. 137-141; Bruns/Weczerka 1967, Karte 2

衡していた。

表2-1：リューベック―オルデスロー・ハンブルク商業

単位：リューベック・マルク

地名	輸出	輸入	合計	割合
オルデスロー	41,147.5000	685.0000	41,832.5000	51.0%
ハンブルク	0.0000	40,196.8958	40,196.8958	49.0%
合計	41,147.5000	40,881.8958	82,029.3958	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 193r, 234r, 234v, 288v-291r, 347v-349r, 417r, 471v-473r, 474v; AHL, PQ 81-86, 95-105, 107-111, 113-118, 120-124, 126-133, 135-157, 159-160, 162-165, 167-168, 170-173, 175, 177-178, 181, 183-200, 203-218, 220, 222-223; Nirrnheim 1910, Beilage II, Nr. 76-88, 91-128, 131, 152, 168, 202, 205, 209-211, 225-239, 241, 246-258, 260-273, 280-281, 283-284.

このような貿易構造は，1368 年の貿易構造と大きく異なっている。Lechner によって集計された数値によると，1368 年のポンド税台帳と領収書には，ハンブルクからの輸入が 9,247.5 マルク，オルデスローへの輸出が 37,317.8375 マルク，オルデスローからの輸入が 136,280.125 マルク記録されている[27]。輸出額については 1369 年の方が約 3,830 マルク多くなっているが，輸入額は 1368 年の方が大幅に上回っている。しかも，1368 年に記録されたオルデスローからの輸入額は，1368 年から 1369 年を通じて一つの都市との取引額としては最高を記録しており，1368 年にハンブルク方面からの輸入が輸出を約 10 万マルク上回っていたことになる。これは 1368 年の数値が特別多かったということではなく，上述のように 1368 年 10 月までハンブルクでポンド税が徴収されていなかったために，ハンブルク方面からの輸入がオルデスローからの輸入としてポンド税台帳に記録されていたために高額となっていたと考えるべきだろう。また，1369 年にハンブルクからの輸入を記録したポンド税領収書には，価格不明の商品が合計 122 件も存在する。このことからも 1369 年のハンブルクからリューベックへの輸入額が少なかったことが説明されるだろう。

1368 年にデンマーク諸海峡周辺では，ハンザとデンマーク王国およびノルウェー王国との戦闘がおこなわれており，その影響でユトランド半島を迂回する迂回航行が阻害され，リューベック―ハンブルク間の内陸路の利用が増えた可能性を指摘する研究者もいる[28]。しかし，オルデスローで徴収されていた関税徴収額の推移からは，そのような商業動向は読み取れない（図 1 参照）。14 世紀のオルデスローでは関税が徴収されており，当時その関税徴収権を獲得していたリューベックの都市会計簿には，1340 年から 1386 年までの関税額が記録されていた[29]。それによると 1368 年に徴収されていた関税額は 31 マルクだったのに対し，1369 年の関税額は 41 マルクであり，1368 年よりも 1369 年の方が関税徴収額は多かったことが分かる。このことからも，1369 年のハンブルク－リューベック間商業は 1368 年よりも多かったことが推測され，1368 年の数値の方が当時のリューベック―ハンブルク商業の実態をより反映していたと言えるのではないだろうか。また，1368 年の数値では，ハンブルクおよびオルデスローからの輸入額が輸出額を大幅に上回っていたが，

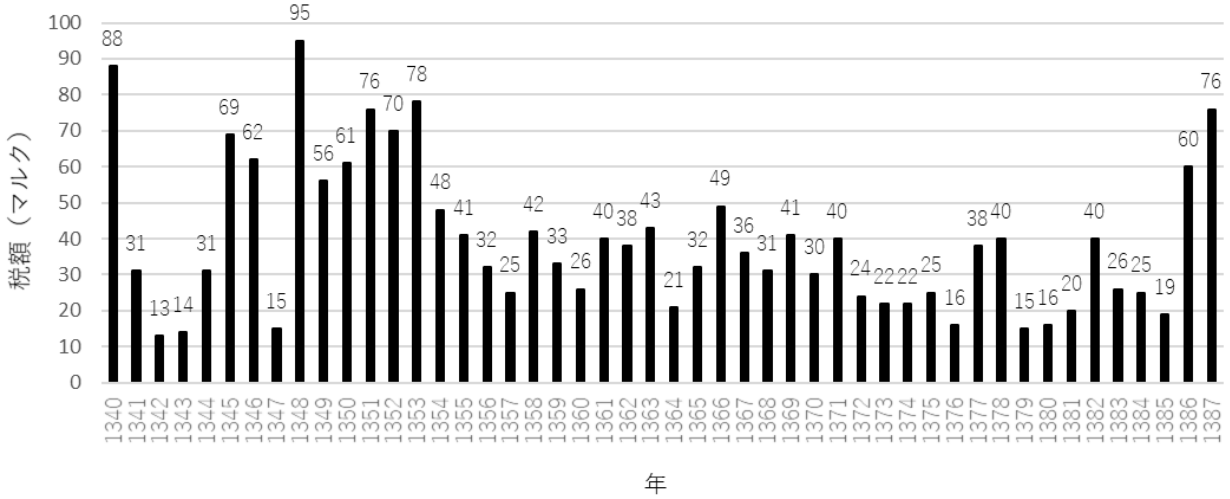
[27] Lechner 1935, S. 406-409.

[28] Hammel-Kiesow 1993a, S. 80.

[29] UBStL 3, Nr. 146, Anm. 1, S. 144.

これについてはバルト海沿岸のハンザ都市でポンド税が徴収された商品は，所有者が変わらない限り，非課税となるというポンド税徴収規則の影響が予測されるため，貿易収支について確かなことは言えないだろう。

図1：オルデスロー関税額（1340年―1387年）



出典：UBStL 3, Nr. 146, Anm. 1, S. 144 より作成。

リューベックとオルデスローおよびハンブルク間の商業取引額をポンド税台帳の記帳時期に準じて集計したのが，表 2-2 である。この表から，第 1 章で検討したネーデルラント商業と同様に,春から夏にかけての時期に取引が最も活発だったことが読み取れる。一方，ネーデルラント地方との商業では，冬のため航海が困難となる 10 月から 12 月にかけての時期になると取引額が低下していたが，内陸路が利用されていたこの方面では，取引額はそれほど落ち込んでいなかったことが分かる。

表2-2：リューベック―オルデスロー・ハンブルク商業の取引時期

単位：リューベック・マルク

地名	1369年3月11日-1369年7月12日	1369年7月13日-1369年10月2日	1369年10月3日-1369年12月24日	1369年12月25日-1370年4月13日	合計
オルデスロー	21,034.0000	7,197.0000	3,171.5000	10,430.0000	41,832.5000
ハンブルク	27,353.1458	6,450.0000	5,643.7500	750.0000	40,196.8958
合計	48,387.1458	13,647.0000	8,815.2500	11,180.0000	82,029.3958
割合	59.0%	16.6%	10.7%	13.6%	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 193r, 234r, 234v, 288v-291r, 347v-349r, 417r, 471v-473r, 474v; AHL, PQ 81-86, 95-105, 107-111, 113-118, 120-124, 126-133, 135-157, 159-160, 162-165, 167-168, 170-173, 175, 177-178, 181, 183-200, 203-218, 220, 222-223; Nirrnheim 1910, Beilage II, Nr. 76-88, 91-128, 131, 152, 168, 202, 205, 209-211, 225-239, 241, 246-258, 260-273, 280-281, 283-284.

2．商品

表2-3：ハンブルクからの輸入（1369年）*

単位：リューベック・マルク

商品	金額	割合
毛織物	17,403.6458	43.3%
31テルリング（毛織物）	5,387.5000	13.4%
毛織物・樽	3,903.2500	9.7%
樽	3,750.0000	9.3%
5 フルストゥム（毛織物）	1,665.0000	4.1%
樽・他	915.0000	2.3%
ザルドク	907.5000	2.3%
油・他	862.5000	2.1%
各種商品	670.0000	1.7%
その他	612.5000	1.5%
ワイン	450.0000	1.1%
油	440.0000	1.1%
毛織物・ワイン	420.0000	1.0%
テルリング・樽	385.0000	1.0%
毛織物・交織織物・油	350.0000	0.9%
毛織物・アーモンド	300.0000	0.7%
ワイン・他	290.0000	0.7%
油・樽	255.0000	0.6%
フルストゥム・樽	240.0000	0.6%
不明	190.0000	0.5%
魚・樽	190.0000	0.5%
テルリング・獣脂	170.0000	0.4%
香辛料	110.0000	0.3%
羊毛	105.0000	0.3%
魚	95.0000	0.2%
パッケル（毛織物）	70.0000	0.2%
コメ	60.0000	0.1%
合計	40,196.8958	100.0%

*この他に価格不明の商品が122件ある。

出典：AHL, PQ 81-86, 95-105, 107-111, 113-118, 120-124, 126-133, 135-157, 159-160, 162-165, 167-168, 170-173, 175, 177-178, 181, 183-200, 203-218, 220, 222-223; Nirrnheim 1910, Beilage II, Nr. 76-88, 91-128, 131, 152, 168, 202, 205, 209-211, 225-239, 241, 246-258, 260-273, 280-281, 283-284.

表2-4：オルデスローからの輸入（1369年）

単位：リューベック・マルク

商品	金額	割合
毛織物	244.0000	35.6%
各種商品	215.0000	31.4%
現金	130.0000	19.0%
サフラン	60.0000	8.8%
獣脂	24.0000	3.5%
ワイン	12.0000	1.8%
合計	685.0000	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 234r, 288v, 347v.

次にリューベックとハンブルク方面との間で流通していた商品について確認する。ハンブルクからリューベックに輸入されていた商品を集計したのが表 2-3 である。輸入額 1 位は毛織物（輸入額 17,403.6458 マルク，輸入額に占める割合 43.3 パーセント，以下同じ）

であり，毛織物と明示されていないが，取引単位から毛織物と推測されるテルリング，フルストゥム（Frustum），パッケル（Packel）の金額も合計すると約 24,526 マルクとなり，全体の輸入額の約 61 パーセントを占めることになる。その他にも，毛織物とその他の商品が一括課税されている事例（「毛織物・樽」,「毛織物・ワイン」,「テルリング・樽」,「毛織物・アーモンド」,「フルストゥム・樽」,「テルリング・獣脂」）の合計額が約 5,768 マルクにものぼり,実際に輸入されていた毛織物額はもっと多かったことが推測される。また，オルデスローからリューベックに輸入されていた商品を集計した表 2-4 でも，ハンブルクからの輸入と比較すると金額は少ないが，輸入額 1 位は毛織物（244 マルク，35.6 パーセント）となっており，ここでも毛織物の重要性があらためて認識される。西方からハンブルク経由でリューベックに輸入される毛織物の重要性は，すでに先行研究でも指摘されている点であり[30]，本章でもそれが再確認されたことになる。ただ，谷澤が分析した 1368 年のオルデスローからの毛織物輸入額（107,516 マルク）に比べると，1369 年の毛織物輸入額ははるかに少なかった[31]。ただし，これは 1369 年に毛織物輸入が減少したということではなく,「はじめに」で述べたように，1368 年 10 月からハンブルクでポンド税徴収が始まったため，リューベックのポンド税台帳にハンブルク方面からの輸入が記録されなくなったことに原因があるだろう。そのため，西方からの毛織物輸入については，1368 年のポンド税台帳の方がより当時の状況を反映していると考えられる。毛織物の輸入先としては少数のイングランド産毛織物（pannus Anglicus）だけが明示されていることから，それ以外の毛織物はフランドルを中心としたネーデルラント産毛織物だと見なすべきだろう。一方，第 1 章で検討したネーデルラント地方との海上交易で取引額が多かった毛織物以外の商品については，ワインが 450 マルク（1.1 パーセント），油が 440 マルク（1.1 パーセント），コメが 60 マルク（0.1 パーセント）と少額にとどまっているが，ワインと油も一括課税の事例があることから，実際の輸入額はもっと多かったと考えられる。一方，海路経由のフランドルとの交易では登場せずに，内陸路経由の交易でのみ記録されている商品としてザルドク（sardok, zardok）という名称の亜麻と羊毛の交織織物（907.5 マルク，2.3 パーセント）と，金額は少ないが，香辛料（110 マルク，0.3 パーセント）があった。この他に，樽（3,750 マルク，9.3 パーセント）の輸入額が多いが，金額から判断して空樽ではなく，何らかの商品が梱包されていると考えるべきだが，内容物については一切不明である。なお，谷澤によると，1368 年の樽の輸入額は 2,969 マルク，油は 621 マルク，コメは 610 マルク，ワインは 450 マルクとなっていたが，毛織物に比べると金額は少なかった[32]。

次にリューベックからハンブルク方面への輸出について見てみよう。ここではポンド税台帳にオルデスロー向けの輸出として記載されているデータを集計した表 2-5 をハンブルク方面への輸出と見なして考察する。表 2-5 によると，リューベックからオルデスロー経由でハンブルク方面へ輸出されていたのは，第 1 に東ヨーロッパの特産品である蜜ロウ（14,213.5 マルク，34.5 パーセント）であり，輸出額の 3 分の 1 を占めていた。蜜ロウについては,他の商品と一括課税されている事例が多く(「蜜ロウ・鉄」,「蜜ロウ・亜麻織物」,

---

[30] Lechner 1935, S. 54-56; Kiesselbach 1907, S. 210.

[31] 谷澤 2011，44 頁，表 1-2。

[32] 谷澤 2011，44 頁，表 1-2。

表2-5：オルデスローへの輸出（1369年）

単位：リューベック・マルク

商品	金額	割合
蜜ロウ	14,213.5000	34.5%
毛皮・皮革	4,234.0000	10.3%
銅	2,706.5000	6.6%
蜜ロウ・鉄	2,078.0000	5.1%
バター	2,030.0000	4.9%
各種商品	2,023.0000	4.9%
樽	1,940.0000	4.7%
鉄	1,437.0000	3.5%
蜜ロウ・亜麻織物	1,245.0000	3.0%
その他	915.0000	2.2%
魚	839.0000	2.0%
亜麻	820.5000	2.0%
銅・バター	718.0000	1.7%
銅・毛皮・皮革	630.0000	1.5%
鉄・亜麻布	600.0000	1.5%
14 パッキル（毛織物）	518.0000	1.3%
亜麻織物	443.0000	1.1%
毛皮・バター	400.0000	1.0%
毛皮・蜜ロウ	300.0000	0.7%
蜜ロウ・亜麻	290.0000	0.7%
ベーコン	284.0000	0.7%
バター・獣脂	282.0000	0.7%
鉄・バター	265.0000	0.6%
鉄・毛皮	227.0000	0.6%
銅・他	208.0000	0.5%
毛皮・樽	200.0000	0.5%
銅・亜麻	200.0000	0.5%
銅・灰	168.0000	0.4%
現金	154.0000	0.4%
魚油	147.0000	0.4%
塩	145.0000	0.4%
蜜ロウ・他	136.0000	0.3%
皮革・木材	130.0000	0.3%
獣脂	101.0000	0.2%
毛皮・ニシン	75.0000	0.2%
綱糸	45.0000	0.1%
合計	41,147.5000	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 193r, 234r, 234v, 289r-291r, 348r-349r, 417r, 471v-473r, 474v.

「毛皮・蜜ロウ」,「蜜ロウ・亜麻」,「蜜ロウ・他」, 合計 4,049 マルク), 実際にはもっと

輸出額が多かったことが推測される。次に，他の商品と一括課税されていない，商品名が単独で記されている輸出品の中で金額が多かったのは，毛皮・皮革（4,234 マルク，10.3 パーセント），銅（2,706.5 マルク，6.6 パーセント），バター（2,030 マルク，4.9 パーセント），鉄（1,437 マルク，3.5 パーセント）である。蜜ロウと同様に，毛皮と皮革もロシアをはじめとした東ヨーロッパの特産品であり，他の商品と一括課税されている事例が多いことから（「銅・毛皮・皮革」,「毛皮・バター」,「毛皮・蜜ロウ」,「鉄・毛皮」,「毛皮・樽」,「皮革・木材」,「毛皮・ニシン」，合計 1,962 マルク），実際の取引額はもっと多かったと考えられる。なお，1368 年のポンド税台帳に登場する取引額上位の商品としては，バター（4,816 マルク），蜜ロウ（4,492 マルク），ニシン（3,485 マルク），毛皮・皮革（2,625 マルク），銅（2,182 マルク）があった[33]。バターの輸入額は 1369 年よりも多かったが，蜜ロウと毛皮は少なく記録されている。谷澤の集計によると 1368 年のオルデスロー向け輸出額は 37,318 マルクとなっており[34]，輸出については 1368 年よりも 1369 年の方がより多くの情報を記録しており，当時の状況をより反映していると考えられる。

「はじめに」で述べたように，Jochmann，Lehe，Johansen といった研究者は，ハンブルクを経由して西方へ輸出された商品に占めるバルト海地方産の商品の割合が少ないということを根拠に，リューベック―ハンブルクを経由したハンザの東西交易の重要性について疑念を提起した。しかし，少なくとも金額的にみると，リューベックからハンブルクへの輸出額に占める蜜ロウ，毛皮・皮革，銅，鉄といったバルト海地方産の商品は,「蜜ロウ・鉄」,「銅・毛皮・皮革」,「毛皮・蜜ロウ」,「鉄・毛皮」といった一括課税の事例も合計すると金額は 25,524.5 マルクとなり，ハンブルク向け輸出額の 62 パーセントを占めていた。このことから判断すると，リューベック―ハンブルク間の内陸路を経由したバルト海―北海間の東西交易は活発だったと結論付けてもよいのではないだろうか。

3．商人

ハンブルクおよびオルデスローと取引していた商人について，その取引額に従って人数と合計を集計したのが表 2-6 と表 2-7 である。ハンブルク商業については 161 人の商人が検出できたが，その内 46 人については取引額が不明である一方，オルデスロー商業については 226 人の商人が登場し，その内 13 人の取引額が不明である。ハンブルクとオルデスローの取引額はほぼ同じなので，ハンブルク商業に従事した商人の方が一人当たりの取引額は多かったことになるが，それは前節でみたようにハンブルクからの輸入品の大半が 1 件あたりの金額が高かった毛織物だったことから説明できるだろう。

ハンブルク商業に従事していた商人の内，取引額 100 マルク以下の中小商人の人数は 27 人，取引額の合計は 1,760 マルク（取引額全体に占める割合 4.4 パーセント，以下同じ）にすぎなかった。一方，取引額 101 マルク以上の大商人は 88 人，取引額は 38,436.8958 マルク（95.6 パーセント）となり，人数的にも金額的にも大商人が優勢だった。

---

[33] 谷澤 2011，46 頁，表 1-3。

[34] 谷澤 2011，40 頁，図 1。

表2-6：ハンブルク商業に従事した商人の人数と取引額（1369年）

取引額（マルク）	商人数	合計（マルク）	割合
1-50	10	385.0000	1.0%
51-100	17	1,375.0000	3.4%
101-150	14	1,765.0000	4.4%
151-200	15	2,712.5000	6.7%
201-250	9	2,020.0000	5.0%
251-300	4	1,112.5000	2.8%
301-350	9	3,025.0000	7.5%
351-400	7	2,582.5000	6.4%
401-450	6	2,535.0000	6.3%
451-500	4	1,900.0000	4.7%
501-550	1	515.0000	1.3%
551-600	2	1,195.0000	3.0%
601-650	1	617.5000	1.5%
651-700	2	1,350.0000	3.4%
701-800	0	0.0000	0.0%
801-900	1	900.0000	2.2%
901-1000	5	4,909.8958	12.2%
1001-2000	6	6,913.2500	17.2%
2080	1	2,080.0000	5.2%
2303.75	1	2,303.7500	5.7%
合計	115	40,196.8958	100.0%

出典：AHL, PQ 81-86, 95-105, 107-111, 113-118, 120-124, 126-133, 135-157, 159-160, 162-165, 167-168, 170-173, 175, 177-178, 181, 183-200, 203-218, 220, 222-223; Nirrnheim 1910, Beilage II, Nr. 76-88, 91-128, 131, 152, 168, 202, 205, 209-211, 225-239, 241, 246-258, 260-273, 280-281, 283-284.

表2-7：オルデスロー商業に従事した商人の人数と取引額（1369年）

取引額（マルク）	商人数	合計（マルク）	割合
1-50	69	1,950.0000	4.7%
51-100	34	2,419.0000	5.8%
101-150	30	3,789.5000	9.1%
151-200	12	2,234.5000	5.3%
201-250	14	3,161.5000	7.6%
251-300	9	2,552.0000	6.1%
301-350	8	2,564.0000	6.1%
351-400	12	4,495.0000	10.7%
401-450	9	3,852.5000	9.2%
451-500	0	0.0000	0.0%
501-550	2	1,033.0000	2.5%
551-600	2	1,181.0000	2.8%
601-650	3	1,860.5000	4.4%
651-700	1	694.0000	1.7%
701-800	0	0.0000	0.0%
801-900	2	1,754.5000	4.2%
901-1000	0	0.0000	0.0%
1001-2000	6	8,291.5000	19.8%
合計	213	41,832.5000	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 193r, 234r, 234v, 288v-291r, 347v-349r, 417r, 471v-473r, 474v.

オルデスロー商業に携わっていた商人の内，中小商人の人数は 103 人，取引額の合計は 4,369 マルク（10.4 パーセント），大商人は 110 人，取引額は 37,463.5 マルク（89.6 パーセント）となる。人数的にも，取引額的にも，ハンブルクおよびオルデスロー商業の大半を担っていたのは取引額 100 マルク以上の大商人だったということになる。

ハンブルク商業では，その中でも特に取引額 1,000 マルク以上を記録していた上位 8 人の取引額の合計が 11,297 マルク，全体に占める割合の 28.1 パーセントを占めていた。この 8 人の大商人の取引内容をポンド税領収書から抜粋したのが，表 2-8 である。この表からは，Heydorn 以外の商人が毛織物輸入に従事していたことが判明する。毛織物の産地は Hama が輸入したイングランド産毛織物以外の産地は記入されていないが，毛織物とその他の商品の価格表記にフランドル地方のグロート・ポンドが使用されていることから，フランドル産毛織物の可能性が高い。また，取引額が多いことから，主要商人の中に社会的身分の高い市参事会員の存在が予想されるところだが，実際には 1369 年の時点で市参事会員だったという商人は確認されない。唯一，Hereke が後年の 1387 年に市参事会員に選

出されているのみである[35]。

表2-8：ハンブルク商業に従事した主な商人

商人	取引額（マルク）	取引件数	取引内容（商品名，数量，金額）	出典
Hama, Johannes	2,303.7500	4	毛織物?（2テルリング）232グロート・ポンド，毛織物（2フルストゥム）151.5グロート・ポンド，イングランド産毛織物（2テルリング）103スターリング・ポンドを輸入	Nirrnheim 1910, Beilage II, Nr.160, 166, 263, 268.
Hachede, Johannes de	2,080.0000	4	ザルドク（2フルストゥム，1バレン）181.5グロート・ポンド，毛織物（1フルストゥム）・不明（1 1/2ファス）124.5グロート・ポンド，毛織物（2フルストゥム）110グロート・ポンド，毛織物（1テルリング）金額不明を輸入	Nirrnheim 1910, Beilage II, Nr.96, 190, 232, 291.
Nighenborgh, Bertolt	1,280.0000	2	毛織物（3フルストゥム，1テルリング）226グロート・ポンドを輸入	Nirrnheim 1910, Beilage II, Nr.100, 135.
Hereke, Peter de	1,255.0000	1	毛織物（3テルリング）251グロート・ポンドを輸入	Nirrnheim 1910, Beilage II, Nr.81.
Heydorn, Hinricus	1,195.0000	2	油（4トンネ，2パイプ，6ファス）・アーモンド（1ファス）・米（4ファス）・硫黄（4トンネ）135グロート・ポンド，商品名不明（5トンネ，4ファス，2袋）104.5グロート・ポンドを輸入	Nirrnheim 1910, Beilage II, Nr.148, 269.
Schonenberch, Hermannus	1,105.0000	3	毛織物（1フルストゥム）89グロート・ポンド，毛織物（1フルストゥム）46グロート・ポンドを輸入	Nirrnheim 1910, Beilage II, Nr.82, 93.
Schoneweder, Heine	1,048.2500	4	毛織物（１フルストゥム）91グロート・ポンド，毛織物？（１テルリング）60グロートポンド，油（10パイプ）200マルク，毛織物・樽93.25マルクを輸入	AHL, PQ 120, 121, 172; Nirrnheim 1910, Beilage II, Nr. 83.
Stade, Hinricus de	1,030.0000	2	商品名不明（2ファス，2 1/2トンネ）107グロート・ポンド，毛織物（2フルストゥム）99グロート・ポンドを輸入	Nirrnheim 1910, Beilage II, Nr.125, 162.

表2-9：オルデスロー商業に従事した主な商人

商人	取引額（マルク）	取引件数	取引内容（商品名，金額）	出典
Hama, Johannes	1,824.5000	7	蜜ロウ1,010.5マルク，鉄・蜜ロウ420マルク，亜麻織物・蜜ロウ150マルクを輸出，毛織物244マルクを輸入	AHL, PZB 1368-1371, fol. 234r, 289r, 348r, 473r.
Hachede, Johannes de	1,461.0000	6	12スキムメーゼ780マルク，毛皮・バター400マルク，鉄・蜜ロウ275マルク，穀粉6マルクを輸出	AHL, PZB 1368-1371, fol. 289r, 289v, 290r, 348r, 472v, 473r.
Bekendorp, Ludeke	1,414.0000	7	蜜ロウ914マルク，亜麻織物・蜜ロウ309マルク，鉄191マルクを輸出	AHL, PZB 1368-1371, fol. 234r, 290v, 348r, 472r, 472v, 473r; Nirrnheim 1910, Nr. 312.
Langhe, Johannes	1,331.0000	3	蜜ロウ1,000マルク，銅271マルク，現金60マルクを輸出	AHL, PZB 1368-1371, fol. 290v, 472r.
Schoneweder, Heine	1,214.0000	7	毛皮307マルク，皮革81マルク，銅・鉄・毛皮・灰・獣脂・その他826マルクを輸出	AHL, PZB 1368-1371, fol. 289r, 290r, 290v, 348r, 348v, 417r, 472r, 472r.
Camen, Clawus de	1,047.0000	5	バター942マルク，1スキムメーゼ60マルク，鉄45マルクを輸出	AHL, PZB 1368-1371, fol. 289v, 290r, 290v, 348r, 472r.

[35] Lutterbeck 2002, S. 276-278.

オルデスローについては，取引額 1,000 マルク以上を記録していた上位 6 人の商人の取引額が合計 8,291.5 マルク（19.8 パーセント）となっていた。そのほとんどがハンブルク方面への輸出に携わっていたが，取引額 1 位の Hama だけが毛織物の輸入を記録している。この 6 人の商人の内 4 人が蜜ロウ輸出に関わっており，そのうち蜜ロウだけの取引額が判明する Hama（1,010.5 マルク），Bekendorp（612.5 マルク），Langhe（1,000 マルク）の蜜ロウ取引額は 2,623 マルクに達し，オルデスロー商業で扱われた蜜ロウ取引総額の 18 パーセントを占めていた。このことから，比較的高価な蜜ロウの輸出は，大商人によって担われていたと考えられる。ハンブルク同様，市参事会員の関与は少なく，Langhe のみが 1368 年から 1385 年までリューベックの市参事会員であったことが判明する[36]。

取引額 1 位の Hama と 2 位の Hachede は，ハンブルク商業でも取引額上位 2 名の商人として登場している。1369 年のポンド税台帳と領収書から判明する Hama の総取引額は 4,128.25 マルクに達しており，取引相手地はハンブルクとオルデスローのみが記録されていた[37]。1368 年のポンド税台帳にも総額 1,320.875 マルクの取引が記録されており，その内の 13 件はオルデスローとの取引，1 件はヴィスマルとの取引だった[38]。14 世紀のリューベック―フランクフルト商業に従事していた商人について研究した Koppe によると，Hama はハンブルク出身のリューベック商人であり，内陸部のニュルンベルク商人と信用取引をおこなっていた商人だったことが明らかにされている[39]。ポンド税台帳や領収書からはニュルンベルク方面との取引は確認できないが，Hama はハンブルクを通じて北海方面と，リューベックを通じてバルト海方面と通商関係を構築していた商人であったと言えよう。

Hachede は，1369 年には西方のフランドルとハンブルク，北方のカルマルとスコーネ，東方のヴィスマルおよびダンツィヒといったように多様な通商関係を有し，その総取引額は Hama よりも多い 4,286 マルクに達していた[40]。Asmussenn の研究によると，Hachede は，1368 年のポンド税台帳でもブルッヘ，オルデスロー，カルマル，ダンツィヒとの間で合計 4,087 マルクの取引が記録されており，特にフランドルとの関係が強かったリューベックのフランドル渡航商人であったとされている[41]。

おわりに

本章では，リューベック―ハンブルク間の内陸路を経由した商業取引について，その貿

---

[36] Lutterbeck 2002, S. 290-292.

[37] 表 2-8 と表 2-9 の合計。

[38] Lechner 1935, I 220, 223, 230, 506-507, 518, 526-527, 534, 709, 851, 876, 1359-1363.

[39] Koppe 2006, S. 79-80

[40] AHL, PZB 1368-1371, fol. 274r, 289r, 289v, 290r, 304r, 321r, 322v, 344v, 348r, 352v, 359r, 374r, 390r, 466v, 469r, 472v, 473r; AHL, PQ 156, 216; Nirrnheim 1910, Beilage II, Nr. 96, 232.

[41] Asmussen 1999, S. 358.

易構造，取引商品，商人について検討した。貿易収支については，輸出額と輸入額がほぼ均衡していたが，ハンブルクで発給されたポンド税領収書が不完全にしか保存されておらず，金額不明の記録も存在すること，リューベックからハンブルク方面への輸出についても不完全にしか記録されていないことから,数値に基づいて評価することは難しい。ただ，ハンブルク方面からの輸入については，より正確な状況が記録されていると考えられる1368年のポンド税台帳の数値から判断すると，1369年の約40,881マルクよりも多かったことは間違いないだろう。取引時期については，ネーデルラント地方との海上商業と同様に，春から夏にかけての時期が最も取引額が多くなっている。ただ，海路よりも内陸路を利用した取引の方が冬期の取引額の落ち込みが少なく，内陸路の方が1年を通じてより安定した取引を可能にしていたことが分かる。

商品については，ハンブルク方面から輸入されていたのは毛織物が圧倒的に多く，それ以外の商品としては亜麻と羊毛の交織織物，ワインなどがあったが，複数商品の一括課税や内容物不明の樽の割合が多く，正確な輸入品の割合を出しにくい状況である。一方，輸出品としては，蜜ロウを筆頭に，毛皮・皮革，銅，バター，鉄といった商品が挙げられる。北海地方とバルト海地方の特産品が，リューベック―ハンブルク間の内陸路を東西に行き来していた様子がうかがえる。毛織物の輸入先は明示されていないが，一部の毛織物だけがイングランド産と記されていることから，その他の毛織物はフランドルを中心としたネーデルラント産であったと推測される。また，ハンブルクからの輸出先についても，先行研究からフランドルおよびホラント方面であったと考えられる。

この内陸商業ルートで活動していた商人は，取引額100マルク以上の大商人が人数的にも取引額的にも優勢であった。とりわけ，取引額が1,000マルクを超えていた大商人が，ハンブルク商業では8人，オルデスロー商業では6人もいた。彼らの取引額はハンブルクでは全体の取引の28.1パーセント，オルデスローでは19.8パーセントを占めており，それぞれの都市の商業における影響力が大きかったことが分かる。西ヨーロッパ産の高価な毛織物や，バルト海地方では比較的単価が高い蜜ロウや毛皮・皮革といった商品が取引されていたために，他の地域よりも商人1人当たりの取引額が多くなるという結果をもたらしていたのではないだろうか。

第1章では海路経由のネーデルラント地方との取引について，続いて第2章ではリューベック―ハンブルク間の内陸路経由の西方との取引について，それぞれポンド税台帳および領収書に基づいて検討した。史料にはハンブルクからの輸出入先が明示されていないが，状況証拠からネーデルラント地方が主たる取引先であったと考えられる。海路経由のネーデルラント地方との取引では油や穀物といった低価重量品が主体であり，取引額も合計19,037マルクと決して多くはなかった。それに対して，内陸路経由の取引では毛織物，蜜ロウ，毛皮・皮革といった高価な商品の占める割合が大きく，取引額は約82,029マルクと海路経由の取引額の4倍以上を記録していた。第1部の分析結果から，14世紀後半の北海－バルト海間の東西交易では，流通する商品の特徴に応じて輸送経路が選択されていたこと，そして，リューベック―ハンブルク間の内陸路の重要性が改めて確認できた。

第 2 部　東方貿易―メクレンブルク・ポメルン・プロイセン・リーフラント
第 3 章　メクレンブルク

はじめに

本章では，リューベック東部に隣接するメクレンブルク地方について検討する[1]。中世のメクレンブルクは，メクレンブルク公家の分割相続によって所領が細分化され，統一的な政治権力は存在しなかった。商業拠点としてハンザ都市であるロストク（Rostock）およびヴィスマル（Wismar）が存在し，ポメルン地方のシュトラールズント（Stralsund），ホルシュタイン地方のリューベックやハンブルク，ザクセン地方のリューネブルク（Lüneburg）と共にヴェント都市と呼ばれていた。ロストクとヴィスマルから輸出されていたメクレンブルクの産品として，ビール，穀物，蜂蜜などがあった。13 世紀にヴィスマルはフランドル―イングランド間の中継交易に携わっており，フランドル産の毛織物とイングランド産の羊毛を取引していたようだ。ロストクもイングランド交易に参加していたが，14 世紀末には衰退したという。また，ヴィスマルとロストクはノルウェー商業に関与しており，特にオスロ（Oslo）とテンスベリ（Tønsberg）に進出してノルウェー産の魚とメクレンブルク産の穀物および穀粉，麦芽，ビールを交換していた。

メクレンブルクのハンザ都市ロストクとヴィスマルの商業史については，管見の限り，15 世紀末リューベックのポンド税台帳を利用してリューベック―メクレンブルク・ポメルン間の商業関係について分析した谷澤の研究以外，本格的な研究は存在せず，リューベックとの通商関係についても詳細は不明である[2]。それぞれの都市史の概説書の商業に関する記述や，ビール醸造業に関する研究の中でビール輸出が触れられることはあっても，両都市の商業活動全般について考察した研究は存在しない[3]。その意味で，本章はロストク及びヴィスマル商業史に関する研究史上の欠落点を埋める研究成果ということになるだろう。

ロストクとヴィスマルはハンザ都市であったため，自市でポンド税が徴収されていた。そのために，例外的にヴィスマルからの輸入がリューベックのポンド税台帳に一部記録されているが，基本的に両都市からの輸入についてはリューベック市立文書館に現存するポンド税領収書しか利用できないことになる。特にロストクの場合は伝来するポンド税領収書の件数が少ない上に，商品名と価格がともに不明の記録が存在するため，ロストクからの輸入状況については不完全である。本章では，このような史料的制約下にあることを理解したうえで，リューベック－メクレンブルク商業について検討する必要がある。

---

[1] 以下メクレンブルク地方に関する説明は次の文献を参照。ドランジェ 2016，236-241 頁；North 2008, S. 27-29.

[2] 谷澤 1999；谷澤 2011，279-291 頁。

[3] リューベックとヴィスマルおよびロストクの関係に関する概説的な記述として Graßmann 1990; Graßmann 1994; Simon 1994.ヴィスマルおよびロストクのビール輸出については，次を参照。Techen 1915; Techen 1916; Hoppe 1994; Blanckenburg 2001, S. 90-124.

1．貿易構造

リューベック―メクレンブルク商業の貿易構造についてまとめたのが表 3-1 である。ロストクからの輸入状況が不完全である点を考慮しても，ヴィスマルの方が輸出入額ともにロストクを上回っている。ヴィスマルはリューベックとロストクとの間に位置しており，ロストクよりも距離の近いヴィスマルの方がリューベックとの間で活発な商取引をおこなっていたようだ。貿易収支については，輸入の記録が不完全なこともあり，メクレンブルクへの輸出額（15,400.75 マルク）がリューベックへの輸入額（5,417.5 マルク）を大幅に上回っている。

表3-1：リューベックーメクレンブルク商業（1369年）

単位：リューベック・マルク

地名	輸出	輸入	合計	割合
ヴィスマル	10,083.7500	4,970.5000	15,054.2500	72.3%
ロストク	5,317.0000	447.0000	5,764.0000	27.7%
合計	15,400.7500	5,417.5000	20,818.2500	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 272v-276r, 277r-278r, 331v-335v, 396v-399v, 401r-402r, 443v-449r; AHL, PQ 372, 380-383, 385-413, 416-462, 464-475, 477-489, 585-593, 595-596, 599-603, 606-609.

リューベック―メクレンブルク間の取引時期を集計したのが表 3-2 である。取引額の 38.6 パーセントが 1369 年 3 月から 7 月にかけての時期に集中しているが，1369 年 7 月から 10 月初頭は取引額の 17.6 パーセント，10 月初頭から 12 月末までは 18.9 パーセント，12 月末から 1370 年 4 月中旬までは 24.9 パーセントとなっており，他の地域と比較すると特定の時期に取引が集中せずに分散している点，また 10 月から翌年の 4 月までの冬を含む時期でも取引が行われている点が，メクレンブルク商業の特色と言える。

表3-2：リューベック―メクレンブルク商業の取引時期

単位：リューベック・マルク

地名	1369年3月11日-1369年7月12日	1369年7月13日-1369年10月2日	1369年10月3日-1369年12月24日	1369年12月25日-1370年4月13日	合計
ヴィスマル	6,193.2500	2,654.5000	2,195.5000	4,011.0000	15,054.2500
ロストク	1,850.5000	1,013.0000	1,738.0000	1,162.5000	5,764.0000
合計	8,043.7500	3,667.5000	3,933.5000	5,173.5000	20,818.2500
割合	38.6%	17.6%	18.9%	24.9%	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 272v-276r, 277r-278r, 331v-335v, 396v-399v, 401r-402r, 443v-449r; AHL, PQ 372, 380-383, 385-413, 416-462, 464-475, 477-489, 585-593, 595-596, 599-603, 606-609.

2．商品

リューベック―メクレンブルク間で取引されていた商品を集計したのが表 3-3 と表 3-4

である。メクレンブルクからリューベックへの輸入については，ロストクからの輸入額は少ないため，そのほとんどがヴィスマルからの輸入になっている（表 3-1 参照）。輸入品の首位は輸入額 4,402 マルクのビールであり，81.3 パーセントを占めていたが，一括課税の事例もあるため，その割合はもっと大きかっただろう。先行研究でメクレンブルクの特産品として紹介されてきた商品のうち，穀物については少額（35 マルク）のライ麦が輸入されているだけであり，蜂蜜は確認できなかった。表 3-4 にまとめられたリューベックからメクレンブルクへの輸出品としては，輸出額 2,796.5 マルク（輸出額に占める割合 18.2 パーセント）の塩と 1,934 マルク（12.6 パーセント）の大麦が占める割合が大きかった。その他の商品としては，輸出額 847.75 マルクの鉄・鋼鉄（5.5 パーセント），700 マルクのバター（4.5 パーセント），619.5 マルクのワイン（4.0 パーセント），570.5 マルクの亜麻（3.7 パーセント）と続いている。

次に，ヴィスマルおよびロストクとの間で取引されていた商品について確認しよう。ヴィスマルからリューベックへの輸入品を集計した表 3-5 から明白なように，ロストクからの輸入に関する情報が少ないため，表 3-3 のメクレンブルクとヴィスマルからの輸入状況はかなりの部分が重複している。ヴィスマルからの輸入品としては，輸入額 4,402 マルクのビールが，ヴィスマルからの輸入額に占める割合が 88.6 パーセント，メクレンブルクから輸入されたビールの 100 パーセントを占めており，圧倒的に重要だった。その他の輸入品としては，少額の毛皮・皮革，鋼鉄などがあった。一方，リューベックからヴィスマルへの輸出品（表 3-6）については，特定の商品に偏るのではなく，多数の種類の商品が輸出されていたのが特色である。その中でも一番輸出額が多かったのがビールの原料として使用される大麦であり，輸出額 1,934 マルク，全体の 19.2 パーセントを占めていた。リューベックからメクレンブルクへ輸出された大麦は，すべてヴィスマル向けであった。輸出額が次に多かったのが 1,244.5 マルクの塩(輸出額に占める割合 12.5 パーセント)であり，鉄・鋼鉄 572.25 マルク（5.7 パーセント），バター556 マルク（5.5 パーセント），ワイン 414.5 マルク（4.1 パーセント）と続いているが，これらの商品もヴィスマル向けの割合が大きかった。このように，リューベックのヴィスマル商業の特色は，ヴィスマルから手工業製品のビールを輸入し，ヴィスマルへ原料の大麦を輸出するという点である。これまで，ハンザ商業の商品構造としては，西方の北海方面から手工業製品がもたらされ，東方のバルト海地方からは原材料がもたらされるという構図で理解されてきた[4]。しかし，1369 年のリューベック―ヴィスマル間商業は，それとはまったく逆の状況であったことが，本章の分析から判明する。

ロストクからリューベックへの輸入品については，これまで述べた通り，情報がほとんどないという点だけ指摘するにとどめておく（表 3-7 参照）[5]。ロストクへの輸出品（表 3-8 参照）については，商品名不詳の各種商品が約 25 パーセントも占めていることもあり，輸出額首位の塩（1,552 マルク，輸出額に占める割合 29.2 パーセント）以外の商品は少額の輸出にとどまっている。一括課税以外の商品でいうと，鉄（275.5 マルク，5.2 パーセント），コメ（206 マルク，3.9 パーセント），ワイン（205 マルク，3.9 パーセント）などが

---

[4] 本論文の序論，2–3 頁参照。

[5] 表 3-7 で集計した商品の他に，商品名・価格不明の記録が 18 件存在する。

あった。

表3-3：メクレンブルクからの輸入（1369年）

単位：リューベック・マルク

商品	金額	割合
ビール	4,402.0000	81.3%
各種商品	320.0000	5.9%
不明	145.0000	2.7%
毛皮・皮革	138.0000	2.5%
鋼鉄	77.0000	1.4%
現金	56.0000	1.0%
ビール・他	54.0000	1.0%
ビール・亜麻	52.5000	1.0%
バター・蜜ロウ	50.0000	0.9%
ビール・皮革	48.0000	0.9%
綱糸	40.0000	0.7%
ライ麦	35.0000	0.6%
合計	5,417.5000	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 272v, 331v, 396v, 443v; AHL, PQ 372, 380-383, 385-413, 416-462, 464-475, 477-489, 585-593, 595-596, 599-603, 606-609.

表3-4：メクレンブルクへの輸出（1369年）

単位：リューベック・マルク

商品	金額	割合
塩	2,796.5000	18.2%
各種商品	2,570.0000	16.7%
大麦	1,934.0000	12.6%
その他	1,062.5000	6.9%
鉄・鋼鉄	847.7500	5.5%
バター	700.0000	4.5%
ワイン	619.5000	4.0%
亜麻	570.5000	3.7%
毛織物	481.5000	3.1%
塩・他	404.5000	2.6%
鉄・他	402.0000	2.6%
現金	395.5000	2.6%
樽	316.0000	2.1%
コメ	266.0000	1.7%
ベーコン	261.0000	1.7%
綱糸	222.5000	1.4%
エン麦	161.5000	1.0%
肉	157.0000	1.0%
ニシン	149.5000	1.0%
塩・亜麻	144.0000	0.9%
塩・バター	133.0000	0.9%
銅・他	120.0000	0.8%
毛織物・塩	114.0000	0.7%
ライ麦	107.0000	0.7%
魚	102.5000	0.7%
油	98.0000	0.6%
塩・鉄	75.0000	0.5%
鉄・肉	60.0000	0.4%
亜麻・毛織物	35.0000	0.2%
穀粉	34.0000	0.2%
亜麻・他	30.5000	0.2%
麦芽	30.0000	0.2%
合計	15,400.7500	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 272v-276r, 277r-278r, 332r-335v, 397r-399v, 401r-402r, 444r-449r.

表3-5：ヴィスマルからの輸入（1369年）

単位：リューベック・マルク

商品	金額	割合
ビール	4,402.0000	88.6%
毛皮・皮革	86.0000	1.7%
鋼鉄	77.0000	1.5%
不明	70.0000	1.4%
現金	56.0000	1.1%
ビール・他	54.0000	1.1%
ビール・亜麻	52.5000	1.1%
バター・蜜ロウ	50.0000	1.0%
ビール・皮革	48.0000	1.0%
綱糸	40.0000	0.8%
ライ麦	35.0000	0.7%
合計	4,970.5000	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 272v, 331v, 396v, 443v; AHL, PQ 372, 380-383, 385-413, 416-462, 464-475, 477-489.

表3-6：ヴィスマルへの輸出（1369年）

単位：リューベック・マルク

商品	金額	割合
大麦	1,934.0000	19.2%
各種商品	1,260.5000	12.5%
塩	1,244.5000	12.3%
鉄・鋼鉄	572.2500	5.7%
バター	556.0000	5.5%
ワイン	414.5000	4.1%
亜麻	408.5000	4.1%
毛織物	393.0000	3.9%
その他	633.5000	6.3%
現金	341.5000	3.4%
樽	316.0000	3.1%
ベーコン	261.0000	2.6%
綱糸	222.5000	2.2%
エン麦	161.5000	1.6%
肉	157.0000	1.6%
塩・亜麻	144.0000	1.4%
塩・バター	133.0000	1.3%
毛織物・塩	114.0000	1.1%
ニシン	105.5000	1.0%
ライ麦	107.0000	1.1%
塩・他	100.0000	1.0%
油	98.0000	1.0%
魚	81.5000	0.8%
塩・鉄	75.0000	0.7%
鉄・肉	60.0000	0.6%
コメ	60.0000	0.6%
亜麻・毛織物	35.0000	0.3%
穀粉	34.0000	0.3%
亜麻・他	30.5000	0.3%
麦芽	30.0000	0.3%
合計	10,083.7500	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 272v-276r, 332r-334v, 397r-399v, 444r-447v.

表3-7：ロストクからの輸入（1369年）

単位：リューベック・マルク

商品	金額	割合
各種商品	320.0000	71.6%
不明	75.0000	16.8%
毛皮	52.0000	11.6%
合計	447.0000	100.0%

出典：AHL, PQ 585-593, 595-596, 599-603, 606-609.

表3-8：ロストクへの輸出（1369年）

単位：リューベック・マルク

商品	金額	割合
塩	1,552.0000	29.2%
各種商品	1,309.5000	24.6%
鉄・他	402.0000	7.6%
塩・他	304.5000	5.7%
鉄	275.5000	5.2%
その他	260.5000	4.9%
コメ	206.0000	3.9%
ワイン	205.0000	3.9%
亜麻	162.0000	3.0%
バター	144.0000	2.7%
銅・他	120.0000	2.3%
毛織物	88.5000	1.7%
錫	63.0000	1.2%
皮革	54.0000	1.0%
現金	54.0000	1.0%
銅	51.5000	1.0%
ニシン	44.0000	0.8%
魚	21.0000	0.4%
合計	5,317.0000	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 277r-278r, 335r-335v, 401r-402r, 448r-449r.

3．商人

リューベック―メクレンブルク間で取引に従事していた商人について集計したのが，表3-9（ヴィスマル）と表3-10（ロストク）である。地理的にリューベックに近いヴィスマルと遠いロストクの場合では，取引商人の構成が若干異なっている。リューベックから見て，より近距離のヴィスマル商業では，取引額100マルク以下の中小商人が全体の取引額の約52パーセントを占めていた。人数的にも，史料上で用船者（fructuarius, onustarius）として記されていた65件のデータを除外した251人の商人の内，中小商人は222人と圧倒的に多かった。一方，ロストクでは，101マルク以上の大商人が，人数は77人中13人と少ないが，取引額の約59パーセントを占めていた。このように，同じメクレンブルク地方の都市とは言え，リューベックから離れている距離により，取引していた商人の規模に違いが生じていたようだ。

他の地方と比較すると，メクレンブルク地方と取引していた商人の規模は小さかった。メクレンブルク地方の商人で取引額300マルク以上の主要商人の取引内容についてまとめたのが表3-11である。取引額300マルク以上の商人は5人しか確認できず，その最高額も608マルクと少額であった。また，輸入の記録が少ないからか，5人の主要商人の取引

表3-9：ヴィスマル商業に従事した商人の人数と取引額（1369年）

取引額（マルク）	商人数	合計（マルク）	割合
1-50	176	4,446.7500	29.5%
51-100	46	3,199.3750	21.3%
101-150	21	2,567.5000	17.1%
151-200	4	656.5000	4.4%
201-250	3	666.5000	4.4%
320	1	320.0000	2.1%
不明*	65	3,197.6250	21.2%
合計	316	15,054.2500	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 272v-276r, 331v-334v, 396v-399v, 443v-447v; AHL, PQ 372, 380-383, 385-413, 416-462, 464-475, 477-489.

*「不明」の項目には，史料上で用船者（fructuarius, fructuarii, onustarius, onustarii）と記入されている65件のデータを集計している。

表3-10：ロストク商業に従事した商人の人数と取引額（1369年）

取引額（マルク）	商人数	合計（マルク）	割合
1-50	46	1,100.0000	19.1%
51-100	18	1,268.0000	22.0%
101-150	5	623.0000	10.8%
151-200	0	0.0000	0.0%
201-250	2	434.0000	7.5%
251-300	2	559.0000	9.7%
370	1	370.0000	6.4%
400	1	400.0000	6.9%
402	1	402.0000	7.0%
608	1	608.0000	10.5%
合計	77	5,764.0000	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 277r-278r, 335r-335v, 401r-402r, 448r-449r; AHL, PQ 585-593, 595-596, 599-603, 606-609.

内容はすべて輸出となっていること。都市の取引額ではヴィスマルの方が高いにもかかわらず，取引額上位 3 名はロストクと取引しており，4 番目の Direkow も取引内容の大半はロストク向けの輸出となっていたのが特徴的である。リューベックにとってヴィスマルは，ポンド税台帳および領収書で通商関係が判明する取引相手としては，フェーマルン島と並んで最も近い場所に位置する。このような近距離商業では，小資本の中小商人が商取引に従事する割合が大きかったと言えるのではないだろうか。

表3-11：メクレンブルク商業に従事した主な商人

商人	取引額（マルク）	取引件数	取引内容（商品名，数量，金額）	出典
Nighenborgh, Johannes	608.0000	14	各種商品322マルク，塩70マルク，コメ・油・魚油65マルク，コメ39マルク，米・穀粉33マルク，亜麻33マルク，バター24マルク，現金12マルク，油10マルクをロストクへ輸出	AHL, PZB 1368-1371, fol. 277r-278r, 401r-401v, 448r.
Steen, Jo	402.0000	1	鉄・その他402マルクをロストクへ輸出	AHL, PZB 1368-1371, fol. 401v.
Direkow, Jo	400.0000	3	各種商品230マルク，塩・その他170マルクをロストクへ輸出	AHL, PZB 1368-1371, fol. 277r, 335r, 448v.
Direkow	391.0000	6	各種商品230マルク，塩119マルク，鉄21マルクをロストクへ，コメ21マルクをヴィスマルへ輸出	AHL, PZB 1368-1371, fol. 273v, 277v, 401v.
Haghemester, Albertus	320.0000	1	大麦320マルクをヴィスマルへ輸出	AHL, PZB 1368-1371, fol. 273v.

4．船舶

リューベック―メクレンブルク間の海運で用いられていた船舶について集計したのが表3-12（ヴィスマル）と表3-13（ロストク）である。ヴィスマルもロストクも船舶価額18マルク以下の小型船の割合が最も多く，ヴィスマルは船舶数318隻中211隻（66パーセント），ロストクは81隻中38隻（47パーセント）を占めていた。船舶価額36マルク以下の船舶も含めると，ヴィスマルは79パーセント，ロストクは77パーセントに達する。このように，リューベックから距離が近いメクレンブルクでは，小型の船舶が多く利用されていたことが確認できる。

表3-12：リューベック－ヴィスマル海運の船舶価額と船舶数（1369年）

船舶価額(マルク)	船舶数	割合
1-18	211	70.6%
19-36	39	13.0%
37-54	16	5.4%
55-100	15	5.0%
101-200	15	5.0%
280	1	0.3%
320	1	0.3%
400	1	0.3%
合計	299	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 234r, 273r-276r, 331v-334v, 396v-399v, 443v-447v; AHL, PQ 372, 380-409, 411-438, 440-444, 446-459, 461-462, 465-475, 478-489.

表3-13：リューベック－ロストク海運の船舶価額と船舶数（1369年）

船舶価額(マルク)	船舶数	割合
1-18	38	53.5%
19-36	24	33.8%
37-54	5	7.0%
55-100	3	4.2%
101-200	1	1.4%
合計	71	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 277v-278r, 335r-335v, 401r-402r, 448r-449r; AHL, PQ 583-587, 589-603, 605-609.

おわりに

本章では，リューベック東部に隣接するメクレンブルク地方について検討した。メクレンブルクの主要都市として，ハンザ都市であるロストクおよびヴィスマルが存在し，リューベックやポメルン地方のシュトラールズントと共に，ヴェント都市と呼ばれていた。リューベックのメクレンブルク商業については，ロストクからの輸入記録が不完全にしか保存されていないという欠点を有する。そのため，貿易構造では，ロストクよりもヴィスマルの方が取引額は多く，メクレンブルク全体の輸出額が輸入額を一桁上回っている。取引時期は，3 月から 7 月にかけて 38.6 パーセント，7 月から 10 月初頭は 17.6 パーセント，10 月初頭から 12 月末までが 18.9 パーセント，12 月末から 4 月中旬までが 24.9 パーセントであり，冬を含む時期でも取引が行われていたのがメクレンブルク商業の特色だと思われる。

商品取引については，ロストクの輸入額が少なかったので，輸入品はヴィスマルについてのみ確認する。ヴィスマルからの輸入品としては，輸入額の 88.6 パーセントを占めるビールが圧倒的に重要だったと言えよう。その他の輸入品としては，毛皮・皮革，鉄などがあった。一方，リューベックからヴィスマルへの輸出品としては，ビールの原料として使用される大麦の輸出額が最も多かった。リューベックのヴィスマル商業の特色は，ヴィスマルから手工業製品のビールを輸入し，ヴィスマルへ原料の大麦を輸出するという点である。西方の北海方面から手工業製品がもたらされ，東方のバルト海地方からは原材料がもたらされるという従来把握されてきたハンザの東西商業の構図とはまったく逆の状況であったことが，本章の分析から判明した。なお，ロストクも含めたメクレンブルクからの輸入品としては，その他に塩，鉄，バター，ワイン，亜麻などがあった。

商人については，リューベックにより近いヴィスマルの場合とより遠いロストクで，その商業構造が若干異なっている。より近距離のヴィスマル商業では，取引額 100 マルク以下の中小商人が全体の取引額の約 52 パーセントを占めており，人数的にも多かった。一方，ロストクでは 101 マルク以上の大商人が，人数は少ないが，取引額の約 59 パーセントを占めていた。

海運については，ヴィスマルもロストクも船舶価額 18 マルク以上の小型船の割合が最も多く，36 マルク以下の船舶も含めると全体の 7 割以上に達していた。近距離のメクレンブルクでは小型の船舶が多く利用されていたことが分かる。

第 2 部　東方貿易―メクレンブルク・ポメルン・プロイセン・リーフラント
第 4 章　ポメルン

はじめに

中世のポメルン(Pommern)地方は, ポメルン公, リューゲン(Rügen)侯, カミン(Cammin)司教といった聖俗領主によって統治されていたが，ポメルン公領については分割相続に伴う所領の細分化が進行していた[1]。ポメルン地方最大の河川であるオーダー川（Oder，ポーランド語でオドラ Odra 川）は，流域の都市と後背地のブランデンブルク（Brandenburg）辺境伯領やシュレージエン（Schlesien）地方とを結ぶ交通上の動脈であり，この川を基準にしてポメルン地方のハンザ都市は, フォアポメルン(Vorpommern), オーダー川下流域, ヒンターポメルン（Hinterpommern）の 3 地域に分布しており，それぞれ別個の商業利害を有していたようだ。オーダー川より西側のフォアポメルン地方のバルト海沿岸には，シュトラールズントやグライフスヴァルト（Greifswald）といったハンザ都市が存在し，リューベックやメクレンブルク地方のヴィスマルやロストクなどとともに，ヴェント都市と呼ばれていた。オーダー川の下流域にはシュテティーン（Stettin，ポーランド語でシュチェチン Szczecin）やシュタールガルト（Stargard，同スタルガルト）などが，オーダー川より東方のヒンターポメルン地方のバルト海沿岸にはコルベルク（Kolberg，同コウォブジェク Kołobrzeg）などのハンザ都市が分布していた。フォアポメルンを代表するハンザ都市であったシュトラールズントの商人は，西方ではフランドルとイングランドへ，東方ではプロイセン，リーフラント，ノヴゴロドに進出し，ハンザの東西交易に積極的に参加していた。オーダー川下流域の都市は，前面地のバルト海地方とオーダー川の流域，そして，後背地のシュレージエンを接続する中継交易地であった。ヒンターポメルンの諸都市については，あまり活発な商業活動を展開していたわけではなかったようだ。ポメルン地方の特産品は穀物であり，とりわけ，オーダー川下流域のハンザ都市は穀物貿易に関わっていたとされている。

ポメルンの商業史については，第 3 章でも紹介した谷澤の研究[2]以外に，ポメルン地方全体を扱った研究は存在せず，Kehn の 13・14 世紀オーダー川流域に関する商業史[3]や Zientara の 13・14 世紀ポメルン穀物貿易に関する研究[4]，そして，Aßmann のシュテティーン海上交易史についての研究[5]を除けば，個別都市の概説的記述にとどまっている。そのため，本章は 14 世紀後半ポメルンのハンザ都市による商業活動に関する最初の研究と位置付けられるだろう。

---

[1] 以下のポメルン地方の説明については，次の文献を参照した。ドランジェ 2016，236-241 頁；North 2008, S. 28-29.

[2] 谷澤 1999；谷澤 2011，279-291 頁。

[3] Kehn 1968; Kehn 1981.

[4] Zientara 1961; Zientara 1983. 前者の論文については，酒井 1989 による紹介がある。

[5] Aßmann 1951; Aßmann 1952.

本章では，1369 年リューベックのポンド税台帳と領収書に記録が残っているオーダー川下流域のハンザ都市シュテティーンおよびシュタールガルト，そして，フォアポメルンのハンザ都市シュトラールズント並びにグライフスヴァルトについて検討する[6]。しかし，本章でも，ポンド税特有の史料上の制約が存在する。上記の都市はすべてハンザ都市であるため，ポンド税台帳には例外的にしか輸入記録が登記されておらず（ポメルンではシュテティーンとシュトラールズントの輸入が記録されている），輸入の分析は不完全にしか現存しないポンド税領収書に依拠せざるを得ない。また，シュタールガルトとグライフスヴァルトについてはポンド税領収書の輸入記録しか存在せず，輸出については全く不明である。ただ，オーダー川の支流イーナ川（Ihna）沿岸の都市であったシュタールガルトについては，シュテティーンとの通商関係が密接であり，シュタールガルト向けの輸出はシュテティーン向けとして記録されていた可能性がある。以上の点に留意しながら，ポメルン商業について検討する必要がある。

1．貿易構造

リューベック―ポメルン商業の貿易構造について集計したのが表 4-1 である。リューベックからポメルンへの輸出額が輸入額を大幅に上回っているが，上述のように，リューベックからシュタールガルトおよびグライフスヴァルトへの輸出が記録されていないこと，また，輸入についても不十分にしか記録が残っていないことから，貿易収支について正確なことは不明である。

表4-1：リューベックーポメルン商業（1369年）

単位：リューベック・マルク

地名	輸出	輸入	合計	割合
シュテティーン	13,432.7500	3,637.0000	17,069.7500	61.2%
シュトラールズント	6,614.7500	1,087.0000	7,701.7500	27.6%
シュタールガルト	0.0000	2,671.5000	2,671.5000	9.6%
グライフスヴァルト	0.0000	459.0000	459.0000	1.6%
合計	20,047.5000	7,854.5000	27,902.0000	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 279v, 280r-281r, 282r-287v, 336v-337v, 338v-340v, 403v-404v, 405v-406v, 451r-452r, 454r-455r; AHL, PQ 655, 660, 662-663, 665-667, 669-675, 698-703, 705-726, 738-742, 777-784.

取引規模からみたポメルン都市の序列としては，輸出入額 17,069.75 マルクのシュテティーン（ポメルン全体の 61.2 パーセント），7,701.75 マルクのシュトラールズント（27.6 パーセント），2,671.5 マルクのシュタールガルト（9.6 パーセント），459 マルクのグライフスヴァルト（1.6 パーセント）となっており，オーダー川下流域のシュテティーンとシュタールガルトでポメルン全体の 70.8 パーセントを占めていた。

リューベック―ポメルン間の取引時期は，表 4-2 によると，3 月から 10 月初頭にかけて

[6] この他にコルベルクのポンド税領収書が 1 件のみ存在するが，船舶価額・商品価格ともに不明のため，本章では扱わない。AHL, PQ 855.

表4-2：リューベック―ポメルン商業の取引時期

単位：リューベック・マルク

地名	1369年3月11日-1369年7月12日	1369年7月13日-1369年10月2日	1369年10月3日-1369年12月24日	1369年12月25日-1370年4月13日	合計
シュテティーン	10,300.0000	3,668.0000	1,851.7500	1,250.0000	17,069.7500
シュトラールズント	1,841.5000	2,264.5000	1,494.2500	2,101.5000	7,701.7500
シュタールガルト	428.2500	489.0000	414.0000	1,340.2500	2,671.5000
グライフスヴァルト	324.0000	135.0000	0.0000	0.0000	459.0000
合計	12,893.7500	6,556.5000	3,760.0000	4,691.7500	27,902.0000
割合	46.2%	23.5%	13.5%	16.8%	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 279v, 280r-281r, 282r-287v, 336v-337v, 338v-340v, 403v-404v, 405v-406v, 451r-452r, 454r-455r; AHL, PQ 655, 660, 662-663, 665-667, 669-675, 698-703, 705-726, 738-742, 777-784.

取引額の約 70 パーセントが集中しており，特に 3 月から 7 月にかけての時期が 46.2 パーセントと多かった。それ以降の時期も 10 月初旬から 12 月末までの時期に 13.5 パーセント，12 月末から翌年の 4 月中旬までの時期に 16.7 パーセントを記録しており，このことは冬季でも取引が続いていたことを示唆している。

2．商品

リューベック―ポメルン間で輸出入されていた商品をまとめたのが表 4-3（輸入）と表 4-4（輸出）である。ポメルンからリューベックへの輸入品（表 4-3）としては，ライ麦，ライ麦・穀粉，ライ麦・小麦，穀粉を合計した 5,105 マルクの穀物が輸入額の 65 パーセントを占めており，特に輸入額 4,534 マルクのライ麦の割合が大きい（輸入額全体に占める割合 57.7 パーセント，以下同じ）。穀物の輸入先は，先行研究でも 13 世紀から穀物輸出が盛んだったと指摘されているオーダー川下流域のシュテティーンとシュタールガルトであった[7]。次に輸入額が多かったのが魚であり，ニシン，種類不明の魚，干ダラの輸入額を合計すると 1,297.5 マルク（16.5 パーセント）になる。魚の中で一番輸入額が多いニシン（990 マルク，12.6 パーセント）は，すべてシュトラールズントからの輸入となっている。シュトラールズント沖に位置するリューゲン島はニシンの産地として有名だが[8]，シュトラールズントはニシン漁で有名なスコーネ地方（第 7 章参照）でもニシン取引に従事していたため，このニシンがリューゲン産なのかスコーネ産なのかは不明である。種類不明の魚はシュトラールズントとシュテティーンから，干ダラはグライフスヴァルトから輸入されていた。干ダラについては，グライフスヴァルトが北海方面から輸入したものが再輸出されていたと考えられる。その他の輸入品としては，輸入額 164 マルク（2.1 パーセント）のワインがあった。ワインはすべてシュテティーンから輸入されており，産地は記載されていないが，当時はオーダー川上流域の支流ナイセ川（Neiße）沿岸のグーベン（Guben）でワ

[7] Zientara 1961; Zientara 1983.

[8] Jahnke 2000a, S. 15-38.

インが生産されていたので，グーベン産ワインの可能性が高いだろう[9]。

リューベックからの輸出品（表 4-4）の中では，輸出額 8,732.25 マルク（輸出額に占める割合 43.6 パーセント，以下同じ）の塩と 2,735.5 マルク（13.6 パーセント）の毛織物が主要輸出品を形成していた。その他には輸出額 664.75 マルク（3.3 パーセント）のワイン，456.5 マルク（2.5 パーセント）の毛皮・皮革，334 マルク（1.7 パーセント）の魚などがあった。ワインと魚はリューベクとポメルンとの間を相互に流通していたようだ。

表4-3：ポメルンからの輸入（1369年）

単位：リューベック・マルク

商品	金額	割合
ライ麦	4,534.0000	57.7%
ニシン	990.0000	12.6%
その他	305.0000	3.9%
ライ麦・穀粉	291.0000	3.7%
銅・他	198.0000	2.5%
ライ麦・小麦	180.0000	2.3%
魚	172.5000	2.2%
ピッチ・ワイン・鉛	164.0000	2.1%
ワイン	164.0000	2.1%
干ダラ	135.0000	1.7%
ピッチ・ワイン	118.0000	1.5%
穀粉	100.0000	1.3%
魚・木材	88.0000	1.1%
桶	72.0000	0.9%
銅	67.5000	0.9%
ライ麦・他	65.0000	0.8%
木材	60.5000	0.8%
鉛・ライ麦	50.0000	0.6%
不明	46.0000	0.6%
鉛・穀粉	40.0000	0.5%
羊毛	14.0000	0.2%
合計	7,854.5000	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 279v, 282r-282v, 283v, 284v-286r, 287v, 338v-339v, 403v, 405v; AHL, PQ 655, 660, 662-663, 665-667, 669-675, 698-703, 705-726, 738-742, 777-784.

表4-4：ポメルンへの輸出（1369年）

単位：リューベック・マルク

商品	金額	割合
塩	8,732.2500	43.6%
各種商品	3,819.5000	19.1%
毛織物	2,735.5000	13.6%
現金	681.5000	3.4%
ワイン	664.7500	3.3%
毛皮・皮革	505.0000	2.5%
魚	334.0000	1.7%
塩・亜麻織物	258.0000	1.3%
コメ	256.0000	1.3%
その他	247.0000	1.2%
亜麻	232.0000	1.2%
塩・毛織物	180.0000	0.9%
亜麻織物	148.5000	0.7%
樽	142.0000	0.7%
バター	137.5000	0.7%
油	136.5000	0.7%
魚油	120.0000	0.6%
鍋・釜	179.0000	0.9%
鉄	84.5000	0.4%
鍋・羊毛	84.0000	0.4%
木材	62.5000	0.3%
塩・他	61.0000	0.3%
皮革・亜麻	58.0000	0.3%
塩・鉄	50.0000	0.2%
塩・現金	49.0000	0.2%
ビール	34.0000	0.2%
油・コメ	30.0000	0.1%
エン麦	25.5000	0.1%
合計	20,047.5000	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 280r-281r, 282r-287v, 336v-337v, 338v-340v, 404r-404v, 406r-406v, 451r-452r, 454r-

[9] Sprandel 1998, S. 42, 89.

表4-5：シュテティーンからの輸入（1369年）

単位：リューベック・マルク

商品	金額	割合
ライ麦	2,037.5000	56.0%
その他	305.0000	8.4%
銅・他	198.0000	5.4%
ピッチ・ワイン・鉛	164.0000	4.5%
ワイン	164.0000	4.5%
ピッチ・ワイン	118.0000	3.2%
穀粉	100.0000	2.7%
穀粉・ライ麦	90.0000	2.5%
魚	89.5000	2.5%
魚・木材	88.0000	2.4%
銅	67.5000	1.9%
ライ麦・他	65.0000	1.8%
木材	60.5000	1.7%
鉛・ライ麦	50.0000	1.4%
鉛・穀粉	40.0000	1.1%
合計	3,637.0000	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 282r-282v, 283v, 284v-286r, 287v, 338v-339v, 405v; AHL, PQ 777-784.

表4-6：シュテティーンへの輸出（1369年）

単位：リューベック・マルク

商品	金額	割合
塩	8,295.7500	61.8%
毛織物	1,455.0000	10.8%
各種商品	1,287.0000	9.6%
毛皮・皮革	505.0000	3.8%
塩・亜麻織物	258.0000	1.9%
塩・毛織物	180.0000	1.3%
魚	176.0000	1.3%
現金	166.0000	1.2%
コメ	115.0000	0.9%
亜麻	112.0000	0.8%
樽	108.0000	0.8%
鍋・羊毛	84.0000	0.6%
油	77.5000	0.6%
木材	62.5000	0.5%
塩・他	61.0000	0.5%
鍋	60.0000	0.4%
皮革・亜麻	58.0000	0.4%
バター	53.0000	0.4%
亜麻織物	52.5000	0.4%
魚油	50.0000	0.4%
鉄	45.0000	0.3%
ビール	34.0000	0.3%
その他	82.0000	0.6%
油・コメ	30.0000	0.2%
エン麦	25.5000	0.2%
合計	13,432.7500	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 282r-287v, 338v-340v, 406r-406v, 454r-455r.

表4-7：シュトラールズントからの輸入（1369年）

単位：リューベック・マルク

商品	金額	割合
ニシン	990.0000	91.1%
魚	83.0000	7.6%
羊毛	14.0000	1.3%
合計	1,087.0000	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 279v, 403v; AHL, PQ 655, 660, 662-663, 665-667, 669-675.

表4-8：シュトラールズントへの輸出（1369年）

単位：リューベック・マルク

商品	金額	割合
各種商品	2,532.5000	38.3%
毛織物	1,280.5000	19.4%
ワイン	664.7500	10.0%
現金	515.5000	7.8%
塩	436.5000	6.6%
その他	165.0000	2.5%
魚	158.0000	2.4%
コメ	141.0000	2.1%
亜麻	120.0000	1.8%
鍋・釜	119.0000	1.8%
亜麻布	96.0000	1.5%
バター	84.5000	1.3%
魚油	70.0000	1.1%
油	59.0000	0.9%
塩・鉄	50.0000	0.8%
塩・現金	49.0000	0.7%
鉄	39.5000	0.6%
樽	34.0000	0.5%
合計	6,614.7500	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 280r-281r, 336v-337v, 404r-404v, 451r-452r.

表4-9：シュタールガルトからの輸入（1369年）

単位：リューベック・マルク

商品	金額	割合
ライ麦	2,218.5000	83.0%
ライ麦・穀粉	201.0000	7.5%
ライ麦・小麦	180.0000	6.7%
桶	72.0000	2.7%
合計	2,671.5000	100.0%

出典：AHL, PQ 698-703, 705-726.

表4-10：グライフスヴァルトからの輸入（1369

単位：リューベック・マルク

商品	金額	割合
ライ麦	278.0000	60.6%
干ダラ	135.0000	29.4%
不明	46.0000	10.0%
合計	459.0000	100.0%

出典：AHL, PQ 738-742.

次に，都市ごとに取引されている商品について確認しよう。シュテティーンからリューベックへの輸入を集計したのが表 4-5 であるが，この他にも 55 件の価格不明の商品が存在するので，実際の輸入額はもっと多かったようだ。主要な輸入品は，輸入額 2,037.5 マルク（輸入額に占める割合 56.0 パーセント）のライ麦であり，穀粉，穀粉・ライ麦といったその他の穀物も合計すると，穀物がシュテティーンからの輸入の約 61 パーセントを占めていた。シュテティーンへの輸出品（表 4-6）としては，8,295.75 マルク（輸出額に占める割合 61.8 パーセント）の塩が圧倒的に多く，1,455 マルク（10.8 パーセント）の毛織物がそれに続いている。リューベックのシュテティーン商業の特徴は，穀物と塩の交換であったといえるだろう。

シュトラールズントからの輸入（表 4-7）については，39 件の金額不明の記録が存在するが，その内の 13 件は 78.5 ラストのニシンだということが分かっている。そのため，表 4-7 では，ポンド税台帳から判明したニシン 1 ラストの価格（12 マルク）からニシン 78.5 ラストの輸入額 990 マルク（輸入額に占める割合 91.1 パーセント）を復元している[10]。シ

[10] ニシン 1 ラストの価格算出は，ニシン 4 ラストの価格が 48 マルクと記されている次の典拠による。AHL, PZB 1368-1371, fol. 451v.

ュトラールズントへの輸出品（表 4-8）については，詳細不明の各種商品の割合が 38.3 パーセントと大きいが，商品名が判明する範囲では，輸出額 1,280.5 マルク（輸出額に占める割合 19.4 パーセント）の毛織物が最も多く，664.75 マルク（10.0 パーセント）のワイン，436.5 マルク（6.6 パーセント）の塩と続いている。ニシンと毛織物・ワイン・塩の交換が，シュトラールズント商業の商品構造だったようだ。

表 4-9 はシュタールガルトからの輸入，表 4-10 はグライフスヴァルトからの輸入だが，グライフスヴァルトについては少額の輸入品（ライ麦と干ダラ）しか記録されていない。シュタールガルトからの輸入品については，ライ麦の輸入額だけで 2,218.5 マルク（輸入額に占める割合 83.0 パーセント）に達しており，ライ麦・穀粉，ライ麦・小麦も合計すると輸入額の約 97 パーセントが穀物になる。イーナ川流域で生産された穀物がシュタールガルト経由でリューベックに輸出されていた様子がうかがえる。

３．商人

リューベック―ポメルン間で商業に従事していた商人について集計したのが表 4-11（シュテティーン），表 4－12（シュトラールズント），表 4-13（シュタールガルト）である[11]。シュテティーンと取引していた商人は，人数的には取引額 100 マルク以下の中小商人が 224 人中 164 人と多かったが，取引額では 101 マルク以上の大商人（60 人）が約 61 パーセントを占めていた。シュタールガルトと取引していた商人は 22 人と少なかったが，取引額 100 マルク以下の中小商人が 9 人である一方，101 マルク以上の大商人は 13 人と若干多く，取引額でも大商人が約 77 パーセントを占めており，大商人が優勢であった。また，シュテティーンやシュタールガルトと取引していた商人に共通する特徴として，取引額 51 マルクから 150 マルクの大商人と中小商人の境目に位置する商人が多かった（シュテティーンでは 223 人中 79 人，シュタールガルトでは 22 人中 17 人）。一方，シュトラールズントについては，人数（108 人中 91 人）でも取引額（約 52 パーセント）でも中小商人の占める割合が大きく，メクレンブルク地方のヴィスマルと似たような傾向を示している。

メクレンブルク地方と同様に，ポメルンと取引していた商人の取引規模は小さかった。取引額 300 マルク以上を記録した商人の取引内容を抜粋したのが表 4-14 である。これによると，取引額 300 マルク以上の商人は 6 人しか確認できず，グライフスヴァルトと取引していた商人はおらず，取引額の最高は 520 マルクにとどまっている。主要商人の取引内容はポメルン商業の傾向を反映しており，ライ麦の輸入と毛織物および塩の輸出が大半であった。

---

[11] グライフスヴァルトについては，ポンド税領収書に商人の個人名が記載されておらず，onustarii（用船者たち）としか記入されていないため，ここでは扱わない。

表4-11：シュテティーン商業に従事した商人の人数と取引額（1369年）

取引額（マルク）	商人数	合計（マルク）	割合
1-50	116	3,111.7500	18.2%
51-100	48	3,525.5000	20.7%
101-150	31	3,770.5000	22.1%
151-200	14	2,488.5000	14.6%
201-250	5	1,141.0000	6.7%
251-300	7	1,851.0000	10.8%
350	1	350.0000	2.1%
388	1	388.0000	2.3%
443.5	1	443.5000	2.6%
合計	224	17,069.7500	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 282r-287v, 338v-340v, 405v, 406r-406v, 454r-455r; AHL, PQ 777-784.

表4-12：シュトラールズント商業に従事した商人の人数と取引額（1369年）

取引額（マルク）	商人数	合計（マルク）	割合
1-50	69	1,797.5000	26.6%
51-100	22	1,726.2500	25.5%
101-150	6	721.0000	10.7%
151-200	7	1,235.0000	18.3%
201-250	2	459.0000	6.8%
301	1	301.0000	4.5%
520	1	520.0000	7.7%
合計	108	6,759.7500	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 279v-281r, 336v-337v, 403v-404v, 451r-452r; AHL, PQ 655, 660, 662-663, 665-667, 669-675.

表4-13：シュタールガルト商業に従事した商人の人数と取引額（1369年）

取引額（マルク）	商人数	合計（マルク）	割合
1-50	1	40.5000	1.5%
51-100	8	581.2500	21.8%
101-150	9	1,026.7500	38.4%
192	1	192.0000	7.2%
216	1	216.0000	8.1%
298.5	1	298.5000	11.2%
316.5	1	316.5000	11.8%
合計	22	2,671.5000	100.0%

出典：AHL, PQ 698-703, 705-726.

表4-14：ポメルン商業に従事した主な商人

商人	取引額（マルク）	取引件数	取引内容（商品名，数量，金額）	出典
Plate, Clawus	520.0000	3	各種商品400マルク，毛織物120マルクをシュトラールズントへ輸出	AHL, PZB 1368-1371, fol. 337r.
Retzeman, Ghyzo	511.5000	4	40ラストのライ麦316.5マルクをシュタールガルトから輸入，毛織物195マルクをシュテティーンへ輸出	AHL, PZB 1368-1371, fol. 339r; AHL, PQ 712, 723, 724.
Quast, Pawel	443.5000	4	ライ麦225.5マルクをシュテティーンから輸入，塩218マルクをシュテティーンへ輸出	AHL, PZB 1368-1371, fol. 285r, 339r.
Wilke, Langhe	388.0000	6	塩243マルク，20マルクをシュテティーンへ輸出，ライ麦・その他65マルク，ライ麦60マルクをシュテティーンから輸入	AHL, PZB 1368-1371, fol. 285r, 339v, 406r.
Tamme, Clawus	350.0000	3	塩212マルクをシュテティーンへ輸出，ライ麦138マルクをシュテティーンから輸入	AHL, PZB 1368-1371, fol. 282v, 284v, 406r.
Luddam, Thomas	301.0000	2	毛織物281マルク，現金20マルクをシュトラールズントへ輸出	AHL, PZB 1368-1371, fol. 336v.

４．船舶

リューベック―メクレンブルク間を航海していた船舶について集計したのが表 4-15（シュテティーン），表 4-16（シュトラールズント），表 4-17（シュタールガルト）である[12]。船舶価額は，商人と同じように，シュトラールズントとオーダー川下流域のシュテティーンとシュタールガルトで異なる傾向があったようだ。シュテティーンは 167 隻中 78 隻（46.7 パーセント），シュタールガルトは 15 隻中 7 隻（46.7 パーセント）が，船舶価額 55 マルク以上 200 マルク以下の中型船であった。シュテティーンとシュタールガルトの船舶は，オーダー川流域で産出される穀物の輸送に従事していたためか，この価額帯の占める割合が最も多かったのだろう。一方，シュトラールズントについては，船舶価額 18 マルク以下の船が 73 隻中 39 隻（53.4 パーセント），36 マルク以下の船も含めると全体の 83.6 パ

表4-15：リューベック－シュテティーン海運の船舶価額と船舶数（1369年）

船舶価額(マルク)	船舶数	割合
1-18	7	4.2%
19-36	41	24.4%
37-54	40	23.8%
55-100	74	44.0%
101-200	5	3.0%
300	1	0.6%
合計	168	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 282r-287v, 338v-340v, 406r-406v, 453v-455r; AHL, PQ 776-780, 782-784.

表4-16：リューベック－シュトラールズント海運の船舶価額と船舶数（1369年）

船舶価額(マルク)	船舶数	割合
1-18	39	53.4%
19-36	22	30.1%
37-54	1	1.4%
55-100	7	9.6%
101-200	3	4.1%
400	1	1.4%
合計	73	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 279v-281r, 337r-337v, 404r-404v, 451r-452r; AHL, PQ 656.

[12] グライフスヴァルトについては 5 隻の船しか確認できなかったため，ここでは検討しない。

ーセントを占めており，小型船が多かったようだ。リューベックからの距離と取引する商品の違いから，船舶の大きさに違いが生じていたとみられる。

表4-17：リューベック－シュタールガルト海運の船舶価額と船舶数（1369年）

船舶価額(マルク)	船舶数	割合
1-18	0	0.0%
19-36	2	13.3%
37-54	5	33.3%
55-100	6	40.0%
150	1	6.7%
252	1	6.7%
合計	15	100.0%

出典：AHL, PQ 700-704, 706-709, 714-715, 717-718, 722, 726.

おわりに

中世のポメルン地方には，オーダー川の西側に位置するフォアポメルンにシュトラールズントやグライフスヴァルトが，オーダー川下流域にシュテティーンやシュタールガルトといったハンザ都市が存在していた。貿易構造としては，シュトラールズントとグライフスヴァルトからの輸入の記録が少なく，貿易収支について正確なことは不明である。取引規模からみた都市の序列としては，シュテティーンが 61.2 パーセント，続いてシュトラールズントが 27.6 パーセント，シュタールガルトが 9.6 パーセント，グライフスヴァルトが 1.6 パーセントであった。取引時期については，3 月から 10 月初頭にかけて取引額の約 70 パーセントが集中していたが，それ以降の時期も秋は 13.5 パーセント，冬から春にかけて 16.8 パーセントを記録しており，冬季でも取引が続いていたことを示唆している。

ポメルンからの輸入品としては，穀物が輸入額の約 65 パーセント占めており，特にライ麦が多く輸入されていたが（57.7 パーセント），輸入先はオーダー川下流域のシュテティーンとシュタールガルトであった。その他の輸入品には，魚，ワイン，干ダラがあった。種類不明の魚はシュトラールズントとシュテティーンから，ワインはシュテティーンから，干ダラはグライフスヴァルトから輸入されていた。干ダラについては，グライフスヴァルトが北海方面から輸入したものが再輸出されていたと考えられる。ワインは，オーダー川上流のグーベン産ワインの可能性が高いだろう。リューベックからの輸出品の中では，輸出額の 43.6 パーセントを占めていた塩と 13.6 パーセントを占めていた毛織物が主要輸出品を形成していた。その他に，ワイン，魚，米，亜麻，亜麻織物などがあった。魚とワインはリューベックとポメルンとの間を互いに行き来していたようだ。

人数の少なかったグライフスヴァルトを除くと，オーダー川下流域のシュテティーンとシュタールガルトと取引していた商人は，取引額 51 マルクから 150 マルクの大商人と中小商人の境目を行き来する商人が多かった一方，シュトラールズントと取引していた商人

は，取引額 100 マルク以下の中小商人が取引額の約 52 パーセントを占めていた。

船舶については，オーダー川下流域のシュテティーンとシュタールガルトは穀物輸送に従事していたためか，55 マルク以上 200 マルク以下の中型船の占める割合が最も多いが，リューベックにより近いシュトラールズントについては 18 マルク以下の小型船が 53.4 パーセントを占めていた。同じポメルン地方の都市であっても，リューベックからの距離と輸送する商品の違いが，船舶の大きさに違いをもたらしていたことが分かる。

第 2 部　東方貿易―メクレンブルク・ポメルン・プロイセン・リーフラント
第 5 章　プロイセン

はじめに

中世のプロイセン地方は，バルト海に面した海港都市から国内の産物を輸出するだけでなく，ポーランド王国とはヴァイクセル川（Weichsel，ポーランド語でヴィスワ川 Wisła）を通じて，リトアニア大公国とはメーメル川（Memel，リトアニア語でネムナス川 Nemunas）を経由して通商関係を有しており，後背地の産物を輸出する中継地点でもあった[1]。プロイセンの商業拠点としては，バルト海沿岸の海港都市であるダンツィヒ（Danzig，ポーランド語でグダニスク Gdańsk），エルビング（Elbing，同エルブロンク Elbląg），ケーニヒスベルク（Königsberg，現ロシア領のカリーニングラード Kaliningrad），ブラウンスベルク（Braunsberg，ポーランド語でブラニェヴォ Braniewo），そして，内陸都市のトルン（Thorn，同 Toruń）があった[2]。13 世紀にはフリッシェス・ハフ（Frisches Haff）を経由してバルト海に通じていた海港都市エルビングとプロイセン・ポーランドの国境地帯にあった河港都市トルンがプロイセンの商業都市として重要だったが，14 世紀以降になるとヴァイクセル川下流域のダンツィヒがエルビングやトルンを凌駕するようになった。プロイセンの商業活動の特色としては，この地方を支配していたドイツ騎士修道会が，商業活動に積極的に関与していたことである。例えば，ドイツ騎士修道会は，バルト海沿岸で取れたコハク取引を独占してケーニヒスベルクからリューベックやブルッヘに輸出したり，レンベルク（Lemberg，現ウクライナ領のリヴィウ Lwiw）を経由して黒海方面と取引したりしていた[3]。プロイセン地方の特産品としては，木材と炭酸カリウム（ポターシュ），ピッチ，タールがリトアニア，ポーランド，カルパティア山脈の森林地帯からヴァイクセル川やメーメル川などを経由して輸出されていたが，最大の輸出品は穀物であった。当初はプロイセン産の穀物（特にライ麦）がダンツィヒから西ヨーロッパへバルト海経由で輸出されていたが，15 世紀中頃以降になると後背地のポーランドとリトアニアから穀物が供給されるようになり，16 世紀に穀物輸出は最盛期を迎えたとされている。また，ダンツィヒから，ハンガリーおよびスウェーデン産の銅，スウェーデン産の鉄，毛皮製品，蜜ロウ，ビール，船舶などが輸出されていた。

中世プロイセン商業史に関する研究は 15 世紀以降に関するものが多く，本章で扱う 14 世紀については研究蓄積が少ないのが現状である。プロイセン内陸部の都市トルンについ

---

[1] 以下のプロイセンに関する記述については次の文献を参照。ドランジェ 2016，243-246 頁; Arnold 1998a; Arnold 1998b.

[2] これら 5 都市にトルンより少し下流のヴァイクセル川流域にあるクルム（Kulm，ヘウムノ Chełmno）を加えた 6 都市は，プロイセンの 6 大都市と呼ばれている。しかし，クルムは司教座都市ではあったが，商業都市としてはあまり目立った痕跡を残していない。

[3] レンベルクを経由したバルト海―黒海間交易については次を参照。Weczerka 1990; Samsonowicz 1993.

ては，1362 年-1363 年と 1368 年-1371 年のポンド税台帳が現存している[4]。しかし，それを利用した Ahnsehl の研究によると，トルンのポンド税台帳には輸出入先に関する情報がなく，リューベックとの通商関係も不明である[5]。プロイセンの領主であったドイツ騎士修道会の商業活動については 1400 年前後の商業帳簿を分析した Renken の研究があり，一部の商品についてはリューベックとの流通関係が明らかにされている[6]。一方，15 世紀後半のプロイセン―リューベック商業に関しては Stark の一連の研究があり，リューベックからダンツィヒへの輸出品は毛織物と塩，プロイセンからリューベックへの輸入品は蜜ロウと木材であったこと，この時期に輸出量が増えていたと考えられる穀物については免税対象だったために数量的な把握ができないこと，が明らかにされている[7]。また，15 世紀から 16 世紀にかけてのプロイセン商業の構造変化については Schildhauer によって研究されており[8]，日本では谷澤がその研究成果を紹介している[9]。それによると，1470 年代までリューベック―プロイセン商業は活発であり，リューベックがバルト海商業における商品集散地として機能していたが，その後，プロイセンの中心都市ダンツィヒがリューベックを経由せずに北ネーデルラント（後のオランダ）との直接取引を増加させ，リューベックの商品集散地としての機能は低下していったと考えられている。このように，15 世紀における商業中心地の移動を伴った北海・バルト海貿易の構造変化が示されている。

中世プロイセン商業史に関する未解決の課題としては，上述のように，14 世紀以前のプロイセン全体を視野に入れた研究がないということ，そして，史料上の制約から，15 世紀になるとプロイセン地方の特産品である穀物の輸出量は判明するが，輸出先についての情報が不十分だということである[10]。中世プロイセン商業の詳細な商品流通の実態は不明のままであり，リューベック―プロイセン商業においても「リューベックがダンツィヒから穀物を取り寄せていたかどうかは，史料から読み取ることはできない」のが現状である[11]。このような研究史における欠落点を埋めるために，本章では，1369 年リューベックのポンド税台帳と領収書を利用して 14 世紀のリューベック－プロイセン商業の流通状況について検討する。

プロイセン地方の主要な都市はハンザ都市であったため，輸出時にプロイセンでポンド税が徴収されていた。そのために，リューベックのポンド税台帳には，プロイセンからリューベックへの輸入状況について，ダンツィヒからの輸入が例外的に少数記録されているにすぎない。しかし，ダンツィヒ，エルビング，ケーニヒスベルク，ブラウンスベルクで発行されたポンド税領収書の一部がリューベック市立文書館に所蔵されており，それを利

---

[4] Koczy 1935.

[5] Ahnsehl 1961.

[6] Renken 1937. ドイツ騎士修道会の内陸交易については次の研究がある。Böhnke 1962.

[7] Stark 1969; Stark 1970; Stark 1973; Stark 1981.

[8] Schildhauer 1968; Schildhauer 1969; Schildhauer 1970a; Schildhauer 1970b; Schildhauer 1970c.

[9] 谷澤 2010，138-169 頁。

[10] Link 2014.

[11] Graßmann 1997, S. 207.

用することでプロイセンからリューベックに輸入された商品の構成について知ることができる。それにより，従来の研究では明らかにされてこなかった中世プロイセンの商品流通について，リューベック経由の海上交易という観点から解明することが可能なのである。しかも，1369 年のポンド税台帳と領収書には，他の史料には記載されていない穀物取引に関する詳細な情報が含まれており，本章では中世プロイセンの穀物貿易の実態をはじめて解明することが期待できる。ただ，1369 年のポンド税台帳にはケーニヒスベルクとブラウンスベルクへの輸出が記録されていないという史料上の制約が存在するため，その点には留意する必要がある[12]。

1．貿易構造

リューベック―プロイセン商業の貿易構造について集計したのが表 5-1 である。プロイセン最大の都市であったのはダンツィヒだが，取引額でも 63.8 パーセントを占めており，商業都市としてもプロイセン地方で首位を占めていたことが分かる[13]。貿易額 2 位のエルビングは，取引額の 30.4 パーセントを占めており，両都市だけでプロイセンの取引額全体の 94.1 パーセントを占めていた。ただ，ケーニヒスベルクとブラウンスベルクについては，輸出額が記録されていないため，実際の取引額はもっと多かったかもしれない。貿易収支では，輸入額が輸出額を約 2,422 マルク上回っていたが，ケーニヒスベルクとブラウンスベルクの輸出額が記録されていれば，状況は変わっていたかもしれないため，正確なことは言えないだろう。

表5-1：リューベック―プロイセン商業（1369年）

単位：リューベック・マルク

地名	輸出	輸入	合計	割合
ダンツィヒ	18,050.4895	17,596.5000	35,646.9895	63.8%
エルビング	8,695.5000	8,277.4750	16,972.9750	30.4%
ケーニヒスベルク	0.0000	3,113.2500	3,113.2500	5.6%
ブラウンスベルク	0.0000	181.5000	181.5000	0.3%
合計	26,745.9895	29,168.7250	55,914.7145	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 240r-243v, 235r-238r, 239r, 304r-306r, 307r-308r, 379v-381r, 382r-382v, 425r-428v, 430r, AHL, PQ 927-1064, 1082, 1100-1149, 1157-1159, 1167-1192.

リューベックとプロイセンとの取引時期は，表 5-2 によると，3 月から 7 月にかけての

---

[12] エルビング，ケーニヒスベルク，ブラウンスベルクの 3 都市は，細長い砂州によってバルト海からさえぎられたフリッシェス・ハフ（ポーランド語でヴィスワ潟 Zalew Wiślany）という潟（ラグーン）に面している港湾都市である。これら 3 都市への輸出が一括され，この地域最大の都市であるエルビング向けとして記帳されていた可能性がある。

[13] ダンツィヒについては，次を参照。Lingenberg 1998.

4 か月間に全期間の取引額の約 52 パーセントが集中していた。その一方で，冬をはさむ 10 月から翌年 4 月までの期間も小規模ながら商業活動は継続されており（約 10～11 パーセント），冬季でもリューベック―プロイセン間で航海が続けられていたことが分かる。

表5-2：リューベック―プロイセン商業の取引時期

地名	1369年3月11日-1369年7月12日	1369年7月13日-1369年10月2日	1369年10月3日-1369年12月24日	1369年12月25日-1370年4月13日	1369年日付不明	合計
ダンツィヒ	15,925.7395	9,358.0000	4,391.5000	5,377.0000	594.7500	35,646.9895
エルビング	11,453.2500	3,993.7250	1,146.0000	380.0000	0.0000	16,972.9750
ケーニヒスベルク	1,812.7500	723.0000	0.0000	421.5000	156.0000	3,113.2500
ブラウンスベルク	78.0000	103.5000	0.0000	0.0000	0.0000	181.5000
合計	29,269.7395	14,178.2250	5,537.5000	6,178.5000	750.7500	55,914.7145
割合	52.3%	25.4%	9.9%	11.0%	1.3%	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 240r-243v, 235r-238r, 239r, 304r-306r, 307r-308r, 379v-381r, 382r-382v, 425r-428v, 430r; AHL, PQ 927-1064, 1082, 1100-1149, 1157-1159, 1167-1192.

2．商品

ここでは，リューベック―プロイセン間で取引されていた商品の構造について確認する。リューベックがプロイセンから輸入していた商品を集計したのが表 5-3 である。輸入品については，複数の商品を一括課税した事例が多いため，ひとつひとつの商品取引額を算出するのが困難な状況である。しかし，そのような状況にもかかわらず，この表から明らかになるのが穀物輸入の重要性である。特定可能な穀物の種類を輸入額順に列挙すると，大麦，ライ麦，小麦，エン麦，穀粉（穀物の種類は不明），麦芽，挽き割り麦となる[14]。それに複数の種類の穀物が一括課税されているデータも合計すると[15]，穀物輸入額は 15,028.975 マルクに達し，プロイセンからリューベックへの輸入額全体の 51.5 パーセントを占めていた。穀物の中でも特に輸入額が多かったのが，ビールの原料として用いられていた大麦であり，輸入額が 9,942.475 マルク（輸入額全体の 34.1 パーセント，以下同じ）に達していた。プロイセンからの穀物輸出は 15 世紀以降になると輸出量が記録されるようになるが，14 世紀後半にはすでにリューベックに対して多くの穀物が輸出されていたことが，初めて数量的に判明した。輸入額 2 位の魚（種類は不明）は 2,406 マルク（8.2 パーセント）となっているが，他の商品と一括課税されている事例が多いので，実際の輸入額はもっと多かった。ちなみに，穀物と魚の一括課税額は 2,286.75 マルク（7.8 パーセント）となり，穀物，魚，穀物と魚の一括課税額をすべて合計すると 19,721.725 マルク（67.6 パーセント）に達した。プロイセンからリューベックへの主要輸入品は，穀物と魚だったといえるだろう。その他の商品としては，木材（704.25 マルク，2.4 パーセント）や蜜ロウ（658.5 マルク，2.3 パーセント）などの林産品が輸入されていた。

---

[14] 挽き割り麦の輸入額は 7.5 マルクと少ないため，「その他」の項目に算入している。

[15] 表 5-3 で示されている項目の他に，ライ麦と小麦が一括課税されているが，輸入額が 9.75 マルクと少ないため，「その他」の項目に算入している。

表5-3：プロイセンからの輸入（1369年）

単位：リューベック・マルク

商品	金額	割合
大麦	9,942.4750	34.1%
魚	2,406.0000	8.2%
各種商品	1,746.0000	6.0%
ライ麦	1,297.5000	4.4%
蜜ロウ・銅	1,105.5000	3.8%
その他	943.5000	3.2%
小麦	850.5000	2.9%
大麦・穀粉	837.0000	2.9%
大麦・魚	795.0000	2.7%
木材	704.2500	2.4%
蜜ロウ	658.5000	2.3%
木材・魚	636.7500	2.2%
不明	593.2500	2.0%
穀粉・魚	533.2500	1.8%
大麦・挽き割り麦	282.7500	1.0%
エン麦・魚	279.0000	1.0%
大麦・亜麻	273.0000	0.9%
ライ麦・穀粉	270.7500	0.9%
エン麦	269.2500	0.9%
大麦・小麦	258.7500	0.9%
ライ麦・魚	243.7500	0.8%
麦芽・木材	225.0000	0.8%
樽	204.0000	0.7%
大麦・織物	202.5000	0.7%
大麦・エン麦	200.2500	0.7%
穀粉	188.2500	0.6%
大麦・穀粉・挽き割り麦・亜麻	180.0000	0.6%
大麦・ライ麦	177.0000	0.6%
小麦・魚	175.5000	0.6%
毛皮・糸	168.7500	0.6%
農具・魚・小麦	168.0000	0.6%
亜麻・魚・小麦	163.5000	0.6%
蜜ロウ・魚	142.5000	0.5%
蜜ロウ・樽	142.5000	0.5%
大麦・麦芽	139.5000	0.5%
蜜ロウ・亜麻織物	121.5000	0.4%
穀粉・木材・魚	120.0000	0.4%
ライ麦・織物	112.5000	0.4%
木材・毛皮	106.5000	0.4%
大麦・小麦・魚	105.0000	0.4%
穀粉・ライ麦・小麦	103.5000	0.4%
亜麻・魚	102.0000	0.3%
大麦・足場	95.2500	0.3%
魚・鉄	85.5000	0.3%
大麦・穀粉・挽き割り麦	81.0000	0.3%
挽き割り麦・織物	64.5000	0.2%
穀粉・ライ麦・魚	63.7500	0.2%
亜麻	61.5000	0.2%
大麦・挽き割り麦・塩	60.0000	0.2%
ライ麦・挽き割り麦	60.0000	0.2%
大麦・木材	54.0000	0.2%
穀粉・亜麻・松脂	52.5000	0.2%
穀粉・挽き割り麦・魚	51.0000	0.2%
現金	49.5000	0.2%
木材・亜麻・小麦	49.5000	0.2%
ヤチヤナギ	42.0000	0.1%
大麦・ライ麦・魚	40.5000	0.1%
麦芽	36.0000	0.1%
穀粉・挽き割り麦	17.2500	0.1%
スキムメーゼ	15.0000	0.1%
松脂	15.0000	0.1%
合計	29,168.7250	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 305v; AHL, PQ 927-1064, 1082, 1100-1149, 1157-1159, 1167-1192.

続いて，リューベックからプロイセンへ輸出された商品について集計したのが表 5-4 である。輸出品としては，先行研究で指摘されている 15 世紀の事例と同様に，塩と毛織物の輸出額が多く，特に輸出額 1 万 4,334.4895 マルクの塩は輸出額の 53.6 パーセントを占めていた。毛織物の産地は不明だが，輸出額は 2,089 マルクで全体の 7.8 パーセントであった。その他の輸出品として，亜麻織物（650.5 マルク，2.4 パーセント），油脂類（油 622 マルク，バター270 マルク，魚油 21 マルク，合計 3.4 パーセント），魚（ニシン 442.5 マルク，種類不詳の魚 100 マルク，タラ 53 マルク，合計 2.2 パーセント）などがあった。魚については，輸入品でも上位に来ており，バルト海地方内部で魚が一方向ではなく，双方向で流通していた様子が分かる。以上のことから，1369 年のリューベック－プロイセン間の商品流通の特徴は，穀物と塩の交換と魚の相互流通だったと言える。

表5-4：プロイセンへの輸出（1369年）

単位：リューベック・マルク

商品	金額	割合
塩	14,334.4895	53.6%
各種商品	4,070.0000	15.2%
毛織物	2,089.0000	7.8%
現金	1,055.0000	3.9%
亜麻織物	650.5000	2.4%
油	622.0000	2.3%
ニシン	442.5000	1.7%
樽	321.5000	1.2%
羊毛	316.5000	1.2%
バター	270.0000	1.0%
亜麻織物・樽	253.0000	0.9%
金	250.0000	0.9%
その他	232.5000	0.9%
糸・綱糸	231.0000	0.9%
鍋	218.0000	0.8%
ホップ	213.0000	0.8%
毛織物・蜂蜜	150.0000	0.6%
ワイン	148.0000	0.6%
皮	144.0000	0.5%
コメ	134.0000	0.5%
塩・ニシン	110.0000	0.4%
魚	100.0000	0.4%
塩・各種商品	90.0000	0.3%
蜂蜜	75.0000	0.3%
塩・鋼鉄	60.0000	0.2%
タラ	53.0000	0.2%
木材	48.0000	0.2%
皮革	44.0000	0.2%
魚油	21.0000	0.1%
合計	26,745.9895	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 240r-243v, 235r-238r, 239r, 304r-306r, 307r-308r, 379v-381r-382v, 382r, 425r-428v, 430r.

次に，リューベック―プロイセン間の輸出入の状況を都市ごとに確認しよう。リューベックとプロイセンの 4 都市との間で取引されていた商品を集計したのが，表 5-5 から表 5-10 である。まず，プロイセンでリューベックとの取引額が最も多かったダンツィヒからの輸入品（表 5-5）については，プロイセン全体の商品構造と同様に，穀物輸入額が過半数を占めており（9,585.75 マルク，輸入額に占める割合 54.5 パーセント），その中でも大麦の占める割合が大きかった（6,570 マルク，37.3 パーセント）。その他の商品としては，魚（1,624.5 マルク，9.2 パーセント）や蜜ロウ（658.5 マルク，3.7 パーセント）などがあった。蜜ロウは，他の商品と一括課税された「蜜ロウ・銅」（1,105.5 マルク），「蜜ロウ・樽」

表5-5：ダンツィヒからの輸入（1369年）

単位：リューベック・マルク

商品	金額	割合
大麦	6,570.0000	37.3%
魚	1,624.5000	9.2%
ライ麦	1,270.5000	7.2%
蜜ロウ・銅	1,105.5000	6.3%
蜜ロウ	658.5000	3.7%
各種商品	628.5000	3.6%
その他	610.5000	3.5%
小麦	568.5000	3.2%
木材	496.5000	2.8%
穀粉・魚	458.2500	2.6%
大麦・魚	334.5000	1.9%
26フンデルト（大麦？）	308.2500	1.8%
ライ麦・魚	243.7500	1.4%
麦芽・木材	225.0000	1.3%
樽	204.0000	1.2%
エン麦	185.2500	1.1%
大麦・ライ麦	177.0000	1.0%
不明	177.0000	1.0%
穀粉	168.7500	1.0%
大麦・小麦	165.7500	0.9%
大麦・エン麦	147.7500	0.8%
大麦・穀粉	147.0000	0.8%
木材・魚	144.0000	0.8%
蜜ロウ・樽	142.5000	0.8%
大麦・麦芽	139.5000	0.8%
蜜ロウ・亜麻織物	121.5000	0.7%
大麦・足場	95.2500	0.5%
魚・鉄	85.5000	0.5%
穀粉・ライ麦・魚	63.7500	0.4%
大麦・亜麻	54.0000	0.3%
大麦・木材	54.0000	0.3%
蜜ロウ・魚	48.0000	0.3%
大麦・ライ麦・魚	40.5000	0.2%
麦芽	36.0000	0.2%
亜麻	30.0000	0.2%
大麦・小麦・魚	28.5000	0.2%
スキムメーゼ	15.0000	0.1%
ベーコン	13.5000	0.1%
ライ麦・小麦	9.7500	0.1%
合計	17,596.5000	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 305v; AHL, PQ 927-1064.

表5-6：ダンツィヒへの輸出（1369年）

単位：リューベック・マルク

商品	金額	割合
塩	7,636.4895	42.3%
各種商品	3,729.5000	20.7%
毛織物	1,788.0000	9.9%
現金	973.5000	5.4%
油	622.0000	3.4%
ニシン	420.5000	2.3%
バター	270.0000	1.5%
金	250.0000	1.4%
樽	242.0000	1.3%
その他	232.5000	1.3%
亜麻織物	231.5000	1.3%
糸・綱糸	231.0000	1.3%
羊毛	220.5000	1.2%
ホップ	213.0000	1.2%
鍋	171.0000	0.9%
ワイン	148.0000	0.8%
皮	144.0000	0.8%
コメ	134.0000	0.7%
塩・ニシン	110.0000	0.6%
魚	100.0000	0.6%
蜂蜜	75.0000	0.4%
塩・鋼鉄	60.0000	0.3%
木材	48.0000	0.3%
合計	18,050.4895	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 235r-238r, 239r, 304r-306r, 379v-381r, 425r-428v.

（142.5 マルク），「蜜ロウ・亜麻織物」（121.5 マルク），「蜜ロウ・魚」（48 マルク）を合計

すると 1,417.5 マルクに達しており，実際の輸入額はもっと多かった。蜜ロウはロシア・リーフラントの特産品というイメージがあるが，実際にはプロイセンからの輸入も多かったことが判明する[16]。ダンツィヒへの輸出品（表 5-6）は，詳細不明の各種商品（3,729.5 マルク）を除外すると，塩（7,636.4895 マルク，42.3 パーセント）と毛織物（1,788 マルク，9.9 パーセント）の輸出額が多かった。ダンツィヒへ輸出された塩はプロイセンへの輸出額の約 53 パーセントを占めており，毛織物に関しては約 86 パーセントにも達している。高額な商品である毛織物輸出は，ダンツィヒに集中する傾向があったようだ。他にも，リューベックからプロイセンへ輸出された商品の内, ニシンは輸出額 442.5 マルクの内 420.5 マルクが，バターは輸出額 270 マルクの全額がダンツィヒ向けの輸出だった。

次にエルビングからの輸入（表 5-7）だが，ここでも穀物の占める割合が大きい。輸入額 3,372.475 マルク（40.7 パーセント）の大麦を筆頭に，各種の穀物輸入額を合計すると 5,170.225 マルクに達して全輸入額の約 63 パーセントを占めていた。他の商品と一括課税されている事例も多く，それを含めると輸入額の約 86 パーセントが穀物と関係していたことになる。エルビングの穀物輸出港としての特徴がよく表れていると言えよう。エルビングへの輸出品（表 5-8）としては，ここでもやはり塩の輸出額が 6,698 マルク（77 パーセント）で首位を占めていた。その他の輸出品として特徴的なのが亜麻織物である。リューベックからプロイセンへ輸出された亜麻織物 650.5 マルクの内, 約 64 パーセントの 419 マルクがエルビング向けであった。高価な毛織物はダンツィヒへ，安価な亜麻織物はエルビングへというように，取引される繊維製品に応じて輸出市場に違いが生じていたようである。

ケーニヒスベルクとブラウンスベルクについては輸出の記録がないため，輸入についてのみ確認可能である。ケーニヒスベルクからの輸入（表 5-9）については，商品が特定できない各種商品の割合が 35.9 パーセントと大きく, 複数の商品の一括課税の事例も多いため，輸入品の特徴をつかみにくい。単独の商品としては，種類不明の魚の輸入額が 584.25 マルク（18.8 パーセント）となっており，他の商品との一括課税の事例も多いことから，魚が代表的な輸出品と言えるだろう。その他の商品としては，木材（156 マルク，5.0 パーセント), 一括課税の事例が多い各種の穀物が主要な輸出品だったようだ。ブラウンスベルク（表 5-10）については，史料となるポンド税領収書の件数自体が 3 件と少なく，輸入額 181.5 マルクの全てが穀物となっていた。

[16] 15 世紀後半においてもダンツィヒからリューベックへ蜜ロウが輸出されていたことが先行研究によって明らかにされている。Stark 1973, S. 118-124.

表5-7：エルビングからの輸入（1369年）

単位：リューベック・マルク

商品	金額	割合
大麦	3,372.4750	40.7%
大麦・穀粉	690.0000	8.3%
大麦・魚	460.5000	5.6%
その他	401.2500	4.8%
大麦・挽き割り麦	282.7500	3.4%
エン麦・魚	279.0000	3.4%
ライ麦・穀粉	270.7500	3.3%
木材・魚	228.7500	2.8%
大麦・亜麻	219.0000	2.6%
小麦	204.0000	2.5%
大麦・織物	202.5000	2.4%
魚	197.2500	2.4%
大麦・穀粉・挽き割り麦・亜麻	180.0000	2.2%
小麦・魚	175.5000	2.1%
毛皮・糸	168.7500	2.0%
ライ麦・織物	112.5000	1.4%
大麦・小麦	93.0000	1.1%
大麦・穀粉・挽き割り麦	81.0000	1.0%
大麦・小麦・魚	76.5000	0.9%
穀粉・魚	75.0000	0.9%
挽き割り麦・織物	64.5000	0.8%
大麦・挽き割り麦・塩	60.0000	0.7%
ライ麦・挽き割り麦	60.0000	0.7%
大麦・エン麦	52.5000	0.6%
木材	51.7500	0.6%
穀粉・挽き割り麦・魚	51.0000	0.6%
現金	49.5000	0.6%
ヤチヤナギ	42.0000	0.5%
ライ麦	27.0000	0.3%
穀粉	19.5000	0.2%
穀粉・挽き割り麦	17.2500	0.2%
亜麻	12.0000	0.1%
合計	8,277.4750	100.0%

出典：AHL, PQ 1082, 1100-1149.

表5-8：エルビングへの輸出（1369年）

単位：リューベック・マルク

商品	金額	割合
塩	6,698.0000	77.0%
亜麻織物	419.0000	4.8%
各種商品	340.5000	3.9%
毛織物	301.0000	3.5%
亜麻織物・樽	253.0000	2.9%
毛織物・蜂蜜	150.0000	1.7%
羊毛	96.0000	1.1%
塩・各種商品	90.0000	1.0%
現金	81.5000	0.9%
樽	79.5000	0.9%
タラ	53.0000	0.6%
鍋	47.0000	0.5%
皮革	44.0000	0.5%
ニシン	22.0000	0.3%
魚油	21.0000	0.2%
合計	8,695.5000	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 240r-243v, 307r-308r, 382r-382v, 430r.

表5-9：ケーニヒスベルクからの輸入（1369年）

単位：リューベック・マルク

商品	金額	割合
各種商品	1,117.5000	35.9%
魚	584.2500	18.8%
木材・魚	264.0000	8.5%
農具・魚・小麦	168.0000	5.4%
亜麻・魚・小麦	163.5000	5.3%
木材	156.0000	5.0%
穀粉・木材・魚	120.0000	3.9%
木材・毛皮	106.5000	3.4%
亜麻・魚	102.0000	3.3%
蜜ロウ・魚	94.5000	3.0%
エン麦	84.0000	2.7%
穀粉・亜麻・松脂	52.5000	1.7%
木材・亜麻・小麦	49.5000	1.6%
亜麻	19.5000	0.6%
松脂	12.0000	0.4%
ピッチ・松脂	12.0000	0.4%
挽き割り麦	7.5000	0.2%
合計	3,113.2500	100.0%

出典：AHL, PQ 1167-1192.

表5-10：ブラウンスベルクからの輸入（1369年）

単位：リューベック・マルク

商品	金額	割合
穀粉・ライ麦・小麦	103.5000	57.0%
小麦	78.0000	43.0%
合計	181.5000	100.0%

出典：AHL, PQ 1157-1159.

3．商人

リューベック―プロイセン間で取引に従事していた商人について都市ごとに集計したのが，表 5-11 から表 5-13 である[17]。プロイセンの 4 都市の中で取引額が多かったダンツィヒとエルビングの商人に共通する点は，人数的には少ない取引額 101 マルク以上の大商人が，取引額の合計では 6 割以上を超えていたということである。一方，取引額も商人数（41 人）も少なかったケーニヒスベルクでは，100 マルク以下の中小商人が多数派を占めていた。同じプロイセン地方の都市ではあったが，ダンツィヒおよびエルビングとケーニヒスベルクとの間では，交易に従事していた商人層に違いが存在していたことが分かる。ただ，ケーニヒスベルクの史料状況を鑑みると，それは取引記録が不完全なことが原因かもしれない。

大商人の中から取引額 500 マルク以上の 7 人の商人について取引内容を抜粋したのが表 5-14 である。Evart Pael と Hernest はダンツィヒとエルビングの両方と取引をしていたが，それ以外の 5 人はどちらかの都市とのみ取引をしていた。取引額と取引件数の両方が一番多かったのは Evart Pael であるが，ダンツィヒとエルビングへの輸出しか記録されておらず，輸入の記録はない。同じように，Tideke Pael はエルビングからの輸入のみ，Peper は

[17] ブラウンスベルクについては，商人の数が 5 名と少ないため，ここでは扱わない。

表5-11：ダンツィヒ商業に従事した商人の人数と取引額（1369年）

取引額（マルク）	商人数	合計（マルク）	割合
1-50	181	5,030.0000	14.1%
51-100	101	7,299.2500	20.5%
101-150	46	5,622.0000	15.8%
151-200	29	5,010.0000	14.1%
201-250	15	3,329.2500	9.3%
251-300	7	1,953.5000	5.5%
301-350	3	982.5000	2.8%
351-400	3	1,081.5000	3.0%
401-450	2	853.0000	2.4%
457.5	1	457.5000	1.3%
471	1	471.0000	1.3%
513.5	1	513.5000	1.4%
514	1	514.0000	1.4%
614	1	614.0000	1.7%
1,916	1	1,915.9895	5.4%
合計	393	35,646.9895	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 235r-238r, 239r, 304r-306r, 379v-381r, 425r-428v;AHL, PQ 927-1064.

表5-12：エルビング商業に従事した商人の人数と取引額（1369年）

取引額（マルク）	商人数	合計（マルク）	割合
1-50	71	2,086.4750	12.3%
51-100	48	3,342.5000	19.7%
101-150	23	2,666.7500	15.7%
151-200	14	2,409.7500	14.2%
201-250	4	875.2500	5.2%
251-300	1	292.5000	1.7%
301-350	2	658.0000	3.9%
410.75	1	410.7500	2.4%
626.75	1	626.7500	3.7%
754.5	1	754.5000	4.4%
1,725.5	1	1,725.5000	10.2%
不明*	7	1,124.2500	6.6%
合計	174	16,972.9750	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 240r-243v, 307r-308r, 382r-382v, 430r; AHL, PQ 1082, 1100-1149.

*「不明」の項目には，史料上で用船者（fructuarii）と記入されている7件のデータを集計している。

ダンツィヒへの輸出のみが記録されている。彼らが取引していた商品は，リューベック―プロイセン商業で取引されていた商品と同じ構造を示している。つまり，輸出品としては塩，輸入品としては穀物と魚が主な取引対象であり，Pepperode だけは蜜ロウと銅の輸入に携わっていた。

表5-13：ケーニヒスベルク商業に従事した商人の人数と取引額（1369年）

取引額（マルク）	商人数	合計（マルク）	割合
1-50	17	412.5000	13.2%
51-100	16	1,314.7500	42.2%
101-150	4	442.5000	14.2%
151-200	2	348.0000	11.2%
241.5	1	241.5000	7.8%
354	1	354.0000	11.4%
合計	41	3,113.2500	100.0%

出典：AHL, PQ 1167, 1172-1188, 1190-1192.

表5-14：リューベック―プロイセン商業に従事した主な商人

商人	取引額（マルク）	取引件数	取引内容（商品名，数量，金額）	出典
Pael, Evart	1,940.5000	24	塩1340.5マルク，亜麻織物315マルク，各種商品70マルクをエルビングへ，毛織物114マルク，亜麻織物101マルクをダンツィヒへ輸出	AHL, PZB 1369-1371, fol. 240r, 240v, 241v, 242r, 243r, 305r, 307r, 307v, 308r, 382r, 382v, 426v.
Sepperode, Johannes	1,915.9895	10	蜜ロウ・銅903マルク，蜜ロウ90マルクをダンツィヒから輸入，塩591.9895マルク，各種商品166マルク，2樽65マルク，2スキムメーゼ60マルク，毛織物40マルクをダンツィヒへ輸出	AHL, PZB 1369-1371, fol. 235r, 236r, 304r, 305r, 380v, 381r; AHL, PQ 992, 994, 1039.
Pael, Tideke	754.5000	7	エン麦・魚222マルク，大麦159マルク，穀粉・ライ麦146.25マルク，大麦・魚123.75マルク，現金49.5マルク，ヤチヤナギ42マルク，穀粉12マルクをエルビングから輸入	AHL, PQ 1116, 1126, 1129, 1146, 1149.
Hernest	722.0000	8	大麦336マルクをダンツィヒから輸入，塩278マルクをダンツィヒへ，塩88マルク，皮革20マルクをエルビングへ輸出	AHL, PZB 1369-1371, fol. 235r, 238r, 242r, 427r, 427v; AHL, PQ 968, 1003.
Parchem, Johannes	626.7500	8	塩353マルクをエルビングへ輸出，魚・亜麻・織物・ヤチヤナギ197.25マルク，小麦・大麦・魚76.5マルクをエルビングから輸入	AHL, PZB 1369-1371, fol. 240v, 307r, 307v, 308r, 382r; AHL, PQ 1104, 1130.
Peper, Merten	514.0000	3	各種商品490マルク，現金24マルクをダンツィヒへ輸出	AHL, PZB 1369-1371, fol. 305v, 380r.
Korn, Hinricus	513.5000	8	大麦・魚166.5マルク，小麦90マルク，ライ麦84マルク，魚78マルク，木材30マルクをダンツィヒから輸入，各種商品47マルク，塩18マルクをダンツィヒへ輸出	AHL, PZB 1369-1371, fol. 235r, 235v; AHL, PQ 992, 1005, 1009, 1010, 1013, 1039.

4．船舶

リューベック―プロイセン間の海運で用いられていた船舶について，都市ごとにまとめたのが表 5-15 から表 5-17 である[18]。これらの表から，プロイセン地方との航海で用いられていた船舶は，船舶価額 55 マルクから 200 マルクの中型船が多かったことが分かる。作表していないブラウンスベルクの 2 隻を加えると 381 隻中 313 隻，約 82 パーセントを占めていた。特に 55 マルクから 100 マルクの船舶が 170 隻と最も多く，101 マルクから 200 マルクの船舶が 143 隻で続いていた。54 マルク以下の小型船は 33 隻と少なく，特に 18 マルク以下の小型船は 1 隻も記録されていなかった。このように，中型船が多いという特徴は，第 4 章で検討したポメルン地方のシュテティーンやシュタールガルトと同じ傾向を示している。プロイセン地方とポメルン地方の共通点は，リューベック向けの穀物輸出が多いということであり，バルト海内部の穀物輸送では中型船の利用が多かったということになる。

表5-15：リューベック－ダンツィヒ海運の船舶価額と船舶数（1369年）

船舶価額(マルク)	船舶数	割合
1-18	0	0.0%
19-36	7	2.9%
37-54	14	5.9%
55-100	108	45.4%
101-200	89	37.4%
201-300	19	8.0%
310	1	0.4%
合計	238	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 235r-239r, 304r-306r, 380r-381r, 425r-428v; AHL, PQ 927-946, 948-953, 955-971, 973, 975-976, 978-1051, 1053-1055, 1058.

表5-16：リューベック－エルビング海運の船舶価額と船舶数（1369年）

船舶価額(マルク)	船舶数	割合
1-18	0	0.0%
19-36	3	2.6%
37-54	6	5.2%
55-100	48	41.7%
101-200	45	39.1%
201-300	13	11.3%
合計	115	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 240r-243v, 307r-308r, 382r-382v, 430r; AHL, PQ 1082, 1100-1104, 1106-1113, 1116-1149.

表5-17：リューベック－ケーニヒスベルク海運の船舶価額と船舶数（1369年）

船舶価額(マルク)	船舶数	割合
1-18	0	0.0%
19-36	1	3.8%
37-54	2	7.7%
55-100	14	53.8%
101-200	7	26.9%
201-300	2	7.7%
合計	26	100.0%

出典：AHL, PQ 1167-1192.

[18] ブラウンスベルクとの海運で使用されていた船舶は 2 隻しか確認できないため，表は省略している。AHL, PQ 1157, 1159.

おわりに

本章では，リューベックとプロイセン地方との商業関係について，貿易構造，取引商品，商人，船舶について確認した。プロイセン商業については，15 世紀以降の研究はあるが，14 世紀の研究成果はほとんどない状況であり，その点で本章は貴重な研究成果と言える。貿易構造については，プロイセン最大の都市であったダンツィヒが貿易額の 63.8 パーセント，貿易額 2 位のエルビングが 30.4 パーセントを占めており，両都市だけで貿易額全体の 94.1 パーセントを占めていた。貿易収支では，輸入額が輸出額を約 2,422 マルク上回っていたが，その理由としてケーニヒスベルクとブラウンスベルクについては輸入記録しか残されていなかったことが理由かもしれない。取引時期は 3 月から 7 月にかけての 4 か月間に全期間の約 52 パーセントが集中していた。

プロイセンからの輸入品としては，穀物が輸入額の 51.5 パーセントを占めており，特に大麦の輸入額が多かった。その他の商品としては，魚，木材，蜜ロウなどが輸入されていた。プロイセン地方は 15 世紀以降になると穀物輸出地域として重要性を増すことになるが，すでに 14 世紀後半からリューベックに対して多くの穀物が輸出されていたことが判明する。輸出品としては，先行研究で示されている 15 世紀の事例と同様に塩と毛織物が多く，特に塩は輸出額の 53.6 パーセントを占めていた。また，毛織物の輸出については，ダンツィヒに輸出が集中する傾向があった。その他の輸出品として油脂類，亜麻織物，魚などがあった。

商人については，取引額が少なかったケーニヒスベルクやブラウンスベルクを除外すると，ダンツィヒとエルビングでは取引額 101 マルク以上の大商人が，人数は少ないが，取引額では 6 割以上を占めていた。

プロイセン地方との海運では，船舶価額 55 マルクから 200 マルクの中型船が全体の隻数の約 82 パーセントを占めており，特に 55 マルクから 100 マルクの船舶が多かった。中型船が多いという点は，プロイセン地方と同様に穀物取引が活発だったポメルン地方のシュテティーンおよびシュタールガルトの事例と似た傾向を示している。このことから，14 世紀後半のバルト海地方内部の穀物輸送では中型船の利用が多かったと言えるだろう。

第 2 部　東方貿易―メクレンブルク・ポメルン・プロイセン・リーフラント
第 6 章　リーフラント

はじめに

バルト海東岸のリーフラント地方（Livland，英語でリヴォニア Livonia）は，現在のエストニアとラトヴィアに該当する地域の歴史的地名である[1]。リーフラントの後背地にはロシアやリトアニアが位置し，陸路や水路を経由して接続されていた。例えば，リーガ湾に流れ込むリーフラント最大の河川であるデューナ川（Düma，ラトヴィア語でダウガヴァ川 Daugava，ロシア語で西ドヴィナ川）を経由して北西ロシア（後にリトアニア大公国の支配下となる）の都市ポロツク（Polotsk）やスモレンスク（Smolensk）に到達することが可能であった。また，リーフラントは，北西ロシア最大の商業都市で，特に毛皮取引の拠点として重要であり，ハンザ商館が置かれていたノヴゴロド（Nowgorod）と西方のハンザ都市の中継地点でもあった。リーフラントの商業拠点としては，3 大都市であるラトヴィアのリーガ（Riga），エストニアのレーヴァル（Reval，エストニア語でタリン Tallinn）とドルパト（Dorpat，同タルト Tartu）があった。また，3 大都市から内陸都市のドルパトを除いた 2 都市にエストニアのペルナウ（Pernau，同パルヌ Pärnu）を加えた都市が，3 大海港都市であった。12 世紀末から始まったカトリック教会による宣教活動と十字軍によって形成されたリーフラント地方は，複数の聖界諸侯とドイツ騎士修道会によって統治されていた。リーフラント地方最大の都市であるリーガはリーガ大司教の大司教座，レーヴァルはレーヴァル司教，ドルパトはドルパト司教の司教座が置かれ，ペルナウにはドイツ騎士修道会の城があった。また，レーヴァルの位置する北エストニアは，13 世紀から 14 世紀中頃にドイツ騎士修道会に売却されるまで，デンマーク王国の支配下にあった。これらの都市を経由して，ロシアからは毛皮と蜜ロウが，リーフラントからは亜麻と麻が西方に向けて輸出されていた。特にノヴゴロド商館が閉鎖された 15 世紀末以降は，リーガ，レーヴァル，ドルパトが対ロシア商業の拠点として重要性を増すことになる。また，16 世紀以降になるとレーヴァルから西方へライ麦が輸出されていたと考えられている。一方，西方からリーフラントにもたらされた商品としては，フランドル産の毛織物，塩（当初はリューネブルク産の塩だったが，15 世紀になるとフランスのブルヌフ産海塩が増加），甘みの強いドイツ産の蜂蜜などがあった。さらに，ハンザの対ロシア・リーフラント貿易は輸入超過の状態であったため，商品代金の支払い手段として貴金属の銀が，銀貨としても地金としても東方に輸送されていたようだ。

中世リーフラント商業史に関しては，複数の数量史料が現存するレーヴァルを対象とした研究が盛んである。1887 年にレーヴァルのポンド税台帳および領収書を刊行した Stieda は，中世レーヴァル商業で取引されていた商品について詳しく解説している[2]。1940 年に

---

[1] 以下リーフラントに関する解説は Angermann 1990 を，ハンザのロシア・リーフラント商業についてはドランジェ 2016，247-250 頁を参照。

[2] Stieda 1887.

発表された Koppe の論文は，14 世紀後半のレーヴァルとリューベックのポンド税台帳を分析し，レーヴァルのポンド税台帳の記録から 14 世紀後半にライ麦が西方向けの主要輸出品であったこと，レーヴァルを出入港していた船舶には北ネーデルラント出身の船長が多かったことを指摘した[3]。この Koppe が主張したレーヴァルからのライ麦輸出については，レーヴァルのポンド税台帳は当時の実態を十分に反映しておらず，ライ麦はまだ主要輸出品ではないという旧ソ連の歴史家 Lesnikov による批判がある[4]。Lesnikov 自身は，ポンド税台帳に代わる史料として 15 世紀初頭の損害一覧とリューベック商人フェッキンクーゼン（Veckinchusen）の商業帳簿を分析し，毛皮，蜜ロウ，亜麻がリーフラントの主要輸出品であると主張した。その後，中世リーフラントの穀物貿易史についてはフィンランドの Ahvenainen が単著をまとめており，証書史料などを利用してリーフラントから西方への穀物輸出を確認したが，数量規模が判明するのは 16 世紀以降だとしている[5]。その 16 世紀のレーヴァルについて検討したのが Schildhauer の研究であり，16 世紀レーヴァルの港湾税台帳を分析してライ麦輸出の増加を検出している[6]。これまで紹介した研究はリーフラントからの輸出を扱っていたが，輸入状況について検討を加えたのが Sass である[7]。彼は，15 世紀レーヴァルの入港船舶台帳を分析し，この時期に大西洋・北海方面からの塩輸入が増加したことを検証した。リューベック―リーフラント商業については，Vogtherr が 15 世紀末リューベックのポンド税台帳を分析した論文を発表している[8]。このように，史料状況が良好な 15 世紀以降の研究は盛んだが，本論文で扱う 14 世紀については，レーヴァルを除くと研究があまり進展していないという問題点がある。また，15 世紀以前のリーフラントからの穀物輸出については，研究者によって評価が分かれている状況である。

本章では，1369 年リューベックのポンド税台帳および領収書を利用して，リューベック―リーフラント商業について検討する。しかし，残念ながら，1369 年のポンド税台帳と領収書には，リーフラントからリューベックへの輸入について詳細な情報を提供してくれないという史料上の欠点がある。まず，ポンド税が徴収されていたリーフラントの都市からリューベックへの輸入については，ごく一部の例外を除き，リューベックのポンド税台帳には記帳されていない。そのために，リーフラントからの輸入については，リューベック市立文書館に現存しているポンド税領収書のデータを利用するしかない。リーフラントで発給されたすべてのポンド税領収書が現存しているわけではないので，リーフラントからの輸入状況については不完全にしか判明しない点に留意する必要がある。また，第二次世界大戦後にリューベック市立文書館の所蔵史料が旧ソ連や旧東ドイツに押収された結果，レーヴァルとペルナウのポンド税領収書が所蔵不明となってしまった。ただ，1887 年に

---

[3] Koppe 1940.

[4] Lesnikov 1958.

[5] Ahvenainen 1963.

[6] Schildhauer 1969; Schildhauer 1970.

[7] Sass 1955. 同じレーヴァルの入港船舶台帳を利用した研究として次の研究がある。Wolf 1986; Vogelsang 1997.

[8] Vogtherr 2001. なお，日本では谷澤 2011，75-101 頁が，15 世紀のリューベックにおけるロシア・リーフラント産品の取引について検討している。

Stieda が刊行した 14 世紀後半レーヴァルのポンド税台帳と領収書には，当時現存していたリーフラント諸都市のポンド税領収書がすべて収録されていたため，本章ではそれを利用した。さらに問題なのが，1369 年のポンド税領収書やポンド税台帳では，リーフラントから輸出入されていた商品が，具体的な商品名ではなく，「商品」（bona, mercimonia）や「各種商品」（diversa bona）などとしか記入されていない点である。このため，リューベック―リーフラント間の商品流通については，輸出についても輸入についても不完全にしか判明しないという制約があることに留意しなくてはならない。

1．貿易構造

1369 年のリューベック―リーフラント商業の構造について集計したのが表 6-1 である。貿易構造については，輸出入が記録されていたリーフラントの 4 つの海港都市の内，取引額首位はリーガ（56.6 パーセント）であり，レーヴァル（25.2 パーセント），ペルナウ（17.5 パーセント），ヴィンダウ（0.6 パーセント）と続いている。リューベック―リーフラント交易の半分以上がリーガに集中していたことになる。一方，取引額最下位のヴィンダウ（Windau，ラトヴィア語でヴェンツピルス Ventspils）はラトヴィア西部のクールラント（Kurland，同クルゼメ Kurzeme）地方の海港都市であるが，ヴィンダウに関する取引記録は 2 件のポンド税領収書しか残されておらず，少額の輸入しか判明しない。リーフラント全体の取引額では，輸出額が輸入額を約 19,600 マルク上回っているが，リーフラントからの輸入がポンド税台帳に記録されていないことに起因しており，貿易収支について正確なことは言えないだろう。ただ，リーガは例外的に輸入の記録が多く残されており，輸入超過となっている。

表6-1：リューベック―リーフラント商業（1369年）

単位：リューベック・マルク

地名	輸出	輸入	合計	割合
リーガ	23,935.0000	25,697.7500	49,632.7500	56.6%
レーヴァル	15,757.5000	6,331.9375	22,089.4375	25.2%
ペルナウ	13,918.5000	1,433.2500	15,351.7500	17.5%
ヴィンダウ	0.0000	547.8750	547.8750	0.6%
合計	53,611.0000	34,010.8125	87,621.8125	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 244r-245r, 246r-246v, 247v-249v, 310r-310v, 311v-313v, 383r-383v, 385r, 432r, 434r, 435r-435v; AHL, PQ 1201-1202, 1231-1247, 1249-1250; Stieda 1887, I 21-28, 30, 32-60, 62-67, 121-123, 125-128.

リューベック－リーフラント商業の取引時期を集計したのが表 6-2 である。商業取引の時期は，3 月から 10 月にかけての約 7 か月間に取引額の約 85 パーセントが集中していた。一方，冬季を含む 12 月末から翌春にかけての時期は，取引額がひどく少なくなっている（取引額全体の約 4 パーセント）。冬季のリーフラントでは馬ぞりを利用した内陸商業がおこなわれていたことが知られているが，冬季の海上商業については不活発だったことが

分かる[9]。

表6-2：リューベック―リーフラント商業の取引時期

単位：リューベック・マルク

地名	1369年3月11日-1369年7月12日	1369年7月13日-1369年10月2日	1369年10月3日-1369年12月24日	1369年12月25日-1370年4月13日	合計
リーガ	24,421.3750	19,479.3750	3,431.5000	2,300.5000	49,632.7500
レーヴァル	6,157.1875	8,070.7500	6,772.5000	1,089.0000	22,089.4375
ペルナウ	8,612.7500	6,739.0000	0.0000	0.0000	15,351.7500
ヴィンダウ	353.2500	194.6250	0.0000	0.0000	547.8750
合計	39,544.5625	34,483.7500	10,204.0000	3,389.5000	87,621.8125
割合	45.1%	39.4%	11.6%	3.9%	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 244r-245r, 246r-246v, 247v-249v, 310r-310v, 311v-313v, 383r-383v, 385r, 432r, 434r, 435r-435v; AHL, PQ 1201-1202, 1231-1247, 1249-1250; Stieda 1887, I 21-28, 30, 32-60, 62-67, 121-123, 125-128.

2．商品

リューベック―リーフラント間で輸出入されていた商品をまとめたのが表 6-3 と表 6-4 である。「はじめに」で述べたように，輸入品については具体的な商品名が分からない各種商品や不明の件数が多く，表 6-3 から分かるように，両方合わせると輸入全体の 77.8 パーセントに達している。また，複数の商品を一括課税した事例も多く，詳細な商品構成を再現できない状況である。そのような制約がある中で特定可能な輸入品の内，毛皮・皮革が輸入額 2,184.75 マルク，輸入額に占める割合 6.4 パーセントで首位を占めていた。毛皮・皮革はロシア・リーフラント地方を代表的する商品と言われているが，数量的にもそれが確認できたことになる。毛皮は，他の商品と一括課税されている事例も多く，1369 年のリーフラントから輸出されていた最も代表的な商品であったといえるだろう。一方，もう一つの特産品である蜜ロウは単独で課税されている事例が 1 件もなく，他の商品と一括課税されている事例も 5 件のみで，輸入額もそれほど多くなかった。他の輸入品として，リーフラントの特産品であった亜麻が輸入額 324 マルク（1.0 パーセント），先行研究で言及されることのなかったバターが 258.1875 マルク（0.8 パーセント）であったが，一括課税の事例もあり，実際の金額がもっと多かったのは間違いない。先行研究で評価の分かれたライ麦については，1369 年の時点ではリューベックへの輸入は記録されていなかった。

次に輸出品についてだが（表 6-4 参照），各種商品，現金，樽などを除くと，先行研究で指摘されている代表的な輸出品である毛織物と塩が上位 2 位を占めていた。毛織物は輸出額 20,943.5 マルクで首位を占めており，輸出額に占める割合は 39.1 パーセントに達していた。他の商品との一括課税の事例も多い。塩の輸出額は 4,171 マルク（7.8 パーセント）を記録しており，毛織物と塩の一括課税額（1,499 マルク）を合計すると，この二つの商品だけで輸出額の約 50 パーセントを占めていたことになる。その他には，輸出額 1,217.5 マ

[9] リーフラントの冬季商業については次を参照。柏倉 2000b; Niitemaa 1952.

ルクの亜麻織物（2.3 パーセント），1,199 マルクのニシン（2.2 パーセント），534 マルクの鉄（1.0 パーセント），439 マルクの魚（種類不明，0.8 パーセント）などがあった。

表6-3：リーフラントからの輸入（1369年）

単位：リューベック・マルク

商品	金額	割合
各種商品	24,139.2500	71.0%
不明	2,318.6250	6.8%
毛皮・皮革	2,184.7500	6.4%
毛皮・パター・魚	1,171.0000	3.4%
毛皮・バター	810.0000	2.4%
毛皮・バター・魚油	486.0000	1.4%
現金	412.8750	1.2%
亜麻	324.0000	1.0%
その他	319.8750	0.9%
蜜ロウ・亜麻・麻・エン麦	283.5000	0.8%
バター	258.1875	0.8%
毛皮・蜜ロウ・バター	247.5000	0.7%
毛皮・蜜ロウ・バター・エン麦	225.0000	0.7%
毛皮・亜麻・糸	148.5000	0.4%
亜麻・現金	139.5000	0.4%
大麦	121.5000	0.4%
蜜ロウ・各種商品	119.2500	0.4%
亜麻・各種商品	81.0000	0.2%
毛皮・現金	63.0000	0.2%
毛皮・亜麻	45.0000	0.1%
バター・魚油	45.0000	0.1%
バター・チョウザメ	27.0000	0.1%
蜜ロウ・亜麻	22.5000	0.1%
毛皮・亜麻	18.0000	0.1%
合計	34,010.8125	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 247v, 311v; AHL, PQ 1201-1202, 1231-1247, 1249-1250; Stieda 1887, I 21-28, 30, 32-60, 62-67, 121-123, 125-128.

表6-4：リーフラントへの輸出（1369年）

単位：リューベック・マルク

商品	金額	割合
毛織物	20,943.5000	39.1%
各種商品	12,548.5000	23.4%
塩	4,171.0000	7.8%
現金	3,922.5000	7.3%
樽	3,783.0000	7.1%
毛織物・塩	1,499.0000	2.8%
亜麻織物	1,217.5000	2.3%
ニシン	1,199.0000	2.2%
毛織物・樽	720.0000	1.3%
鉄	534.0000	1.0%
魚	439.0000	0.8%
ホップ	387.5000	0.7%
毛織物・ニシン	337.0000	0.6%
毛織物・鍋	310.0000	0.6%
毛織物・鉄	280.0000	0.5%
塩・ニシン	276.0000	0.5%
鍋	271.5000	0.5%
毛織物・魚	162.0000	0.3%
不明	102.0000	0.2%
毛織物・ホップ	94.0000	0.2%
ワイン	87.0000	0.2%
塩・亜麻織物	71.0000	0.1%
ニシン・各種商品	66.0000	0.1%
その他	63.0000	0.1%
毛織物・各種商品	50.0000	0.1%
毛織物・タラ	45.0000	0.1%
ヴァズマル	32.0000	0.1%
合計	53,611.0000	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 244r-245r, 246r-246v, 248r-249v, 310r-310v, 312r-313v, 383r-383v, 385r, 432r, 434r, 435r-435v.

続いて都市ごとに集計した商品について見てみよう[10]。表 6-5 のリーガからの輸入については，輸出入を通じて取引金額が一番多く記録されているにもかかわらず，肝心の商品名に関する情報がなく，1369 年のポンド税台帳および領収書から輸入品の構成について知

[10] ヴィンダウについては，史料から商品名が判明しないため，ここでは検討しない。AHL, PQ 1201-1202.

ることは不可能である。リーガへの輸出品（表 6-6）については，毛織物の輸出額（14,801.5 マルク，輸出額に占める割合 61.8 パーセント）が輸出状況の判明する 3 都市の中で最も多く，リーフラントに対する毛織物輸出額の約 71 パーセントがリーガに向けて輸出されていたことになる。一方，塩の輸出額は 52 マルク（0.2 パーセント）と極めて少なかった。

表6-5：リーガからの輸入（1369年）

単位：リューベック・マルク

商品	金額	割合
各種商品	23,912.0000	93.1%
不明	1,770.7500	6.9%
魚	15.0000	0.1%
合計	25,697.7500	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 311v; AHL, PQ 1231-1247, 1249-1250.

表6-6：リーガへの輸出（1369年）

単位：リューベック・マルク

商品	金額	割合
毛織物	14,801.5000	61.8%
各種商品	4,251.5000	17.8%
現金	1,217.0000	5.1%
毛織物・塩	670.0000	2.8%
樽	574.5000	2.4%
鉄	534.0000	2.2%
亜麻織物	418.0000	1.7%
毛織物・鍋	310.0000	1.3%
毛織物・鉄	280.0000	1.2%
ホップ	227.5000	1.0%
鍋	114.0000	0.5%
魚	111.0000	0.5%
不明	102.0000	0.4%
毛織物・ホップ	94.0000	0.4%
ニシン	72.0000	0.3%
ワイン	56.0000	0.2%
塩	52.0000	0.2%
毛織物・各種商品	50.0000	0.2%
合計	23,935.0000	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 246r-246v, 312r-312v, 385r, 435r-435v.

レーヴァルからの輸入品については，リーガとは異なり，商品名の記載が詳細である（表 6-7）。毛皮・皮革の輸入額が 2,184.75 マルク（輸入額に占める割合 34.5 パーセント）で最も多く，一括課税の事例も多いため，レーヴァルからの輸入品は主に毛皮から構成されていたのだろう。次に輸入額が多かったのが 258.1875 マルク（4.1 パーセント）のバターであり，毛皮とバターの一括課税（810 マルク，12.8 パーセント）も含めると，この二つの商品だけでレーヴァルからの輸入額の約 51 パーセントを占めていた。また，毛皮とバターが他の商品と共に一括課税されている事例も多く，実際にはもっと多くのバターが輸入されていた。従来の研究では，バターは北欧諸国からの輸入品と認識されていたが，レーヴァルからも輸入されていたことは新しい発見である。レーヴァルへの輸出品（表 6-8）としては，リーフラント全体の傾向と同じように，毛織物（3,658 マルク，23.2 パーセント）と塩（3,593.5 マルク，22.8 パーセント）が上位を占めていた。特にレーヴァルへ輸出された塩は，リューベックからリーフラントへ輸出された金額に占める割合が約 61 パーセントを占めていた。また，ニシンの輸出額（1,045 マルク，6.6 パーセント）もリーフラント向け輸出の約 87 パーセントを占めていた。

表6-7：レーヴァルからの輸入（1369年）

単位：リューベック・マルク

商品	金額	割合
毛皮・皮革	2,184.7500	34.5%
毛皮・バター・魚	1,171.0000	18.5%
毛皮・バター	810.0000	12.8%
毛皮・バター・魚油	486.0000	7.7%
その他	297.0000	4.7%
バター	258.1875	4.1%
毛皮・バター・蜜ロウ	247.5000	3.9%
毛皮・バター・蜜ロウ・エン麦	225.0000	3.6%
現金	180.0000	2.8%
毛皮・亜麻・糸	148.5000	2.3%
大麦	121.5000	1.9%
毛皮・現金	63.0000	1.0%
バター・魚油	45.0000	0.7%
毛皮・亜麻	45.0000	0.7%
バター・チョウザメ	27.0000	0.4%
蜜ロウ・亜麻	22.5000	0.4%
合計	6,331.9375	100.0%

出典：Stieda 1887, I 21-28, 30, 32-60, 62-67.

表6-8：レーヴァルへの輸出（1369年）

単位：リューベック・マルク

商品	金額	割合
毛織物	3,658.0000	23.2%
各種商品	3,593.5000	22.8%
塩	2,562.5000	16.3%
樽	2,448.5000	15.5%
ニシン	1,045.0000	6.6%
亜麻織物	602.5000	3.8%
現金	460.0000	2.9%
毛織物・樽	340.0000	2.2%
毛織物・塩	330.0000	2.1%
毛織物・魚	162.0000	1.0%
ホップ	160.0000	1.0%
ニシン・塩	150.0000	1.0%
鍋	100.0000	0.6%
その他	55.5000	0.4%
ヴァズマル	32.0000	0.2%
ワイン	31.0000	0.2%
魚	27.0000	0.2%
合計	15,757.5000	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 244r-245r, 310r-310v, 383r-383v, 432r.

ペルナウからの輸入品（表 6-9）の特色は，リーフラントからの輸入額の 100 パーセントを占めていた亜麻（324 マルク，22.6 パーセント）である。他の商品と一括課税されている事例も多いので，亜麻の輸入額はもっと多かったに違いない。ペルナウへの輸出（表 6-10）については，毛織物（2,484 マルク，17.8 パーセント），塩（1,556.5 マルク，11.2 パーセント），毛織物と塩の一括課税（499 マルク，3.6 パーセント）で輸出額の約 33 パーセントを占めており，この二つの商品の占める割合が比較的大きかった。

表6-9：ペルナウからの輸入（1369年）

単位：リューベック・マルク

商品	金額	割合
亜麻	324.0000	22.6%
蜜ロウ・亜麻・麻・エン麦	283.5000	19.8%
現金	232.8750	16.2%
各種商品	227.2500	15.9%
亜麻・現金	139.5000	9.7%
蜜ロウ・各種商品	119.2500	8.3%
亜麻・各種商品	81.0000	5.7%
亜麻・毛皮	18.0000	1.3%
スキムメーゼ	7.8750	0.5%
合計	1,433.2500	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 247v; Stieda 1887, I 121-123, 125-128.

表6-10：ペルナウへの輸出（1369年）

単位：リューベック・マルク

商品	金額	割合
各種商品	4,703.5000	33.8%
毛織物	2,484.0000	17.8%
現金	2,245.5000	16.1%
塩	1,556.5000	11.2%
樽	760.0000	5.5%
毛織物・塩	499.0000	3.6%
毛織物・樽	380.0000	2.7%
毛織物・ニシン	337.0000	2.4%
魚	301.0000	2.2%
亜麻織物	197.0000	1.4%
塩・ニシン	126.0000	0.9%
ニシン	82.0000	0.6%
塩・亜麻織物	71.0000	0.5%
ニシン・各種商品	66.0000	0.5%
鍋	57.5000	0.4%
毛織物・タラ	45.0000	0.3%
毛皮	7.5000	0.1%
合計	13,918.5000	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 248r-249v, 313r-313v, 434r.

以上のように，リーガからの輸入品については不明だが，レーヴァルからは毛皮・皮革とバターが，ペルナウからは亜麻の輸入が多かった。一方，輸出品としては毛織物という手工業製品の割合が多かったリーガに対して，レーヴァルは塩やニシンといった一次産品が多いというように，都市ごとに違いがあった。同じリーフラント地方でも都市によってリューベックとの間で取引されていた商品の構造にはそれぞれ特色があったことが分かる。

3．商人

リューベック―リーフラント間で取引していた商人について，都市ごとに集計したのが表 6-11 から表 6-13 である[11]。リーフラントと取引していた商人については，取引額 101 マルク以上の大商人が占める割合が大きいのが特徴である。リーガでは 197 人中 114 人の大商人の取引額が 91.0 パーセント（表 6-11），レーヴァルでは 147 人中 62 人の大商人が 83.3 パーセント（表 6-12），ペルナウでは 105 人中 35 人の大商人が 65.3 パーセント（表 6-13）を占めていた。特にリーガやレーヴァルと取引していた商人については，取引額 101 マルク以上の大商人が占める割合が非常に大きかった。リーフラント地方で取引されてい

[11] ヴィンダウについては，史料上で確認できる商人数が 7 人と少ないため，ここでは扱わない。AHL, PQ 1201-1202.

た商品は，高価な毛皮・皮革，毛織物が多く，そのために大商人が多くなる結果をもたらしたのかもしれない。

表6-11：リーガ商業に従事した商人の人数と取引額（1369年）

取引額（マルク）	商人数	合計（マルク）	割合
1-50	38	1,079.250	2.2%
51-100	45	3,394.750	6.8%
101-150	22	2,784.500	5.6%
151-200	16	2,902.750	5.8%
201-250	12	2,693.250	5.4%
251-300	9	2,483.625	5.0%
301-350	14	4,586.625	9.2%
351-400	8	2,958.250	6.0%
401-450	8	3,400.250	6.9%
451-500	3	1,434.000	2.9%
501-550	2	1,025.000	2.1%
551-600	1	596.250	1.2%
601-650	3	1,898.500	3.8%
651-700	3	1,996.750	4.0%
711	1	711.000	1.4%
872	1	872.000	1.8%
901-1000	3	2,887.000	5.8%
1001-2000	7	9,874.000	19.9%
2055	1	2,055.000	4.1%
合計	197	49,632.750	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 246r-246v, 311v-312v, 385r, 435r-435v; AHL, PQ 1231-1247, 1249-1250.

表6-12：レーヴァル商業に従事した商人の人数と取引額（1369年）

取引額（マルク）	商人数	合計（マルク）	割合
1-50	59	1,732.1875	7.8%
51-100	26	1,960.5000	8.9%
101-150	23	2,997.5000	13.6%
151-200	16	2,681.0000	12.1%
201-250	7	1,652.5000	7.5%
251-300	3	806.5000	3.7%
301-350	1	341.0000	1.5%
351-400	2	737.5000	3.3%
401-450	1	408.5000	1.8%
451-500	2	984.0000	4.5%
625	1	625.0000	2.8%
635	1	635.0000	2.9%
772	1	772.0000	3.5%
956.25	1	956.2500	4.3%
1116	1	1,116.0000	5.1%
1580	1	1,580.0000	7.2%
2104	1	2,104.0000	9.5%
合計	147	22,089.4375	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 244r-245r, 310r-310v, 383r-383v, 432r; Stieda 1887, I 21-28, 30, 32-60, 62-67.

表6-13：ペルナウ商業に従事した商人の人数と取引額（1369年）

取引額（マルク）	商人数	合計（マルク）	割合
1-50	40	1,042.5	6.8%
51-100	30	2,184.8	14.2%
101-150	10	1,268.0	8.3%
151-200	5	835.0	5.4%
201-250	6	1,399.5	9.1%
251-300	3	815.8	5.3%
301-350	1	337.0	2.2%
351-400	4	1,539.8	10.0%
550	2	1,100.0	7.2%
731	1	731.0	4.8%
801	1	801.0	5.2%
1197.5	1	1,197.5	7.8%
2100	1	2,100.0	13.7%
合計	105	15,351.8	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 247v-249v, 313r-313v, 434r; Stieda 1887, I 121-123, 125-128.

さらに，リーフラントでは，大商人の中でも取引額が 1,001 マルク以上の商人が多いのが特徴的である。取引額 1,001 マルク以上の大商人が，リーガで 8 人（リーガの取引額に占める割合は 24.0 パーセント），レーヴァルで 3 人（21.7 パーセント），ペルナウで 2 人（21.5 パーセント）存在し，数名の大商人がそれぞれの都市の商業活動で支配的な立場を占めていた様子が分かる。この 13 人の主要商人の取引内容を抜粋したのが表 6-14 である[12]。

表6-14：リューベックーリーフラント商業に従事した主な商人

商人	取引額（マルク）	取引件数	取引内容（商品名，数量，金額）	出典
Oldenborgh, Johannes de	2,104.0000	4	1樽600マルク，各種商品100マルク，現金40マルクをレーヴァルへ輸出	AHL, PZB 1368-1371, fol. 244r, 383r.
Nighenborgh, Johannes	2,100.0000	1	現金2100マルクをペルナウへ輸出	AHL, PZB 1368-1371, fol. 313r.
Dertzow, Herman	2,055.0000	1	毛織物2055マルクをリーガへ輸出	AHL, PZB 1368-1371, fol. 312r.
Mole, Herman de	1,980.0000	9	各種商品772マルク，毛織物・樽340マルク，毛織物230マルク，毛織物・魚162マルク，塩76マルクをレーヴァルへ，毛織物400マルクをペルナウへ輸出	AHL, PZB 1368-1371, fol. 244v, 248r, 310r, 313r, 383r, 432r.
Goltbergh, Clawus	1,839.5000	5	各種商品949.5マルクをリーガから輸入，鉄490マルク，毛織物400マルクをリーガへ輸出	AHL, PZB 1368-1371, fol. 246r, 312v; PQ 1232-1233, 1243.
Covolt, Bruno	1,689.7500	3	各種商品1329.75マルク，不明360マルクをリーガから輸入	AHL, PQ 1232, 1237, 1243.
Buke, Jo de	1,598.5000	5	各種商品1197.5マルクをペルナウへ，毛織物365マルクをリーガへ，亜麻織物36マルクをレーヴァルへ輸出	AHL, PZB 1368-1371, fol. 244v, 246r, 248v, 313r.
Moer, Herman	1,455.2500	1	各種商品1455.25マルクをリーガへ輸出	AHL, PQ 1250.
Sost, Rütgherus	1,391.5000	5	各種商品1201.5マルクをリーガから輸入，現金190マルクをリーガへ輸出	AHL, PZB 1368-1371, fol. 312r; PQ 1236-1238, 1243.
Pael, Evart	1,242.5000	6	各種商品762マルク，毛織物438.5マルク，不明42マルクをリーガへ輸出	AHL, PZB 1368-1371, fol. 246v, 312r, 435r-435v.
Gelren, Ghereke de	1,212.5000	4	毛織物350マルク，各種商品300マルクをリーガへ輸出，各種商品562.5マルクをリーガから輸入	AHL, PZB 1368-1371, fol. 246r, 312v; PQ 1232, 1243.
Stor, Clawus	1,116.0000	1	1樽1116マルクをリーガへ輸出	AHL, PZB 1368-1371, fol. 383r.
Swartekop, Symon	1,043.0000	4	各種商品600マルク，毛織物380マルク，現金63マルクをリーガへ輸出	AHL, PZB 1368-1371, fol. 246r-246v, 312r.

この 13 人の取引内容の特徴としては，13 人中 9 人がリューベックからの輸出のみに従事していたという点である。輸入の記録が多く残されているリーガと取引していた商人でも，8 人中 4 人は輸出の記録しか残されていない。商品名が不詳の事例が多く，取引内容の共通点を見出すのは困難だが，高額な商品である毛織物の輸出が多かったことが特徴的

[12] Mole と Buke の 2 名は複数のリーフラント都市と取引しており，その取引内容を記載してある。

であったといえるかもしれない。

４．船舶

リューベック―リーフラント間を航海していた船舶について集計したのが表 6-15 から表 6-17 である[13]。これらの表から判明する通り，バルト海地方においてリューベックから最も遠く離れていたリーフラント地方との航海では，船舶価額 101 マルク以上の中型船が多かった。船舶価額 101 マルク以上の船が，リーガでは 81.0 パーセント，レーヴァルでは 83.3 パーセント，ペルナウでは 92.3 パーセントという他の地方では見られない高い割合を占めていた。特に，ポンド税台帳に記録されているリューベックの取引相手都市としては最も東方に位置していたレーヴァルについては，船舶価額 201 マルク以上の大型船が 50.0 パーセントを占めていた。同様に，船舶価額 201 マルク以上の船が，リーガでは 33.3 パーセント，ペルナウでは 30.8 パーセントとなり，遠方のリーフラントとの海運では大型船の比率が高かったといえる。

表6-15：リューベック－リーガ海運の船舶価額と船舶数（1369年）

船舶価額(マルク)	船舶数	割合
1-18	0	0.0%
19-36	0	0.0%
37-54	0	0.0%
55-100	4	19.0%
101-200	10	47.6%
201-300	4	19.0%
337.5	2	9.5%
400	1	4.8%
合計	21	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 246r, 312r-312v, 385r, 435r-435v; AHL, PQ 1232-1239, 1243-1245, 1248.

表6-16：リューベック－レーヴァル海運の船舶価額と船舶数（1369年）

船舶価額(マルク)	船舶数	割合
1-18	0	0.0%
19-36	0	0.0%
37-54	0	0.0%
55-100	3	16.7%
101-200	6	33.3%
201-300	9	50.0%
合計	18	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 244r-244v, 310r, 383r-383v, 432r; Stieda 1887, I 20, 28-29, 31-32, 61, 68.

[13] ヴィンダウについては，船舶価額の判明する船が 1 隻（18 マルク）しか確認できなかった。AHL, PQ 1201.

表6-17：リューベック－ペルナウ海運の
船舶価額と船舶数（1369年）

船舶価額(マルク)	船舶数	割合
1-18	0	0.0%
19-36	0	0.0%
37-54	0	0.0%
55-100	1	7.7%
101-200	8	61.5%
201-300	4	30.8%
合計	13	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 247v-249v, 313r; Stieda 1887, I 121, 124, 126.

おわりに

本章では，バルト海を前面地，北西ロシアを後背地としていたリーフラント地方について検討した。先行研究では，ハンザ商人とロシアとを結びつける通過拠点としての歴史的意義が強調され，自地域の特産品だけではなく，ロシアの特産品である毛織物や蜜ロウの通過交易が盛んであったとされているが，15 世紀以前の穀物輸出については評価が分かれている。しかし，残念ながら，1369 年リューベックのポンド税台帳および領収書は，リーフラントからリューベックへの輸入について詳細な情報を提供してくれないという欠点がある。

貿易構造については，輸出額が輸入額を約 19,600 マルク上回っているが，リーフラントからリューベックへの輸入がポンド税台帳に記録されていないことに起因し，貿易収支について正確なことは言えない。リューベックはリーフラントの 4 つの海港都市との間で商取引をおこなっていたが，取引額首位はリーガ（56.6 パーセント）であり，レーヴァル（25.2 パーセント），ペルナウ（17.5 パーセント），ヴィンダウ（0.6 パーセント）と続いていた。商業取引の時期は，3 月から 10 月にかけての約 7 か月間に取引額の約 85 パーセントが集中していた一方，冬季を含む 12 月末から翌春にかけての時期は取引額がひどく少なくなっている（取引額全体の約 4 パーセント）。このことから，リーフラントでは冬季に馬ぞりを利用した内陸商業がおこなわれていたことが知られているが，海上商業については不活発だったことが分かる。

輸入品については具体的な商品名が分からない「各種商品」の件数が多く，詳細な商品構成が再現できない状況である。輸入品名が判明する数少ない事例として，レーヴァルからリューベックへ毛皮･皮革とバターが，ペルナウからは亜麻の輸入額が比較的多かった。リューベックからの輸出品については毛織物と塩が多く，その他には鉄，亜麻織物，ニシン，魚（種類不明）などがあった。

リーガやレーヴァルと取引していた商人については，取引額 101 マルク以上の大商人が 8 割以上を占めており，大商人が占める割合が圧倒的に大きかった。リーフラント地方で取引されていた商品は，高価な毛皮・皮革，毛織物が多く，そのために大商人が多かった

のだろう。

バルト海地方においてリューベックから最も遠方のリーフラントと航海していたのは，船舶価額 101 マルク以上の中型船であった。特に，ポンド税台帳に記録されているリューベックの取引相手としては最も東方に位置していたレーヴァルについては，201 マルク以上の大型船が 50 パーセントを占めていたことから，遠方のリーフラントとの海運では大型船の比率が高かったといえる。

第3部　北方貿易―デンマーク・ホルシュタイン・スウェーデン・ノルウェー
第7章　デンマーク（スコーネ地方）

はじめに

「リューベック市の富はニシン樽の上に築かれた」という表現があるように[1]，ハンザおよびリューベック商業史における中世デンマークの歴史的意義は，スコーネ地方（Skåne，スカンディナヴィア半島の南端部で現在はスウェーデン領）産のニシン取引にあった。そして，スコーネ地方における商取引の特色は，ハンザ商業圏の交易地としては珍しい，大市（Messe）で取引が行われていたという点である。スコーネ沖のエアソン海峡（デンマーク語 Øresund，スウェーデン語でエーレスンド海峡 Öresund）では，ニシン漁が8月中旬から10月までおこなわれ，塩漬けされたニシンを売買するために8月15日から10月9日までスコーネの大市が開催されていた[2]。大市が開催されていたのは，スコーネ地方の複数の都市（スカノール Skanör，ファルステルボー Falsterbo，マルメー Malmö など）であった。その中でも14世紀まではスカノールが，15世紀になるとファルステルボーが，スコーネの大市の中心的な市場であったとされている。スコーネの大市は，当初はハンザ商人だけでなく，フランドルやオランダ，イングランドやスカンディナヴィアの商人たちが訪問する国際的な大市であり，大市で取引されていた商品も魚，織物，木材，毛皮，蜜ロウ，鉄など多様性に富んでいた[3]。しかし，デンマークとの戦争が勃発した1368年から戦後の1385年まで，ハンザがスコーネ地方の主要な城を占領・統治した結果，スコーネの大市からハンザ商人以外の外国商人はほぼ全面的に排除されてしまい，スコーネの大市はもっぱらニシンだけを取引するバルト海地方の地域的な定期市に変化してしまったと考えられている。このスコーネの大市でリューベックは，大量のニシンを自市に輸入し，リューベックからスコーネ地方へは樽や塩，穀粉やビールを輸出していた。だが，15世紀になると，スコーネ地方のニシン商業は衰退傾向を示すようになり，代わりに北海産のニシンがオランダ人によってバルト海へ輸出されるようになっていった。

このようなニシン取引に特徴があったハンザのスコーネ商業史に関する古典的研究としては，1887年に初版が，1927年に第2版が刊行された Schäfer のモノグラフがある。Schäfer は，特権状などに記されている関税率表から主要取引商品を明らかにするとともに，「スコーネ市場，スカノールとファルステルボーの半島は，とりわけ東西商業の途中経由地だった」と述べ，スコーネの大市を単なるニシン取引のための定期市としてではなく，北海・バルト海を結ぶ東西交易の結節点として評価した[4]。その後，スウェーデンの歴史家 Weibull が1922年と1967年に，14世紀末リューベックのポンド税台帳を利用したスコ

---

[1] Jahnke 2014, S. 81.

[2] Jahnke 2000b, S. 8.

[3] 以下，スコーネの大市の説明はドランジェ 2016，252-255頁に依拠している。

[4] Schäfer 1927, S. LXX. Schäfer の研究成果を日本に紹介した文献として，高村 1980，107-122頁がある。

ーネおよびデンマーク商業に関する研究を発表している。彼の研究の画期的な点は，次の3点である。まず，ポンド税台帳から算出した14世紀末の数量データに基づいて，当時のリューベック商業にとってスカノールとファルステルボーよりもマルメーの方が取引相手都市として重要であったことを明らかにしたこと。次に，スコーネ地方への輸出品としては塩（平均約14,750樽，輸出額約14,450マルク）と空樽（トン樽，平均約15,800樽，輸出額約1,300マルク）が，輸入品としてはニシン（平均約68,150樽，輸入額約91,000マルク）が主要商品だったのを数量的に示したこと。最後に，スコーネ地方だけではなくデンマークについても，主要輸出品であった塩の輸出量（1399年：4,156樽，1400年：3,584樽）について具体的な取引量を明らかにしたこと，である[5]。その後，考古学調査に基づいた研究はあったが，リューベック市立文書館の所蔵史料が利用できなかったこともあり，文献史料に基づいた研究は停滞を余儀なくされた[6]。しかし，リューベック市立文書館の史料が再び利用可能となった 20 世紀末以降，Jahnke によって新たな研究が発表された。Jahnke は，ロストク市立文書館に所蔵されていた1375年マルメーの関税台帳を1997年に刊行した後[7]，2000年にスコーネ地方以外も対象としたハンザ圏全体の中世ニシン商業に関する初のモノグラフを発表した[8]。彼の研究では，Weibull も主張したニシン取引におけるマルメーの重要性と，スコーネの大市において14世紀から15世紀にかけてスカノールとファルステルボーの重要性が逆転したことが，数量データによって明らかにされている[9]。

しかし，中世リューベック―デンマーク商業史には，いまだ未解決の課題がいくつか存在する。まず，スコーネ地方以外のデンマーク商業の実態である。この点については，2007年に出版された Hybel による中世デンマーク経済史に関する著書が，商業史に関する最新の研究状況を示している。しかし，Hybel の著書から判明するのは，商業に関する数量史料の不足から，商業史研究がそれほど進展していないという現状である[10]。次に，スコーネの大市の3大都市（スカノール，ファルステルボー，マルメー）の序列である。1375年と14世紀末の時点におけるマルメーの重要性が Weibull と Jahnke によって主張されているが，1369年の時点でもそうだったのかが検討される必要があるだろう。また，これまでの研究では，主要商品としてニシン，塩，空樽についてのみ数量データが示されてきたが，それ以外の商品についても取引額と取引量の解明が可能かどうかを検討する必要がある。

ただ，以上の課題のうちスコーネ地方以外のデンマーク商業については，1369年のポン

---

[5] Weibull 1922; Weibull 1967.

[6] この時期の研究成果をまとめた文献として，Hill/ Ersgård 1998.

[7] Jahnke 1997.

[8] Jahnke 2000a.

[9] Jahnke 2000a, S. 129-130. なお，15世紀末のデンマークおよびスコーネ商業を扱った日本の研究成果として，谷澤 2011，259-278頁がある。

[10] Hybel 2007, pp. 353-379. なお，15世紀末から16世紀初頭にかけてデンマークのユトランド半島から陸路で北ドイツにもたらされた牛や馬の取引については，次の研究がある。Schwetlik 1961; Schwetlik 1963.

ド税台帳と領収書から明確な解答を得ることは困難である。というのも，1369 年 9 月までハンザとデンマーク王国との間で戦闘が続いていたせいか，スコーネ地方以外のデンマークとの取引が 1369 年のポンド税台帳には一切記録されていないからである[11]。そのため，リューベックのデンマーク商業を扱う本章では，スコーネ地方との取引について検討することになる。

また，ポンド税台帳は，スコーネ地方との輸出入記録をスコーネとマルメーという 2 項目でしか区分しておらず，スコーネについては個別の都市名が記載されていない[12]。ただし，マルメーだけが別個に記帳されていること，また，ファルステルボーとスカノールで発給されたポンド税領収書が存在することから，ポンド税台帳のスコーネの項目にはファルステルボーおよびスカノールとの輸出入が記録されていたとみなしてよいだろう[13]。後で見るように，ポンド税台帳に記載されているスコーネからの輸入は少額にとどまっている。当時，ファルステルボーとスカノールではポンド税が徴収されていたため，当地からリューベックに商品が輸入された時には非課税とされていたようだ。ただ，何らかの事情でファルステルボーやスカノールにおいてポンド税の支払いを免れた商品についてのみ，リューベックでポンド税が徴収され，その記録がポンド税台帳のスコーネの項目に記帳されていたと考えられる。このことから，スコーネ地方からの輸入状況については，ファルステルボーとスカノールで発給されたポンド税領収書のデータを利用する必要がある。ただし，ファルステルボーとスカノールで発給されたすべてのポンド税領収書が現存しているわけではない点に留意しなくてはならない。

さらに，ポンド税領収書には，商品名とその数量しか記録されておらず，金額が記載されていない事例が多いという欠点がある[14]。ほとんどの場合，商品価格を復元することは不可能だが，ニシンについては数量と価格の両方を記録した史料があるため，その数量が明記されている事例については，ニシン 1 ラストを 12 マルクに換算して取引額を復元し

---

[11] 1368 年のポンド税台帳には，スコーネ地方の他にもユトランド半島のオーフス（Aarhus）とフレンスボー（Flensborg，現ドイツのフレンスブルク Flensburg），フュン島（Fyn）のアセンス（Assens），シェラン島（Sjælland）のコペンハーゲン（København）との取引が記録されていたが，取引額は少額だった（輸入額：約 808 マルク，輸出額：約 152 マルク）。Lechner 1935, I 172, 495-496, 546-547, 1056, 1463-73.

[12] 「スコーネ地方」とファルステルボーおよびスカノールのことを指している史料上の表記「スコーネ」とを区別するため，以下ではファルステルボー，スカノール，マルメーを含める場合は「スコーネ地方」，マルメーを含めない場合は「スコーネ」と表記する。

[13] 1368 年のポンド税台帳でもスコーネとマルメーは記録されているが，ファルステルボーとスカノールの記録はない。Lechner 1935, I 545, 879-1055, 1364-1462. ただし，ポンド税領収書は，ファルステルボーとスカノールで別々に発給されている。Lechner 1935, II SF 1-14, II SSk 1-159. なお，ファルステルボーとスカノールの距離はわずか 3 キロメートルである。Hill 1998, S. 722.

[14] 価格不明の領収書の事例は，スカノールが 30 件，ファルステルボーが 26 件，存在する。

ている[15]。

1．貿易構造

1369 年のリューベック―デンマーク商業について集計したのが表 7-1 である。ポンド税台帳に登場するスコーネとマルメー，ポンド税領収書が現存するファルステルボーとスカノールについて，史料に準じて輸出入額を集計している。「はじめに」で述べたように，ポンド税台帳のスコーネという項目からは，ファルステルボーとスカノールそれぞれの輸出取引の状況については判明しないという史料的限界が存在する。一方，輸入状況については，ファルステルボーとスカノールで発給されたポンド税領収書が存在するため，2 つの都市を別々に検討することが可能である。スコーネ，ファルステルボー，スカノール，マルメーの取引額を合計したデンマークとリューベックとの貿易構造は，リューベックからの輸出額（56,965 マルク）の方がデンマークからの輸入額（44,414.75 マルク）よりも約 12,550 マルク多くなっている。ただし，これは上述のように，スコーネ地方からの輸入記録が完全ではないことが原因として考えられ，貿易収支について正確なことは言えないだろう。ポンド税台帳のスコーネという項目とポンド税領収書から判明するファルステルボーおよびスカノールの輸出入額（97,993.75 マルク）は，ポンド税台帳に記録されているマルメーの輸出入額（3,386 マルク）よりも圧倒的に多く，デンマーク商業の 96.7 パーセントを占めていた。その結果，1369 年の時点ではマルメーよりもファルステルボーとスカノールの方が，リューベックとの取引が活発だったことになる。また，ポンド税領収書から判明する輸入額によると，ファルステルボーの方がスカノールよりも約 25,391 マルク多く，この数値から判断すると，当時のスコーネの大市ではファルステルボーが中心的な市場であったと見なすことができる。

表7-1：リューベック―デンマーク商業

単位：リューベック・マルク

<table>
<tr><td>地名</td><td>輸出</td><td>輸入</td><td colspan="2">合計</td><td colspan="2">割合</td></tr>
<tr><td>スコーネ</td><td>54,913.5000</td><td>1,550.5000</td><td>56,464.0000</td><td rowspan="3">97,993.7500</td><td>55.7%</td><td rowspan="3">96.7%</td></tr>
<tr><td>ファルステルボー</td><td>0.0000</td><td>33,460.0000</td><td>33,460.0000</td><td>33.0%</td></tr>
<tr><td>スカノール</td><td>0.0000</td><td>8,069.7500</td><td>8,069.7500</td><td>8.0%</td></tr>
<tr><td>マルメー</td><td>2,051.5000</td><td>1,334.5000</td><td colspan="2">3,386.0000</td><td colspan="2">3.3%</td></tr>
<tr><td>合計</td><td>56,965.0000</td><td>44,414.7500</td><td colspan="2">101,379.7500</td><td colspan="2">100.0%</td></tr>
</table>

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 292v, 350v-378v, 410v-412r, 418v-419r, 420r, 421v, 422v, 461v-462r; AHL, PQ 1411-1453, 1459-1462, 1464-1470, 1472-1473, 1591-1603, 1605-1749.

リューベックとデンマークとの取引額を，ポンド税台帳から判明する 4 つの時期に応じて集計したのが表 7-2 である。一見して分かるのが，スコーネの大市の開催期間（8 月 15 日から 10 月 9 日）と重複している 7 月 13 日から 10 月 2 日にかけての時期に圧倒的に取引額が多かったということである（全期間の 80.3 パーセント）。さらに，続く 10 月 3 日

[15] ポンド税領収書にはニシンの数量と価格が判明する事例が 6 件存在し，その内 4 件がニシン 1 ラストあたり 12 マルクの価格となっている。AHL, PQ 1466-1468, 1607.

から 12 月 24 日の時期の数値と合計すると取引額は 98.4 パーセントに達する。以上のことから，デンマークとの取引は，スコーネの大市の期間に集中していたことがよく分かる。

表7-2：リューベック―デンマーク商業の取引時期

単位：リューベック・マルク

地名	1369年3月11日-1369年7月12日	1369年7月13日-1369年10月2日	1369年10月3日-1369年12月24日	1369年12月25日-1370年4月13日	不明	合計
スコーネ	0.0000	54,255.0000	2,209.0000	0.0000	0.0000	56,464.0000
ファルステルボー	492.0000	19,331.0000	13,572.0000	0.0000	65.0000	33,460.0000
スカノール	0.0000	7,781.7500	156.0000	132.0000	0.0000	8,069.7500
マルメー	208.0000	0.0000	2,481.5000	696.5000	0.0000	3,386.0000
合計	700.0000	81,367.7500	18,418.5000	828.5000	65.0000	101,379.7500
割合	0.7%	80.3%	18.2%	0.8%	0.1%	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 292v, 350v-378v, 410v-412r, 418v-419r, 420r, 421v, 422v, 461v-462r; AHL, PQ 1411-1453, 1459-1462, 1464-1470, 1472-1473, 1591-1603, 1605-1749.

2．商品

リューベックがデンマークから輸入していた商品をすべて集計したのが表 7-3 である。デンマークからの輸入品の特徴は，輸入額 42,806.25 マルクのニシンであり，輸入全体の 96.4 パーセントを占めていた。ニシン以外の輸入品としては，商品名が特定できない各種商品や現金を除くと，毛織物・亜麻織物が 215 マルク，毛皮・皮革が 204 マルクを記録している程度である。ポンド税領収書から判明する当時のスコーネ地方から輸入されていたニシン 1 ラストの価格 12 マルクから計算すると，リューベックに輸入されていたニシン

表7-3：デンマークからの輸入（1369年）

単位：リューベック・マルク

商品	金額	割合
ニシン	42,806.2500	96.4%
各種商品	337.0000	0.8%
現金	252.0000	0.6%
毛織物・亜麻織物	215.0000	0.5%
毛皮・皮革	204.0000	0.5%
馬・その他	148.0000	0.3%
その他	107.0000	0.2%
毛織物	92.0000	0.2%
不明	87.5000	0.2%
木材	84.0000	0.2%
馬	82.0000	0.2%
合計	44,414.7500	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 292v, 350v-378v, 410v-412r, 418v-419r, 420r, 421v, 422v, 461v-462r; AHL, PQ 1411-1453, 1459-1462, 1464-1470, 1472-1473, 1591-1603, 1605-1749.

*この他に船舶・木材1件（153マルク）あり。

の量は約 3,567 ラストとなる。1 ラストはトン（重量トンではなく，樽の名称，以下同じ）に換算すると 12 トンになるため，ニシン 1 トンの価格は 1 マルクとなり，既述の 3,567 ラストをトンに換算すると 42,804 トンの数量となる。Jahnke によると，樽 1 トンには 830 匹から 840 匹のニシンが詰められていたという[16]。仮に 1 トン 830 匹で計算すると，1369 年のリューベックにはスコーネ地方から 3552 万 7320 匹ものニシンが輸入されていたことになる。中世ヨーロッパでは，カトリック教会の規範により，復活祭前の四旬節など年間約 180 日から 200 日もの間，肉食が禁じられていた。そのため，肉食禁止期間中の精進料理の食材として魚が食べられるようになり，スコーネ産の塩漬けニシンも需要が大きかったようだ[17]。

リューベックからデンマークへの輸出については，ポンド税台帳に記載されたスコーネとマルメーへの記録しか残されておらず，しかも両者の輸出品目には大きな違いがあるため，ここでは扱わずに，下記でそれぞれ別々に検討する。

続いて取引相手地ごとに集計した商品について見てみよう。まず，ポンド税台帳でスコーネと記帳されている項目であるが，上述のように，ファルステルボーおよびスカノールとの取引記録と見なすべきだろう。輸入額は 1,550.5 マルクしか記録されていないが，それはファルステルボーとスカノールでポンド税が徴収されていたためである（表 7-4）。主要な輸入品は輸入額 1,244 マルクのニシンであり，全体の 80.2 パーセントを占めていた。それ以外の商品の輸入額は少なく，毛皮・皮革が 101 マルク（輸入額に占める割合 6.5 パーセント）記録されているほかは，馬（36 マルク），豚脂（24 マルク），肉（6 マルク）といった畜産品が輸入されていた。一方，リューベックからスコーネへの輸出は，54,913.5 マルクに達している（表 7-5）。輸出品の中では輸出額 35,279.5 マルクの塩が，全体の 64.2 パーセントを占めていた。それ以外の輸出品としては，詳細不明の各種商品と現金を除くと，毛織物（2,567.5 マルク，輸出額に占める割合 4.7 パーセント），樽（tunna あるいは vas，1,319.5 マルク，2.4 パーセント）と続いている。塩，毛織物，樽といった輸出額上位の 3 商品とそれらが一括課税されている「塩・樽」，「毛織物・塩」，「毛織物・樽」の輸出額を合計すると，41,293 マルク（75.2 パーセント）に達していた。塩と樽は，先行研究でも指摘されている通り，塩漬けニシンを生産するために必要な原料であり，22-24 ラスト（264-288 トン）のニシンを塩漬けするのに，リューネブルク産の塩が 7 ラスト（84 トン）必要だったという（約 3 対 1 の比率）[18]。1369 年のポンド税台帳および領収書からは塩 1 ラストの価格が産出できないため，仮に 1368 年のポンド税台帳の最頻値である 1 ラスト 12 マルクで上述の塩輸出額から輸出量を計算すると，約 2,940 ラストとなる[19]。上述したように，スコーネ地方全体からリューベックに輸入されていたニシンの量が約 3,527 ラストなので，塩漬けニシンを生産するのに十分な量の塩がリューベックから輸出されていたことが分かる。リューベックから塩漬けニシンに必要な塩と樽を輸出し，スコーネ地方から塩漬けニシンを輸入するというのが，1369 年のリューベック―デンマーク商業の

---

[16] Jahnke 2000a, S. 220.

[17] Jahnke 2014, S. 78-79.

[18] Jahnke 2000a, S. 220.

[19] Lechner 1935, S. 576.

商品構造だったといえよう。なお，それ以外の輸出品としては，蜜ロウ（1,000 マルク，1.8 パーセント），バター（676.5 マルク，1.2 パーセント），靴（481 マルク，0.9 パーセント）などがあった。

表7-4：スコーネからの輸入（1369年）

単位：リューベック・マルク

商品	金額	割合
ニシン	1,244.0000	80.2%
毛皮・皮革	101.0000	6.5%
各種商品	86.0000	5.5%
現金	47.5000	3.1%
馬	36.0000	2.3%
豚脂	24.0000	1.5%
肉	6.0000	0.4%
樽	6.0000	0.4%
合計	1,550.5000	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 350v, 353r, 356v, 362r, 363v, 418v, 419r, 420r, 421v, 422v.

表7-5：スコーネへの輸出（1369年）

単位：リューベック・マルク

商品	金額	割合
塩	35,279.5000	64.2%
各種商品	5,252.5000	9.6%
現金	4,383.5000	8.0%
毛織物	2,567.5000	4.7%
樽	1,319.5000	2.4%
塩・樽	1,224.5000	2.2%
蜜ロウ	1,000.0000	1.8%
毛織物・塩	701.5000	1.3%
バター	676.5000	1.2%
靴	481.0000	0.9%
その他	335.0000	0.6%
鉄	241.5000	0.4%
塩・魚油	200.0000	0.4%
毛織物・樽	200.5000	0.4%
ワイン・塩	170.0000	0.3%
油	160.0000	0.3%
亜麻	147.0000	0.3%
不明	141.0000	0.3%
大麦	127.5000	0.2%
ビール	107.5000	0.2%
亜麻織物	57.5000	0.1%
魚	57.0000	0.1%
穀粉	55.0000	0.1%
エン麦	28.0000	0.1%
合計	54,913.5000	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 351r-377v, 378v, 420r, 421v, 422v.

ファルステルボーとスカノールについては，ポンド税領収書のデータから輸入状況のみが把握できる（表 7-6，表 7-7 参照）。両都市ともにニシンの占める割合が圧倒的に多く，ファルステルボーは 33,139 マルク（輸入額の 99.0 パーセント），スカノールは 7,778.25 マルク（96.4 パーセント）を記録していた。それ以外の輸入品としては毛織物や亜麻織物，皮革などがある程度である。ファルステルボーは輸入額 92 マルク（0.3 パーセント）の毛織物，スカノールは毛織物と亜麻織物の一括課税 215 マルク（2.7 パーセント）を記録しているが，こういった繊維製品はスコーネ地方で生産されたものではなく，イングランド

やネーデルラントの商人がスコーネ地方にもたらしたものが，リューベックに再輸出されていたと先行研究では考えられている[20]。

表7-6：ファルステルボーからの輸入（1369年）

単位：リューベック・マルク

商品	金額	割合
ニシン	33,139.0000	99.0%
毛織物	92.0000	0.3%
不明	65.0000	0.2%
現金	56.0000	0.2%
皮革	53.0000	0.2%
各種商品	30.0000	0.1%
その他	25.0000	0.1%
合計	33,460.0000	100.0%

出典：AHL, PQ 1591-1603, 1605-1619, 1623-1749.

表7-7：スカノールからの輸入（1369年）

単位：リューベック・マルク

商品	金額	割合
ニシン	7,778.2500	96.4%
毛織物・亜麻織物	215.0000	2.7%
樽	30.0000	0.4%
皮革	24.0000	0.3%
不明	22.5000	0.3%
合計	8,069.7500	100.0%

出典：AHL, PQ 1411-1453, 1459-1462, 1464-1470, 1472-1473, 1620-1622.

表7-8：マルメーからの輸入（1369年）

単位：リューベック・マルク

商品	金額	割合
ニシン	645.0000	48.3%
各種商品	221.0000	16.6%
現金	148.5000	11.1%
木材	84.0000	6.3%
馬・バター	80.0000	6.0%
馬	46.0000	3.4%
馬・その他	44.0000	3.3%
魚	24.0000	1.8%
馬・豚	24.0000	1.8%
毛皮	18.0000	1.3%
合計	1,334.5000	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 292v, 410v, 461v-462r.

*この他に船舶・木材1件(153マルク)あり。

表7-9：マルメーへの輸出（1369年）

単位：リューベック・マルク

商品	金額	割合
穀粉	1,504.0000	73.3%
各種商品	260.0000	12.7%
不明	198.0000	9.7%
麦芽	37.0000	1.8%
亜麻	24.0000	1.2%
毛織物	12.0000	0.6%
塩	9.0000	0.4%
ビール	7.5000	0.4%
合計	2,051.5000	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 410v-412r, 461v-462r.

マルメーについては，ポンド税台帳から輸出入の状況が把握できる（表 7-8，表 7-9 参照）。輸入額は 1,334.5 マルク，輸出額は 2,051.5 マルクとなっており，輸出額の方が多くなっている。輸入品（表 7-8）は，スコーネ地方の他の取引地同様，ニシンが首位を占めているが，その割合は少なくなっている（645 マルク，48.3 パーセント）。それ以外の輸入品としては，少額の木材（84 マルク）と馬（46 マルク）が登場するが，他の商品との一括課税（「馬・バター」，「馬・その他」，「馬・豚」）が他にも記帳されている馬については，実際の輸入額はもっと多かったことが推測される。輸出品（表 7-9）としては，塩が 9 マル

[20] Weibull 1967, S. 69.

クしか記載されていない一方，穀粉の輸出額が 1,504 マルク（73.3 パーセント）に達していたのが，先述のスコーネとは異なる特徴である。この多額の穀粉輸出は他の年には記録されていない現象であり，ノルウェーのベルゲン商業を研究した Nedkvitne は，マルメーへの輸出として記帳されているこの穀物が，実際には，1369 年 11 月 10 日まで通商禁止とされていたベルゲン向けの輸出だったと推測している[21]。

3．商人

デンマークとの間で商業に従事していた商人について，取引相手地ごとに集計したのが表 7-10 から表 7-13 である。ポンド税領収書からデータを集計したファルステルボー（表 7-11）とスカノール（表 7-12）については，領収書上で具体的な商人名が記載されず，「彼（船長）の用船者たち（sui fructuarii）」と表記されている事例が多いため，取引額不明の商人数が多いという欠点がある。そのため，表 7-10 から表 7-13 において取引額不明や商人を特定できない事例を除外して，全体のデータを再集計した。その結果，個人名が把握可能なデンマークと取引していた商人 967 人の内，人数にして 784 人（全体の 81 パーセント）が取引額 100 マルク以下の中小商人であった。中小商人の内，さらに取引額 50 マルク以下の小商人の人数を集計すると 593 人（同 61 パーセント）となる[22]。取引額的には中小商人の占める割合は 42.4 パーセントにとどまっていたが，リューベックから距離の

表7-10：スコーネ商業に従事した商人の人数と取引額（1369年）

取引額（マルク）	商人数	合計（マルク）	割合
1-50	475	11,581.5000	20.5%
51-100	157	11,455.5000	20.3%
101-150	77	9,941.5000	17.6%
151-200	31	5,586.0000	9.9%
201-250	25	5,661.0000	10.0%
251-300	12	3,354.5000	5.9%
301-350	2	654.0000	1.2%
351-400	3	1,101.0000	1.9%
401-450	6	2,491.5000	4.4%
451-500	1	474.0000	0.8%
501-550	3	1,605.5000	2.8%
615	1	615.0000	1.1%
816	1	816.0000	1.4%
1127	1	1,127.0000	2.0%
合計	795	56,464.0000	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 350v-378v, 418v, 419r, 420r, 421v, 422v.

表7-11：ファルステルボー商業に従事した商人の人数と取引額（1369年）

取引額（マルク）	商人数	合計（マルク）	割合
1-50	18	478.0000	1.4%
51-100	9	708.0000	2.1%
101-150	2	246.0000	0.7%
151-200	3	492.0000	1.5%
201-250	1	240.0000	0.7%
251-300	3	786.0000	2.3%
318	1	318.0000	1.0%
372	1	372.0000	1.1%
516	1	516.0000	1.5%
不明*	100	29,304.0000	87.6%
合計	139	33,460.0000	100.0%

出典：AHL, PQ 1591-1603, 1605-1619, 1623-1749.

*「不明」の項目には，史料上で用船者（sui fructuarii）と記入されている100件のデータを集計している。

[21] Nedkvitne 2014, p. 657.

[22] 本論文では「小商人」という用語を，小売商ではなく，取引額が少ない商人という意味で用いる。

近いデンマークとの商業に従事していた商人の人数は，中小商人が圧倒的に多かったことが分かる。

表7-12：スカノール商業に従事した商人の人数と取引額（1369年）

取引額（マルク）	商人数	合計（マルク）	割合
1-50	28	848.2500	10.5%
51-100	5	322.5000	4.0%
101-150	1	108.0000	1.3%
151-200	1	156.0000	1.9%
201-250	1	215.0000	2.7%
390	1	390.0000	4.8%
516	1	516.0000	6.4%
552	1	552.0000	6.8%
不明*	38	4,962.0000	61.5%
合計	77	8,069.7500	100.0%

出典：AHL, PQ 1411-1453, 1459-1462, 1464-1470, 1472-1473, 1620-1622.

*「不明」の項目には，史料上で用船者（sui fructuarii）と記入されている38件のデータを集計している。

表7-13：マルメー商業に従事した商人の人数と取引額（1369年）

取引額（マルク）	商人数	合計（マルク）	割合
1-50	72	1,750.5000	51.7%
51-100	20	1,344.5000	39.7%
101-150	1	110.0000	3.2%
151-200	1	181.0000	5.3%
合計	94	3,386.0000	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 292v, 410v-412r, 461v-462r.

取引額 101 マルク以上の大商人の内，デンマーク全体で取引額 501 マルク以上の商人は 9 人存在するが（スコーネ 6 人，ファルステルボー1 人，スカノール 2 人），彼らの取引額を合計しても，全体の取引額の 8.5 パーセントにすぎない。本論文で検討する他の多くの地域では大商人が取引額で大きな割合を占めている中，デンマークのスコーネ地方ではそうではなかったのが特徴的である。表 7-14 では，デンマークの主要商人の取引内容を知るために，取引額 552 マルク以上の上位 4 人を集計した。この表によると，Sestap 以外の商人は，スコーネ地方に向けて複数回の取引，とくに輸出を多くしていたことが分かるだろう。この内，Langhe と Osenbrugghe はリューベックの市参事会員であり[23]，特に Langhe は 1368 年から 1369 年までスコーネ地方におけるポンド税徴収任務のためスコーネ地方へ派遣されていた人物であった[24]。当時のリューベック市参事会員が，外国で参事会員と

表7-14：リューベック―デンマーク商業に従事した主な商人

商人	取引額（マルク）	取引件数	取引内容（商品名，数量，金額）	出典
Langhe, Johannes	1,127.0000	5	蜜ロウ1,000マルク，塩111マルク，樽16マルクをスコーネ地方へ輸出	AHL, PZB 1368-1371, 357r, 361r, 371r, 374v, 378v.
Osenbrugghe, Herman	816.0000	5	バター600マルク，鉄96マルク，各種商品66マルク，塩54マルクをスコーネ地方へ輸出	AHL, PZB 1368-1371, 365r, 369r, 378v, 378v, 378v.
Kropelin, Clawus	615.0000	9	塩497.5マルク，バター16.5マルク，樽5マルクをスコーネ地方へ輸出，ニシン8ラストをスコーネ地方から輸入	AHL, PZB 1368-1371, 351r, 353v, 356v, 359v, 367v, 373v, 375r, 375v, 378v, 418v.
Sestap, Gherart	552.0000	1	ニシン46ラストをスカノールから輸入	AHL, PQ 1450.

[23] Lutterbeck 2002, S. 290-292, 321-323.

[24] Jahnke 2000a, S. 409.

しての任務に従事しながら，自分自身の商取引をおろそかにしていなかったことが，Langheの事例から分かるだろう。

4．船舶

リューベック―デンマーク間で用いられていた船舶について集計したのが表 7-15 から表 7-18 である。これらの表から分かるのが，船舶価額 55 マルク以上 200 マルク以下の中型船が多かったということである。この傾向がより明確になるのが，デンマークとの海運で用いられていた船舶をすべて集計した表 7-19 である。

表7-15：リューベック－スコーネ海運の船舶価額と船舶数（1369年）

船舶価額(マルク)	船舶数	割合
1-18	22	9.4%
19-36	15	6.4%
37-54	27	11.6%
55-100	89	38.2%
101-200	63	27.0%
201-300	16	6.9%
400	1	0.4%
合計	233	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 350v-378v, 418v, 419r, 420r, 421v, 422v.

表7-16：リューベック－ファルステルボー海運の船舶価額と船舶数（1369年）

船舶価額(マルク)	船舶数	割合
1-18	2	1.7%
19-36	11	9.1%
37-54	19	15.7%
55-100	43	35.5%
101-200	39	32.2%
201-300	4	3.3%
399	1	0.8%
480	1	0.8%
798	1	0.8%
合計	121	100.0%

出典：AHL, PQ 1591-1603, 1605-1619, 1623-1749.

表7-17：リューベック－スカノール海運の船舶価額と船舶数（1369年）

船舶価額(マルク)	船舶数	割合
1-18	1	2.3%
19-36	2	4.7%
37-54	6	14.0%
55-100	17	39.5%
101-200	13	30.2%
201-300	4	9.3%
合計	43	100.0%

出典：AHL, PQ 1411-1453, 1459-1462, 1464-1470, 1472-1473, 1620-1622.

表7-18：リューベック－マルメー海運の船舶価額と船舶数（1369年）

船舶価額(マルク)	船舶数	割合
1-18	4	20.0%
19-36	7	35.0%
37-54	1	5.0%
55-100	2	10.0%
101-200	6	30.0%
合計	20	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 292v, 410v-412r, 461v-462r.

表 7-19 によると，船舶価額が 55 マルクから 200 マルクの船舶が，船舶数全体の 65.2 パーセントを占めており，特に多かったのが価額 55 マルクから 100 マルクの間の船舶

（417 隻中 151 隻，全体の 36.2 パーセント）だった。このことから，デンマーク海運に従事していた船舶が，近距離の航海ルートであるにもかかわらず，小型船ではなく，中型船が多く用いられていたことが判明する。これは，中・小型の船舶や小さな漁船が多かったという Weibull が分析した 14 世紀末のスコーネ地方との海運とは状況が異なっていた[25]。しかし，その違いがデンマーク王国との戦争中という特殊事情による影響なのか，それとも，1369 年と 14 世紀末とで利用されていた船舶に変化が生じていたのかについては，判断するための証拠がないため，ここでは明確な判断を下すことはできない。

表7-19：リューベック－デンマーク海運の船舶価額と船舶数（1369年）

船舶価額(マルク)	船舶数	割合
1-18	29	7.0%
19-36	35	8.4%
37-54	53	12.7%
55-100	151	36.2%
101-200	121	29.0%
201-300	24	5.8%
399	1	0.2%
400	1	0.2%
480	1	0.2%
798	1	0.2%
合計	417	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 292v, 350v-378v, 410v-412r, 418v-419r, 420r, 421v, 422v, 461v-462r; AHL, PQ 1411-1453, 1459-1462, 1464-1470, 1472-1473, 1591-1603, 1605-1749.

おわりに

本章では，リューベックとデンマークとの商業関係について，史料に記録が残っているデンマークのスコーネ地方が検討された。スコーネ地方では，ハンザ商業圏では珍しい定期市,「スコーネの大市」が取引の場であった。スコーネの大市は，ファルステルボー，スカノール，マルメーなどで開催されていたが，ポンド税台帳にはファルステルボーとスカノールが登場せず, スコーネという区分で登記されているという史料上の制約が存在する。ただ，このスコーネとは，ファルステルボーとスカノールのことを指していると考えられる。デンマーク商業の貿易収支については，輸入額よりも輸出額の方が多かったが，これは輸入状況の記録が不完全なことに起因している可能性が高い。ファルステルボーとスカ

[25] Weibull 1967, S. 56-61.

ノールを意味するスコーネとの取引額が一番多く記録されている点，また，ポンド税領収書から判明する輸入額から判断すると，先行研究で明らかにされた 14 世紀末の状況とは異なり，1369 年の時点ではファルステルボーとの取引が最も活発だったようだ。また，取引時期については，スコーネの大市が開催されている期間と重なっている 7 月から 10 月にかけての時期が，取引額の 80.3 パーセントを占めていた。

デンマークから輸入されていた商品は，スコーネ地方の特産品であるニシンが輸入額の 96.4 パーセントと圧倒的に多く，その他の商品の輸入額は少なかった。リューベックからの輸出品としては，スコーネでは塩漬けニシンの原料となる塩が輸出額の 64.2 パーセント，マルメーでは穀粉が 73.3 パーセントを占めており，取引相手によって主要輸出品に違いがあった。ただ，先行研究ではマルメーへの穀粉輸出をベルゲン向けの輸出と解釈する見解もある。その他の輸出品としては，スコーネ向けに輸出されていた毛織物と樽が多かった。そのため，輸出入商品の構造は，先行研究で示されていたのと変わらなかった。

デンマークと取引していた商人については，取引額 100 マルク以下の中小商人の人数が全体の 81 パーセントと多く，特に取引額 50 マルク以下の小商人の割合が人数的にも 61 パーセント，取引額的にも 42.4 パーセントと最多数派を占めている一方，取引額が大きな大商人の占める割合は小さかったのが特徴的である。

デンマークとの海運で使用されていた船舶については，船舶価額 55 マルクから 200 マルクの中型船が船舶数全体の 65.2 パーセントを占めていた。とりわけ 100 マルク以下の中型船の比率が 36.2 パーセントとなっており，最も頻繁に利用されていたことが分かる。この点は，先行研究で中・小型の船舶や小さな漁船の航海が多かったという 14 世紀末の状況とは異なる点である。

第３部　北方貿易―デンマーク・ホルシュタイン・スウェーデン・ノルウェー
第８章　ホルシュタイン（フェーマルン島）

はじめに

第１部第２章では，ホルシュタイン地方西部のハンブルクおよびオルデスローとリューベックとの通商関係について検討した。それに対して，本章で検討するのはホルシュタイン地方東部のフェーマルン島（Fehmarn）とリューベックとの商業関係である。リューベックよりも北方に位置するフェーマルン島は，地理的にデンマーク王国との関係が深く，時代によってはデンマークの支配下に置かれていることもあった。そのために，フェーマルン商業はリューベックの北方貿易の一部とみなして本章で検討することにする。1369 年リューベックのポンド税台帳には，ホルシュタイン地方東部を代表するハンザ都市キール（Kiel）はもとより，その他の都市についても記録が残されておらず，唯一登場するのがフェーマルン島である。本章で検討するフェーマルン島は，東ホルシュタインのヴァグリエン半島（Wagrien）とデンマークのロラン島（Lolland）の間に位置する面積 185 平方キロメートルの島であり，中世には港のある交易拠点としてブルク（Burg）やレムケンハーフェン（Lemkenhafen）があった[1]。14 世紀当時のフェーマルン島はホルシュタイン伯が支配していたが，ハンザ都市からはデンマーク王の封土と見なされていた。そのため，デンマークとの戦争中だった 1369 年 3 月 11 日にリューベックで開催されたハンザ総会において，フェーマルン島に対する鋼鉄，鉄，ホップ，塩の輸出が禁止されている[2]。しかし，実際にはフェーマルン島との取引は継続されていたようであり，1369 年 9 月 8 日にはフェーマルン島の人々に鋼鉄，鉄，ホップ，塩の輸出が許可されたことが，リューベックのポンド税台帳に記載されている[3]。

中世フェーマルン島の商業史のみを対象とした研究はなく，Höpner によるフェーマルン島史の概説的記述が存在する程度である[4]。リューベック商業史におけるフェーマルン島の位置づけとしては，領主であったホルシュタイン伯が 1435 年から 1490 年までフェーマルン島をリューベックの抵当に入れたこともあり，フェーマルン島は「リューベックの後背地として最も重要な穀物倉庫となった」と言われている[5]。

フェーマルン島はハンザ都市でないため，ポンド税は徴収されていなかった。そのため，ポンド税領収書は残されておらず，ポンド税が徴収されていたリューベックのポンド税台帳にしか取引の記録は残されていない。ただし，ポンド税台帳ではフェーマルン島に関する頁において輸出と輸入がはっきり区別されていないという史料上の問題点が存在する。

---

[1] Lorenzen-Schmidt/Pelc 2006, S. 162-164.

[2] HR I, 1, Nr. 489, §17; Wendt 1902, S. 29-30.

[3] AHL, PZB 1368-1371, fol. 343 v ; Wendt 1902, S. 32.

[4] Höpner 1975.

[5] Höpner 1975, S. 15.

例えば，ポンド税台帳のフォリオ 293v には次のような記述がある[6]。

Hinricus Grüt nauta de sua navi valente 40 m de integra dedit 26 1/2 d.

Peter Sverink de ordeo valente 87 m dedit 5 s 2 d minus.

Gudew de ordeo valente 44 m dedit 2 1/2 s.

最初の行には「船長（nauta）Hinricus Grüt は 40 マルクの価値がある船舶について出入港分（de integra）として［ポンド税］26.5 ペニヒを支払った」とある。そのため，この文面だけからは，この船長がポンド税を入港時に支払ったのか，それとも，出港時に支払ったのかが不明である。しかし，続いて「Peter Sverink は 87 マルクの価値がある大麦について［ポンド税］4 シリング 10 ペニヒを支払った」,「Gudew は 44 マルクの価値がある大麦について［ポンド税］2 シリング 6 ペニヒを支払った」という記録から，フェーマルン島の特産品である穀物についてポンド税を支払っていることが判明する。このことから，この一連のポンド税徴収にまつわる記録が，リューベック入港時に記載されたことが分かるのである。同様の事例は 1368 年の台帳でも確認できるが，編纂者の Lechner は商品名などから輸出と輸入を区別している。同じことが，15 世紀末リューベックのポンド税台帳でも確認できる。15 世紀末リューベックのポンド税台帳は，輸出と輸入がそれぞれ別の帳簿に記録されていたにもかかわらず，輸入を記録した帳簿に輸出が疑われる商品の記載が確認できる[7]。本章では，刊行史料である 1368 年や 15 世紀末のポンド税台帳の記録を利用して，商品名から輸出と輸入を区別したが，区別できないものはそのまま輸出入不明としている。また，取引相手地についてポンド税台帳にはフェーマルン島としか記載されておらず，フェーマルン島のどの港と取引していたのかは不明である。

1．貿易構造

リューベックのフェーマルン商業の構造についてまとめたのが表 8-1 である。フェーマルン島からの輸入額が 4,269.5 マルク（全体の 43.4 パーセント），輸出額が 3,811.75 マルク（38.8 パーセント），輸出入不明が 1,755 マルク（17.8 パーセント）となっている。輸入が輸出を約 458 マルク上回っているが，輸出入不明の金額が 1,755 マルクあるため，貿易収支について正確なところは不明である。ただ，1368 年のリューベックのポンド税台帳の集計値によると，輸入額が 1,536.25 マルク，輸出額が 856.5 マルクとなっていたことから，フェーマルン島との商業は輸入超過だった可能性が高い[8]。

リューベックとフェーマルン島との間の商業取引額を，ポンド税の記帳時期に従って分類したのが表 8-2 である。3 月から 7 月にかけての取引額が多い（全体の 62.5 パーセン

---

[6] AHL, PZB 1368-1371, fol. 293 v .

[7] Vogtherr 1995, S. 1224, Satz 5720 によると，1492 年 10 月 1 日にフェーマルン島から塩とホップの輸入が記録されている。しかし，塩とホップはリューベックからフェーマルン島に輸出されていた典型的な商品であり，編纂者のフォークトヘアは「輸出？」と追記している。

[8] Lechner 1935, S. 406-409.

ト）という点は他の地域と同じ傾向を示しているが，12 月末から 4 月にかけての時期の取引が 2 番目に活発（22.6 パーセント）なのは，フェーマルン島の特色といえるだろう。遠距離の，例えばネーデルラント地方との航海は冬の荒天の影響を受けやすく，冬季の航海は不活発であったが，フェーマルン島のある東ホルシュタイン地方のように，リューベックから距離が近い地域の場合は，冬季になっても活発な商業取引や海運が営まれていた様子がうかがえる。

表8-1：リューベックのフェーマルン商業（1369年）

単位：リューベック・マルク

	取引額	割合
輸入	4,269.5000	43.4%
輸出	3,811.7500	38.8%
不明	1,755.0000	17.8%
合計	9,836.2500	100.0%

出典：AHL, PZB 1369-71, fol. 234r, 293v-296r, 297r, 303v, 342v-343v, 413v-414r, 463v-466r.

表8-2：リューベック―フェーマルン商業の取引時期

単位：リューベック・マルク

地名	1369年3月11日-1369年7月12日	1369年7月13日-1369年10月2日	1369年10月3日-1369年12月24日	1369年12月25日-1370年4月13日	合計
フェーマルン島	6,148.2500	586.5000	879.0000	2,222.5000	9,836.2500
割合	62.5%	6.0%	8.9%	22.6%	100.0%

出典：AHL, PZB 1369-71, fol. 234r, 293v-296r, 297r, 303v, 342v-343v, 413v-414r, 463v-466r.

2．商品

リューベックとフェーマルン島との間で取引されていた商品についてまとめたのが，表 8-3 から表 8-5 である。フェーマルン島からリューベックへ輸入されていた商品について集計したのが表 8-3 である。農業が主産業であったフェーマルン島の特産品は穀物であり，輸入品の一覧からもそれは一目瞭然である。輸入額が最も多かったのが大麦であり，輸入額の半分以上を占めていた（2,314.5 マルク，54.2 パーセント）。同じく穀物の輸入品としては，小麦・大麦の一括課税（276 マルク，6.5 パーセント），小麦（208 マルク，4.9 パーセント），種類が不特定の穀物（196 マルク，4.6 パーセント），エン麦（147 マルク，3.4 パーセント），ライ麦（38 マルク，0.9 パーセント），穀粉（穀物の種類は不明，9 マルク），大麦・燕麦の一括課税（8 マルク）が確認され，穀物の輸入額を合計すると 3,196.5 マルク（約 75 パーセント）に達していた。「はじめに」で言及したように，まさしく，フェーマルン島はリューベックの穀倉地帯の 1 つであったと言えるだろう。穀物以外の輸入品としては，種類不明の魚（358.5 マルク，8.4 パーセント），ニシン（108 マルク，2.5 パーセント），ウナギ（102 マルク，2.4 パーセント）といった魚類の合計が 585.5 マルク（約 13 パーセント）となっている。また，大麦，魚の次に輸入額が多かったのが馬（281.5 マルク，6.6 パーセント）であったというのも特色である。このように，農作物や水産物が多かった

というのがフェーマルン島からの輸入の特徴であった。

表8-3：フェーマルン島からの輸入（1369年）

単位：リューベック・マルク

商品	金額	割合
大麦	2,314.5000	54.2%
魚	358.5000	8.4%
馬	281.5000	6.6%
小麦・大麦	276.0000	6.5%
小麦	208.0000	4.9%
穀物	196.0000	4.6%
その他	153.0000	3.6%
エン麦	147.0000	3.4%
ニシン	108.0000	2.5%
ウナギ	102.0000	2.4%
ライ麦	38.0000	0.9%
現金	36.0000	0.8%
各種商品	34.0000	0.8%
穀粉	9.0000	0.2%
大麦・エン麦	8.0000	0.2%
合計	4,269.5000	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-71, fol. 234r, 293v-295r, 297r, 303v, 342v-343v, 413v-414r, 463v-466r.

表8-4：フェーマルン島への輸出（1369年）

単位：リューベック・マルク

商品	金額	割合
蜜ロウ	831.0000	21.8%
銅・バター	600.0000	15.7%
毛皮・皮革	528.0000	13.9%
塩	416.2500	10.9%
各種商品	408.0000	10.7%
バター	284.0000	7.5%
その他	161.5000	4.2%
獣脂	126.0000	3.3%
毛織物	125.0000	3.3%
鉄	110.0000	2.9%
油	72.0000	1.9%
亜麻織物	50.0000	1.3%
コメ	45.0000	1.2%
亜麻	34.0000	0.9%
現金	21.0000	0.6%
合計	3,811.7500	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-71, fol. 234r, 293v-296r, 297r, 303v, 342v-343v, 413v-414r, 463v-466r.

次に，リューベックからフェーマルン島への輸出であるが，表 8-4 によると輸出額 1 位は蜜ロウであり，輸出額のおよそ 5 分の 1 を占めていた（831 マルク，21.8 パーセント）。蜜ロウの主な用途はロウソクの原料であり，フェーマルン島はそれをリューベックからの輸入に依存していたようである[9]。次に銅とバターの一括課税（600 マルク，15.7 パーセント），毛皮・皮革（528 マルク，13.9 パーセント），塩（416.25 マルク，10.9 パーセント），各種商品（408 マルク，10.7 パーセント），バター（284 マルク，7.5 パーセント）と続いている。「はじめに」で言及したように，1369 年 3 月にフェーマルン島に対する塩と鉄の輸出が禁止されていたにもかかわらず，塩も鉄（110 マルク，2.9 パーセント）も輸出が記録されており，輸出禁止が厳格に実行されていなかったことが分かる。また，蜜ロウや銅，バターといったバルト海地方の様々な特産品がリューベックを経由して輸出されている一方，毛織物（125 マルク，3.3 パーセント）や亜麻織物（50 マルク，1.3 パーセント）といった手工業製品の輸出額は少なく，ビールにいたっては輸出が記録されていない。人口数千人のフェーマルン島は，購買力が低く，リューベックにとって重要な輸出市場とは言えなかったのかもしれない[10]。

---

[9] 中世ハンザ圏における蜜ロウ取引の意義については，谷澤 2011，83-89 頁を参照。

[10] Höpner 1975, S. 214 によると，フェーマルン島の人口は，1230 年頃の推計値が 4,000

最後に，輸出入不明の商品を集計したのが表 8-5 である。ただ，フェーマルン島は森林面積が少なかったと考えられるため，木材（240 マルク）と炭（60 マルク）もリューベックからの輸出品であった可能性が高いだろう。商品名が不詳の各種商品や現金については，輸出入の判別は困難である。

表8-5：リューベック―フェーマルン島間の商業―輸出入不明（1369年）

単位：リューベック・マルク

商品	金額	割合
各種商品	682.5000	38.9%
現金	663.5000	37.8%
木材	240.0000	13.7%
その他	109.0000	6.2%
炭	60.0000	3.4%
合計	1,755.0000	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-71, fol. 293v-295r, 303v, 342v-343v, 413v-414r, 464r-466r.

3．商人

リューベック―フェーマルン島間で取引に従事していた商人について，その取引額を集計したのが表 8-6 である。ポンド税台帳から検出された 183 人の商人の内，取引額不明の 15 人を除いた 168 人の商人を検討対象としている。このうち取引額 100 マルク以下の中小商人の人数が 143 人（50 パーセント），さらに 50 マルク以下の小商人が 111 人（26.8 パーセント）となっており，取引額が少ない中小商人が圧倒的に多かったことが分かる。ただ，人数は少ないが，取引額 101 マルク以上の大商人 25 人の取引額に占める割合は 50 パーセントとなっており，少数の大商人に取引が集中する傾向があった。

大商人の中でも取引額が 201 マルク以上を記録していた上位 7 人の取引額は，約 2,489 マルク（全体の 25.3 パーセント）に達していた。この 7 人の商人の取引についてまとめたのが表 8-7 である。彼らの取引は，輸出と輸入のどちらかに特化しているのが特徴と言える。Havene だけは輸出と輸入，両方の記録が残っているが，輸出は 7.5 マルクの塩だけであり，取引額のほとんどは輸入となっている。また，取引件数が少ないのも特徴であり，Vorwer と Bekendorp はそれぞれ蜜ロウ輸出 1 件, Grabow は輸出入不明の各種商品 1 件，Lotze はバター輸出 1 件のみの取引となっている。

人，1420 年頃の推計値が 2,500 人となっている。

表8-6：フェーマルン商業に従事した商人の人数と取引額（1369年）

取引額(マルク)	商人数	合計(マルク)	割合
1-50	111	2,632.7500	26.8%
51-100	32	2,287.0000	23.3%
101-150	14	1,715.0000	17.4%
151-200	4	713.0000	7.2%
201-250	2	475.0000	4.8%
251-300	2	550.5000	5.6%
301-350	1	324.0000	3.3%
351-400	1	377.0000	3.8%
762	1	762.0000	7.7%
合計	168	9,836.2500	100.0%

出典：AHL, PZB 1369-71, fol. 234r, 293v-296r, 297r, 303v, 342v-343v, 413v-414r, 463v-466r.

表8-7：リューベック―フェーマルン商業に従事した主な商人

商人	取引額（マルク）	取引件数	取引内容（商品名，数量，金額）	出典
Osenbrugghe, Herman	762.0000	3	銅・バター600マルク，鉄96マルク，各種商品66マルクを輸出	AHL, PZB 1368-1371, fol. 295v.
Vorwer, Heine	377.0000	1	蜜ロウ377マルクを輸出	AHL, PZB 1368-1371, fol. 295v.
Bekendorp, Ludeke	324.0000	1	蜜ロウ324マルクを輸出	AHL, PZB 1368-1371, fol. 295v.
Holste, Volrat	285.0000	4	大麦205マルク，穀物80マルクを輸入	AHL, PZB 1368-1371, fol. 234r, 464r, 464v, 465v.
Havene, Michil de	265.5000	4	大麦・小麦132マルク，大麦90マルク，36マルクを輸入，塩7.5マルクを輸出	AHL, PZB 1368-1371, fol. 303v, 464v.
Grabow	250.0000	1	各種商品250マルクを取引（輸出入不明）	AHL, PZB 1368-1371, fol. 294v.
Lotze, Hinricus	225.0000	1	バター225マルクを輸出	AHL, PZB 1368-1371, fol. 296r.

4．船舶

リューベック―フェーマルン島間で海運に従事していた船舶の価額について集計したのが表 8-8 である。価額不明の 4 隻を除いた 199 隻の船舶の内，実に 119 隻（全体の 59.8 パーセント）が 18 マルク以下の小型船であった。101 マルク以上の船舶は 7 隻しか確認できず，リューベック―フェーマルン島航路を航海していた船舶の多くが小型船であったことが分かる。第 3 章で検討したメクレンブルク地方と同様に，フェーマルン島のような近距離の航海ルート上では小型船の利用が多かったことが，本章からも確認できる。

表8-8：リューベック－フェーマルン島海運の船舶価額と船舶数（1369年）

船舶価額(マルク)	船舶数	割合
1-18	119	59.8%
19-36	55	27.6%
37-54	12	6.0%
55-100	6	3.0%
101-200	7	3.5%
合計	199	100.0%

出典：AHL, PZB 1369-71, fol. 234r, 293v-296r, 297r, 303v, 342v-343v, 413v-414r, 463v-466r.

おわりに

本章では，リューベックとフェーマルン島との商業関係について，貿易構造，取引商品，商人，船舶について確認してきた。貿易収支については，輸出入不明の記録もあるが，1368年の事例を顧慮するとリューベックの輸入超過であったといえよう。取引時期については，3 月初頭から 7 月初頭にかけての時期の取引額が全体の 63.5 パーセントを占めている一方，12 月下旬から 4 月初頭にかけての時期も 22.6 パーセントを占めていた。リューベックから距離が近いことを勘案すると，フェーマルン島との間では冬季においても取引が継続されていたようである。

そして，「リューベックの穀倉」という表現の通り，フェーマルン島から輸入されていたのは，大麦をはじめとした各種の穀物であった。その他の輸入品としては魚類と馬があった。一方，リューベックからの輸出品としては，蜜ロウ，銅，バター，塩などがあったが，一次産品が多く，手工業製品の輸出が少なかったのが特徴的である。リューベックの対フェーマルン島交易が輸入超過だったことも考え合わせると，リューベック商業にとってフェーマルン島は，輸出市場としてではなく，穀物の輸入先として位置づけられていたのだろう。

商人については，取引額 100 マルク以下の中小商人の比率が高く，その中でも特に取引額 50 マルク以下の小商人が人数的にも，取引額の割合でも一番多かった。その一方で，人数は少ないが取引額 101 マルク以上の大商人が取引額に占める割合も 50 パーセントに達しており，特に 201 マルク以上の取引額を記録していた上位 7 人の大商人だけで総取引額の 25.3 パーセントを占めていた。

船舶については，船舶価額 18 マルク以下の小型船が全体の船舶数の 59.8 パーセントを占めており，近距離のリューベック―フェーマルン島航路では，小型船の利用が多かったことが判明した。

第3部　北方貿易―デンマーク・ホルシュタイン・スウェーデン・ノルウェー
第9章　スウェーデン

はじめに

中世のハンザおよびリューベックの対スウェーデン商業の構造は，13世紀から14世紀にかけて大きく変化した[1]。13世紀まではスウェーデン中部沖のゴットランド島（Gotland）と当地の海港都市ヴィスビー（Visby）が，バルト海の東部と西部を接続する海上交通の結節点として重要だったが，徐々に衰退した。その後，ドイツ人が移住したスウェーデン中部や南部の都市との商業関係がハンザにとって重要となった。スウェーデン中部のストックホルム（Stockholm），南部のニーシェーピング（Nyköping），スーデルシェーピング（Söderköping），カルマル（Kalmar），西部のルードゥーセ（Lödöse），当時はスウェーデン領だったフィンランドの都市オーボ（Åbo，フィンランド語でトゥルク Turku）などが商業都市として存在したが，特に重要だったのがストックホルムであった。当初はリューベック―ストックホルム間の通商路が中世スウェーデン商業の動脈であったが，15世紀以降になるとダンツィヒ―ストックホルム間の通商関係が徐々に増えていったようである。スウェーデンの輸出品としては，鉄やダーラナ地方（Dalarna）のファールン（Falun）鉱山で産出された銅が最も重要であり，その他にも毛皮や皮革などがあった。輸入品としては毛織物と塩が主要商品であった。

スウェーデンの諸都市で徴収されていた関税記録は16世紀以降にならないと現存しないため，リューベックのポンド税台帳は中世スウェーデン商業史研究にとっても必須の史料となっている[2]。このポンド税台帳を利用してリューベック―スウェーデン間の商業史研究に着手したのがKoppeである。Koppeは，14世紀後半のポンド税台帳を利用してストックホルム（1368-1400年），ルードゥーセ（1378-1400年），カルマル（1368年）とリューベックとの商業と海運について分析した[3]。そして，彼がポンド税台帳（カルマルについてはポンド税領収書も利用）から算出した商取引額の数値は，第二次世界大戦後にポンド税台帳がリューベック市立文書館の他の所蔵史料と共に旧ソ連によって押収されて利用できなくなったため，後世の研究でも引用され続けることになった[4]。未刊行史料に基づいた唯一の例外的な研究が，第二次世界大戦以前に14世紀末のポンド税台帳を閲覧・利用していたWeibullが戦後に発表した，リューベックとスウェーデン，ノルウェー，デンマー

---

[1] 以下のスウェーデン商業に関する説明は，ドランジェ 2016，250-252頁を参照。

[2] ハンザ―スウェーデン間の商業史研究の状況については，次を参照。Dahlbäck 2002; Vogtherr 1998.

[3] Koppe 1933; Koppe 1934; Koppe 1943.

[4] Dahlbäck 2002, S. 163. Dahlbäckによれば，Kjell Kumlienの中・近世スウェーデン―ハンザ史研究（Kumlien 1953）でもKoppeの数値が引用されているという。この分野におけるKumlienの研究業績として，さらに以下の研究がある。Kumlien 1952; Kumlien 1960; Kumlien 1963.

クとの商業規模や海運について比較検討した研究であり，14 世紀後半の北欧諸国とリューベックとの商業関係について大まかな見取り図を提供している[5]。冷戦終結前後になってようやくリューベック市立文書館の所蔵史料が返還されると，未刊行史料に基づいた研究が再開され，15 世紀末のリューベック―スウェーデン商業史に関する一連の研究が，Vogtherr によって発表されたが，14 世紀後半のポンド税台帳を分析した研究はまだ着手されていない[6]。また，すでに刊行されている 1368 年のポンド税台帳については上述の Koppe の諸研究によってすでに詳細な分析がなされているが，1369 年の台帳についてはストックホルムを除くと本格的な利用はまだされていない。さらに，14 世紀末を扱った Weibull の論文を除くと，ストックホルムやカルマルといった特定の都市だけではなく，スウェーデン全体の商業活動について詳細に検討した研究はないのが現状である。

以上のことから，本章では，1369 年リューベックのポンド税台帳を分析し，リューベック―スウェーデン商業の実態について解明を試みる。具体的には，リューベック商業におけるスウェーデンとスウェーデン諸都市との商業構造，取引されていた商品の種類と数量，商人と船舶について検討する。

1．貿易構造

1369 年のポンド税台帳から判明するリューベック―スウェーデン商業の構造は，表 9-1 の通りである。この表から，1369 年のリューベック―スウェーデン商業が，スウェーデン中部のストックホルム，スウェーデン東部沖に位置するゴットランド島（その取引の中心は都市ヴィスビーであった）[7]，スウェーデン南部のスーデルシェーピングおよびカルマルという 4 つの海港都市に集中していたことが分かる。この 4 か所以外に，1368 年のポンド税台帳ではニーショーピングとヴェルテルヴィークが[8]，1378 年以降のポンド税台帳にはスウェーデン西部の港湾都市ルードゥーセが記録されていたが[9]，1369 年の台帳には登場していない。また，当時スウェーデン領であったフィンランドの港湾都市（オーボやヴィボリ）についても，1369 年のポンド税台帳に取引の記録はない[10]。

リューベックとスウェーデン全体との貿易収支は，リューベックからスウェーデンへの輸出額 23,653.8125 マルクに対して，30,820.1 マルクの輸入となっており，リューベック

---

[5] Weibull 1967. 初出は Weibull 1966. 1967 年に発表されたドイツ語版では，一部の表が修正されてより正確な数値が提示されている。そのため，本章でもドイツ語版を利用する。

[6] Vogtherr 1993; Vogtherr 1995; Vogtherr 1999.

[7] ゴットランド島とヴィスビーについては，Westholm 1999.

[8] Lechner 1935, I 388, 678-679.

[9] Koppe 1934.

[10] 15 世紀末のポンド税台帳にはオーボ（現トゥルク）との取引が記録されている。Vogtherr 1993, S.3. なおハンザとフィンランド諸都市との関係については，Dencker 1959.

の輸入超過となっている。この点は，1368 年のポンド税台帳でも，15 世紀末（1492-1496 年）のポンド税台帳でも同様の傾向を示しており，中世リューベック―スウェーデン商業の特徴と言ってよいだろう[11]。個々の商業拠点の取引規模は，ストックホルムがスウェーデン全体の 40.6 パーセントで首位を占めており，2 位のゴットランド島が 24.4 パーセント，スーデルシェーピングが 19.4 パーセント，カルマルが 15.7 パーセントとなっている。この序列は 1368 年のポンド税台帳でも確認され，スウェーデン商業に占めるストックホルムの重要性が本章でも明確に示されていると共に，バルト海における東西交易の拠点だったゴットランド島の重要性が 14 世紀後半にはまだ衰えていなかったことを示している[12]。また，ゴットランド島を除くと，諸都市の貿易収支は軒並みリューベックの輸入超過となっている。

表9-1：リューベックースウェーデン商業（1369年）

単位：リューベック・マルク

地名	輸出	輸入	合計	割合
ストックホルム	8,290.5000	13,818.6000	22,109.1000	40.6%
ゴットランド島	7,897.5000	5,388.0000	13,285.5000	24.4%
スーデルシェーピング	4,324.5000	6,229.0000	10,553.5000	19.4%
カルマル	3,141.3125	5,384.5000	8,525.8125	15.7%
合計	23,653.8125	30,820.1000	54,473.9125	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 250r-254v, 255v-258r, 259r-260r, 261v-265v, 266v-271r, 314v-317r, 318r-319r, 320v-322v, 323v-325r, 326r-326v, 327v-329r, 330r-330v, 386v-387r, 388r, 389v-390r, 391v-392r, 393v-394r, 395r, 436v-437r, 438r-438v, 439v-440r, 442r.

ポンド税台帳の記帳時期に従って取引額を集計したのが表 9-2 である。この表に示されている通り，春から初夏にかけての最初の取引期間に 1369 年の取引額の 50.5 パーセントが集中していた。逆に秋から翌春までの冬を含む期間はわずか 18.8 パーセントにすぎない。このことは航海に適さない冬の時期の船舶交通が活発ではなかったことを示している。ところで，このような取引傾向は 1368 年の数値とは大きく異なっている。1368 年のポンド税台帳の編纂者である Lechner の集計によると，1368 年は 6 月 24 日から 9 月 30 日までの約 3 か月間に取引額の 47 パーセントが集中していた[13]。この両年度の取引時期に差異が生じている原因として，1368 年の春にハンザ諸都市とデンマークとの間で戦争が始まり，春先の商取引が正常ではなかったことが挙げられる。一方，1369 年になると本格的な戦闘はほとんど終結しており，1369 年の方がより平時の状況を示していると考えられる[14]。

---

[11] 1368 年については，Lechner 1935, S. 406-409, 15 世紀末については，Vogtherr 1993, S.3 を参照。

[12] Lechner 1935, S. 406-409. なお，15 世紀末になるとゴットランド島の序列はオーボよりも低下している。Vogtherr 1993, S.3.

[13] Lechner 1935, S. 406-409 より計算。

[14] この時期のハンザ―デンマーク戦争の状況については Goetze 1970 を参照。

表9-2：リューベック―スウェーデン商業の取引時期

単位：リューベック・マルク

地名	1369年3月11日-1369年7月12日	1369年7月13日-1369年10月2日	1369年10月3日-1369年12月24日	1369年12月25日-1370年4月13日	合計
ストックホルム	10,152.1000	7,897.0000	1,609.0000	2,451.0000	22,109.1000
ゴットランド島	6,471.0000	4,585.0000	1,631.5000	598.0000	13,285.5000
スーデルシェーピング	6,522.0000	2,032.0000	1,999.5000	0.0000	10,553.5000
カルマル	4,384.8125	2,177.5000	970.0000	993.5000	8,525.8125
合計	27,529.9125	16,691.5000	6,210.0000	4,042.5000	54,473.9125
割合	50.5%	30.6%	11.4%	7.4%	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 250r-254v, 255v-258r, 259r-260r, 261v-265v, 266v-271r, 314v-317r, 318r-319r, 320v-322v, 323v-325r, 326r-326v, 327v-329r, 330r-330v, 386v-387r, 388r, 389v-390r, 391v-392r, 393v-394r, 395r, 436v-437r, 438r-438v, 439v-440r, 442r.

2．商品

次に，リューベック―スウェーデン間で取引されていた商品について見ていこう。先行研究ではストックホルムなど特定の都市や商品しか検討されてこなかったため，本章では最初にスウェーデン全体の商品構造を明らかにしてみたい。リューベックがスウェーデンから輸入していた商品について集計したのが表 9-3 である。1369 年のポンド税台帳において，詳細不明の各種商品を除外すると，輸入額第 1 位はバター（6,862 マルク，輸入額に占める割合 22.3 パーセント），第 2 位は鉄（4,238.1 マルク，13.8 パーセント）となっており，第 4 位の「鉄・バター」の輸入額（2,737 マルク，8.9 パーセント）も合計すると，この 2 商品だけで全輸入額の 44.9 パーセントを占めることになる。この時期のスウェーデンからリューベックへのバター輸入については，先行研究では特異な現象と指摘されており[15]，14 世紀末のポンド税台帳ではバターの輸入額は激減していた。Weibull が示している数値は，スウェーデン全体ではなくストックホルムからの輸入額だけだが，1399 年に 390 マルク，1400 年に 774 マルクとなっていた[16]。一方，鉄は，中世から近世を通じてスウェーデンの主要輸出品であり，本章でもその重要性が再確認できたことになる[17]。それから，銅（1,294 マルク，4.2 パーセント），毛皮・皮革（894.5 マルク，2.9 パーセント），魚（774 マルク，2.5 パーセント），綱糸（517.5 マルク，1.7 パーセント）と続いている。

---

[15] Lechner 1935, S. 34. Lechner は，メクレンブルク公と息子のスウェーデン王が 1368 年春にリューベック，ヴィスマル，ロストク，シュトラールズントから貸し付けられた 3,000 マルクをバターで現物返済した可能性を指摘している。

[16] Weibull 1967, S. 85-86 によると，1368 年のバター輸入額は 1369 年よりも多く，14,904 マルクに達していたという。Weibull の見解では，通常はデンマークがリューベックへのバター供給国であり，1368 年にはじまったハンザ–デンマーク戦争の勃発とそれに伴った通商禁止措置が原因でデンマーク産バターの供給が停止し，その代わりにスウェーデン産バターの輸入が増えたのだという。次も参照。Dahlbäck 2002, S. 167-168.

[17] Dahlbäck 2002, S. 166-167.

銅は，鉄と並んで中・近世を通じてスウェーデンの主要輸出品であり続け，毛皮・皮革も中世スウェーデンの輸出品として先行研究で言及されてきた商品である[18]。魚については種類が明記されていないが，15 世紀末のポンド税台帳によるとストックホルムからサケが輸出されていたことから，サケの可能性が高いだろう[19]。綱糸は，スウェーデンから輸出されていた手工業製品の中で唯一大きな役割を果たしていた商品だった[20]。

表9-3：スウェーデンからの輸入（1369年）

単位：リューベック・マルク

商品	金額	割合
各種商品	8,024.5000	26.1%
バター	6,862.0000	22.3%
鉄	4,238.1000	13.8%
鉄・バター	2,737.0000	8.9%
現金	2,634.5000	8.6%
銅	1,294.0000	4.2%
その他	1,033.5000	3.4%
毛皮・皮革	894.5000	2.9%
魚	774.0000	2.5%
綱糸	517.5000	1.7%
蜜ロウ	366.0000	1.2%
鉄・魚油	325.0000	1.1%
鉄・銅・バター	300.0000	1.0%
銅・バター	210.0000	0.7%
馬	140.0000	0.5%
鉄・銅	120.0000	0.4%
魚油	111.0000	0.4%
樽	110.5000	0.4%
バター・各種商品	110.0000	0.4%
合計	30,802.1000	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 250r-252v, 255v-258r, 261v-263v, 266v-268v, 314v-317r, 320v-321v, 323v-325r, 327v-329r, 386v-387r, 389v, 391v, 393v-394r, 436v-437r, 439v.

表9-4：スウェーデンへの輸出（1369年）

単位：リューベック・マルク

商品	金額	割合
塩	9,587.7500	40.5%
各種商品	4,522.0000	19.1%
毛織物	3,579.0000	15.1%
現金	1,099.0000	4.6%
亜麻織物	1,015.0000	4.3%
その他	726.0000	3.1%
ニシン	588.0000	2.5%
ライ麦	548.7500	2.3%
毛織物・塩	512.8125	2.2%
毛織物・ワイン	376.0000	1.6%
樽	344.0000	1.5%
ワイン	280.0000	1.2%
塩・ホップ	218.0000	0.9%
毛織物・各種商品	150.0000	0.6%
ホップ	125.5000	0.5%
合計	23,671.8125	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 250r-254v, 255v-258r, 259r-260r, 261v-265v, 266v-271r, 314v-317r, 318r-319r, 320v-322v, 323v-325r, 326r-326v, 327v-329r, 330r-330v, 386v-387r, 388r, 389v-390r, 391v-392r, 393v-394r, 395r, 436v-437r, 438r-438v, 439v-440r, 442r.

次に，リューベックからスウェーデンに輸出されていた商品について見てみよう（表 9-4）。ここから明白になるのが，輸出品における塩と毛織物の重要性であり，塩だけで輸出額の 40.5 パーセント（輸出額 9,587.75 マルク），毛織物は 15.1 パーセント（3,579 マルク）を占めている。「塩」,「毛織物」,「塩・毛織物」の項目を合計すると，この 2 商品だけでリューベックからスウェーデンへ輸出された金額の 57.8 パーセントに達していた。ポ

[18] Dahlbäck 2002, S. 167.ドランジェ 2016 年，250-252 頁。

[19] Dahlbäck 2002, S. 169.

[20] Koppe 1943, S. 201-202.

ンド税台帳には複数の商品が一括して課税される事例が多く，塩と毛織物も他の商品と一括課税されている記録が存在する。そのため，実際に取引されていた塩と毛織物の金額はもっと多かったのは間違いない。スウェーデンの輸入商業における塩と毛織物の重要性は，先行研究によってすでに指摘されてきたことであり，本章でもそれが再確認されたことになる[21]。むしろ興味深いのは，それ以外の商品であろう。輸出額 3 位以下には，現金（1,099 マルク，4.6 パーセント），亜麻織物（1,015 マルク，4.3 パーセント），ニシン（588 マルク，2.5 パーセント），ライ麦（548.8 マルク，2.3 パーセント），樽（344 マルク，1.5 パーセント），ワイン（280 マルク，1.2 パーセント）が登場している。亜麻織物の原産地は不明だが，ハンザ都市で生産された手工業製品として有名な商品であり，北ドイツ原産だったと想定される[22]。ライ麦はポメルン地方かプロイセン地方からリューベックに輸入されたものが再輸出されていたようだ。ニシンは当時デンマーク領であったスコーネ地方の特産品であり，これもスウェーデンに再輸出されていたと考えられるだろう[23]。樽については，金額から判断すると樽そのものが輸出されていたというよりも，中身は不明だが何らかの商品が詰められていたと考えるべきだろう。最後のワインだが，産地が記載されていないため，どこからリューベックに輸入されていたのかは不明である。ただし，先行研究によると，14 世紀後半のハンザ都市ロストクやリューベックで最も多く購入されていたのはドイツ産のラインワインであったことから，スウェーデンに輸出されていたワインもラインワインだった可能性が高いと言えるだろう[24]。

以上のように，1369 年にリューベックがスウェーデンから輸入した商品としてはバター，鉄，銅，毛皮・皮革が，輸出品としては塩と毛織物が取引額に占める割合が多い商品であり，この点はすでに先行研究でも確認されてきた通りである。一方，これまで注目されることのなかった商品として，スウェーデンからの輸入品として魚や綱糸が，リューベックの輸出品としては亜麻織物や穀物の存在が明らかにされた。そこで次に，これらの商品がスウェーデンのどの都市との間で流通していたのかを確認していこう。

リューベックとスウェーデンの 3 都市およびゴットランド島との間で取引されていた商品を集計したのが表 9-5 から表 9-12 である。これらの表を一見して明らかなように，取引額が多かったストックホルムとゴットランド島では輸出入商品の種類が多様だった一方，取引額の少ないスーデルシェーピングとカルマルでは扱われていた商品の種類も少ないという傾向がみられる。

スウェーデンの中でリューベックとの取引額が最も多かったストックホルムでは，輸出入ともに商品名不詳の「各種商品」の占める割合が約 25 パーセントに達する一方，スウェーデン全体の貿易構造と同様に，輸出品の中では塩（2,334 マルク，輸出額に占める割合 28.2 パーセント）と毛織物（1,284 マルク，15.5 パーセント）が他の商品よりも取引額が一桁多かった（表 9-5）[25]。リューベックからスウェーデンに輸出されたニシンの約 86 パ

---

[21] Hildebrand 1954.

[22] 北ドイツ産の亜麻織物輸出については次を参照。Hohls 1926; Huang 2015.

[23] Jahnke 2000.

[24] Sprandel 1998, S. 89.

[25] リューベック―ストックホルム商業については，Koppe 1933 が詳細に論じている。た

ーセント，ワインにいたっては 100 パーセントがストックホルムへ輸出されており，この２つの商品がストックホルムで需要が高かった様子がうかがえる。ストックホルムからの輸入品（表 9-6）としては，鉄（3,698.1 マルク，輸入額に占める割合 26.8 パーセント），バター（1,648 マルク，11.9 パーセント），銅（1,210 マルク，8.8 パーセント）というスウェーデンの輸出品として典型的な商品が上位を占めていた。「鉄・バター」,「鉄・銅・バター」,「銅・バター」,「鉄・銅」の項目も含めて集計すると，これら 3 種類の商品だけでストックホルムからの輸入額の 64.2 パーセントを占めていた。しかも，リューベックがスウェーデンから輸入していた鉄の約 87 パーセントと銅の約 94 パーセントがストックホルムから船積みされていた。この時期のスウェーデンからの鉄・銅輸出の拠点としてストックホルムが重要だった証左といえよう。

次にゴットランド島への輸出だが，ここでもストックホルムと同様に，塩（1,733.5 マルク，輸出額に占める割合 21.9 パーセント）と毛織物（1,692.5 マルク，21.4 パーセント）の占める割合が大きかった（表 9-8）。リューベックからスウェーデン全体への毛織物輸出額の内，47 パーセントがゴットランド島向けであった。同様に，亜麻織物（616 マルク）はスウェーデン向け輸出の 63 パーセント，ホップ（121 マルク）は 96 パーセントを占めていた。輸入では，バターが多かったが（1,451.5 マルク，輸入額に占める割合 26.9 パーセント），鉄や銅は少なく，魚がスウェーデン全体からの輸入額の 80 パーセント（619.5

表9-5：ストックホルムからの輸入(1369年)

単位：リューベック・マルク

商品	金額	割合
鉄	3,698.1000	26.8%
各種商品	3,466.0000	25.1%
鉄・バター	1,682.0000	12.2%
バター	1,648.0000	11.9%
銅	1,210.0000	8.8%
その他	540.5000	3.9%
毛皮・皮革	339.5000	2.5%
鉄・銅・バター	300.0000	2.2%
蜜ロウ	250.0000	1.8%
銅・バター	210.0000	1.5%
現金	207.0000	1.5%
魚	147.5000	1.1%
鉄・銅	120.0000	0.9%
合計	13,818.6000	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 250r-252v, 314v-317r, 386v-387r, 436v-437r.

表9-6：ストックホルムへの輸出(1369年)

単位：リューベック・マルク

商品	金額	割合
塩	2,334.0000	28.2%
各種商品	2,037.0000	24.6%
毛織物	1,284.0000	15.5%
ニシン	505.0000	6.1%
亜麻織物	399.0000	4.8%
ワイン	280.0000	3.4%
毛織物・塩	266.0000	3.2%
ライ麦	240.0000	2.9%
毛織物・ワイン	230.0000	2.8%
その他	187.5000	2.3%
現金	167.0000	2.0%
毛織物・各種商品	150.0000	1.8%
塩・ホップ	112.0000	1.4%
樽	99.0000	1.2%
合計	8,290.5000	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 250v, 253r-254v, 318r-319r, 388r, 438r-438v.

だし，Koppe が示している数値と本稿で提示している数値には，若干の誤差が生じている。というのも，Koppe は数量不明で複数の商品が一括して登記されている記録から，特定の商品の取引額を復元しているからである。なお，考古学の発掘調査結果を反映したストックホルム商業史の研究として，Söderlund 1999.

マルク，11.5 パーセント）を占めていた（表 9-8）。

表9-7：ゴットランド島からの輸入(1369年)

単位：リューベック・マルク

商品	金額	割合
バター	1,451.5000	26.9%
各種商品	1,189.5000	22.1%
魚	619.5000	11.5%
鉄	406.5000	7.5%
鉄・魚油	325.0000	6.0%
毛皮	280.0000	5.2%
バター・鉄	252.0000	4.7%
その他	225.5000	4.2%
現金	159.0000	3.0%
蜜ロウ	116.0000	2.2%
銅	84.0000	1.6%
樽	81.5000	1.5%
魚・亜麻	76.0000	1.4%
肉	62.0000	1.2%
バター・魚油	60.0000	1.1%
合計	5,388.0000	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 261v-263v, 323v-325r, 391v.

表9-8：ゴットランド島への輸出(1369年)

単位：リューベック・マルク

商品	金額	割合
各種商品	2,121.0000	26.9%
塩	1,733.5000	21.9%
毛織物	1,692.5000	21.4%
現金	756.0000	9.6%
亜麻織物	616.0000	7.8%
樽	232.0000	2.9%
毛織物・ワイン	146.0000	1.8%
その他	142.5000	1.8%
ホップ	121.0000	1.5%
ニシン・魚	106.0000	1.3%
塩・ホップ	106.0000	1.3%
毛織物・塩	65.0000	0.8%
塩・現金	60.0000	0.8%
合計	7,897.5000	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 262v, 263v-265v, 324r, 326r-32v, 392r, 442r.

南スウェーデンの海港都市スーデルシェーピングの場合，リューベックからの輸出品は塩（3,721.5 マルク，86.1 パーセント）が圧倒的に多く，スウェーデンに輸出された塩の約 39 パーセントを占めていた（表 9-10）。逆に，リューベックへの輸入品としては，バター（1,647.5 マルク，26.4 パーセント）の存在が大きかった（表 9-9）。バター製造に必要な塩をリューベックから輸入し，後背地で生産された畜産品のバターをリューベックへ輸出するというリューベック―スーデルシェーピング間の貿易構造の存在が想定される。

表9-9：スーデルシェーピングからの輸入(1369年)

単位：リューベック・マルク

商品	金額	割合
各種商品	2,478.0000	39.8%
バター	1,647.5000	26.4%
現金	818.0000	13.1%
鉄・バター	803.0000	12.9%
毛皮・皮革	200.0000	3.2%
鉄	113.5000	1.8%
馬	106.0000	1.7%
その他	63.0000	1.0%
合計	6,229.0000	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 266v-268v, 327v-329r, 393v-394r.

表9-10：スーデルシェーピングへの輸出(1369年)

単位：リューベック・マルク

商品	金額	割合
塩	3,721.5000	86.1%
各種商品	252.0000	5.8%
塩・ライ麦	95.0000	2.2%
ライ麦	78.0000	1.8%
毛織物・銀	70.0000	1.6%
毛織物	56.0000	1.3%
その他	52.0000	1.2%
合計	4,324.5000	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 267r, 269r-271r, 327v, 330r-330v, 395r.

スーデルシェーピング同様，南スウェーデンの海港都市カルマルでも，リューベックから塩が輸出され（1,780.75 マルク，56.7 パーセント），バターをリューベックへ輸入する（2,115 マルク，39.3 パーセント）という構造が見受けられる（表 9-11，表 9-12）[26]。スウェーデンからリューベックへ輸入されたバターの金額は，カルマルが一番多く，スウェーデン全体の約 31 パーセントを占めていた。リューベックからの輸出品ではライ麦（230.75 マルク，7.3 パーセント）がスウェーデンへの輸出額の 42 パーセント，輸入品では綱糸（504 マルク，9.4 パーセント）がスウェーデンからの輸入額の約 97 パーセントを占めていた。

表9-11：カルマルからの輸入(1369年)

単位：リューベック・マルク

商品	金額	割合
バター	2,115.0000	39.3%
現金	1,450.5000	26.9%
各種商品	891.0000	16.5%
綱糸	504.0000	9.4%
その他	157.0000	2.9%
毛皮	75.0000	1.4%
バター・綱糸	68.0000	1.3%
バター・各種商品	64.0000	1.2%
バター・毛皮・屋根瓦	60.0000	1.1%
合計	5,384.5000	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 255v-258r, 320v-321v, 389v, 439v.

表9-12：カルマルへの輸出(1369年)

単位：リューベック・マルク

商品	金額	割合
塩	1,780.7500	56.7%
毛織物	546.5000	17.4%
ライ麦	230.7500	7.3%
毛織物・塩	181.8125	5.8%
現金	166.0000	5.3%
各種商品	112.0000	3.6%
その他	80.5000	2.6%
ビール	43.0000	1.4%
合計	3,141.3125	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 250r-252v, 314v-317r, 386v-387r, 436v-437r.

以上を小括すると，リューベックからスウェーデン諸港への輸出では，塩が 4 つの港にほぼ均等に輸出されていた一方，塩と並んで代表的な北欧向け輸出品である毛織物は，ストックホルムとゴットランド島に取引が集中していた。小都市のスーデルシェーピングとカルマルでは，高価な毛織物の市場がなかったのだろうか。また，スウェーデンからリューベックへの輸入については，どの港からもバターがほぼ等しく輸入されていた。それ以外の取引商品として鉄と銅がストックホルムから，魚がゴットランド島から，綱糸がカルマルから輸入されており，それぞれの都市とその後背地の特色を反映していたといえるだろう。

3．商人

リューベック―スウェーデン間で取引していた商人について集計したのが，表 9-13 から表 9-16 である。スウェーデンの 4 つの商業拠点の内，ストックホルム，ゴットランド島，スーデルシェーピングの 3 か所に共通する点は，取引額 100 マルク以下の中小商人が人数的には多数派を占めているにもかかわらず，取引額の合計では 101 マルク以上の大商人が占める割合が過半数を超えていたということである。スウェーデンで最も取引額が多

[26] カルマルについては次を参照。Koppe 1943; Selling 1980.

かったストックホルムでは，大商人（213 人中 46 人）の取引額合計に占める割合が 69.5 パーセントに達していた。また，501 マルク以上の取引額を記録していた 9 人の大商人がストックホルム商業に占める割合は 32.1 パーセントに達しており，他のスウェーデンの交易地よりも大商人が活躍していた様子がうかがえる。一方，ストックホルムと対照的だったのが，取引額が最も少ないカルマルであった。カルマルでは，中小商人の取引額に占める割合が 54.8 パーセントを占めており，人数的にも取引額的にも中小商人が多数派を形成していた。

表9-13：ストックホルム商業に従事した商人の人数と取引額（1369年）

取引額（マルク）	商人数	合計（マルク）	割合
1-50	115	3,078.6000	13.9%
51-100	52	3,659.5000	16.6%
101-150	13	1,635.0000	7.4%
151-200	6	1,096.0000	5.0%
201-250	6	1,386.0000	6.3%
251-300	4	1,140.0000	5.2%
301-350	3	975.0000	4.4%
351-400	3	1,125.5000	5.1%
401-450	1	433.0000	2.0%
451-500	1	473.0000	2.1%
501-550	1	507.5000	2.3%
551-600	3	1,753.0000	7.9%
656	1	656.0000	3.0%
696	1	696.0000	3.1%
936	1	936.0000	4.2%
1120	1	1,120.0000	5.1%
1439	1	1,439.0000	6.5%
合計	213	22,109.1000	100.0%

AHL, PZB 1368-1371, fol. 250r-254v, 314v-317r, 318r-319r, 386v-387r, 388r, 436v-437r, 438r-438v.

表9-14：ゴットランド商業に従事した商人の人数と取引額（1369年）

取引額（マルク）	商人数	合計（マルク）	割合
1-50	90	2,366.0000	17.8%
51-100	45	3,369.5000	25.4%
101-150	20	2,532.0000	19.1%
151-200	4	700.5000	5.3%
201-250	6	1,375.5000	10.4%
251-300	4	1,065.0000	8.0%
301-350	0	0.0000	0.0%
351-400	1	395.0000	3.0%
401-450	1	433.0000	3.3%
451-500	0	0.0000	0.0%
501-550	2	1,049.0000	7.9%
合計	173	13,285.5000	100.0%

AHL, PZB 1368-1371, fol. 261v-265v, 323v-325r, 326r-326v, 391v-392r, 442r.

表9-15：スーデルシェーピング商業に従事した商人の人数と取引額（1369年）

取引額（マルク）	商人数	合計（マルク）	割合
1-50	74	2,121.5000	20.1%
51-100	37	2,680.0000	25.4%
101-150	13	1,608.5000	15.2%
151-200	10	1,842.5000	17.5%
201-250	2	448.0000	4.2%
251-300	1	270.0000	2.6%
320	1	320.0000	3.0%
483	1	483.0000	4.6%
780	1	780.0000	7.4%
合計	140	10,553.5000	100%

AHL, PZB 1368-1371, fol. 266v-271r, 327v-329r, 330r-330v, 393v-394r, 395r.

表9-16：カルマル商業に従事した商人の人数と取引額（1369年）

取引額（マルク）	商人数	合計（マルク）	割合
1-50	114	2,563.3125	30.1%
51-100	29	2,107.0000	24.7%
101-150	5	555.0000	6.5%
151-200	2	345.0000	4.0%
201-250	6	1,350.5000	15.8%
251-300	1	253.0000	3.0%
301-350	3	961.0000	11.3%
351-400	1	391.0000	4.6%
合計	161	8,525.8125	100.0%

AHL, PZB 1368-1371, fol. 255v-258r, 259r-260r, 320v-322v, 389v-390r, 439v-440r.

大商人の中でも取引額が 601 マルクを超えていた商人は，ストックホルム（5 人）とス

ーデルシェーピング（1 人）の 6 人しか存在しなかった。この上位 6 人の大商人がスウェーデン各地でおこなっていた商取引について，他の都市との取引も含めて再集計したのが表 9-17 である。その結果，取引額が Brincke については 2,000 マルクを，Anckelam と Camen の 2 人については 1,000 マルクを超えていた。この 6 人の大商人の取引の特徴としては，特定の都市や商品に取引が集中するのではなく，複数の取引相手地との間で多種多様な商品を取引していた点である。

表9-17：リューベック―スウェーデン商業に従事した主な商人

商人	取引額（マルク）	取引件数	取引内容（商品名，数量，金額）	出典
Brincke, Johannes de	2,049.0000	16	バター345マルクをストックホルムとカルマルから，鉄・魚油325マルクをゴットランド島から，銅190マルク，銅・鉄120マルク，鉄60マルクをストックホルムから，各種商品730マルクをゴットランド島とストックホルムから輸入，塩181マルクをストックホルムへ，毛織物70マルクをゴットランド島とカルマルへ，現金28マルクをストックホルムへ輸出	AHL, PZB 1368-1371, 251v, 252r, 254v, 259v, 261v, 264v, 315v, 316r, 318r, 321r, 323v, 390r, 436v, 438r, 438v.
Anckelam, Johannes de	1,379.5000	20	バター195マルク，皮革100マルクをストックホルムから，各種商品380マルクをストックホルムとスーデルシェーピングから輸入，塩237.5マルク，塩・ホップ112マルク，各種商品140マルク，穀粉30マルク，サフラン24マルク，錫21マルクをストックホルムへ，亜麻織物70マルクをゴットランド島へ，毛織物・銀70マルクをスーデルシェーピングへ輸出	AHL, PZB 1368-1371, 269r, 314v, 315r, 316v, 318r, 318v, 319r, 326r, 329r, 386v, 393v, 395r, 436v, 438r, 438v.
Camen, Clawus de	1,198.0000	25	鉄456マルクをストックホルムとゴットランド島から，鉄・皮革48マルク，鉄・バター28マルク，現金18マルクをストックホルムから，各種商品25マルクをカルマルから，バター20マルクをゴットランド島から輸入，塩405マルクをストックホルムとゴットランド島へ，毛織物158マルクをストックホルム，カルマル，ゴットランド島へ，ホップ21マルク，現金19マルクをゴットランド島へ輸出	AHL, PZB 1368-1371, 250v, 252r, 252v, 253r, 254v, 261v, 263r, 314v, 315r, 318r, 319r, 326r, 386v, 388r, 389v, 390r, 392r, 436v, 438r, 438v, 442r.
Stoet, Johannes	956.0000	8	銅・鉄・バター300マルク，各種商品250マルクをストックホルムから，バター150マルクをゴットランド島から輸入，毛織物152マルクをゴットランド島とストックホルムへ，亜麻織物80マルク，塩24マルクをストックホルムへ輸出	AHL, PZB 1368-1371, 251v, 253r, 261v, 264v, 315v, 318r, 318v, 326r.
Schepenstede, Johannes	936.0000	1	各種商品936マルクをストックホルムへ輸出	AHL, PZB 1368-1371, 317r.
Blistorp, Thideke	780.0000	3	各種商品350マルクをスーデルシェーピングから輸入，塩230マルク，各種商品200マルクをスーデルシェーピングへ輸出	AHL, PZB 1368-1371, 266v, 269r, 269v.

4．船舶

リューベック―スウェーデン間で海運に従事していた船舶についてまとめたのが表 9-18 から表 9-21 である。これらの表から，リューベック―スウェーデン間を行き来していた船舶が，船舶価額 55 マルクから 200 マルクの中型船が多かったことが分かる。ただ，港によって 100 マルク以下が多かったり（スーデルシェーピング，カルマル），101 マルク以上が多かったり（ストックホルム，ゴットランド島）という若干の違いは存在する。例えば，ストックホルムは 101 マルク以上が 59.6 パーセントだったが，スーデルシェーピングでは 101 マルク以上の船舶はゼロだった。一方，ゴットランド島については，リュー

ベックからゴットランド島を経由してさらに東方のリーフラント地方へ航海する船舶もあったことが推測されるが，それを裏付けるかのように，スウェーデンの他の港では見られない 201 マルク以上の大型船が 8 隻登場している。

表9-18：リューベック―ストックホルム海運の船舶価額と船舶数（1369年）

船舶価額(マルク)	船舶数	割合
1-18	0	0.0%
19-36	3	6.4%
37-54	4	8.5%
55-100	12	25.5%
101-200	28	59.6%
合計	47	100.0%

AHL, PZB 1368-1371, fol. 250r-254v, 314v-317r, 318r-319r, 386v-387r, 388r, 436v-437r, 438r-438v.

表9-19：リューベック―ゴットランド海運の船舶価額と船舶数（1369年）

船舶価額(マルク)	船舶数	割合
1-18	0	0.0%
19-36	0	0.0%
37-54	0	0.0%
55-100	7	24.1%
101-200	14	48.3%
201-300	7	24.1%
301-400	1	3.4%
合計	29	100.0%

AHL, PZB 1368-1371, fol. 261v-265v, 323v-325r, 326r-326v, 391v-392r, 442r.

表9-20：リューベック―スーデルシェーピング海運の船舶価額と船舶数（1369年）

船舶価額(マルク)	船舶数	割合
1-18	0	0.0%
19-36	3	7.9%
37-54	5	13.2%
55-100	30	78.9%
合計	38	100.0%

AHL, PZB 1368-1371, fol. 266v-271r, 327v-329r, 330r-330v, 393v-394r, 395r.

表9-21：リューベック―カルマル海運の船舶価額と船舶数（1369年）

船舶価額(マルク)	船舶数	割合
1-18	2	6.3%
19-36	4	12.5%
37-54	3	9.4%
55-100	15	46.9%
101-200	8	25.0%
合計	32	100.0%

AHL, PZB 1368-1371, fol. 255v-258r, 259r-260r, 320v-322v, 389v-390r, 439v-440r.

おわりに

本章では，リューベック―スウェーデン間で営まれていた商業活動と海運について検討してきた。1369 年のポンド税台帳でリューベックと取引していた記録があるスウェーデンの交易地の序列は，ストックホルム（スウェーデン全体の取引額に占める割合が 40.6 パーセント，以下同じ），ゴットランド島（24.4 パーセント），スーデルシェーピング（19.4 パーセント），カルマル（15.7 パーセント）の順番であった。このことから，リューベックにとってストックホルムがスウェーデンで最も重要な取引相手であったこと。そして，14 世紀後半の時点ではまたゴットランド島のバルト海交易における重要性はまだ失われていなかったこと，が判明する。取引時期については，3 月から 7 月初頭までの時期が取引額全体の 50.5 パーセント，7 月初頭から 10 月初頭までの時期が 30.6 パーセントを占めていた一方，10 月初頭以降の時期は取引額が少なかった。晩秋から冬季にかけての季節になると，スウェーデン沿岸との海上交易は不活発だったことが分かる。

リューベックからスウェーデンに輸出された商品としては，先行研究でも指摘されてきた塩と毛織物が占める割合が圧倒的に大きかった一方で，亜麻織物，ライ麦，ニシン，ワインといった従来の研究ではあまり注目されてこなかった商品の輸出も確認できた。スウェーデンからリューベックへ輸入された商品についても，バター，鉄，銅という当時の主要商品の占める割合が大きかったことが再確認されたとともに，魚や索具といった商品も輸入されていたことが判明した。そして，ストックホルム以外の諸都市やゴットランド島とリューベックとの間の商品流通の状況についても,初めてその概要を示すことができた。特に印象的なのは，鉄や銅といった金属輸出が活発なストックホルムと対照的な，畜産品や林産品が中心のスーデルシェーピングとカルマルの輸出品である[27]。

カルマル以外のスウェーデンと取引していた商人は，取引額 100 マルク以下の中小商人の人数が多かったが，取引額的には 100 マルク以上の大商人が占める割合が大きかった。特に取引額最大のストックホルムでは，他のスウェーデンの交易地よりも大商人が活躍していたようだ。

スウェーデンとの海運で用いられていた船舶は，船舶価額 55 マルクから 200 マルクの中型船が多かった。また，バルト海を東西にむすぶ海運の中継拠点でもあったゴットランド島については，スウェーデンの他の港では見られない 201 マルク以上の大型船が就航していたのが特徴的である。

[27] 先行研究で紹介されている 1580 年にカルマルから輸出された商品の構造は，本論文で検討した 1369 年の状況と類似を示しており，中世から近世初頭にかけて持続したスウェーデン南部の経済構造を反映しているようである。Dahlbäck 2002, S. 172-173.

第 3 部　北方貿易―デンマーク・ホルシュタイン・スウェーデン・ノルウェー
第 10 章　ノルウェー

はじめに

中世のハンザおよびリューベック商業にとって，ノルウェー王国はタラ取引で重要な存在であった[1]。ロフォーテン諸島（Lofoten）などで水揚げされたタラは，干し魚に加工され，中世ノルウェー最大の交易拠点であったベルゲン（Bergen）を経由してヨーロッパ各地に流通した。ベルゲン以外の交易港としてテンスベリ（Tønsberg）やオスロ（Oslo）があったが，ハンザの四大商館のひとつが置かれたベルゲンにタラ取引は集中しており，そのベルゲン商館を事実上掌握していたのがリューベックのベルゲン渡航者団体（ベルゲンファーラー Bergenfahrer）であった。14 世紀のベルゲンからリューベックへの輸入品は，およそ 9 割がタラであり，その他の商品（サケ，タラの肝油，皮革，バターなど）は少なかったという。一方，リューベックからベルゲンへの輸出品は，ライ麦粉と小麦粉が中心で，その他にビールの原料となる麦芽とホップ，塩と亜麻織物などがあった。リューベックとベルゲンの通商関係は南北貿易という構図で把握されることが多いが，ベルゲンが北海とバルト海とを結ぶ東西交易の中継拠点としての機能も有していたことが分かっている。14 世紀になるとリューベックのベルゲンファーラーは，北ドイツのリューベック―ノルウェーのベルゲン―イングランド東岸のボストン（Boston）との間で一種の三角交易を展開しており，リューベックからベルゲンに穀粉を輸出し，ベルゲンからボストンにタラをもたらし，ボストンからリューベックにイングランド産の毛織物を輸入するという交易を行なっていた。そのため，リューベックのベルゲンファーラーは，イングランドファーラーとしても活動していたということになる。その後，15 世紀になるとノルウェーにおけるリューベック商業は衰退していった。その原因として，オランダ商人のベルゲン進出や安価なアイスランド産のタラがヨーロッパ市場で流通するようになったことがあげられる。

中世のベルゲン商業に関する研究は主にノルウェーとドイツの研究者によって進められてきたが，本章ではノルウェー語の文献を利用することができなかったため，以下ではノルウェーの研究者である Helle と Nedkvitne がドイツ語と英語で執筆した研究動向紹介に基づいて研究史を整理しておきたい[2]。19 世紀末から 20 世紀前半までノルウェーの研究者は，ベルゲンで干ダラ交易が盛んであったということ，当初はイングランドが重要な交易相手であったが，13 世紀後半になるとハンザ商人がベルゲンに進出すること，そして，その結果，ノルウェーがハンザ商人によってもたらされたバルト海産穀物に依存するようになり，ノルウェー経済がハンザに従属してしまったこと，を主張していた。一方，ハンザのベルゲン商館においてリューベックが主導的な役割を演じていたこと，そして，リューベック―ベルゲン間でバルト海産穀物とノルウェー産の干ダラが交換されていたことを

---

[1] 以下のハンザによるノルウェー商業に関する説明は次を参照した。ドランジェ 2016, 255-257 頁。

[2] Helle 1980; Nedkvitne 1994, pp. 14-22.

明らかにしたのが，1900 年にリューベック市立文書館に所蔵されているベルゲンファーラー関連史料を刊行したドイツの Bruns である[3]。ノルウェーの研究者もドイツの研究者も，中世のハンザ，特にリューベックが，ノルウェーへの穀物輸出を通じて経済的な影響力を有していたという点で見解は一致していたようだ。このような研究動向が変化したのは，20 世紀後半になってからである。まず，1966 年にスウェーデンの Weibull が，14 世紀末リューベックのポンド税台帳から集計した数値を利用して，リューベックにとってベルゲン交易の取引規模がデンマークやスウェーデンよりも少なかったと結論付けた[4]。また，1967 年にノルウェーの研究者 Lunden が，ベルゲンのリューベック向け干ダラ輸出とリューベックからベルゲンへの穀物輸入の経済的意義を従来よりも下方修正した。Lunden は，ベルゲンからリューベックに輸出された干ダラは高価なため，少数（800 人から 900 人程度）の富裕層向けの商品だったとみなし，リューベックからベルゲンに輸出された穀物は，せいぜい 5,000 人から 7,000 人分の量であり，ノルウェー全体の穀物需要を満たすことはできない数量であったと主張した[5]。これにより，ベルゲンの干ダラ交易とリューベック商業におけるベルゲンの位置付けが従来よりも低く評価されるようになった。それに対して Nedkvitne は，干ダラがハンザだけではなく，イングランドやフランドルなどの北海沿岸地方にも輸出されていたこと，特に 14 世紀イングランドの関税史料によるとリューベックよりもイングランド（特に東部のボストンなど）の方が干ダラ輸出市場として重要だったことを明らかにすると同時に，リューベック―ベルゲン―ボストン間の三角交易についても言及している。彼の見解では，リューベックにとってベルゲン商業はそれほど重要ではなかったが，ベルゲンの干ダラ交易は従来想定されていたよりも広範囲の地域でおこなわれていたことになる[6]。

このように，リューベック―ベルゲン商業については多くの研究成果が発表されており，本論文で分析している 1369 年リューベックのポンド税台帳についても，Bruns, Weibull, Nedkvitne らによってベルゲン商業に関係する数量データとしてすでに利用されてきた。しかし，本章では，改めてポンド税台帳のデータを独自に集計して分析する。というのも，同じ史料を利用してリューベック―ベルゲン商業の取引額を集計しているにもかかわらず，後述する Weibull と Nedkvitne がそれぞれ引用している数値には，若干の異同が存在するからである。

---

[3] Bruns 1900. この著書の中で Bruns は，14 世紀後半リューベックのポンド税台帳に記載されているベルゲン交易に関するデータを抜粋して刊行しており，その数値がその後の研究で利用されるようになった。日本では高村 1980，68-106 頁が，Bruns の研究成果を紹介している。なお，ベルゲンファーラーとベルゲン交易に関する最新の研究として，ドイツの Burkhardt による一連の研究がある。Burkhardt 2009; Burkhardt 2010; Burkhardt 2012; Burkhardt 2013.

[4] 本章では翌年出版されたドイツ語版を利用している。Weibull 1967, S. 76-77.

[5] Helle 1980, S. 25-27.

[6] Helle 1980, S. 28-34. なお 1983 年にノルウェー語で発表された Nedkvitne の博士論文が，2014 年に英訳・改訂出版されており，本章でもこちらを参照した。Nedkvitne 2014.

ベルゲンではポンド税は徴収されておらず，そのために，リューベック―ベルゲン商業については，リューベックでポンド税が徴収され，その徴税記録がリューベックのポンド税台帳に記帳されていた。ただ，取引されていた商品の種類について継続的かつ詳細に記入されているのは 1368 年から 1371 年のポンド税台帳のみであり，ベルゲン交易の具体的な取引について知ることができる唯一の史料ということになる。ただ，本章で検討する 1369 年のデータはかなり不完全なものである。というのも，1368 年にデンマークとの戦争が始まってから，デンマークの同盟国であったノルウェーとの通商が禁止されてしまったからである。ノルウェーとの戦闘は 1369 年 8 月 3 日に一時休戦となり，ベルゲンとの交易が再開されたのは 1369 年 11 月 11 日のことであった[7]。その結果，本論文で検討する 1369 年については，ベルゲンからの輸入に関しては 1369 年 12 月 25 日から 1370 年 4 月 13 日までの期間，リューベックからの輸出に関しては 1369 年 10 月 4 日から 12 月 24 日までの期間以降にならないと，情報が残されていない。そのせいなのか，Weibull は 1369 年の数値を 1370 年に集約してしまっている。そこで，本章では，1369 年の数値を別個に集計・計算して分析する。

1．貿易構造

14 世紀後半のリューベック―ベルゲン商業の構造については，すでに Weibull や Nedkvitne によってリューベックのポンド税台帳から集計された輸出入額が示されている（表 10-1 および表 10-2 参照）。各年度の始期や終期をいつにするのか，あるいは，不完全な記録の復元方法などの違いにより，両者には年度によって輸出入額の数値にかなりの相

表10-1：リューベックーベルゲン商業
（1370年～1399年）

単位：リューベック・マルク

年度	輸出	輸入	合計
1370年	11,058.5	10,586.0	21,644.5
1378年	6,881.0	18,055.5	24,936.5
1379年	7,564.0	17,629.0	25,193.0
1381年	9,369.0	19,072.0	28,441.0
1384年	8,017.0	21,156.0	29,173.0
1385年	9,532.0	11,344.0	20,876.0
1398年	5,547.0	15,404.0	20,951.0
1399年	8,608.0	16,655.0	25,263.0
平均	8,322.1	16,237.7	24,559.8

注：1370年には1369年11月以降の数値も含む。
出典：Weibull 1967, S. 76より作成。

表10-2：リューベックーベルゲン商業
（1368年～1399年）

単位：リューベック・マルク

年度	輸出	輸入	合計
1368年	0.0	4,362.0	4,362.0
1369年	5,937.0	0.0	5,937.0
1370年	8,004.0	12,680.0	20,684.0
1378年	6,881.0	18,056.0	24,937.0
1379年	7,852.0	17,714.0	25,566.0
1381年	9,330.0	18,821.0	28,151.0
1383年	5,795.0	7,841.0	13,636.0
1384年	8,012.0	20,497.0	28,509.0
1385年	9,532.0	11,346.0	20,878.0
1398年	5,600.0	15,167.0	20,767.0
1399年	10,231.0	0.0	10,231.0
平均	7,015.8	11,498.5	21,484.3

出典：Nedkvitne 2014, p. 113, Table II.6, p. 114, Table II.7より作成。

[7] Nedkvitne 2014, pp. 655, 657.

違がある。しかし，輸出入の大まかな傾向は明白であり，ベルゲンからリューベックへの輸入が輸出を上回っていたようだ。ただ，Weibull が指摘しているように，他の都市からリューベックに輸入された商品は，所有者が変わらない限り，リューベックからの輸出時にポンド税が課税されないため，ベルゲンへの輸出額の数値は不完全だった可能性があることに留意する必要がある[8]。

なお，ポンド税台帳から 1369 年の輸出入額を取引時期ごとに算出したのが表 10-3 である。本論文では，1369 年にポンド税が徴収されていた会計年度を 1369 年 3 月 11 日から 1370 年 4 月 13 日までとしているため，Nedkvitne が表 10-2 で示した数値とは異なり，輸出が 8,522 マルク，輸入が 4,879 マルクとなっている。上述のように，1369 年は戦時であり，輸入が 12 月 25 日以降の時期しか記録されていないため，貿易収支については不完全な数値である。一方，輸出については，ノルウェーとの貿易が正式に再開された 11 月 11 日以前にも取引がされていたようだ。いずれにせよ，すべての期間の取引が記録されているわけではないため，1369 年のポンド税台帳から取引時期について通常の状況は判明しない。

表10-3：リューベックーベルゲン商業の取引時期（1369年）

単位：リューベック・マルク

	1369年7月13日-1369年10月2日	1369年10月3日-1369年12月24日	1369年12月25日-1370年4月13日	合計
輸出	339.0000	4,352.0000	3,831.0000	8,522.0000
輸入	0.0000	0.0000	4,879.0000	4,879.0000
合計	339.0000	4,352.0000	8,710.0000	13,401.0000
割合	2.5%	32.5%	65.0%	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 341v, 408r-410r, 456v-460r.

2．商品

次にリューベック―ベルゲン間で取引されていた商品について確認する。上述のように，1369 年のポンド税台帳には輸入記録が少ないという欠点があるが，輸入記録が詳細な 1370 年のポンド税台帳と比較すると，輸入商品の比率に大きな違いはない[9]。ベルゲンからリューベックに輸入されていた商品についてまとめたのが表 10-4 である。この表によると，先行研究でも示されている通り，魚が輸入額の 75.3 パーセントを占めており，それ以外に商品名が判明するのは毛織物（輸入額の 4.3 パーセント）だけである。この魚とは，先行研究によれば，ノルウェーの特産品である干ダラと見なされている[10]。ベルゲンよりも北方のノルウェー海沿岸，特にロフォーテン諸島で漁獲されたタラが干し魚に加工され，それがベルゲンを経由してヨーロッパ各地に輸出されており，その一部がリューベックに

[8] Weibull 1967, S. 62.

[9] Bruns 1900, S. XXXV.

[10] Bruns 1900, S. LXX-LXXX.

輸入されていた。もう一つの輸入品である毛織物については，ベルゲンと通商関係があったイングランド東部の港から輸入されたイングランド産の毛織物だったと推測される。先行研究で明らかにされている通り，リューベックのベルゲンファーラーは，ベルゲンとだけ取引していたのではなく，ベルゲンからイングランド東部の諸港を訪れ，ベルゲン―イングランド間の通商取引にも従事していたことが分かっている[11]。この毛織物もベルゲンを経由してイングランドとリューベックを結ぶ三角交易によってもたらされた商品であったのだろう。

表10-4：ベルゲンからの輸入（1369年）

単位：リューベック・マルク

商品	金額	割合
魚	3,671.5	75.3%
各種商品	924.0	18.9%
毛織物	210.0	4.3%
現金	73.5	1.5%
合計	4,879.0	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 456v-457v.

表10-5：ベルゲンへの輸出（1369年）

単位：リューベック・マルク

商品	金額	割合
穀粉	4,535.5	53.2%
各種商品	1,560.5	18.3%
不明（83ラスト）	1,274.0	14.9%
毛織物	380.0	4.5%
その他	210.0	2.5%
現金	146.5	1.7%
麦芽	95.0	1.1%
亜麻織物	94.0	1.1%
大麦	90.0	1.1%
ライ麦	45.5	0.5%
鍋	28.0	0.3%
ホップ	27.0	0.3%
塩	18.0	0.2%
亜麻	18.0	0.2%
合計	8,522.0	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 341v, 408r-410r, 458r-460r.

次にリューベックからベルゲンへ輸出されていた商品について確認しよう（表 10-5）。ここでも先行研究で説明されているのと同じように，穀粉が主要な輸出品となっており，輸出額の 53.2 パーセントを占めていた。穀粉以外の穀物類（麦芽，大麦，ライ麦）の輸出額を合計すると，合計 4,766 マルク，輸出額に占める割合は 55.9 パーセントに達していた。穀物輸出の重要性が，この数値から判明するだろう。「はじめに」で述べたように，Lunden はリューベックの穀物輸出が中世のノルウェー経済に与える影響について批判したが[12]，少なくとも，商業都市ベルゲンへの穀物供給に対するリューベックの影響は大きかったに違いないだろう。その他の商品としては，毛織物や亜麻織物といった繊維製品が輸出されていたが，輸入品として登場した毛織物が輸出品としても登場しているのが特徴的である。リューベックから輸出された毛織物は西方のネーデルラント産の可能性が高く，

[11] Helle 1980, S. 28-34.

[12] Helle 1980, S. 25-27.

イングランド産とネーデルラント産の毛織物がベルゲンとリューベックを経由して相互に流通していた様子がうかがえる。

3．商人

リューベック－ベルゲン商業に従事していた商人を取引額毎に集計したのが表 10-6 である。人数的には 100 マルク以下の中小商人が多数派であったが（149 人中 108 人），取引額的には 101 マルク以上の大商人（41 人）が 66.7 パーセントを占めていた。リューベックのベルゲン商業で大商人が優勢であったという点は，14 世紀末のベルゲン商業を分析した Weibull も指摘していることであり[13]，1369 年の事例でもそれが確認されたことになる。

表10-6：ベルゲン商業に従事した商人の人数と取引額（1369年）

取引額（マルク）	商人数	合計（マルク）	割合
1-50	75	1,995.5	14.9%
51-100	33	2,468.5	18.4%
101-150	18	2,166.0	16.2%
151-200	10	1,762.5	13.2%
201-250	3	671.0	5.0%
251-300	4	1,105.5	8.2%
333.5	1	333.5	2.5%
362	1	362.0	2.7%
434.5	1	434.5	3.2%
635	1	635.0	4.7%
642	1	642.0	4.8%
825	1	825.0	6.2%
合計	149	13,401.0	100%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 341v, 408r-410r, 456v-460r.

大商人の内，特に取引額が 301 マルク以上となっている上位 6 人の取引額の合計は 3,232 マルクに達しており，総取引額の 24.1 パーセントを占めていた。ベルゲン商業に対する大商人の影響力が大きかったことが分かる。この 6 人の主要商人の取引内容を集計したのが表 10-7 である。Sluter を除いた全員が輸出と輸入の両方の取引に携わっており，彼らが取引していた商品はリューベック－ベルゲン商業の特徴である魚（輸入品）と穀粉（輸出品）であったことが，この表から見て取れる。

[13] Weibull 1967, S. 79-80.

表10-7：リューベックーノルウェー商業に従事した主な商人（1369年）

商人	取引額（マルク）	取引件数	取引内容（商品名，数量，金額）	出典
Osenbrugghe, Herman	825.0000	2	各種商品735マルクを輸入，5ラスト（商品名不明）90マルクを輸出	AHL, PZB 1368-1371, fol. 456v, 457r, 458r, 458v.
Pael, Evart	642.0000	10	穀粉259マルク，12ラスト（商品名不明）126マルク，各種商品67マルクを輸出，魚190マルクを輸入	AHL, PZB 1368-1371, fol. 408r, 409v, 410r, 457r, 458r, 458v, 459r, 459v.
Sluter, Lambrecht	635.0000	8	各種商品442マルク，穀粉147マルク，その他46マルクを輸出	AHL, PZB 1368-1371, fol. 408r, 408v, 410r, 458v, 459r.
Staden, Johannes de	434.5000	10	穀粉294.5マルク，その他46マルクを輸出，魚94マルクを輸入	AHL, PZB 1368-1371, fol. 408v, 409v, 410r, 456v, 457r, 458r, 459v.
Staden, Herder de	362.0000	4	魚265マルクを輸入，穀粉55マルク，2ラスト（商品名不明）42マルクを輸出	AHL, PZB 1368-1371, fol. 409v, 456v, 457r, 458v.
Hamme, Meneke de	333.5000	8	穀粉116.5マルク，各種商品65マルク，現金40マルクを輸出，魚112マルクを輸入	AHL, PZB 1368-1371, fol. 408r, 410r, 456v, 458r, 459r, 460r.

4．船舶

リューベック―ベルゲン海運で利用されていた船舶の価額と隻数を集計したのが表 10-8 である。この表によると，船舶価額が判明する 26 隻の内，101 マルク以上 200 マルク以下の中型船が 14 隻（全体の 53.8 パーセント）を占めており，201 マルク以上の大型船も含めると 21 隻（84.6 パーセント）に達していたことが分かる。14 世紀末のベルゲン海運に従事していた船舶も比較的大型の船舶が多かったことが先行研究で明らかにされている

表10-8：リューベック－ベルゲン海運の船舶価額と船舶数（1369年）

船舶価額(マルク)	船舶数	割合
1-18	1	3.8%
19-36	1	3.8%
37-54	1	3.8%
55-100	1	3.8%
101-200	14	53.8%
201-300	5	19.2%
301-400	2	7.7%
600	1	3.8%
合計	26	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371, fol. 341v, 408r-410r, 456v-460r.

が[14]，1369 年の時点でも同じ傾向がみられることが確認できた。フランドルとの海運でもそうであったが，バルト海と北海という二つの異なる海域を行き来し，航海する距離も長いリューベック―ベルゲン海運では，他の地域よりも比較的大型の船が使用されていたようである。

おわりに

本章では，リューベックとノルウェーとの商業関係について，ポンド税台帳に唯一記録されているベルゲンに関して検討した。このことから分かるように，リューベックのノルウェー商業の構造上の特徴は，ベルゲンに集中していたという点である。ベルゲン商業については，先行研究ですでに詳細な史料分析がおこなわれているため，本章ではその研究成果に依拠しつつ，ポンド税台帳のデータについては独自に集計・分析をおこなった。リューベック―ベルゲン商業の貿易構造については，先行研究で紹介されている 1370 年から 1399 年までの輸出入額によると，リューベックの輸入超過だったようだ。取引時期については，輸入の記録が不完全にしか記載されていないため，正確な状況は不明である。

1369 年のポンド税台帳によると，ベルゲンから輸入されていた商品としては魚が圧倒的に多いが，この魚とはベルゲンの特産品である干ダラであることが先行研究によって明らかにされている。その他の輸入品については毛織物しか記録されていないが，この毛織物はベルゲンと通商関係があったイングランド産の毛織物であったと推測される。リューベックからベルゲンへの輸出品については，穀粉だけで 53.2 パーセント，その他の穀物（麦芽，大麦，ライ麦）も含めると穀物の輸出額は 55.9 パーセントに達していた。また，ベルゲンからの輸入品として登場した毛織物が，輸出品にも登場しているのが特徴的である。その他には亜麻織物などが輸出されていた。

商人については，人数的には 100 マルク以下の中小商人（108 人）が上回っており，取引額的には 101 マルク以上の大商人（41 人）が 66.7 パーセントを占めていた。特に取引額 301 マルク以上の大商人は，たった 6 人で総取引額の 24.1 パーセントを占めており，ベルゲン商業に占める大商人の役割が大きかったことを示している。

船舶については，船舶価額 101 マルク以上 200 マルク以下の中型船が 53.8 パーセントを占めており，201 マルク以上の大型船も含めると 84.6 パーセントに達していた。このことから，リューベック―ベルゲン海運では他の地域よりも大型の船が使用されていたことが判明した。

---

[14] Weibull 1967, S. 56-59.

第 4 部　14 世紀後半のリューベック商業
第 11 章　14 世紀後半リューベックの商業構造

はじめに

本章では，第 1 部から第 3 部の取引相手地域ごとの分析結果に基づきながら，14 世紀後半のリューベック商業の全体像について，貿易構造，商品流通，取引に従事した商人と船舶の観点から検討する。同じような観点から中世リューベック商業について分析しているのが，1368 年リューベックのポンド税台帳および領収書を刊行した Lechner である。彼は，1368 年リューベックのポンド税台帳および領収書の記載内容を取引相手地ごと，さらに船舶 1 隻ごとに集計して船長の名前，船舶価額と船長が支払ったポンド税額，その船に積荷を載せていた商人の名前，商品，商品価格，記録されていれば商品の数量，商人が支払ったポンド税額といった情報を整理して編纂した。そして，彼は，自らが刊行したポンド税台帳および領収書の解説の中で 1368 年リューベック商業の全体像を提示している[1]。彼が明らかにした中世リューベックの貿易構造は，ドランジェのハンザ史概説をはじめとして，日本の西洋商業史やハンザ史の文献でも引用され，ハンザ商業の典型的な事例として紹介されてきた[2]。ただし，「序論」でも述べたように，1368 年は戦時であったため，このポンド税台帳や領収書から判明する数値は，平時のリューベック商業の数値とは言えないのではないかという疑義が呈されることもある。そこで，本章では，戦争の影響が 1368 年よりも少なかったと考えられる 1369 年リューベックのポンド税台帳および領収書を分析することにより，14 世紀後半のリューベック商業の全体像について検討する。

1．貿易構造―取引相手地域と都市

これまで検討してきたリューベックのポンド税台帳および領収書のデータを地域ごとにまとめたのが表 11-1 であり，それをさらに取引相手都市（一部は都市ではなく地方や島だが）別に集計したのが表 11-2 である。これらの表から，最初に 1369 年リューベックの貿易構造について確認したい。

表 11-1 に示されているリューベックの取引相手地域を，西方（ネーデルラント地方，オルデスローとハンブルク），東方（メクレンブルク地方，ポメルン地方，プロイセン地方，リーフラント地方），北方（スウェーデン王国，デンマーク王国，ホルシュタイン東部＝フェーマルン島，ノルウェー王国）の 3 つの地域に分けると，1369 年のポンド税台帳および領収書から判明する取引額の割合は，西方が 101,066 マルク（1 マルク未満は切り捨て，以下同じ）で 21.4 パーセント，東方が 192,256 マルクで 40.7 パーセント，北方が 179,090

[1] Lechner 1935, S. 46-73.

[2] Dollinger 2012, S. 576-577; 伊藤 1971，111 頁；高橋 2013，117-120 頁；谷澤 2011，78-79 頁。

マルクで 37.9 パーセントとなる。一見，西方との通商関係が一番少なかった印象を与えるが，1368 年と比較すると 1369 年は西方からの輸入額が不完全にしか記録されていなかった。Lechner の集計値によると，1368 年はオルデスローから 136,280 マルク，ハンブルクから 9,247 マルク，計 145,527 マルクの輸入が記録されていた[3]。仮に 1369 年も 1368 年と同規模の輸入が記録されていれば，リューベックの西方・東方・北方という 3 地域との貿易額はほぼ同じ規模になっていただろう。また，南方のドイツ内陸部との通商関係については，ポンド税台帳や領収書には直接的な取引の記録は残されていない。けれども，後出の商品流通を扱う節で確認するように，大量の塩や亜麻織物といった北ドイツ内陸地方の特産品がリューベックから輸出されていることを考えると，14 世紀後半のリューベックが東西交易だけではなく，南北方向でも活発な商業活動を展開していたと言えるだろう。

表11-1：1369年リューベックの貿易構造（地域別）

単位：リューベック・マルク

地域	地名	輸入	輸出	不明	合計	割合
西方	ネーデルラント	7,697.0000	11,340.0000	0.0000	19,037.0000	4.0%
	ハンブルク・オルデスロー	40,881.8958	41,147.5000	0.0000	82,029.3958	17.4%
東方	メクレンブルク	5,417.5000	15,400.7500	0.0000	20,818.2500	4.4%
	ポメルン	7,854.5000	20,047.5000	0.0000	27,902.0000	5.9%
	プロイセン	29,168.7250	26,745.9895	0.0000	55,914.7145	11.8%
	リーフラント	34,010.8125	53,611.0000	0.0000	87,621.8125	18.5%
北方	デンマーク	44,414.7500	56,965.0000	0.0000	101,379.7500	21.5%
	ホルシュタイン東部	4,269.5000	3,811.7500	1,755.0000	9,836.2500	2.1%
	スウェーデン	30,820.1000	23,653.8125	0.0000	54,473.9125	11.5%
	ノルウェー	4,879.0000	8,522.0000	0.0000	13,401.0000	2.8%
不明	不明	0.0000	32.0000	0.0000	32.0000	0.01%
合計		209,413.7833	261,277.3020	1,755.0000	472,446.0853	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371; AHL, PQ; Nirrnheim 1910, Beilage II, 76-88, 91-128, 131, 152, 168, 202, 205, 209-211, 225-239, 241, 246-258, 260-273, 280-281, 283-284; Stieda 1887, I 20-68, 121-128.

次に，本論文の第 1 部から第 3 部で分析した 10 の取引相手地域を取引額に基づいて確認すると（表 11-1 参照），1369 年リューベックの総取引額 472,446 マルクの内，101,379 マルクを占めていたデンマーク（スコーネ地方）が首位だった（取引額に占める割合は 21.5 パーセント）。14 世紀末のリューベック商業にとってスコーネ地方が重要だったということは，先行研究によってすでに指摘されているが[4]，本論文でもそれが確認できたことになる。デンマークの次は，取引額 87,621 マルクのリーフラント（18.5 パーセント），82,029 マルクのハンブルク（オルデスローも含む，17.4 パーセント），55,914 マルクのプロイセン（11.8 パーセント），54,473 マルクのスウェーデン（11.5 パーセント）と続いており，5 万マルク以上を記録した上位 5 地域の取引額の合計は 381,419 マルクに達し，全体の 80.7 パーセントを占めていた。北方のデンマークとスウェーデン，東方のリーフラントとプロイセン，西方のハンブルクが，1369 年のリューベックにとって主要な市場圏だったことになる。

[3] Lechner 1935, S. 408-409 の数値を 1 マルク未満は切り捨てて集計。

[4] Weibull 1967, S. 69-70, 96-97.

続いて，5 万マルク未満の地域を確認すると，27,902 マルクのポメルン（5.9 パーセント），20,818 マルクのメクレンブルク（4.4 パーセント），19,037 マルクのネーデルラント（4.0 パーセント），13,401 マルクのノルウェー（2.8 パーセント），9,836 マルクのホルシュタイン東部（フェーマルン島，2.1 パーセント）となっていた。

表11-2：1369年リューベックの貿易構造（取引相手地別）

単位：リューベック・マルク

地名	輸入	輸出	不明	合計	割合
フランドル地方	5,977.0000	11,340.0000	0.0000	17,317.0000	3.7%
カンペン	1,220.0000	0.0000	0.0000	1,220.0000	0.3%
ドルトレヒト	500.0000	0.0000	0.0000	500.0000	0.1%
オルデスロー	685.0000	41,147.5000	0.0000	41,832.5000	8.9%
ハンブルク	40,196.8958	0.0000	0.0000	40,196.8958	8.5%
ヴィスマル	4,970.5000	10,083.7500	0.0000	15,054.2500	3.2%
ロストク	447.0000	5,317.0000	0.0000	5,764.0000	1.2%
シュテティーン	3,637.0000	13,432.7500	0.0000	17,069.7500	3.6%
シュトラールズント	1,087.0000	6,614.7500	0.0000	7,701.7500	1.6%
シュタールガルト	2,671.5000	0.0000	0.0000	2,671.5000	0.6%
グライフスヴァルト	459.0000	0.0000	0.0000	459.0000	0.1%
ダンツィヒ	17,596.5000	18,050.4895	0.0000	35,646.9895	7.5%
エルビング	8,277.4750	8,695.5000	0.0000	16,972.9750	3.6%
ケーニヒスベルク	3,113.2500	0.0000	0.0000	3,113.2500	0.7%
ブラウンスベルク	181.5000	0.0000	0.0000	181.5000	0.04%
リーガ	25,697.7500	23,935.0000	0.0000	49,632.7500	10.5%
レーヴァル	6,331.9375	15,757.5000	0.0000	22,089.4375	4.7%
ペルナウ	1,433.2500	13,918.5000	0.0000	15,351.7500	3.2%
ヴィンダウ	547.8750	0.0000	0.0000	547.8750	0.1%
スコーネ地方	1,550.5000	54,913.5000	0.0000	56,464.0000	12.0%
ファルステルボー	33,460.0000	0.0000	0.0000	33,460.0000	7.1%
スカネール	8,069.7500	0.0000	0.0000	8,069.7500	1.7%
マルメー	1,334.5000	2,051.5000	0.0000	3,386.0000	0.7%
フェーマルン島	4,269.5000	3,811.7500	1,755.0000	9,836.2500	2.1%
ストックホルム	13,818.6000	8,290.5000	0.0000	22,109.1000	4.7%
ゴットランド島	5,388.0000	7,897.5000	0.0000	13,285.5000	2.8%
スーデルシェーピング	6,229.0000	4,324.5000	0.0000	10,553.5000	2.2%
カルマル	5,384.5000	3,141.3125	0.0000	8,525.8125	1.8%
ベルゲン	4,879.0000	8,522.0000	0.0000	13,401.0000	2.8%
不明	0.0000	32.0000	0.0000	32.0000	0.01%
合計	209,413.7833	261,277.3020	1,755.0000	472,446.0853	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371; AHL, PQ; Nirrnheim 1910, Beilage II, 76-88, 91-128, 131, 152, 168, 202, 205, 209-211, 225-239, 241, 246-258, 260-273, 280-281, 283-284; Stieda 1887, I 20-68, 121-128.

取引相手地域の次に，表 11-2 にあげられた 29 の取引相手都市（一部は地方や島）を取引額順に確認すると，ここでも首位は取引額 56,464 マルクのスコーネ地方（12.0 パーセ

ント）となっていた[5]。スコーネ地方のニシン取引が 14 世紀後半のリューベック商業にとっていかに重要だったかということを，この数値が改めて示していると言える。取引額 2 万マルク以上を記録している都市としては，49,632 マルクのリーガ（10.5 パーセント），41,832 マルクのオルデスロー（8.9 パーセント）と 40,196 マルクのハンブルク（8.5 パーセント），35,646 マルクのダンツィヒ（7.5 パーセント），33,460 マルクのファルステルボー（7.1 パーセント），22,109 マルクのストックホルムと 22,089 マルクのレーヴァル（ともに 4.7 パーセント）があった。リューベック商業にとって，これら 1 地方と 7 都市の取引額に占める割合は 63.8 パーセントに達しており，当時のリューベックにとって最も重要な取引相手地だったことが判明する。その分布は，北方のスコーネ地方およびファルステルボー（共にデンマーク）とストックホルム（スウェーデン），西方のオルデスローとハンブルク，東方のリーガおよびレーヴァル（リーフラント）とダンツィヒ（プロイセン）へと広がっており，特定の地域に偏在していたわけではなかった。そして，スコーネ地方を除いたこれらの都市は，上述の取引額上位 5 地域の中心的な都市でもあった。つまり，デンマークとの交易ではファルステルボーが，スウェーデンとの交易ではストックホルムが，リーフラント（および後背地のロシア）との交易ではリーガとレーヴァルが，プロイセンとの交易ではダンツィヒが，それぞれの地域の中心的な市場であった。

続いて，取引額 1 万マルク以上の都市を確認すると（取引額と割合は省略），フランドル地方，シュテティーン，エルビング，ペルナウ，ヴィスマル，ベルゲン，ゴットランド島，スーデルシェーピングの 1 地方，1 島，6 都市があり，取引額を合計すると 119,005 マルク（25.2 パーセント）を占めていた。地理的な分布状況をみると，西方のフランドル地方，東方のシュテティーン（ポメルン），エルビング（プロイセン），ペルナウ（リーフラント），ヴィスマル（メクレンブルク），北方のベルゲン（ノルウェー），ゴットランド島およびスーデルシェーピング（スウェーデン）となっており，ここでも特定地域への偏重は確認できない。また，ポメルン地方のシュテティーン，メクレンブルク地方のヴィスマル，ノルウェー王国のベルゲンのように，その地域の中心的な都市もあれば，エルビング，ペルナウ，ゴットランド島やスーデルシェーピングのように，中心的な都市に次ぐ規模の都市もあった。

以上で紹介した 1369 年のポンド税台帳および領収書から判明するリューベックの主要な取引相手地域を，Lechner が示している 1368 年の事例と比較してみると，188,000 マルクの西方（オルデスロー，ハンブルク，ブルッヘ，カンペン，フランドル地方）を筆頭に，94,700 マルクのリーフラント，82,000 マルクのデンマーク（スコーネ地方），81,400 マルクのスウェーデン，48,400 マルクのプロイセン，42,300 マルクのメクレンブルク・ポメルン，4,300 マルクのノルウェーという序列となっていた。Lechner の解釈によると，リューベックのバルト海内交易にとって特に重要だったのは，一方では，リューベックにとって遠距離交易の相手地域であったリーフラントとスウェーデンであり，そして，他方では，近郊でニシン交易が営まれていたスコーネ地方であったという[6]。1369 年の数値と比較す

---

[5] 「スコーネ地方」という項目に含まれているのはファルステルボーとスカノールの 2 都市だと想定される。第 7 章参照。

[6] Lechner 1935, S. 48-51, Diagramm I; 谷澤 2011，78-79 頁も参照。

ると序列は異なるが，西方，リーフラント，デンマークという上位 3 地域は同じ地域となっており，14 世紀後半のリューベックにとって最も重要な市場圏であったことになる。

このように，取引額上位の取引相手地域や都市を確認してみると，リューベックの商業圏がどこか特定の地域に偏っていたわけではなかったことが判明する。リューベックにとって西方のネーデルラント方面との窓口となっていたオルデスローやハンブルク，東方のロシアやポーランドと取引する上での通過拠点であったリーガやレーヴァルとダンツィヒ，北方のニシン取引の拠点であったスコーネ地方とファルステルボー，そして，スウェーデン貿易の中心地であるストックホルムなど，リューベックの商業ネットワークが北海・バルト海地域に広がっていた様子が読み取れるのである。

２．14 世紀後半リューベックの主要商品

1369 年リューベックのポンド税台帳および領収書に記載されている商品のうち，全体の取引額に占める割合が 0.1 パーセント以上の商品を列挙したのが表 11-3 である。なお，表 11-3 の「商品」の項目には，史料上で商品名が特定できない事例がいくつか存在する。例えば，取引額 2 位（合計 75,693 マルク，輸出入額に占める割合 16.0 パーセント，以下同じ）の「各種商品」とは，diversa や bona などのように具体的な商品名が史料上であげられていない項目を集計してある[7]。4 位（48,294 マルク，10.2 パーセント）の「複数商品」とは，「毛織物と塩」のように，複数の商品が一括して登記され，それぞれの取引額が特定できない項目を集計している。7 位（16,564 マルク，3.5 パーセント）の「現金」とは，史料で denarius, marca, prompta, prompta marca, prompta pecunia, promta pecunia と表記されている項目である[8]。10 位（12,399 マルク，2.6 パーセント）の「樽」は，史料中の droghe tonne, lagena, traventunna, tunna, tunna bereven, tunna sicca, tunna vacua, vas が集計されている。樽自体が商品として取引されることもあるが，樽としては評価額が高い事例もあり，樽の中に何らかの商品が梱包されていると考えられるが，中身は全く不明である。17 位（5,971 マルク，1.3 パーセント）の「不明」とは，輸出入額の記載はあるが，商品名が解読不明だったり，特定できなかったり，記入されていなかったものである。このように商品名が特定できない項目の取引額を合計すると，全体に占める割合が 33.5 パーセントに達する。つまり，総取引額の約 3 分の 1 については，商品名が特定できないことになる。しかし，Lechner が述べているように，特定の商品だけが商品名不明になるとは想定しにくいため，実際に取引されていた商品のおおよその構造をポンド税台帳および領

---

[7] diversa, bona 以外に「各種商品」として集計したのは，次の項目である。alia bona, alia mercemonia, bona diversa, coepschat, diversa bona, diversa bona sua, diversa mercemonia, diversa res, ghud, mercimonium, merx diversa, omnes, sua, sua bona, sua merx.

[8] ポンド税の徴収に当たっては，商品だけでなく，現金も課税対象となっていた。ポンド税の徴収規定については，次を参照。Weibull 1967, S. 12-13; Lechner 1935, S. 17-21.

表11-3：1369年リューベックの主要商品

単位：リューベック・マルク

商品	輸入	輸出	不明	合計	割合
塩	0.0000	76,355.7395	0.0000	76,355.7395	16.2%
各種商品	37,168.2500	37,842.5000	682.5000	75,693.2500	16.0%
毛織物	26,738.1458	33,463.0000	0.0000	60,201.1458	12.7%
複数商品	26,610.7500	21,640.3125	43.0000	48,294.0625	10.2%
ニシン	43,500.2500	3,246.0000	0.0000	46,746.2500	9.9%
蜜ロウ	1,024.5000	16,270.5000	0.0000	17,295.0000	3.7%
現金	3,679.3750	12,215.5000	663.5000	16,558.3750	3.5%
大麦	12,378.4750	2,151.5000	0.0000	14,529.9750	3.1%
バター	7,120.1875	5,899.0000	0.0000	13,019.1875	2.8%
樽	4,189.0000	8,210.0000	0.0000	12,399.0000	2.6%
ライ麦	5,904.5000	3,978.2500	0.0000	9,882.7500	2.1%
魚	8,025.5000	1,151.0000	0.0000	9,176.5000	1.9%
皮革・毛皮	3,444.1250	5,700.5000	0.0000	9,144.6250	1.9%
鉄	4,322.1000	3,444.2500	0.0000	7,766.3500	1.6%
穀粉	297.2500	6,134.5000	0.0000	6,431.7500	1.4%
不明	4,014.3750	1,891.0000	66.0000	5,971.3750	1.3%
ビール	4,402.0000	204.0000	0.0000	4,606.0000	1.0%
銅	1,361.5000	2,909.0000	0.0000	4,270.5000	0.9%
ワイン	2,198.0000	1,823.2500	0.0000	4,021.2500	0.9%
油	2,628.5000	1,187.5000	0.0000	3,816.0000	0.8%
穀物	3,330.0000	369.0000	0.0000	3,699.0000	0.8%
亜麻織物	0.0000	3,676.0000	0.0000	3,676.0000	0.8%
ベーコン	70.5000	2,661.5000	0.0000	2,732.0000	0.6%
他	1,395.5000	1,021.5000	60.0000	2,477.0000	0.5%
亜麻	433.5000	1,876.0000	0.0000	2,309.5000	0.5%
小麦	1,058.5000	535.5000	0.0000	1,594.0000	0.3%
木材	854.7500	216.5000	240.0000	1,311.2500	0.3%
糸	557.5000	552.0000	0.0000	1,109.5000	0.2%
コメ	346.0000	718.5000	0.0000	1,064.5000	0.2%
交織織物	907.5000	0.0000	0.0000	907.5000	0.2%
鍋・釜	7.5000	795.5000	0.0000	803.0000	0.2%
ホップ	0.0000	788.0000	0.0000	788.0000	0.2%
エン麦	482.2500	215.0000	0.0000	697.2500	0.1%
魚油	111.0000	421.5000	0.0000	532.5000	0.1%
羊毛	119.0000	405.5000	0.0000	524.5000	0.1%
馬	503.5000	0.0000	0.0000	503.5000	0.1%
靴	0.0000	489.0000	0.0000	489.0000	0.1%
獣脂	147.5000	263.0000	0.0000	410.5000	0.1%
肉	82.5000	285.0000	0.0000	367.5000	0.1%
貴金属	0.0000	271.0000	0.0000	271.0000	0.1%
合計	209,413.7833	261,277.3020	1,755.0000	472,446.0853	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371; AHL, PQ; Nirrnheim 1910, Beilage II, 76-88, 91-128, 131, 152, 168, 202, 205, 209-211, 225-239, 241, 246-258, 260-273, 280-281, 283-284; Stieda 1887, I 20-68, 121-128.

収書のデータが示していると考えられる[9]。なお，24 位（2,477 マルク，0.5 パーセント）

[9] Lechner 1935, S. 51-52.

の「その他」の項目には，主要商品としてあげなかった取引額が少ない商品を一括して集計している。これら商品名が特定できない項目については，以下では検討の対象外とする。

以上の点をふまえた上で，表 11-3 から読み取れる 1369 年にリューベックを流通していた商品の全体的な特徴は，特定の商品に取引が集中するのではなく，多種多様な商品が取引されていたという点である。15 世紀に由来すると考えられているハンザ都市の特徴を表現した諺の中で，リューベックは「百貨店 Kaufhaus」とよばれていたが，史料に記録された商品は，それにふさわしい品ぞろえであったと言えよう[10]。

その中でも輸出入額が 4 万マルクを超えていて取引額が特に多かったのが，塩，毛織物，ニシンの 3 商品であった。塩（sal）は，輸出のみの記録であるにもかかわらず，輸出額 76,355 マルクで取引額首位となっている。リューベックの輸出入額に占める割合は 16.2 パーセントであった。取引額 3 位の毛織物は，史料で pannus, pannus Anglicus, pannus Brugensus, pannus pulcher, laken, watmal と記載されている項目の他に，商品名が記載されてなくても毛織物特有の取引単位（terlinghus, frustum, packel, packil）から毛織物と推測されるものも含んでいる。輸出入額は 60,201 マルク（12.7 パーセント）であった。取引額 5 位のニシン（allec, hering(h), haringgen）は，取引額 46,746 マルク（9.9 パーセント）を記録した。以上 3 商品だけで，ポンド税から判明する総取引額のうち 38.8 パーセントを占めていた。この数値を Lechner が集計した 1368 年と比較すると，1368 年は 1 位が毛織物，2 位が塩，3 位がニシンとなっていた[11]。3 つの商品の序列は異なるが，1369 年と同じ商品が上位 3 位を占めていたことになり，塩，毛織物，ニシンが 14 世紀後半リューベックで取引されていた 3 大商品と位置付けられる。なお，1368 年と 1369 年では毛織物と塩の順位が逆転しているが，これは 1368 年 10 月以降になると北海方面からの輸入品はハンブルクで課税されるようになったことが理由であると考えられる[12]。ハンブルクからリューベックへ運ばれた毛織物はすでにハンブルクで課税済のため，リューベックではポンド税が徴収されず，リューベックのポンド税台帳には登記されなくなってしまった。そのため，毛織物の輸入は，ポンド税領収書と何らかの理由で登記されたポンド税台帳の一部の記録からしか判明しない。この点を考慮すると，毛織物取引については 1368 年のポンド税台帳の方が，より実状を反映している可能性が高いと言えるだろう。

次に，輸出入額が 1 万マルクを超えている 3 つの商品を確認しよう。6 位の蜜ロウ（cera, cera pura）は，取引額 17,295 マルク（3.7 パーセント），8 位の大麦（ordeum）は，取引額 14,529 マルク（3.1 パーセント）を占めていた。1369 年のポンド税台帳および領収書の特徴として，穀物の取引内容が記録されている点があげられる。1369 年のポンド税台帳と領収書は，穀物の種類，輸出入先，取引額が記録されている史料としては，中世ハンザ圏で唯一といってよい貴重な記録である。特に 1368 年と比較すると 1369 年は穀物の輸入先に関する情報が豊富なため，リューベックを経由した穀物の流通状況を解明することが可能となっている[13]。9 位のバター（butirum）の取引額は，13,019 マルク（2.8 パーセント）

---

[10] ドランジェ 2016，137 頁。

[11] Lechner 1935, S. 53.

[12] Weibull 1967, S. 15-16.

[13] 1369 年リューベックのポンド税台帳と領収書を利用した穀物貿易に関する研究とし

に達していた。1368 年および 1369 年にスウェーデンからリューベックへのバター輸入が多かったことについては，すでに先行研究で指摘されている点ではあるが，他の年度では確認されない，この時期特有の現象である[14]。既述の上位 6 商品の取引額を合計すると，その割合は全体の 48.3 パーセントに達していた。

さらに，輸出入額 5,000 マルク超の商品を列挙すると，11 位のライ麦（siligo, 取引額 9,882 マルク，2.1 パーセント），12 位の魚（piscis, strumulus, pictilli, 9,176 マルク，1.9 パーセント），13 位の皮革・毛皮（opus, cutis, schimmese など，9,144 マルク，1.9 パーセント），14 位の鉄（ferrum, osemunt/osemund/ozemunt, calibs, 7,766 マルク，1.6 パーセント），15 位の穀粉（farina, 6,431 マルク，1.4 パーセント）と続いていた。以上 1 位の塩から 15 位の穀粉まで 11 種類の商品が，リューベックで取引されていた主要商品であった。上位 15 位までの商品の取引額を合計すると，その割合は 57.3 パーセントとなり，商品名が特定できない項目も合計すると，全体の 89.5 パーセントに達していた。いずれの商品も 1368 年のポンド税台帳および領収書においても主要商品として登場しており，14 世紀後半リューベックで取引されていた代表的な商品だったと結論付けられる。

その一方で，取引額 16 位以下の商品の中にも，先行研究によってハンザ商業の主要商品とみなされてきた商品が存在する[15]。例えば，17 位のビール（cervisia, 4,606 マルク，1.0 パーセント），18 位の銅（cuprum, 4,270 マルク，0.9 パーセント），19 位のワイン（vinum, 4,021 マルク，0.9 パーセント），20 位の油（おそらくオリーブ油，3,816 マルク，0.8 パーセント），22 位の亜麻織物（lineus pannus, 3,676 マルク，0.8 パーセント），25 位の亜麻（linum, 2,309 マルク，0.6 パーセント），26 位の小麦（triticum, 1,594 マルク，0.3 パーセント），27 位の木材（lignum, waghenscot など，1,311 マルク，0.3 パーセント）などである。

３．主要商品の流通構造

次に，主要商品の流通構造を取引額順に確認しよう。まずは取引額 1 位の塩であるが，先述のように，すべて輸出の記録であり，他の都市や地方からの輸入は確認できない。この塩の産地として考えられるのは，北ドイツ内陸部，ザクセン（ニーダーザクセン）地方に位置するハンザ都市リューネブルクである[16]。リューベックは，このリューネブルク塩の積出港として知られていた。バルト海地方では塩の生産量が少なかったため，リューベックよりも南方の後背地からもたらされたリューネブルク塩が，リューベックを経由して前面地のバルト海地方各地に輸出されていた（表 11-4 参照）[17]。主な輸出市場としては，

て，柏倉 2019。

[14] Koppe 1933, S. 45-50; Lechner 1935, S. 34.

[15] ドランジェ 2016，230-236 頁；Irsigler 1998, S. 703; Jahnke 2014, S. 58-96.

[16] リューネブルク塩については次を参照。Witthöft 1976; Witthöft 1990.

[17] ハンザ圏の塩生産については Fellmann 1961，リューベックの塩取引については Braun 1926 を参照。

デンマークのスコーネ地方向けの輸出が多く（全体の 46.2 パーセント），次にプロイセン（18.8 パーセント），スウェーデン（12.5 パーセント），ポメルン（11.4 パーセント）と続いていた。先行研究で述べられているように，スコーネ地方では特産品のニシンを塩漬けにするために大量の塩が必要とされていた[18]。1369 年のポンド税台帳および領収書からも，スコーネ地方がリューベックの塩輸出にとって最大の市場であったことが判明する。

表11-4：塩の輸出（1369年）

単位：リューベック・マルク

輸出先	取引額	割合
デンマーク	35,288.5000	46.2%
プロイセン	14,366.4895	18.8%
スウェーデン	9,569.7500	12.5%
ポメルン	8,732.2500	11.4%
リーフラント	4,171.0000	5.5%
メクレンブルク	2,796.5000	3.7%
西方	997.0000	1.3%
ホルシュタイン	416.2500	0.5%
ノルウェー	18.0000	0.02%
合計	76,355.7395	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371; AHL, PQ; Nirrnheim 1910, Beilage II, 76-88, 91-128, 131, 152, 168, 202, 205, 209-211, 225-239, 241, 246-258, 260-273, 280-281, 283-284; Stieda 1887, I 20-68, 121-128.

3 位の毛織物は，輸入額が 26,738 マルク，輸出額が 33,463 マルクであったが，1368 年に記録された 120,672 マルクという輸入額を顧慮すると[19]，1369 年も実際の輸入額はもっと多かったことが推測される（表 11-5 参照）。先述のように，ハンブルクでポンド税の徴収が始まった結果，西方からの輸入品をリューベックのポンド税台帳では把握できなくなったからである。輸入市場としては西方（フランドル地方，ハンブルク，オルデスロー）の占める割合が 98.9 パーセントと圧倒的に多かった。毛織物の産地が明示されていたのはブルッヘ産とイングランド産の毛織物だけだが，当時のハンザ圏で流通していた毛織物の大半はフランドルをはじめとしたネーデルラント産の毛織物だった[20]。そして，輸出市場としては，バルト海地方の最東端に位置するリーフラントが 62.7 パーセントを占めていた。西方からリーフラント地方へと流通していた毛織物の取引は，西方の北海地方から輸入された毛織物が，バルト海沿岸のリューベックを経由して東方のリーフラント（その後背地は北西ロシアであった）へと輸出されるという伝統的なハンザの東西交易の構図を示している。一方，リーフラント以外の主要輸出先としては，北方のスウェーデンが 10.7 パ

[18] Weibull 1967, S. 64-65.

[19] Lechner 1935, S. 53 に記載されている pannus, panni, packil の輸入額を合計。

[20] ハンザ圏の毛織物取引については Abraham-Thisse 2002 参照。

ーセント，デンマークが 7.5 パーセント，東方のポメルンが 8.2 パーセント，プロイセンが 6.2 パーセントを占めており，バルト海沿岸の複数の地域へ毛織物が輸出されていたことが分かる。このような 2 種類の毛織物の流通構造から，リューベックが北海・バルト海間の東西交易の商品積み替え地としての側面だけではなく，バルト海地方の様々な市場に向けて商品を再配分する商品集散地としての側面も有していたことが判明する。

表11-5：毛織物の輸出入（1369年）

単位：リューベック・マルク

輸入先	取引額	割合	輸出先	取引額	割合
西方	26,436.1458	98.9%	リーフラント	20,975.5000	62.7%
ノルウェー	210.0000	0.8%	スウェーデン	3,579.0000	10.7%
デンマーク	92.0000	0.3%	ポメルン	2,735.5000	8.2%
合計	26,738.1458	100.0%	デンマーク	2,579.5000	7.7%
			プロイセン	2,089.0000	6.2%
			西方	518.0000	1.5%
			メクレンブルク	481.5000	1.4%
			ノルウェー	380.0000	1.1%
			ホルシュタイン	125.0000	0.4%
			合計	33,463.0000	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371; AHL, PQ; Nirrnheim 1910, Beilage II, 76-88, 91-128, 131, 152, 168, 202, 205, 209-211, 225-239, 241, 246-258, 260-273, 280-281, 283-284; Stieda 1887, I 20-68, 121-128.

表11-6：ニシンの輸出入（1369年）

単位：リューベック・マルク

輸入先	取引額	割合	輸出先	取引額	割合
デンマーク	42,674.25	97.4%	リーフラント	1,199.00	36.9%
ポメルン	1,018.00	2.3%	西方	789.00	24.3%
ホルシュタイン	108.00	0.2%	スウェーデン	588.00	18.1%
合計	43,800.25	100.0%	プロイセン	442.50	13.6%
			メクレンブルク	149.50	4.6%
			ポメルン	48.00	1.5%
			デンマーク	24.00	0.7%
			ホルシュタイン	6.00	0.2%
			合計	3,246.00	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371; AHL, PQ; Nirrnheim 1910, Beilage II, 76-88, 91-128, 131, 152, 168, 202, 205, 209-211, 225-239, 241, 246-258, 260-273, 280-281, 283-284; Stieda 1887, I 20-68, 121-128.

5 位のニシンは，塩のところで述べたように，スコーネ地方の特産品であった（表 11-6 参照）[21]。そのことを示すように，ニシンの 97.4 パーセントがスコーネ地方のあるデンマークからの輸入であった。なお，輸入額が 43,800 マルクであったのに対して，輸出額は 10

[21] バルト海産ニシン商業については Jahnke 2000 が詳しい。

分の 1 以下の 3,246 マルクしか記録されていない。輸入されたニシンが，リューベックで消費されていたのか，あるいは，リューベック経由で内陸部に再輸出されたのか，それとも，所有者が交代することなく別の都市へ再輸出されたのかは不明である。主要な輸出市場としては，リーフラント地方が 36.9 パーセント，西方（オルデスローとフランドル地方）が 24.3 パーセント，スウェーデンが 18.1 パーセント，プロイセンが 13.6 パーセントを占めていた。ニシンと塩の流通状況から判明するのは，塩が南方のリューネブルクからリューベックを経由して北方のスコーネ地方へ輸出される一方，リューネブルク塩で塩漬けされたニシンが北方のスコーネ地方からリューベックに輸入され，その一部が各地に再輸出されるという南北交易の構図である。

表11-7：蜜ロウの輸出入（1369年）

単位：リューベック・マルク

輸入先	取引額	割合	輸出先	取引額	割合
プロイセン	658.5	64.3%	西方	14,439.5	88.7%
スウェーデン	366.0	35.7%	デンマーク	1,000.0	6.1%
合計	1,024.5	100.0%	ホルシュタイン	831.0	5.1%
			合計	16,270.5	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371; AHL, PQ; Nirrnheim 1910, Beilage II, 76-88, 91-128, 131, 152, 168, 202, 205, 209-211, 225-239, 241, 246-258, 260-273, 280-281, 283-284; Stieda 1887, I 20-68, 121-128.

6 位の蜜ロウは，輸入額は 1,024 マルクと少ないのに対して，輸出額は 16,270 マルクを記録していた（表 11-7 参照）。輸入市場は，プロイセン（64.3 パーセント）とスウェーデン（35.7 パーセント）の 2 地方だけであり，蜜ロウが特産品であったリーフラントからの輸入がなく，スウェーデンからの輸入が記録されている点が特徴的である[22]。輸入額が少ない理由として，ポンド税の徴収規則があげられる[23]。蜜ロウは，北西ロシア（おもな市場としてノヴゴロド，スモレンスク，プスコフなど）からリーフラント地方のハンザ都市を経由するか，リトアニア大公国からプロイセン地方のハンザ都市を経由してリューベックに輸入されていた[24]。リーフラントやプロセインにおいてポンド税が輸出時に課税された場合，リューベックに輸入された時は非課税扱いとされていた。ただし，リューベックで蜜ロウの所有者が交代したものについては，輸出時に再び課税対象となった。そのため，蜜ロウの輸入額よりも輸出額の方が多くなったと考えられる。また，リーフラントで発行されたポンド税領収書には商品名不詳の各種商品（bona など）が多数記録されており，この中に蜜ロウが隠れている可能性がある。そのため，実際の蜜ロウの輸入額はもっと多か

---

[22] 中世リーフラントの蜜ロウ取引については，谷澤 2011，83-89 頁を参照。

[23] Weibull 1967, S. 12-14.

[24] プロイセンで課税された事例として，プロイセン内陸部のハンザ都市トルンのポンド税台帳に記録された蜜ロウ輸出額の記録がある。それによると，1362 年から 1363 年にかけては 31,215 マルク，1369 年から 1371 年にかけては 34,552.5 マルクの蜜ロウがバルト海方面に向けて輸出されていた。Ahnsehl 1961, S. 58-59 のプロイセン・マルクで記載されている数値をリューベック・マルクに換算。

ったに違いないだろう。他の史料，例えば，1410 年にリーガからフランドルに向かって航行中に，イングランドの海賊に略奪された船舶の積荷一覧によると，107 人の商人によって毛皮（積荷額の 60 パーセント），蜜ロウ（23 パーセント），亜麻（14 パーセント）が輸送されており，リーフラントからも蜜ロウが輸出されていた様子がうかがえる[25]。蜜ロウの輸出市場としては，西方（オルデスロー，フランドル地方）が 88.7 パーセントと最も割合が多かった。バルト海地方の東部や北部からリューベックを通過して西方の北海地方へ輸出されるという伝統的なハンザの東西交易の構造が，蜜ロウ交易にも見受けられる。

8 位の大麦，11 位のライ麦，15 位の穀粉は，同じ穀物なのでここでまとめて確認しておこう[26]。ビールの原料である大麦は（表 11-8 参照），輸入額は 12,378 マルクであったのに対し，輸出額は 2,151 マルクと少なかった。主たる輸入市場はプロイセン（80.3 パーセント）とホルシュタイン（すべてフェーマルン島から，18.7 パーセント），輸出市場はメクレンブルクが 89.9 パーセント（そのすべてがヴィスマル向けの輸出）となっていた。中世のヴィスマルは，バルト海沿岸のハンザ都市の中でも特にビール醸造で有名だった都市であり，1369 年にリューベックが輸入していたビールはすべてヴィスマル産であった（輸入額 4,402 マルク，表 11－3）。ビールの原料となる大麦がプロイセンやフェーマルン島からリューベックに輸入されていたこと，リューベックからはビールの原料である大麦がヴィスマルへ輸出されていたこと，そして，ヴィスマルで生産された手工業製品のビールがリューベックに輸入されていたこと，が判明する[27]。このような大麦とビールの流通状況から，ハンザ都市の間で相互に営まれていたバルト海内交易の流通構造が確認できる。

表11-8：大麦の輸出入（1369年）

単位：リューベック・マルク

輸入先	取引額	割合	輸出先	取引額	割合
プロイセン	9,942.5	80.3%	メクレンブルク	1,934.0	89.9%
ホルシュタイン	2,314.5	18.7%	デンマーク	127.5	5.9%
リーフラント	121.5	1.0%	ノルウェー	90.0	4.2%
合計	12,378.5	100.0%	合計	2,151.5	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371; AHL, PQ; Nirrnheim 1910, Beilage II, 76-88, 91-128, 131, 152, 168, 202, 205, 209-211, 225-239, 241, 246-258, 260-273, 280-281, 283-284; Stieda 1887, I 20-68, 121-128.

パンの原料となるライ麦は（表 11-9 参照），輸入額は 5,904 マルク，輸出額は 3,978 マルクを記録していた。主要な輸入市場はポメルン（76.8 パーセント）とプロイセン（22.0 パーセント）であり，輸出市場として重要だったのが西方のフランドル地方（81.8 パーセント）とスウェーデン（13.8 パーセント）であった。東方のバルト海地方から輸入されたライ麦が，西方のフランドル地方へ輸出される一方で，一部は同じバルト海地方のスウェ

[25] Lesnikov 1958, S. 289.

[26] ハンザの穀物貿易については柏倉 2019 参照。

[27] ハンザのビール生産や流通については Blanckenburg 2001，リューベックについては Frontzek 2005 を参照。なお，ビール醸造業がハンザ都市経済に与えた影響について検討した研究として，斯波 2006；斯波 2013。

ーデンにも輸出されていた。ライ麦交易は，バルト海と北海を結ぶ東西交易およびバルト海内交易という 2 つの流通構造を示している。

表11-9：ライ麦の輸出入（1369年）

単位：リューベック・マルク

輸入先	取引額	割合	輸出先	取引額	割合
ポメルン	4,534.0	76.8%	西方	3,256.0	81.8%
プロイセン	1,297.5	22.0%	スウェーデン	548.8	13.8%
ホルシュタイン	38.0	0.6%	メクレンブルク	107.0	2.7%
メクレンブルク	35.0	0.6%	ノルウェー	45.5	1.1%
合計	5,904.5	100.0%	デンマーク	21.0	0.5%
			合計	3,978.3	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371; AHL, PQ; Nirrnheim 1910, Beilage II, 76-88, 91-128, 131, 152, 168, 202, 205, 209-211, 225-239, 241, 246-258, 260-273, 280-281, 283-284; Stieda 1887, I 20-68, 121-128.

最後に穀粉であるが，穀物の種類が小麦なのか，それともライ麦なのかは不明である（表 11-10 参照）。輸入額は 297 マルクしかなく，輸出額は 6,134 マルクであった。主な輸入市場はプロイセン（63.3 パーセント）とポメルン（33.6 パーセント）であり，輸出市場はノルウェー（すべてベルゲン向け，73.9 パーセント）とデンマークのスコーネ地方（25.4 パーセント）が重要だった。リューベックからベルゲン向けに穀粉が輸出されていたことは先行研究で指摘されていた点であり，本論文でもそれが確認されたことになる[28]。

表11-10：穀粉の輸出入（1369年）

単位：リューベック・マルク

輸入先	取引額	割合	輸出先	取引額	割合
プロイセン	188.3	63.3%	ノルウェー	4,535.5	73.9%
ポメルン	100.0	33.6%	デンマーク	1,559.0	25.4%
ホルシュタイン	9.0	3.0%	メクレンブルク	34.0	0.6%
合計	297.3	100.0%	西方	6.0	0.1%
			合計	6,134.5	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371; AHL, PQ; Nirrnheim 1910, Beilage II, 76-88, 91-128, 131, 152, 168, 202, 205, 209-211, 225-239, 241, 246-258, 260-273, 280-281, 283-284; Stieda 1887, I 20-68, 121-128.

9 位のバターは，輸入額が 7,120 マルク，輸出額が 5,899 マルクとなっていた（表 11-11 参照）[29]。輸入先はスウェーデンが 96.4 パーセント，輸出先は西方（フランドル地方とオルデスロー）が 64.9 パーセントを占めていた。バターを作るには塩が必要だったが，塩がスウェーデンに輸出されていることから，塩とバターが交換されるリューベック―スウェーデン間の交易関係が想定される。また，スウェーデンから輸入されたバターが西方（東西交易）やバルト海の他の地方へ再輸出されていた（バルト海内交易）。

---

[28] Bruns 1900; Nedkvitne 2014.

[29] ハンザ圏のバター取引については Henn 1996, S. 45-47.

表11-11：バターの輸出入（1369年）

単位：リューベック・マルク

輸入先	取引額	割合	輸出先	取引額	割合
スウェーデン	6,862.0	96.4%	西方	3,831.0	64.9%
リーフラント	258.2	3.6%	メクレンブルク	700.0	11.9%
合計	7,120.2	100.0%	デンマーク	676.5	11.5%
			ホルシュタイン	284.0	4.8%
			プロイセン	270.0	4.6%
			ポメルン	137.5	2.3%
			合計	5,899.0	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371; AHL, PQ; Nirrnheim 1910, Beilage II, 76-88, 91-128, 131, 152, 168, 202, 205, 209-211, 225-239, 241, 246-258, 260-273, 280-281, 283-284; Stieda 1887, I 20-68, 121-128.

12 位の魚は，タラ（strumulus, pictilli）と明記してある少数の例外を除くと，「魚 piscis」としか記載されておらず，種類は不明である。輸入額は 8,025 マルク，輸出額は 1,151 マルクとなっており，ニシン同様に輸入額と比較して輸出額が少なくなっている（表 11-12 参照）。主要な輸入先はノルウェー（48.5 パーセント）とプロイセン（31.2 パーセント）であり，ノルウェーから輸入されていた魚は，特産品の干ダラであったと考えられている[30]。プロイセンから輸入されていた魚の種類は不明だが，15 世紀にプロイセンのダンツィヒから輸出されていた魚はタラ，チョウザメ，カワカマス，サケ，パイクパーチ，ウナギがあったという[31]。輸出先としては，リーフラント（40.6 パーセント），ポメルン（20.0 パーセント），プロイセン（14.2 パーセント），メクレンブルク（10.6 パーセント）の占める割合が大きく，バルト海南東部の諸地方に魚が輸出されていた様子がうかがえる。また，

表11-12：魚の輸出入（1369年）

単位：リューベック・マルク

輸入先	取引額	割合	輸出先	取引額	割合
ノルウェー	3,671.5000	48.5%	リーフラント	439.0000	40.6%
プロイセン	2,361.0000	31.2%	ポメルン	216.0000	20.0%
スウェーデン	767.0000	10.1%	プロイセン	153.0000	14.2%
ホルシュタイン	358.5000	4.7%	メクレンブルク	114.5000	10.6%
ポメルン	279.5000	3.7%	西方	74.0000	6.8%
西方	95.0000	1.3%	デンマーク	57.0000	5.3%
デンマーク	24.0000	0.3%	スウェーデン	23.0000	2.1%
リーフラント	15.0000	0.2%	ホルシュタイン	4.5000	0.4%
合計	7,571.5000	100.0%	合計	1,081.0000	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371; AHL, PQ; Nirrnheim 1910, Beilage II, 76-88, 91-128, 131, 152, 168, 202, 205, 209-211, 225-239, 241, 246-258, 260-273, 280-281, 283-284; Stieda 1887, I 20-68, 121-128.

[30] Bruns 1900, S. LXX-LXXX.

[31] Stark 1973, S. 140-145.

プロイセンとの間では相互に魚が輸出入されていたことが分かる。

13 位の皮革・毛皮は，1368 年のポンド税台帳および領収書を刊行した Lechner によって，正確に種類を分類するのが困難だと指摘されている[32]。Lechner の分類方法に従って整理すると，狩猟用動物の毛皮（opus, fiber, hemelinus, lasten），家畜の毛皮（pellis, ruhar, ruwar），皮（cutis），なめした革（coreum, pellicula, cordewan/kordewan, leddere, rotlusch）があった。また，スキムメーゼ（scimmese, schimmese, schimmesa, scymmese, schymmese, schymmeze）という名称の，皮で梱包された商品（中身も皮か毛皮だったと想定されている）があった[33]。これらを合計した皮革・毛皮の輸入額は 3,444 マルク，輸出額は 5,700 マルクであった。このうち，取引額の多かった狩猟用動物の毛皮とスキムメーゼについて流通構造を確認しておきたい。毛皮は中世のハンザ商業を代表する商品の 1 つとされているが，ポンド税で把握できる毛皮の輸入額は 2,147 マルク，輸出額は 1,094 マルクとなっており，取引額は意外に少ない（表 11-13 参照）。先述の蜜ロウ同様，リーフラントから輸出された時にポンド税が徴収されていること，リーフラントで発行されたポンド税領収書は商品名を詳細に記していないことが，その原因だと考えられる。輸入先は，ロシア産品の商品集散地であったリーフラントが 93.4 パーセントを占めていた。輸出先は西方のオルデ

表11-13：毛皮の輸出入（1369年）

単位：リューベック・マルク

輸入先	取引額	割合	輸出先	取引額	割合
リーフラント	2,004.7500	93.4%	西方	1,086.5000	99.3%
スウェーデン	142.5000	6.6%	リーフラント	7.5000	0.7%
合計	2,147.2500	100.0%	合計	1,094.0000	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371; AHL, PQ; Nirrnheim 1910, Beilage II, 76-88, 91-128, 131, 152, 168, 202, 205, 209-211, 225-239, 241, 246-258, 260-273, 280-281, 283-284; Stieda 1887, I 20-68, 121-128.

表11-14：スキムメーゼの輸出入（1369年）

単位：リューベック・マルク

輸入先	取引額	割合	輸出先	取引額	割合
スウェーデン	119.0000	79.4%	西方	1,635.5000	80.8%
プロイセン	15.0000	10.0%	プロイセン	144.0000	7.1%
デンマーク	8.0000	5.3%	ポメルン	77.5000	3.8%
リーフラント	7.8750	5.3%	ホルシュタイン	68.0000	3.4%
合計	149.8750	100.0%	デンマーク	50.0000	2.5%
			メクレンブルク	48.0000	2.4%
			合計	2,023.0000	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371; AHL, PQ; Nirrnheim 1910, Beilage II, 76-88, 91-128, 131, 152, 168, 202, 205, 209-211, 225-239, 241, 246-258, 260-273, 280-281, 283-284; Stieda 1887, I 20-68, 121-128.

[32] Lechner 1935, S. 59-60. ハンザ圏の毛皮取引については Lesnikov 1961 参照。

[33] 谷澤 2011，48 頁。Lechner 1935, S. 60.

スローが 99.3 パーセントを占めていた。高価な商品である毛皮は，バルト海東部からリューベックを経由して北海方面へと流通していたことが分かる。次にスキムメーゼだが，輸入額は 149 マルクと極端に少なかったが，輸出額は 2,023 マルクを記録していた（表 11-14 参照）。輸入額が少ないため，輸出先だけ確認すると，西方のオルデスローとフランドル地方が 80.8 パーセントを占めていた。毛皮と同じ輸出先となっているため，スキムメーゼの中身も毛皮だったのかもしれない。

14 位の鉄には，鉄（ferrum，6,253 マルク），スウェーデン産のオスムント鉄（osemunt, ozemunt, osemund，1,418 マルク），鋼鉄（calibs，95 マルク）の 3 種類が含まれており，輸入額は 4,322 マルク，輸出額は 3,444 マルクであった（表 11-15 参照）[34]。輸入先は，スウェーデンが 98.1 パーセント，ストックホルムだけで 85.6 パーセントを占めていた。主な輸出先は，西方（オルデスローとフランドル地方）が 47.2 パーセント（オルデスローだけで 41.7 パーセント），メクレンブルクが 24.6 パーセント，リーフラントが 15.5 パーセントとなっていた。14 世紀のリューベック―ストックホルム交易を研究した Koppe によると，リューベックにとって銅はバルト海地方から西方へ通過する商品，鉄は複数の都市へ再輸出される積み替え商品であったと評価されているが，それが本論文でも確認されたことになる[35]。

表11-15：鉄の輸出入（1369年）

単位：リューベック・マルク

輸入先	取引額	割合	輸出先	取引額	割合
スウェーデン	4,238.1000	98.1%	西方	1,626.5000	47.2%
メクレンブルク	77.0000	1.8%	メクレンブルク	847.7500	24.6%
ポメルン	7.0000	0.2%	リーフラント	534.0000	15.5%
合計	4,322.1000	100.0%	デンマーク	241.5000	7.0%
			ホルシュタイン	110.0000	3.2%
			ポメルン	84.5000	2.5%
			合計	3,444.2500	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371; AHL, PQ; Nirrnheim 1910, Beilage II, 76-88, 91-128, 131, 152, 168, 202, 205, 209-211, 225-239, 241, 246-258, 260-273, 280-281, 283-284; Stieda 1887, I 20-68, 121-128.

なお，18 位の銅は，鉄と同様にスウェーデンからの輸入が多く，スウェーデン産が 95.0 パーセント（88.9 パーセントはストックホルムからの輸入）を占めていた（表 11-16 参照）[36]。なお，少額だが銅は，ポメルンのシュテティーンからも輸入されている。これはオーダー川経由でもたらされたハンガリー産の銅だと考えられる。当時はハンガリー王国の領土だったが，現在はスロヴァキア領のノイゾール（Neusohl ドイツ語，スロヴァキア語でバンスカービストリツァ Banská Bystrica）が銅の産地として有名であり，ハンガリー産の銅

[34] ハンザ圏の鉄取引については Sprandel 1968。

[35] Koppe 1933, S. 32.

[36] 銅取引については Irsigler 1979 を参照。

としてバルト海経由で輸出されていた[37]。輸出先としては，輸出額の 97.9 パーセントが西方（オルデスローとフランドル地方）向けであった。Koppe の指摘通り，銅はスウェーデンからリューベックを経由して西方へ流通していく通過商品だったと言える。

表11-16：銅の輸出入（1369年）

単位：リューベック・マルク

輸入先	取引額	割合	輸出先	取引額	割合
スウェーデン	1,294.0000	95.0%	西方	2,846.5000	97.9%
ポメルン	67.5000	5.0%	メクレンブルク	62.5000	2.1%
合計	1,361.5000	100.0%	合計	2,909.0000	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371; AHL, PQ; Nirrnheim 1910, Beilage II, 76-88, 91-128, 131, 152, 168, 202, 205, 209-211, 225-239, 241, 246-258, 260-273, 280-281, 283-284; Stieda 1887, I 20-68, 121-128.

最後に，北ドイツの特産品である亜麻織物とその原料となる亜麻について確認しておきたい。22 位の亜麻織物は，輸入は記録されておらず，輸出額は 3,676 マルクであった（表 11-17 参照）。主な輸出先としては，リーフラントが 33.1 パーセント，スウェーデンが 27.6 パーセント，プロイセンが 17.7 パーセント，西方（オルデスロー）が 12.1 パーセントとなっていた。一方，亜麻は，輸入額は 433 マルクと少なかったが，輸出額は 1,876 マルクを記録していた（表 11-18 参照）。その少ない輸入のうち 74.7 パーセントはリーフラントから，残りはプロイセン（14.2 パーセント）とスウェーデン（11.1 パーセント）からの輸入であり，亜麻織物の主な輸出先から原料の亜麻が輸入されていたことが分かる。また，亜麻の輸出先としては，西方（オルデスロー）が 43.7 パーセント，メクレンブルクが 30.4 パーセント，ポメルンは 12.4 パーセントとなっていた。オルデスローを経由して西方のハンブルク方面に向かって，亜麻織物と亜麻の両方が輸出されていたことが分かる。亜麻織物は，ビールと並んでハンザ圏を代表する手工業製品であり，主要な生産地は北ドイツ内陸部のヴェストファーレン地方やザクセン地方であった[38]。例えば，1369 年ハンブルクのポンド税台帳によると，亜麻織物はハンブルクから海上輸出された商品の中で 2 番目に輸出額が多い商品であり（輸出総額 182,216 マルクのうち 28,813 マルク，全体の 16 パーセント）[39]，同年のリューベックの輸出額よりもはるかに多い量が輸出されていた。リューベックのポンド税台帳には輸出しか記録されていないことから，内陸部から輸入された亜麻織物がリューベックを経由して輸出されていたと考えられる。

---

[37] 1369 年のリューベック，トルン，ハンブルクのポンド税台帳から銅の取引額を算出して比較した Ahnsehl によると，トルンから輸出されていたハンガリー産銅の輸出額が 9,150 マルクと最も多く，次にリューベック経由で流通していたスウェーデン産銅が 5,500 マルク，最後にハンブルクから輸出されていた北ドイツ内陸部ハルツ山地産の銅が 1,520 マルクと最も少なかったという。Ahnsehl 1961, S. 51. なお,ハンガリー産の銅は，トルンでポンド税が徴収されていたため，リューベックで流通していた正確な数量は不明である。

[38] ハンザ圏の亜麻織物取引については次を参照。Huang 2015; Hohls 1926.

[39] Nirrnheim 1910, S. LCI-LVII の数値から計算。

表11-17：亜麻織物の輸出（1369年）

単位：リューベック・マルク

輸出先	取引額	割合
リーフラント	1,217.5000	33.1%
スウェーデン	1,015.0000	27.6%
プロイセン	650.5000	17.7%
西方	443.0000	12.1%
ポメルン	148.5000	4.0%
ノルウェー	94.0000	2.6%
デンマーク	57.5000	1.6%
ホルシュタイン	50.0000	1.4%
合計	3,676.0000	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371; AHL, PQ; Nirrnheim 1910, Beilage II, 76-88, 91-128, 131, 152, 168, 202, 205, 209-211, 225-239, 241, 246-258, 260-273, 280-281, 283-284; Stieda 1887, I 20-68, 121-128.

表11-8：亜麻の輸出入（1369年）

単位：リューベック・マルク

輸入先	取引額	割合	輸出先	取引額	割合
リーフラント	324.0000	74.7%	西方	820.5000	43.7%
プロイセン	61.5000	14.2%	メクレンブルク	570.5000	30.4%
スウェーデン	48.0000	11.1%	ポメルン	232.0000	12.4%
合計	433.5000	100.0%	デンマーク	171.0000	9.1%
			ホルシュタイン	34.0000	1.8%
			スウェーデン	30.0000	1.6%
			ノルウェー	18.0000	1.0%
			合計	1,876.0000	100.0%

出典：AHL, PZB 1368-1371; AHL, PQ; Nirrnheim 1910, Beilage II, 76-88, 91-128, 131, 152, 168, 202, 205, 209-211, 225-239, 241, 246-258, 260-273, 280-281, 283-284; Stieda 1887, I 20-68, 121-128.

４．商人と船舶

商人と船舶については，対象となるデータの件数が膨大であるということ，そして，リューベックの取引相手地域ごとに商人の取引額や船舶の評価額に特色が見られるという理由から，ここでは第 1 章から第 10 章で確認した結果に基づいて，それぞれの地域の特徴について考察する。その際，商人の取引規模や船舶の評価額から各地域を分類し，それぞれの地域がリューベック商業にとってどのように位置付けられるのかを検討してみたい。なお，第 1 章で言及したように，商人は取引額 100 マルク以下を中小商人（その中でも特

に 50 マルク以下を小商人と表記），101 マルク以上を大商人と区分している。船舶は評価額 54 マルク以下を小型船，55 マルクから 200 マルク以下を中型船，201 マルク以上を大型船と分類している。

最初に，取引額 100 マルク以下の中小商人の占める割合が大きく，特に 50 マルク以下の小商人が多かった地域について確認する。該当するのは，フェーマルン島（表 8-6）とスコーネ地方である（表 7-10 から表 7-13）。利用されていた船舶は，フェーマルン島では小型船（表 8-8），スコーネ地方では中型船であった（表 7-20）。スコーネ地方（リューベックからの直線距離で計測すると，ファルステルボーは 220 キロメートルの距離，以下同様[40]）の方がフェーマルン島（71 キロメートル）よりも遠距離であったため，利用する船舶が大きかったのだろう。

次に，100 マルク以下の中小商人と 101 マルク以上の大商人の比重が都市によって異なっていた地域である。該当するのは，メクレンブルク地方（表 3-9 と表 3-10）とポメルン地方である（表 4-11 から表 4-13）。両地方共にリューベックから距離が近い都市（メクレンブルクでは直線距離 50 キロメートルのヴィスマル，ポメルンでは 165 キロメートルのシュトラールズント）では中小商人が多く，遠い都市（メクレンブルクでは 94 キロメートルのロストク，ポメルンでは 255 キロメートルのシュテティーン）では大商人の割合が多くなっている。利用されていた船舶は，メクレンブルク地方では小型船（表 3-12 と表 3-13），ポメルン地方では穀物輸送に従事していたオーダー川下流域の都市（シュテティーン，シュタールガルト）は中型船が多く，そうでない都市（シュトラールズント）は小型船が多かった（表 4-15 から表 4-17）。

そして，取引額 101 マルク以上の大商人の割合が大きかった地域が，プロイセン地方（表 5-11 から表 5-13）とスウェーデン（表 9-13 から表 9-16）である。利用船舶は，ともに中型船が多かった（プロイセン：表 5-15 から表 5-17，スウェーデン：表 9-18 から表 9-21）。前述までの地域より，プロイセンもスウェーデンもリューベックからの距離が遠くなっており，例えば，プロイセンのダンツィヒは 521 キロメートル，スウェーデンのストックホルムは 755 キロメートルの距離であった。このことから，距離が遠くなるにつれて大商人の存在が大きくなり，船舶も大きくなっていく傾向がうかがえる。

最後に，大商人の割合が大きく，船舶も大型船が利用されていた地域を確認すると，北海沿岸のネーデルラント地方（表 1-6，表 1-8）とノルウェー（表 10-6，表 10-8），そして，バルト海地方でリューベックから距離が最も遠かったリーフラント地方（表 6-11 から表 6-13，表 6-15 から表 6-17）が該当する。ネーデルラント地方のブルッヘは 585 キロメートル，ノルウェーのベルゲンは 798 キロメートル，リーフラント地方のリーガは 920 キロメートル，レーヴァルは 1,061 キロメートルの距離であった。ブルッヘはダンツィヒと，ベルゲンはストックホルムと同程度の距離であったが，バルト海からユラン半島を迂回して北海へ向かう航海ルートを考慮すると，実際にはその数倍の距離を航海する必要があっただろう。リーフラント地方については，リューベックと同じバルト海沿岸に位置するとはいえ，直線距離では最も遠方の地域であった。遠距離の航海では，大型の船舶が利用さ

[40] 以下，リューベクからの直線距離は Google Map（https://www.google.co.jp/maps）で計測した。地図上の直線距離のため，実際の通商ルート上の距離ではない点に注意。

れる傾向が強かったことが，ここからも判明する。

このように，商業活動に従事していた商人の取引規模や海運で用いられていた船舶の評価額から判断すると，1369 年リューベックの取引相手地域は 4 つの商業圏に分類することができるだろう。まず，リューベックからの距離が近く，小資本の商人が比較的小型の船舶を用いて取引することができたリューベックに近接する商業圏であり，フェーマルン島とスコーネ地方が該当する。次に，中小商人と小型船の割合が多かった，メクレンブルク地方やポメルン地方といった近距離の商業圏である。ただ，ポメルン地方のシュテティーンについては，穀物運送の必要上，比較的大型の船が必要だったためか，中型船の割合が大きかった。この地域には政治的なつながりも強いヴェント都市（ヴィスマル，ロストク，シュトラールズントなど）が多く，リューベックとの関係性は政治的にも経済的にも強かった地域であり，リューベックにとっては地域内商業圏であったと言える。そして，プロイセン地方とスウェーデンでは，大商人が多かったが，船舶は中型船が利用されていた地域間商業圏と位置付けられる。最後に，リューベックからの距離が最も遠く離れており，複数の海峡や海域を航海するネーデルラント地方やノルウェー，そして，バルト海地方最東端のリーフラント地方では，大商人の活動と大型船の使用が一般的であるという共通点があり，これらの地域はリューベックの遠距離商業圏であったと言えるだろう。

先行研究においてリューベックの商業圏について詳細に分析した研究は少なく，例えば，Jahnke はリューベックの後背地との関係性について検討しているが，その際，上位（国際商業）・中位（地域内商業）・下位（在地商業）という概念でリューベックの後背地（商業圏と言い換えることが可能だろう）を 3 段階に分類している[41]。また，谷澤は，15 世紀末から 17 世紀にかけてリューベックがバルト海南西地域という近隣地域において自市中心の商業圏を形成していた可能性を指摘しているが，それ以外の商業圏について言及することはない[42]。唯一，中世リューベックの商業圏について参考になるのが Huang の研究である[43]。Huang は，15 世紀末（1492－1496 年）リューベックのポンド税台帳のデータを利用して，リューベック商業の主要な市場圏を示している。15 世紀末リューベックのポンド税台帳には，北海沿岸のノルウェーやフランドル地方との通商関係が記録されておらず，バルト海沿岸の諸地方との関係しか判明しないという制約がある。それを踏まえた上で 14 世紀後半の状況と比較すると，15 世紀末のリューベックにとって主要な取引相手地域は，リーフラント（Huang の集計によると，全体の取引額に占める割合 45 パーセント，以下同じ），プロイセン（20 パーセント），スウェーデン（15 パーセント），デンマーク（スコーネ地方を含む，12 パーセント），メクレンブルクとポメルン（8 パーセント），その他となっていた。Huang によれば，リューベックにとってリーフラント，プロイセン，スウェーデンは超地域的な市場と位置付けられ，水平的な通商関係が展開されていたのに対し，デンマーク，スコーネ地方，メクレンブルク，ポメルンはリューベックに従属的な地域内市場であり，その市場に対してリューベックはより高次な分配機能を有する商品集散地と

---

[41] Jahnke 2019, pp. 238-247. このように商業圏を 3 段階に分類する点に，中心地理論の間接的な影響がうかがえる。

[42] 谷澤 2011，259-322 頁。

[43] Huang 2019.

して機能していたという。Huang は論文の中で，後期中世の商取引を在地（local），地域内（regional），地域間（interregional），長距離交易(long distance trade)，そして，国際的な定期市（international fairs）というように 5 段階に分類している[44]。しかし，本章で明らかになった 4 つの商業圏は，Huang の分類と完全に一致するわけではない。特に，スコーネ地方は在地商業と位置付けるには距離が離れてすぎており，地域内商業に位置づけられるだろう。本章では，Huang や Jahnke のようにモデルに基づいた商業圏の分類を試みるのではなく，史料から明らかとなる実態に基づいた市場圏の分類を提示するにとどめたい。

おわりに

以上，1369 年のポンド税台帳と領収書から集計されたデータを利用して，14 世紀後半リューベックの取引相手地域や都市の序列，取引されていた商品の種類と流通状況，商人と船舶の地域ごとの特徴について検討してきた。その結果，判明したリューベックの貿易構造は，特定の地域や方向に集中しているのではなく，第 1 部で検討した西方，第 2 部で検討した東方，第 3 部で検討した北方の 3 方向に広がっていた。また，南方のリューネブルク産の塩が輸出されていたことから，南方のドイツ内陸部とも通商関係が推測される。さらに，リューベックの主要な取引相手地域や都市について確認しても，リューベックの商業圏が特定の地域に偏っていたという事実はなかった。

次に，リューベックで取引されていた主要商品として，北ドイツ産の塩，ネーデルラント産の毛織物，スコーネ産のニシンを筆頭に，プロイセン（リトアニア）およびスウェーデン産の蜜ロウ，プロイセン産の大麦とポメルン産のライ麦，スウェーデン産のバター，ノルウェー産の干ダラとプロイセン産の魚，リーフラント（ロシア）産の毛皮，スウェーデン産の鉄と銅などがあった。

そして，これらの商品の流通状況から判明するのが，リューベックを経由した商品の流通構造である。例えば，塩，ニシン，バターの取引からは，後背地のリューネブルクから輸入された塩が，北方のスコーネ地方やスウェーデンへ輸出され，スコーネ地方からはニシンが，スウェーデンからはバターが輸入され，さらにバターが西方へと再輸出されていたことが分かる。北方のノルウェーと東方のプロイセンから魚が輸入される一方，リューベックからプロイセンにも魚が輸出されていた。西方のネーデルラント地方からは毛織物が輸入され，東方のリーフラントだけでなく，バルト海地方各地に再輸出された。バルト海からは蜜ロウや毛皮といった商品が西方に向けて流通していた。そして，バルト海地方内部においても穀物やビールといった商品の流通を通じて，リューベックは同じバルト海地方の都市や地域と相互に結びついていたことが判明する。

最後に，商人の取引額や船舶の評価額から分類すると，小商人が小型と中型の船舶を利用していたフェーマルン島とスコーネ地方，中小商人が小型船と中型船を用いていたメクレンブルクとポメルン（ともに地域内商業圏と位置付けられる），大商人と中型船が多かったプロイセンとスウェーデン（地域間商業圏），そして，大商人と大型船が優勢のネーデル

[44] Huang 2019, p. 254.

ラント地方，ノルウェー，リーフラント（遠距離商業圏）という 4 つの商業圏が確認できた。

以上の分析から判明する中世リューベック商業の特徴とは，ハンザ都市リューベックが北海とバルト海を結ぶ東西交易だけではなく，前面地と後背地を結ぶ南北交易や，バルト海内交易に従事していたという点である。つまり，14 世紀後半のリューベック商業にとって重要だったのは，東西交易か南北交易かといった一方向の通商関係ではなく，東西南北に広がった多様な商業ネットワークだった。

結論

地中海商業圏とともに中世ヨーロッパの 2 大海上商業圏の一翼をなしていた北海・バルト海商業圏において最大の商業勢力であったのがハンザであり，そして，ハンザの中心都市だったのが北ドイツの海港都市リューベックであった。北海・バルト海商業圏を中心に商業活動を展開していたハンザの歴史を理解するためには，その商業史研究が必要不可欠である。しかし，中世のリューベックはハンザの中心都市であったにもかかわらず，その商業活動の全体像はいまだ十分に解明されているとはいいがたい。つまり，中世のリューベックで取引されていた商品の種類と数量，商品の原産地，通商路，取引相手地域や都市，商業活動に従事していた商人の取引規模や具体例，流通の担い手である船舶の規模や船長の具体例といった商業史固有の課題が，未解決のまま残されている。これはハンザ商業史のみならず，中世ヨーロッパ商業史の大きな欠落点であり，それを解消するための実証研究を試みることが本論文の目的である。本論文では，リューベック市立文書館に所蔵されている 1369 年のポンド税台帳およびポンド税領収証という未刊行史料を用いて，中世リューベック商業史の実証研究を試みた。

序論では，ハンザおよびリューベック商業史に関するこれまでの研究状況について紹介し，実証研究の不十分さを指摘した。とりわけ，中世ハンザ商業の特徴としてしばしば用いられる「北海とバルト海を接続する東西交易」という評価が，必ずしも十分な実証研究に基づいているわけではないことを指摘した。次に，14 世紀後半の時代背景，本論文で利用する 1369 年リューベックのポンド税台帳および領収書の史料としての性格や証言能力の限界について説明を加えた。そして，14 世紀後半のリューベックの歴史的位置付けについて解説し，最後に，史料に登場する貨幣や度量衡について紹介した。

続いて第 1 部から第 3 部では，ポンド税台帳および領収書に基づいた分析がおこなわれた。第 1 部ではリューベックと西方のネーデルラントとの商業関係について，第 1 章では海路を経由した北ネーデルラントとフランドルとの通商関係，第 2 章ではオルデスローを経由したリューベック―ハンブルク間の内陸路を利用した通商関係が分析された。第 2 部では，リューベックよりも東方に位置する，バルト海南岸のメクレンブルク地方，ポメルン地方，プロイセン地方，バルト海東岸のリーフラント地方について検討した。第 3 部では，北欧のデンマーク王国，スウェーデン王国，ノルウェー王国とともに，リューベックの北側に位置するホルシュタイン地方東部のフェーマルン島について検討した。そして，それぞれの地域の貿易構造，取引商品，商人や船舶の特徴について確認した。

第 4 部では，これまでの分析結果に基づき，14 世紀後半リューベック商業の全体構造について確認した。貿易構造については，西方（ネーデルラント地方，オルデスローとハンブルク），東方（メクレンブルク地方，ポメルン地方，プロイセン地方，リーフラント地方），北方（デンマーク王国，ホルシュタイン地方，スウェーデン王国，ノルウェー王国）の 3 つの地域の貿易額はほぼ同じ規模だった。また，南方のドイツ内陸部との商業取引については，ポンド税台帳や領収書には記録が残されていないが，塩や亜麻織物といった北ドイツ内陸都市の特産品がリューベックから輸出されていることを考えると，14 世紀後半のリ

ューベックが東西交易だけではなく，南北方向でも活発な商業活動を展開していたといえる。次に，本論文で分析した 10 の取引相手地域の中から取引額上位 5 位までの地域を確認すると，デンマーク王国のスコーネ地方が首位であり，リーフラント地方，オルデスローとハンブルク，プロイセン地方とスウェーデン王国と続いていた。さらに，ポンド税で確認できる 29 の取引相手都市（一部は都市ではなく地方や島だが）の内，取引額上位 8 位までの取引相手を確認してみると，ここでも首位はスコーネ地方であり，続いてリーフラント地方のリーガ，オルデスローとハンブルク，プロイセン地方のダンツィヒ，スコーネ地方のファルステルボー，レーヴァル（リーフラント地方）とストックホルム（スウェーデン王国）となっている。このように，取引額上位の取引相手地域や都市を確認しても，リューベック商業がどこか特定の地域に集中しているわけではないことが分かる。

次に商品だが，商品名が特定できない各種商品などを除外し，取引額上位 5 位の商品を抽出すると，塩，毛織物，ニシン，蜜ロウ，大麦となる。塩のほとんどは輸出の記録であり，北ドイツ内陸部に位置する塩の産地リューネブルクから輸入された塩が，大量にリューベックから輸出されていたことになり，リューベックと南方との通商関係がうかがえる。毛織物は西方のネーデルラント地方，蜜ロウはロシア・リーフラント地方，大麦はプロイセン地方の特産品であり，これらの商品がリューベックを経由して流通している様子が分かる。特に注目すべきは穀物の流通状況であり，大麦以外にもライ麦，穀粉，小麦などが，バルト海地方の各地からリューベックに輸入され，それが再びバルト海地方内部で流通している様子が初めて判明した。

商人と船舶については，対象となる件数が膨大になるため，地域ごとに確認した結果に基づいて分析した。商人については，取引額によると中小商人が占める割合が大きく，特に小商人が多かったのがフェーマルン島とスコーネ地方である。利用されていた船舶は，フェーマルン島では小型船，スコーネ地方では中型船であった。次に，中小商人と大商人の比重が都市によって異なっていたのがメクレンブルク地方とポメルン地方である。リューベックからの距離が近い都市では中小商人が多く，遠い都市では大商人の割合が多い。利用されていた船舶は，メクレンブルク地方では小型船，ポメルン地方では小型船と中型船である。そして，大商人の割合が大きかったのがプロイセン地方とスウェーデンである。利用船舶は，中型船が多かった。最後に，大商人の割合が大きく，船舶も大型船が利用されていたのが，北海沿岸のネーデルラント地方とノルウェー，そして，バルト海地方でリューベックから距離が最も遠かったリーフラント地方である。このように，商業活動に従事していた商人の取引規模や海運で用いられていた船舶の評価額から判断すると，1369 年リューベックの取引相手地域は 4 つの商業圏に分けることができる。リューベックからの距離が近く，小資本の商人が比較的小型の船舶を用いて取引することができたリューベックに近接する商業圏（フェーマルン島とスコーネ地方）。次に，中小商人と小型船の割合が多かったメクレンブルクやポメルンといった近距離の商業圏である。この地域の都市はヴェント都市とよばれ，リューベックとの関係性は政治的にも経済的にも強く，リューベックにとっては地域内商業圏であったといえる。そして，プロイセン地方とスウェーデンでは，大商人が多かったが，船舶は中型船が利用されていた地域間商業圏と位置付けられる。最後に，リューベックからの距離が最も遠く離れており，複数の海峡や海域を航海するよ

うなネーデルラント地方やノルウェー，そして，バルト海地方最東端のリーフラント地方では，大商人の活動と大型船の使用が一般的であり，これらの地域はリューベックの遠距離商業圏であったといえる。

以上の分析から判明するのは，14 世紀後半のリューベック商業が，伝統的なハンザ商業の概念ともいえる「北海とバルト海を接続する東西交易」という単純化されたものではなく，東西南北に向かって商業ネットワークが広がっていたということである。先行研究では，バルト海と北海を結ぶ東西交易が中世ハンザ商業の特徴とされてきた。その際，リューベックは北海とバルト海を接続する商品積み替え地として重要な役割を果たしていたと評価されてきた。しかし，15 世紀後半以降，プロイセン地方の海港都市ダンツィヒが北海・バルト海交易の商業拠点として繁栄するようになり，東西交易におけるリューベックの重要性は低下したと考えられている[1]。それにもかかわらず，17 世紀になってもリューベックは活発な商業活動を展開しており，とりわけ，バルト海沿岸の様々な地域や都市と通商関係を結んでいたことが先行研究で明らかにされている[2]。つまり，近世のリューベックは，北海・バルト海交易という超地域的な商業関係では地位が低下したと見なされるが，バルト海内交易の結節点としては重要であり続けたと評価されているのである。

本論文は，このような従来の中世ハンザ商業像とヨーロッパ商業史におけるリューベックの評価について再検討を加えるために，これまで十分に利用されてこなかった未刊行史料（1369 年のポンド税台帳および領収書）を一次史料として利用した実証研究である。そして，本論文で明らかにされたのは，中世のリューベック商業を，史料の裏付けがないままに，北方ヨーロッパで展開されていた東西交易や南北交易という単純化された構図で把握するべきではないということである。少なくとも，1369 年のポンド税台帳および領収書から判明する限りでは，リューベックの商業ネットワークは四方に向かって分布していた。そして，バルト海内交易の商品集散地としてのリューベックは近世に始まった現象なのではなく，中世においてもリューベックはバルト海内交易の結節点として重要な役割を果たしていたということである。

もちろん，本論文では明らかにならなかった点もある。例えば，ハンザの 4 大商館のうち，ロンドン商館のあったイングランド王国との通商関係については不明なままであり，他の利用可能な史料を今後，探索する必要がある。このような史料上の制約があるとはいえ，1369 年リューベックのポンド税台帳および領収書は，商品の種類，その輸出入先や数量，取引に従事していた商人など，商業史の研究に必要な情報を提供してくれる中世のヨーロッパでも数少ない数量史料なのである。そして，この史料をもっと詳細に分析することで，本論文では取り組むことができなかった商人や船長のプロソポグラフィ（人物誌）研究のようなテーマに従事することが，今後の課題である。

---

[1] 谷澤 2011。

[2] Meyer-Stoll 1989; Hammel-Kiesow 1993b; 谷澤 2011。

参考文献

省略記号一覧

Diss. - Dissertation
HGBll – Hansische Geschichtsblätter
N. F. – Neue Folge
QDHG – Quellen und Darstellungen zur hansischen Geschichte

未刊行史料

AHL - Archiv der Hansestadt Lübeck
3.4-4 Pfundzollherrn
PZB 1368-1371 - Pfundzollbuch 1368-1371, fol. 234r-474v.
PQ – Pfundzollquittung 6-10, 64, 81-86, 95-105, 107-111, 113-118, 120-124, 126-133, 135-157, 159-160, 162-165, 167-173, 175, 177-178, 181, 183-200, 203-218, 220, 222-223, 372, 380-438, 440-462, 464-475, 477-489, 583-603, 605-609, 645-663, 665-667, 669-675, 698-726, 738-742, 775-845, 855, 927-1064, 1082, 1100-1149, 1157-1159, 1167-1192, 1201-1202, 1231-1250, 1411-1453, 1459-1462, 1464-1470, 1472-1473, 1591-1603, 1605-1619, 1621-1749.

刊行史料

Bruns 1900 - Friedrich Bruns, *Die Lübecker Bergenfahrer und ihre Chronistik* (Hansische Geschichtsquellen N. F. 2), Berlin 1900.
Bruns 1904-1908 - Friedrich Bruns, Die lübeckischen Pfundzollbücher von 1492-1496, in: HGBll 32, 1904/05, S. 107-131, HGBll 34, 1907, S. 457-499, HGBll 35, 1908, S. 357-407.
HR – *Hanserezesse*, Abt. I: Bde. 1-8 (1256-1430), Leipzig 1870-1897.
Höhlbaum 1874 - Konstantin Höhlbaum, Eine Revalsche Pfundzollberechnung aus den Jahren 1382 und 1384, in: *Beiträge zur Kunde Ehst-, Liv- und Kurlands* 2, Heft 4, 1874, S. 492-508.
Hormuth/Jahnke/Loebert 2006 - Dennis Hormuth/ Carsten Jahnke/ Sönke Loebert (Hgg.), *Die Hamburgisch-Lübischen Pfundgeldlisten 1485-1486* (Veröffentlichungen aus dem Staatsarchiv der Freien und Hansestadt Hamburg 21), Hamburg 2006.
Jahnke 1997 - Carsten Jahnke, Die Malmöer Schonenzolliste des Jahres 1375, in: HGBll 115, 1997, S. 1-107.
Jenks 2012 - Stuart Jenks (Hg.), *Das Danziger Pfundzollbuch von 1409 und 1411* (QDHG N. F. 63), Köln u. a. 2012.
Koczy 1935 - Leon Koczy, Materjały do dziejów handlu hanzy pruskiej z zachodem, in: *Rocznik*

Gdanski 7-8/1933-34, 1935, pp. 275-331.

Lechner 1935 - Georg Lechner (Hg.), *Die hansischen Pfundzollisten des Jahres 1368 (18. März 1368 bis 10. März 1369)* (QDHG N. F. 10), Lübeck 1935.

Militzer 1979 - Klaus Militzer, Ein Elbinger Pfundzollregister aus dem Herbst des Jahres 1398, in: *Preußenland* 17, 1979, S. 14-31.

Nirrnheim 1910 - Hans Nirrnheim (Hg.), *Das hamburgische Pfundzollbuch von 1369* (Veröffentlichungen aus dem Staatsarchiv der Freien und Hansestadt Hamburg 1), Hamburg 1910.

Sprandel 1972 - Rolf Sprandel (Hg.), *Das Hamburger Pfundzollbuch von 1418* (QDHG N. F. 18), Köln u. a. 1972.

Stieda 1887 - Wilhelm Stieda, *Revaler Zollbücher und -quittungen des 14. Jahrhunderts* (Hansische Geschichtsquellen 5), Halle a. S. 1887.

UBStL – *Urkundenbuch der Stadt Lübeck*, 12 Bde., Lübeck 1843-1932.

Vogtherr 1996 - Hans-Jürgen Vogtherr (Bearb.), *Die Lübecker Pfundzollbücher 1492-1496* (QDHG N. F. 41/1-4), 4 Teile, Köln u. a. 1996.

Wendt 1902 - Oscar Wendt, *Lübecks Schiffs- und Warenverkehr in den Jahren 1368 und 1369 in tabellarischer Übersicht auf Grund der Lübecker Pfundzollbücher aus denselben Jahren*, Lübeck 1902.

欧語文献

Abraham-Thisse 2002 - Simone Abraham-Thisse, Der Tuchhandel der Hanse am Ende des Mittelalters (14.-15. Jahrhundert), Rolf Hammel-Kiesow (Hg.), *Vergleichende Ansätze in der hansischen Geschichtsforschung* (Hansische Studien 13), Trier 2002, S. 183-207.

Ahnsehl 1961 - Karl-Otto Ahnsehl, *Thorns Seehandel und Kaufmannschaft um 1370* (Wissenschaftliche Beiträge zur Geschichte und Landeskunde Ost-Mitteleuropas 53), Marburg 1961.

Ahrens 2004 - Gerhard Ahrens, Ein Kaufkraftmultiplikator für den Historiker, in: *Zeitschrift des Vereins für Lübeckische Geschichte und Altertumskunde* 84, 2004, S. 289-296.

Ahvenainen 1963 - Jorma Ahvenainen, *Der Getreidehandel Livlands im Mittelalter* (Societas Scientiarum Fennica. Commentationes Humanarum Litterarum XXXIV 2), Helsinki-Helsingfors 1963.

Angermann 1990 - Norbert Angermann, Die Bedeutung Livlands für die Hanse, in: Norbert Angermann (Hg.), *Die Hanse und der deutsche Osten*, Lüneburg 1990, S. 97-116.

Arnold 1998a - Udo Arnold, Die Hanse im Osten - Preußen, in: Jörg Bracker/Volker Henn/Rainer Postel (Hgg.), *Die Hanse – Lebenswirklichkeit und Mythos: Textband zur Hamburger Hanse-Ausstellung von 1989*, Lübeck [2]1998, S. 78-82.

Arnold 1998b - Udo Arnold, Einbrüche im Osten: Von der Schlacht bei Tannenberg bis zur Schließung des Nowgorodoer Kontors - Preußen und die Hanse, in: Jörg Bracker/Volker Henn/Rainer Postel (Hgg.), *Die Hanse – Lebenswirklichkeit und Mythos: Textband zur*

Hamburger Hanse-Ausstellung von 1989, Lübeck [2]1998, S. 133-137.

Asmussen 1999 - Georg Asmussen, *Die Lübecker Flandernfahrer in der zweiten Hälfte des 14. Jahrhunderts (1358-1408)* (Kieler Werkstücke, Reihe D: Beiträge zur europäischen Geschichte des späten Mittelalters 9; Hansekaufleute in Brügge 2), Frankfurt am Main u. a. 1999.

Aßmann 1951 - Erwin Aßmann, *Stettins Seehandel und Seeschiffahrt im Mittelalter*, Kitzingen 1951.

Aßmann 1952 - Erwin Aßmann, Die Stettiner Zollrolle des 13. Jahrhunderts, in: HGBll 71, 1952, S. 50-75.

Bahr 1911 - Konrad Bahr, *Handel und Verkehr der deutschen Hanse in Flandern während des 14. Jahrhunderts*, Leipzig 1911.

Barioch/Batou/Chèvre 1988 - Paul Bairoch/Jean Batou/Pierre Chèvre, *The Population of European Cities from 800 to 1850: Data Bank and Short Summary of Results*, Geneva 1988.

Baumann 1882 - Max Baumann, *Die Handelsprivilegien Lübecks im XII., XIII. und XIV. Jahrhundert: Eine Vorarbeit für den Verfasser einer Handelsgeschichte Lubecks*, Diss. Göttingen 1882.

Blanckenburg 2001 - Christine von Blanckenburg, *Die Hanse und ihr Bier. Brauwesen und Bierhandel im hansischen Verkehrsgebiet* (QDHG N. F. 51), Köln u. a. 2001.

Bohmbach 1982 - Jürgen Bohmbach, Zollbücher, in: Rolf Sprandel (Hg.), *Quellen zur Hanse-Geschichte* (Ausgewählte Quellen zur Geschichte des Mittelalters 36), Darmstadt 1982, S. 429-447.

Böhnke 1962 - Werner Böhnke, Der Binnenhandel des Deutschen Ordens und seine Beziehung zum Außenhandel um 1400, in: HGBll 80, 1962, S. 26-95.

Braun 1926 - Arthur Braun, *Der Lübecker Salzhandel bis zum Ausgang des 17. Jahrhunderts*, Diss. Hamburg 1926.

Bruns 1896 - Friedrich Bruns, Lübecks Handelsstraßen am Ende des Mittelalters, in: HGBll 24, 1896, S. 43-87.

Bruns/Weczerka 1962 - Fiedrich Bruns/ Hugo Weczerka, *Hansische Handelsstraßen* (QDHG N. F. 13), Teil 1: Atlas, Köln u. a. 1962.

Bruns/Weczerka 1967 - Fiedrich Bruns/ Hugo Weczerka, *Hansische Handelsstraßen* (QDHG N. F. 13), Teil 2: Textband, Köln u. a. 1967.

Burkhardt 2009 - Mike Burkhardt, *Der Bergenhandel im Spätmittelalter: Handel, Kaufleute, Netzwerke* (QDHG N. F. 60), Köln u. a. 2009.

Burkhardt 2010 - Mike Burkhardt, The German Hanse and Bergen – new perspectives on an old subject, in: *Scandinavian Economic History Review* 58/1, 2010, pp. 60-79.

Burkhardt 2012 - Mike Burkhardt, Kaufmannsnetzwerke und Handelskultur. Zur Verbindung von interpersonellen Beziehungsgeflechten und kaufmännischen Habitus im spätmittelalterlichen Ostseeraum, in: Sunhild Kleingärtner/ Gabriel Zeilinger (Hgg.), *Raumbildung durch Netzwerke? Der Ostseeraum zwischen Wikingerzeit und Spätmittelalter aus archäologischer und geschichtswissenschaftlicher Perspektive*, Bonn 2012, S. 117-130.

Burkhardt 2013 - Mike Burkhardt, Business as usual?: a critical investigation on the hanseatic pound toll lists, in: Justyna Wubs-Mrozewicz/ Stuart Jenks (eds.), *The Hanse in medieval and*

early modern Europe (The Northern world 60), Leiden u. a. 2013, pp. 215-237.

Dahlbäck 2002 - Göran Dahlbäck, Eisen und Kupfer, Butter und Lachs. Schwedische Produkte im hansischen Handel, in: Rolf Hammel-Kiesow (Hg.), *Vergleichende Ansätze in der hansischen Geschichtsforschung* (Hansische Studien 13), Trier 2002, S. 163-173.

Dencker 1959 - Rolf Dencker, Finnlands Städte und hansisches Bürgertum (bis 1471), in: HGBll 77, 1959, S. 19-93.

Dollinger/Graßmann 1998 - Philippe Dollinger und Antjekarhrin Graßmann, Zur hansischen Geschichtsforschung 1960-1997, in: Philippe Dollinger, *Die Hanse*, Stuttgart [5]1998, S. 487-508.

Dollinger 2012 - Philippe Dollinger, *Die Hanse*, neu bearbeitet von Volker Henn und Nils Jörn, Stuttgart [6]2012.

Dummler 2012 - Dieter Dummler, *Die Münzsammlung der Reichs- und Hansestadt Lübeck 1114-1819* (Handel, Geld und Politik 12), Lübeck 2012.

Dummler 2015 - Dieter Dummler, *Siebenhundert Jahre Geldwesen in Lübeck. Die Münzgeschichte der Reichs- und Hansestadt Lübeck im Spiegel der Münzsammlung des Archivs der Hansestadt Lübeck (1114-1819) mit einem Beitrag von Jörn Sanftleben* (Kleine Hefte zur Stadtgeschichte 24), Lübeck 2015.

Ekre 1983 - Rune Ekre, Lödöse im Wandel vom 12. zum 13. Jahrhundert, in: *Lübecker Schriften zur Archäologie und Kulturgeschichte* 7, 1983, S. 213-218, Abb. 58, Taf. 6.

Fellmann 1961 - Walter Fellmann, Salzproduktion im Hanseraum, in: Gerhard Heitz/Manfred Unger (Hgg.), *Hansische Studien. Heinrich Sproemberg zum 70. Geburtstag* (Forschungen zur Mittelalterlichen Geschichte 8), Berlin 1961, S. 56-71.

Fritze 1986 - Konrad Fritze, Zur Entwicklung des Städtewesens im Ostseeraum vom 12. bis zum 15. Jahrhundert, in: Konrad Fritze/Eckhard Müller-Mertens/Johannes Schildhauer (Hgg.), *Der Ost- und Nordseeraum. Politik — Ideologie — Kultur vom 12. bis zum 17. Jahrhundert* (Hansische Studien VII) Weimar 1986, S. 9-18.

Frontzek 2005 - Wolfgang Frontzek, *Das städtische Braugewerbe und seine Bauten vom Mittelalter bis zur frühen Neuzeit. Untersuchungen zur Entwicklung, Ausstattung und Topographie der Brauhäuser in der Hansestadt Lübeck* (Häuser und Höfe in Lübeck 7), Neumünster 2005.

Gabrielsson 1982 - Peter Gabrielsson, Die Zeit der Hanse 1300-1517, in: Hans-Dieter Loose (Hg.), *Hamburg: Geschichte der Stadt und ihrer Bewohner, Bd. I: Von den Anfängen bis zur Reichsgründung*, Hamburg 1982, S. 101-190.

Goetze 1970 - Jochen Goetze, Von Greifswald bis Stralsund. Die Auseinandersetzungen der deutschen Seestädte und ihrer Verbündeten mit König Valdemar von Dänemark 1361-1370, in: HGBll 88, 1970, S. 83-122.

Goetze 1973 - Jochen Goetze, Hansische Schiffahrtswege in der Ostsee, in: HGBll 92, 1974, S. 71-88.

Gläser/Hammel-Kiesow/Scheftel 2006 - Manfred Gläser/ Rolf Hammel-Kiesow/ Michael Scheftel, Das Haupt der Hanse: Lübeck, in: Jörg Bracker/ Volker Henn/ Rainer Postel (Hgg.), *Die Hanse – Lebenswirklichkeit und Mythos: Textband zur Hamburger Hanse-Ausstellung von 1989*, Lübeck [4]2006, S. 248-268.

Graßmann 1990 - Antjekathrin Graßmann, Lübeck und der deutsche Osten im Spätmittelalter, in: Norbert Angermann (Hg.), *Die Hanse und der deutsche Osten*, Lüneburg 1990, S. 23-39.

Graßmann 1992 - Antjekathrin Graßmann, Zur Rückführung der Lübecker Archivbestände aus der ehemaligen DDR und UDSSR 1987 und 1990, in: HGBll 110, 1992, 57-70.

Graßmann 1994 - Antjekathrin Graßmann, Lübeck und Rostock. Quellen zu Kaufmann und Handel, in: *Rostock im Ostseeraum in Mittelalter und früher Neuzeit*, Rostock 1994, S. 51-57.

Graßmann 1999 - Antjekathrin Graßmann, Wertvolle Archivalien aus Armenien zurück, in: *Lübeckische Blätter* 1999, S. 32.

Graßmann 2008 - Antjekathrin Graßmann (Hg.), *Lübeckische Geschichte*, Lübeck [4]2008.

Hammel 1988 - Rolf Hammel, Häusermarkt und wirtschaftliche Wechsellagen in Lübeck von 1284-1700, in: HGBll 106, 1988, S. 41-107.

Hammel-Kiesow 1993a - Rolf Hammel-Kiesow, Hansischer Seehandel und wirtschaftliche Wechsellagen. Der Umsatz im lübecker Hafen in der zweiten Hälfte des 14. Jahrhunderts, 1492-6 und 1680-2, in: Stuart Jenks/ Michael North (Hgg.), *Der hansische Sonderweg? Beiträge zur Sozial- und Wirtschaftsgeschichte der Hanse* (QDHG N. F. 39), Köln u. a. 1993, S. 77-93.

Hammel-Kiesow 1993b - Rolf Hammel-Kiesow, Von Tuch und Hering zu Wein und Holz. Der Handel Lübecker Kaufleute von der Mitte des 12. bis zum Ende des 19. Jahrhunderts, in: Gerhard Gerkens/ Antjekathrin Graßmann (Hgg.), *Der Lübecker Kaufmann. Aspekte seiner Lebens- und Arbeitswelt vom Mittelalter bis zum 19. Jahrhundert*, Lübeck 1993, S. 13-33.

Hammel-Kiesow 2014 - Rolf Hammel-Kiesow, *Die Hanse*, München [5]2000.

Hammel-Kiesow 2000 - Rolf Hammel-Kiesow, Hansekaufleute in Brügge. Zu den Publikationen des Kiel-Greifswalder Brügge-Projekts, in: *Zeitschrift des Vereins für Lübeckische Geschichte und Altertumskunde* 80, 2000, S. 361-379.

Hammel-Kiesow 2002 - Rolf Hammel-Kiesow, Lübeck and the Baltic Trade in Bulk Goods for the North Sea Region 1150-1400, in: Lars Berggren/ Nils Hybel/ Annette Landen (eds.), *Cogs, Cargoes, and Commerce: Maritime Bulk Trade in Northern Europe, 1150-1400* (Papers in Mediaeval Studies 15), Toronto 2002, pp. 53-91.

Hammel-Kiesow 2007 - Rolf Hammel-Kiesow, Europäische Union, Globalisierung und Hanse. Überlegungen zur aktuellen Vereinnahmung eines historischen Phänomens, in: HGBll 125, 2007, S. 1-44.

Hammel-Kiesow/Puhle 2009 - Rolf Hammel-Kiesow/ Matthias Puhle, *Die Hanse*, Darmstadt 2009.

Hansen 1912 - Johannes Hansen, *Beiträge zur Geschichte des Getreidehandels und der Getreidepolitik Lübecks* (Veröffentlichungen zur Geschichte der Freien und Hansestadt Lübeck 1, Heft 1), Lübeck 1912.

Heineken 1908 - Hermann Heineken, *Der Salzhandel Lüneburgs mit Lübeck bis zum Anfang des 15. Jahrhunderts* (Historische Studien 63), Berlin 1908.

Helle 1980 - Knut Helle, Neueste norwegische Forschungen über deutsche Kaufleute in Norwegen und ihre Rolle im norwegischen Außenhandel im 12. bis 14. Jahrhundert, in: HGBll 98, 1980, S. 23-38.

Henn 1996 - Volker Henn, Der hansische Handel mit Nahrungsmitteln, in: Günther Wiegelmann/ Ruth-E. Morhmann (Hgg.), *Nahrung und Tischkultur im Hanseraum*, Münster u. a. 1996, S. 23-48.

Hildebrand 1954 - Karl-Gustaf Hildebrand, Salt and Cloth in Swedish Economic History, in: *The Scandinavian Economic History Review* 2, 1954, pp. 74-102.

Hill/Ersgård 1998 - Thomas Hill/ Lars Ersgård, Der Schonenmarkt - die große Messe im Norden, in: Jörg Bracker/ Volker Henn/ Rainer Postel (Hgg.), *Die Hanse – Lebenswirklichkeit und Mythos: Textband zur Hamburger Hanse-Ausstellung von 1989*, Lübeck [2]1998, S. 721-732.

Hoffmann 2008 - Erich Hoffmann, Lübeck im Hoch- und Spätmittelalter: Die große Zeit Lübecks, in: Antjekathrin Graßmann (Hg.), *Lübeckische Geschichte*, Lübeck [4]2008, S. 81-339.

Hohls 1926 - Hermann Hohls, Der Leinwandhandel in Norddeutschland vom Mittelalter bis zum 17. Jahrhundert, in: HGBll 51, 1926, S. 116-158.

Höpner 1975 - Ewald Höpner, *Fehmarn: ein freies Bauerntum in wechselvoller Geschichte*, Lübeck 1975.

Hoppe 1994 - Klaus Dieter Hoppe, Die Rolle Wismars beim hansischen Bierexport nach Flandern und Holland, in: *Wismarer Beiträge* 10, 1994, S. 23-27.

Huang 2015 - Angela Huang, *Die Textilien des Hanseraums: Produktion und Distribution einer spätmittelalterlichen Fernhandelsware* (QDHG N. F. 71), Köln u. a. 2015.

Huang 2019 - Angela Ling Huang, Lübeck ´s Trade in the Fifteenth Century, in: Carsten Jahnke (ed.), *A Companion to Medieval Lübeck* (Brill's Companions to European History 18), Leiden 2019, pp. 253-272.

Hybel 2007 - Nils Hybel, *The Danish Resources c. 1000 - 1550: Growth and Recession* (The Northern World 34), Leiden 2007.

Ibs 1994 - Jürgen Hartwig Ibs, *Die Pest in Schleswig-Holstein von 1350 bis 1547/48: eine sozialgeschichtliche Studie über eine wiederkehrende Katastrophe* (Kieler Werkstücke, Reihe A: Beiträge zur schleswig-holsteinischen und skandinavischen Geschichte 12), Frankfurt am Main u. a. 1994.

Irsigler 1979 - Franz Irsigler, Hansischer Kupferhandel im 15. und in der ersten Hälfte des 16. Jahrhunderts, in: HGBll 97, 1979, S. 15-35.

Irsigler 1998 - Franz Irsigler, Der hansische Handel und seine Voraussetzungen, in: Jörg Bracker/ Volker Henn/ Rainer Postel (Hgg.), *Die Hanse – Lebenswirklichkeit und Mythos: Textband zur Hamburger Hanse-Ausstellung von 1989*, Lübeck [2]1998, S. 700-721.

Jahnke 1996 - Carsten Jahnke, Die hamburg-lübeckischen Pfundgeldlisten von 1458/59 und 1480-1487, in: *Zeitschrift des Vereins für Lübeckische Geschichte und Altertumskunde* 76, 1996, S. 27-54.

Jahnke 1998 - Carsten Jahnke, Zollregister im Ostseeraum - Bestand und Auswertung, in: Zenon

Hubert Nowak/ Janusz Tandecki (Hgg.), *Die preußischen Hansestädte und ihre Stellung im Nord- und Ostseeraum des Mittelalters*, Torun 1998, S. 151-168.

Jahnke 2000a - Carsten Jahnke, *Das Silber des Meeres. Fang und Vertrieb von Ostseehering zwischen Norwegen und Italien (12.-16. Jahrhundert)* (QDHG N. F. 49), Köln u. a. 2000.

Jahnke 2000b - Carsten Jahnke, *„Das Silber des Nordens" Lübeck und der europäische Heringshandel im Mittelalter* (Handel, Geld und Politik 3), Lübeck 2000.

Jahnke 2014 - Carsten Jahnke, *Die Hanse*, Stuttgart 2014.

Jahnke 2015 - Carsten Jahnke, The Baltic Trade, in: Donald J. Harreld (ed.), *A Companion to the Hanseatic League* (Brill's Companions to European History 8), Leiden 2015, pp. 194-240.

Jahnke 2019 – Carsten Jahnke, Lübeck: Early Economic Development and the Urban Hinterland, in: Carsten Jahnke (ed.), *A Companion to Medieval Lübeck* (Brill's Companions to European History 18), Leiden 2019, pp. 226-252.

Jenks 1992 - Stuart Jenks, *England, die Hanse und Preußen: Handel und Diplomatie 1377-1474* (QDHG N. F. 38/1-3), 3 Teile, Köln u. a. 1992, S.297-303.

Jenks 1996 - Stuart Jenks, Der hansische Salzhandel im 15. Jahrhundert im Spiegel des Danziger Pfundzollbuchs von 1409, in: Rainer S. Elkar/ Cornelius Neutsch/ Karl-Jürgen Roth/ Jürgen H. Schawacht (Hgg.), *Vom rechten Maß der Dinge. Beiträge zur Wirtschafts- und Sozialgeschichte. Festschrift für Harald Witthöft zum 65. Geburtstag*, St. Katharinen 1996, S. 257-275.

Jesse 1967 - Wilhelm Jesse, *Der Wendische Münzverein*, Braunschweig [2]1967.

Jochmann 1948 - Werner Jochmann, *Der Hamburger Handel im 13. und 14. Jahrhundert*, Diss. Hamburg 1948.

Johansen 1963 - Paul Johansen, Der hansische Rußlandhandel, insbesondere nach Novgorod, in kritischer Betrachtung, in: Ahasver von Brandt/ Paul Johansen/ Hans van Werveke/ Kjell Kumlien/ Hermann Kellenbenz, *Die Deutsche Hanse als Mittler zwischen Ost und West* (Wissenschaftliche Abhandlungen der Arbeitsgemeinschaft für Forschung des Landes Nordrhein-Westfalen 27), Köln u. a. 1963, S. 39-57.

Karg/Jahnke 2016 - Sabine Karg/ Carsten Jahnke, Der Reishandel im Hanseraum, in: HGBll 134, 2016, S. 97-131.

Kehn 1968 - Wolfgang Kehn, *Der Handel im Oderraum im 13. und 14. Jahrhundert*, Köln u. a. 1968.

Kehn 1981 - Wolfgang Kehn, Der Oderraum und seine Beziehungen zur Hanse im 13. und 14. Jahrhundert, in: Roderich Schmidt (Hg.), *Pommern und Mecklenburg. Beiträge zur mittelalterlichen Städtegeschichte* (Veröffentlichungen der Historischen Kommission für Pommern, Reihe 5: Forschungen zur pommerschen Geschichte 19), Köln u. a. 1981, S. 89-109.

Kiesselbach 1907 - G. Arnold Kiesselbach, *Die wirtschaftlichen Grundlagen der deutschen Hanse und die Handelsstellung Hamburgs bis in die zweite Hälfte des 14. Jahrhunderts*, Berlin 1907.

Koppe 1933 - Wilhelm Koppe, *Lübeck-Stockholmer Handelsgeschichte im 14. Jahrhundert* (Abhandlungen zur Handels- und Seegeschichte N. F. 2), Neumünster 1933.

Koppe 1934 - Wilhelm Koppe, *Lübeck und Lödöse im 14. Jahrhundert*, Göteborg 1934.

Koppe 1940 - Wilhelm Koppe, Revals Schiffsverkehr und Seehandel in den Jahren 1378/84, in: HGBll 64, 1940, S. 111-152.

Koppe 1943 - Wilhelm Koppe, Das mittelalterliche Kalmar. Eine Untersuchung zur Geschichte des deutschen Seehandels und Volkstums, in: HGBll 67/68, 1943, S. 192-221.

Koppe 1952 - Wilhelm Koppe, Die Hansen und Frankfurt am Main im 14. Jahrhundert, in: HGBll 71, 1952, S. 30-49.

Koppe 2006 - Wilhelm Koppe/ Gert Koppe, *Die Lübecker Frankfurt-Händler des 14. Jahrhunderts* (Veröffentlichungen zur Geschichte der Hansestadt Lübeck, Reihe B 42), Lübeck 2006.

Kumlien 1952 - Kjell Kumlien, Stockholm, Lübeck und Westeuropa zur Hansezeit, in: HGBll 71, 1952, S. 9-29.

Kumlien 1953 - Kjell Kumlien, *Sverige och Hanseaterna: Studier i svensk politik och utrikeshandel*, Stockholm 1953.

Kumlien 1960 - Kjell Kumlien, Schweden und Lübeck zu Beginn der Hansezeit, in: HGBll 78, 1960, S. 37-66.

Lehe 1958 - Erich von Lehe, Hamburgische Quellen für den Elbhandel der Hansezeit und ihre Auswertung, in: HGBll 76, 1958, S. 131-142.

Lesnikov 1958 - Michail P. Lesnikov, Die livländische Kaufmannschaft und ihre Handelsbeziehungen zu Flandern am Anfang des 15. Jahrhunderts, in: *Zeitschrift für Geschichtswissenschaft* 6, 1958, S. 285-303.

Lesnikov 1960 - Michail Lesnikov, Lübeck als Handelsplatz für osteuropäische Waren im 15. Jahrhundert, in: HGBll 78, 1960, S. 67-86.

Lesnikov 1961a - Michail P. Lesnikov, Der hansische Pelzhandel zu Beginn des 15. Jahrhundeerts, in: Gerhard Heitz/ Manfred Unger (Hgg.), *Hansische Studien. Heinrich Sproemberg zum 70. Geburtstag* (Forschungen zur mittelalterlichen Geschichte 8), Berlin 1961, S. 223-272.

Lesnikov 1961b - Michail P. Lesnikov, Lübeck als Handelsplatz für Osteuropawaren im 14. Jahrhundert, in: Gerhard Heitz/ Manfred Unger (Hgg.), *Hansische Studien. Heinrich Sproemberg zum 70. Geburtstag* (Forschungen zur mittelalterlichen Geschichte 8), Berlin 1961, S. 273-292.

Lingenberg 1998 – Heinz Lingenberg, Danzig, in: Jörg Bracker/Volker Henn/Rainer Postel (Hgg.), *Die Hanse – Lebenswirklichkeit und Mythos: Textband zur Hamburger Hanse-Ausstellung von 1989*, Lübeck [2]1998, S. 78-82.

Link 2014 - Christina Link, *Der preußische Getreidehandel im 15. Jahrhundert: eine Studie zur nordeuropäischen Wirtschaftsgeschichte* (QDHG N. F. 68), Köln u. a. 2014.

Lorenzen-Schmidt/Pelc 2006 - Klaus-Joachim Lorenzen-Schmidt/Ortwin Pelc (Hgg.), *Das neue Schleswig-Holstein Lexikon*, Neumünster 2006.

Luis 2016 - David Igual Luis, Vom Feld aufs Schiff. Handel und Export von Reis aus Valencia nach Flandern im Spätmittelalter, in: HGBll 134, 2016, S. 61-95.

Mantels 1881 - Wilhelm Mantels, Der im Jahre 1367 in Köln beschlossene zweite hanseatische Pfundzoll, in: Wilhelm Mantels, *Beiträge zur lübisch-hansischen Geschichte*, Jena 1881, S. 233-286.

Meyer-Stoll 1989 - Cornelia Meyer-Stoll, *Die lübeckische Kaufmannschaft des 17. Jahrhunderts unter wirtschafts- und sozialgeschichtlichen Aspekten* (Europäische Hochschulschriften. Reihe 3: Geschichte und ihre Hilfswissenschaften 399), Frankfurt am Main u. a. 1989.

Nedkvitne 2014 - Arnved Nedkvitne, *The German Hansa and Bergen 1100-1600* (QDHG N. F. 70), Köln u. a. 2014.

Niitemaa 1952 - Vilho Niitemaa, *Der Binnenhandel in der Politik der livländischen Städte im Mittelalter*, Helsinki 1952.

Nordmann 1933 - Claus Nordmann, *Nürnberger Großhändler im spätmittelalterlichen Lübeck* (Nürnberger Beiträge zu den Wirtschafts- und Sozialwissenschaften 37/38), Nürnberg 1933.

North 2008 - Michael North, *Geschichte Mecklenburg-Vorpommerns*, München 2008.

Paravicini 1992 - Werner Paravicini, Lübeck und Brügge. Bedeutung und erste Ergebnisse eines Kieler Forschungsprojektes, in: Hubertus Menke (Hg.), *Die Niederlande und der europäische Nordosten. Ein Jahrtausend weiträumiger Beziehungen (700-1700). Vorträge Symposion Kiel, 8. - 11. Oktober 1989*, Neumünster 1992, S. 91-166.

Reisnert 1994 - Anders Reisnert, Trade in medieval Malmö, in: Manfred Gläser (Hg.), *Lübecker Kolloquium zur Stadtarchäologie im Hanseraum II: der Handel*, Lübeck 1999, S. 493-503.

Renken 1937 - Fritz Renken, *Der Handel der Königsberger Grossschäfferei des deutschen Ordens mit Flandern um 1400* (Abhandlungen zur Handels- und Seegeschichte 5), Weimar 1937.

Rörig 1926 - Fritz Rörig, Großhandel und Großhändler im Lübeck des 14. Jahrhunderts, in: *Zeitschrift des Vereins für Lübeckische Geschichte und Altertumskunde* 23, 1926, S. 103-132.

Rörig 1928 – Fritz Rörig, Die Hanse und die nordischen Länder, in: Fritz Rörig, *Hansische Beiträge zur deutschen Wirtschaftsgeschichte*, Breslau 1928, S. 157-173.

Samsonowicz 1993 - Henryk Samsonowicz, Die Handelsstrasse Ostsee-Schwarzes Meer im 13. und 14. Jahrhundert, in: Stuart Jenks/Michael North (Hgg.), *Der hansische Sonderweg? Beiträge zur Sozial- und Wirtschaftsgeschichte der Hanse* (QDHG N. F. 39), Köln u. a. 1993, S. 23-30.

Sass 1955 - Karl Heinz Sass, *Hansischer Einfuhrhandel in Reval um 1430* (Wissenschaftliche Beiträge zur Geschichte und Landeskunde Ost-Mitteleuropas 19), Marburg/Lahn 1955.

Schäfer 1879 - Dietrich Schäfer, *Die Hansestädte und König Waldemar von Dänemark. Hansische Geschichte bis 1376,* Jena 1879.

Schäfer 1927 - Dietrich Schäfer, *Das Buch des Lübeckischen Vogts auf Schonen* (Hansische Geschichtsquellen N. F. 4), Lübeck [2]1927.

Schildhauer 1968a - Johannses Schildhauer, Hafenzollregister des Ostseebereiches als Quellen zur hansischen Geschichte, in: HGBll 86, 1968, S. 63-76.

Schildhauer 1968b - Johannes Schildhauer, Zur Verlagerung des See- und Handelsverkehrs im nordeuropäischen Raum während des 15. und 16. Jahrhunderts. Eine Untersuchung auf der Grundlage der Danziger Pfahlkammerbücher, in: *Jahrbuch für Wirtschaftsgeschicht*e 1968/ IV, 1968, S. 187-211.

Schildhauer 1969a - Johannes Schildhauer, Zum Warenhandel Danzigs mit den wendischen

Hansestädten im ausgehenden 15. und im 16. Jahrhundert, in: *Wissenschaftliche Zeitschrift der Ernst-Moritz-Arndt-Universität Greifswald. Gesellschafts- und sprachwissenschaftliche Reihe* 3/4, Teil 1, Jahrgang XVIII, 1969, S. 139-151.

Schildhauer 1969b - Johannes Schildhauer, Zum See- und Handelsverkehr Revals im 16. Jahrhundert – auf der Grundlage Revaler Hafenzollregister, in: *Wissenschaftliche Zeitschrift der Ernst-Moritz-Arndt-Universität Greifswald. Gesellschafts- und sprachwissenschaftliche Reihe* 3/4, Teil 1, Jahrgang XVIII, 1969, S. 153-156.

Schildhauer 1970a - Johannes Schildhauer, Zur Verlagerung des See- und Handelsverkehrs im nordeuropäischen Raum während des späten Mittelalters. Quellen und bisherige Forschungsergebnisse, in: *Entwicklungsprobleme des Feudalismus im Ostseegebiet: Vorträge der Gemeinsamen Historikerkonferenz der Tartuer Staatsuniversität, der Greifswalder Ernst-Moritz-Arndt-Universität und der Rostocker Universität (Vom 18. - 19. November 1969)*, Tartu 1970, S. 5-25.

Schildhauer 1970b - Johannes Schildhauer, Der Seehandel Danzigs im 16. Jahrhundert und die Verlagerung des Warenverkehrs im Nord- und Mitteleuropäischen Raum, in: *Jahrbuch für Wirtschaftsgeschichte* 1970/ III, 1970, S. 155-178.

Schildhauer 1970c - Johannes Schildhauer, Der Anteil der wendischen Städte am Königsberg See- und Handelsverkehr im 16. Jahrhundert auf der Grundlage der Königsberger Pfundzollregister, in: Konrad Fritze/Eckhard Müller-Mertens/Johannes Schildhauer/Erhard Voigt (Hgg.), *Neue Hansische Studien* (Forschungen zur mittelalterlichen Geschichte 17), Berlin 1970, S. 263-287.

Schildhauer 1970d - Johannes Schildhauer, Zum See- und Handelsverkehr Tallinns im 16. Jahrhundert - auf der Grundlage Tallinner Hafenzollregister, in: *Eesti NSV ajaloo küsimusi* VI, 1970, S. 33-41.

Schubert 2000 - Birte Schubert, Revaler Zollbücher und Brügger Steuerlisten. Flandernhändler im Spiegel zweier Quellen, in: Nils Jörn/ Werner Paravicini/ Horst Wernicke (Hgg.), *Hansekaufleute in Brügge, Teil 4: Beiträge der Internationalen Tagung in Brügge April 1996* (Kieler Werkstücke, Reihe D: Beiträge zur europäischen Geschichte des späten Mittelalters 13), Frankfurt am Main u. a. 2000, S. 283-297.

Schwetlik 1961 - Lothar Schwetlik, Der hansisch-dänische Landhandel und seine Träger 1484-1519, in: *Zeitschrift der Gesellschaft für Schleswig-Holsteinische Geschichte* 85/86, 1961, S. 61-130.

Schwetlik 1963 - Lothar Schwetlik, Der hansisch-dänische Landhandel und seine Träger 1484-1519, in: *Zeitschrift der Gesellschaft für Schleswig-Holsteinische Geschichte* 88, 1963, S. 93-174.

Seifert 1997 - Dieter Seifert, *Kompagnons und Konkurrenten. Holland und die Hanse im späten Mittelalter* (QDHG N. F. 43), Köln u. a. 1997.

Selling 1980 - Dagmar Selling, Handelsbeziehungen von Kalmar aufgrund historischer und archäologischer Quellen, in: *Lübecker Schriften zur Archäologie und Kulturgeschichte* 4, 1980, S. 109-113, Abb. 12.1.

Simon 1994 - Ulrich Simon, Wismar und Lübeck, in: *Wismarer Beiträge* 10, 1994, S. 13-21.

Söderlund 1999 - Kerstin Söderlund, Trading City Stockholm – from the thirteenth to seventeenth centuries. Topography and catchment area, in: Manfred Gläser (Hg.), *Lübecker Kolloquium zur Stadtarchäologie im Hanseraum II: der Handel*, Lübeck 1999, S. 505-511.

Sprandel 1968 - Rolf Sprandel, *Das Eisengewerbe im Mittelalter*, Stuttgart 1968

Sprandel 1975 - Rolf Sprandel, *Das mittelalterliche Zahlungssystem nach hansisch-nordischen Quellen des 13.-15. Jahrhunderts*, Stuttgart 1975.

Sprandel 1998 - Rolf Sprandel, *Von Malvasia bis Kötzschenbroda: die Weinsorten auf den spätmittelalterlichen Märkten Deutschlands*, Stuttgart 1998.

Spufford 2002 - Peter Spufford, The Relative Scale of Medieval Hanseatic Trade, in: Rolf Hammel-Kiesow (Hg.), *Vergleichende Ansätze in der hansischen Geschichtsforschung* (Hansische Studien 13), Trier 2002, S. 153-161.

Stark 1969 - Walter Stark, Der Salzhandel von Lübeck nach Preußen am Ende des 15. Jahrhunderts, in: *Wissenschaftliche Zeitschrift der Ernst-Moritz-Arndt-Universität Greifswald. Gesellschafts- und sprachwissenschaftliche Reihe* 3/4, Teil 1, Jg. XVIII, 1969, S. 177-186.

Stark 1970 - Walter Stark, Der lübecker Preußenhandel – Seine Struktur und Stellung im System des lübecker Ostseehandels am Ende des 15. Jahrhunderts, in: Konrad Fritze/Eckhard Müller-Mertens/Johannes Schildhauer/Erhard Voigt (Hgg.), *Neue Hansische Studien* (Forschungen zur mittelalterlichen Geschichte 17), Berlin 1970, S. 243-262.

Stark 1973 - Walter Stark, *Lübeck und Danzig in der zweiten Hälfte des 15. Jahrhunderts. Untersuchungen zum Verhältnis der wendischen und preußischen Hansestädte in der Zeit des Niedergangs der Hanse* (Abhandlungen zur Handels- und Sozialgeschichte 11), Weimar 1973.

Stark 1981 - Walter Stark, Zum Handel Danzigs in der ersten Hälfte des 15. Jahrhunderts, in: *Wissenschaftliche Zeitschrift der Ernst-Moritz-Arndt-Universität Greifswald, Gesellschafts- und sprachwissenschaftliche Reihe* 1/2, Jg. XXX, 1981, S. 41-44.

Stefke 1979 - Gerald Stefke, *Ein städtisches Exportgewerbe des Spätmittelalters in seiner Entfaltung und ersten Blüte. Untersuchungen zur Geschichte der Hamburger Seebrauerei des 14. Jahrhunderts*, Diss. Hamburg 1979.

Stefke 1983 - Gerald Stefke, Die Hamburger Zollbücher von 1399/1400 und „1418". Der Werkzoll im 14. und frühen 15. Jahrhundert und die Ausfuhr von Hamburger Bier über See im Jahre 1417, in: *Zeitschrift des Vereins für Hamburgische Geschichte* 69, 1983, S. 1-33.

Stefke 1985 - Gerald Stefke, Das Hamburger Zollbuch von 1417: Register des Hamburgischen Werkzolls, nicht hansisches "Pfundzollbuch von 1418", in: *Zeitschrift des Vereins für Hamburgische Geschichte* 71, 1985, S. 161-172.

Stein 1917 - Walther Stein, Über den Umfang des spätmittelalterlichen Handels der Hanse in Flandern und in den Niederlanden, in: HGBll 23, 1917, S. 189-236.

Stieda 1885 - Wilhelm Stieda, Schifffahrtsregister, in: HGBll 5, 1885, S. 77-115.

Streller 1922 - Rudolf Streller, *Die wichtigsten Münzen im Handelsverkehr der Hanse des Mittelalters (bis 1500)*, Diss. Leipzig 1922.

Techen 1915 - Friedrich Techen, Das Brauwerk in Wismar, in: HGBll 21, 1915, S. 263-352.

Techen 1916 - Friedrich Techen, Das Brauwerk in Wismar (Schluß), in: HGBll 22, 1916, S. 145-224.

Theuerkauf 1998 - Gerhard Theuerkauf, Der Hamburger Hafen vom 12. bis zum 16. Jahrhundert, in: Horst Wernicke/Nils Jörn (Hgg.), *Beiträge zur hansischen Kultur-, Verfassungs- und*

Schiffahrtsgeschichte (Hansische Studien 10 = Abhandlungen zur Handels- und Sozialgeschichte 31), Weimar 1998, S. 129-143.

Vogel 1915 - Walther Vogel, *Geschichte der deutschen Seeschiffahrt, Bd. 1: Von der Urzeit bis zum Ende des XV. Jahrhunderts*, Berlin 1915.

Vogelsang 1997 - Reinhard Vogelsang, Salz und Korn. Zum Revaler Handel im 15. Jahrhundert, in: Norbert Angermann/Wilhelm Lenz (Hgg.), *Reval. Handel und Wandel vom 13. bis zum 20. Jahrhundert* (Schriften der Baltischen Historischen Kommission 8), Lüneburg 1997, S. 135-172.

Vogtherr 1993 - Hans-Jürgen Vogtherr, Beobachtungen zum Lübecker Stockholm-Verkehr am Ende des 15. Jahrhunderts, in: HGBll 111, 1993, S. 1-24.

Vogtherr 1995 - Hans-Jürgen Vogtherr, Der Lübecker Hermann Messmann und die lübisch-schwedischen Beziehungen an der Wende des 15. zum 16. Jahrhundert, in: *Zeitschrift des Vereins für Lübeckische Geschichte und Altertumskunde* 75, 1995, S. 53-135.

Vogtherr 1998 - Hans-Jürgen Vogtherr, Spuren der schwedischen Geschichte im Lübeck Archiv, in: *Zeitschrift des Vereins für Lübeckische Geschichte und Altertumskunde* 78, 1998, S. 221-270.

Vogtherr 1999 - Hans-Jürgen Vogtherr, Der Eigenhandel des schwedischen Reichsvorstehers Sten Sture des Älteren über Lübeck Ende des 15. Jahrhunderts, in: *Zeitschrift des Vereins für Lübeckische Geschichte und Altertumskunde* 79, 1999, S. 75-93.

Vogtherr 2001 - Hans-Jürgen Vogtherr, Livlandhandel und Livlandverkehr Lübecks am Ende des 15. Jahrhunderts, in: Norbert Angermann/Paul Kaegbein (Hgg), *Fernhandel und Handelspolitik der baltischen Städte in der Hansezeit: Beiträge zur Erforschung mittelalterlicher und frühneuzeitlicher Handelsbeziehungen und –wege im europäischen Rahmen* (Schriften der Baltischen Historischen Kommission 11), Lüneburg 2001, S. 201-237.

Waschinski 1952 - Emil Waschinski, *Währung, Preisentwicklung und Kaufkraft des Geldes in Schleswig-Holstein von 1226-1864* (Quellen und Forschungen zur Geschichte Schleswig-Holsteins 26), Neumünster 1952.

Weczerka 1990 - Hugo Weczerka, Die Südostbeziehungen der Hanse, in: Norbert Angermann (Hg.), *Die Hanse und der deutsche Osten*, Lüneburg: 1990, S. 117-132.

Weibull 1922 - Curt Weibull, *Lübeck och Skånemarknaden. Studier i Lübecks Punttullsböcker och Pundtullskvitton, 1368-1369 och 1398-1400*, Lund 1922.

Weibull 1966 - Curt Weibull, Lübecks sjöfart och handel på de nordiska rikena 1368 och 1398-1400. Studier i Lübecks pundtullböcker, in: *Scandia* 32, 1966, pp. 1-123.

Weibull 1967 - Curt Weibull, Lübecks Schiffahrt und Handel nach den nordischen Reichen 1368 und 1398-1400. Studien nach den lübischen Pfundzollbüchern, in: *Zeitschrift des Vereins für Lübeckische Geschichte und Altertumskunde* 47, 1967, S. 5-98.

Wernicke 1998a - Horst Wernicke, Wismar. Aufstieg im Schatten Lübecks, in: Jörg Bracker/ Volker Henn/ Rainer Postel (Hgg.), *Die Hanse – Lebenswirklichkeit und Mythos: Textband zur Hamburger Hanse-Ausstellung von 1989*, Lübeck [2]1998, S. 350-353.

Wernicke 1998b - Horst Wernicke, Rostock, in: Jörg Bracker/ Volker Henn/ Rainer Postel (Hgg.), *Die Hanse – Lebenswirklichkeit und Mythos: Textband zur Hamburger Hanse-Ausstellung von*

1989, Lübeck [2]1998, S. 353-357.
Westholm 1999 - Gun Westholm, Gotland and Visby in the Hanseatic trade – Preserved traces of times of prosperity, in: Manfred Gläser (Hg.), *Lübecker Kolloquium zur Stadtarchäologie im Hanseraum II: der Handel*, Lübeck 1999, S. 513-531.
Witthöft 1976 - Harald Witthöft, Struktur und Kapazität der Lüneburger Saline seit dem 12. Jahrhundert, in: *Vierteljahrschrift für Sozial- und Wirtschaftsgeschichte* 63, 1976, S. 1-117.
Witthöft 1990 - Harald Witthöft, Der Export lüneburger Salzes in den Ostseeraum während der Hansezeit, in: Norbert Angermann (Hg.), *Die Hanse und der deutsche Osten*, Lüneburg 1990, S. 41-65.
Wolf 1986 - Thomas Wolf, *Tragfähigkeiten, Ladungen und Maße im Schiffsverkehr der Hanse, vornehmlich im Spiegel Revaler Quellen* (QDHG N. F. 31), Köln u. a. 1986.

Zientara 1961 - Benedykt Zientara, Einige Bemerkungen über die Bedeutung des pommerschen Exports im Rahmen des Ostsee-Getreidehandels im 13. und 14. Jahrhundert, in: Gerhard Heitz/Manfred Unger (Hgg.), *Hansische Studien. Heinrich Sproemberg zum 70. Geburtstag* (Forschungen zur Mittelalterlichen Geschichte 8), Berlin 1961, S. 422-431.
Zientara 1983 - Benedykt Zientara, Die Entwicklung der Städte im Niederoderraum im 13. Jahrhundert im Zusammenhang mit den Anfängen des Kornexports, in: *Lübecker Schriften zu Archäologie und Kulturgeschichte* 7, 1983, 147-157.

邦語文献

石坂・壽永・諸田・山下 1980 - 石坂昭雄，壽永欣三郎，諸田實，山下幸夫『商業史』有斐閣，1980 年。
伊藤 1971 - 伊藤栄『西洋商業史』東洋経済新報社，1971 年。
奥西・鳩澤・堀田・山本 2010 - 奥西孝至，鳩澤歩，堀田隆司，山本千映『西洋経済史』有斐閣，2010 年。
柏倉 2000a - 柏倉知秀「コッゲ・ホルク・クラヴェール―中世ハンザの船舶と海運―」『立正西洋史』第 16 号，2000 年，21-40 頁。
柏倉 2000b - 柏倉知秀「中世リーフラントの「そりの道」―１３・１４世紀のハンザ都市リーガと冬季商業」『大学院年報（立正大学大学院文学研究科)』第 17 号，2000 年，195-204 頁。
柏倉 2003a - 柏倉知秀「14 世紀後半ハンザ諸都市のポンド税台帳」『立正西洋史』第 19 号，2003 年，19-25 頁。
柏倉 2003b -柏倉知秀「14 世紀後半レーヴァルの海上商業」『立正史学』第 93 号，2003 年，61-73 頁。
柏倉 2004 - 柏倉知秀「中世ハンザ都市の商業規模―14 世紀後半のポンド税決算書を中心に」『比較都市史研究』23 巻 1 号，2004 年，33-44 頁。
柏倉 2005 -柏倉知秀「14 世紀ハンザ商業の一断片―リューベックの損害一覧（1345 年)」立正大学史学会創立八十周年記念事業実行委員会編『宗教社会史研究Ⅲ』立正大学史学会，2005 年，397-414 頁。

柏倉 2009 - 柏倉知秀「14 世紀後半リューベック商人のネットワーク」『立正史学』第 105 号，2009 年，1-23 頁。
柏倉 2015 - 柏倉知秀「中世ハンザ商人の世界―リューベックを中心に」斯波照雄・玉木俊明編『北海・バルト海の商業世界』悠書館，2015 年，257-284 頁。
柏倉 2016 - 柏倉知秀「1986 年以降のハンザ史研究」P・ドランジェ（高橋理監訳）『ハンザ　12-17 世紀』みすず書房，2016 年，419-430 頁。
柏倉 2017a -柏倉知秀「中世ハンザ商人のネットワーク―14 世紀前半のリューベック商人を事例に」玉木俊明・川分圭子編『商業と異文化の接触―中世後期から近代におけるヨーロッパ国際商業の生成と展開』吉田書店，2017 年，15-42 頁。
柏倉 2017b -柏倉知秀「14 世紀リューベック商人のネットワーク」『歴史学研究』第 963 号，2017 年，161-168 頁。
柏倉 2018 -柏倉知秀「14 世紀後半リューベックのスウェーデン商業―1369 年のポンド税台帳の分析」『北欧史研究』第 35 号，2018 年，103-111 頁。
柏倉 2019 -柏倉知秀「14 世紀後半ハンザ都市リューベックの穀物貿易」『社会経済史学』第 84 巻第 4 号，2019 年，25-43 頁。
酒井 1989 - 酒井昌美「ポムメルン穀物輸出の意義―B・ツィエンタラの 13・14 世紀」酒井昌美『ドイツ中世後期経済史研究序論―オスト・エルベを中心として』学文社，1989 年，134-149 頁。
斯波 1997 - 斯波照雄『中世ハンザ都市の研究―ドイツ中世都市の社会構造と商業』勁草書房，1997 年
斯波 2006 - 斯波照雄「ハンザ都市ハンブルクの発展と醸造業」木立真直・辰馬信男編『流通の理論・歴史・現状分析』中央大学出版部，2006 年，83-102 頁。
斯波 2010 - 斯波照雄『ハンザ都市とは何か―中近世北ドイツ都市に関する一考察』中央大学出版部，2010 年。
斯波 2013 - 斯波照雄「中近世ハンザ都市におけるビール醸造業について」『商学論纂』55(1・2)，2013 年，137-154 頁。
高橋 2013 - 高橋理『ハンザ「同盟」の歴史－中世ヨーロッパの都市と商業』創元社，2013 年。
高村 1980 - 高村象平『ハンザの経済史的研究』（西欧中世都市の研究 2）筑摩書房，1980 年。
谷澤 1997 - 谷澤毅「ハンザ盛期におけるバルト海・北海間の内陸交易路―リューベック・オルデスロー・ハンブルク」『社会経済史学』第 63 巻第 4 号，1997 年，520-539 頁。
谷澤 1999 - 谷澤毅「1492-1496 年リューベックのポンド税台帳」『市場史研究』19，1999 年，171-188 頁。
谷澤 2003 -谷澤毅「ハンザ後期リューベック・ハンブルク間商業に関する一史料―リューベック商人の申告証書の記録から」『北欧史研究』第 20 号，2003 年，39-51 頁。
谷澤 2007 - 谷澤毅「ハンザ期リューベック商業の諸相―近年の研究成果から」『長崎県立大学論集』第 40 巻第 4 号，2007 年，283-303 頁。
谷澤 2011 - 谷澤毅『北欧商業史の研究―世界経済の形成とハンザ商業』知泉書館，2011 年。
谷澤 2017a - 谷澤毅『世界流通史』昭和堂，2017 年。
谷澤 2017b -谷澤毅「19 世紀リューベックのハンブルク・北海方面との連絡」『長崎県立大学論集経営学部・地域創造学部』第 50 巻第 4 号，2017 年，143-164 頁。
ドランジェ 2016 - P・ドランジェ（高橋理監訳）『ハンザ　12-17 世紀』みすず書房，2016 年。